

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡
21

—南館部分の調査(3)—福岡市埋蔵文化財調査報告書第一二四八集

一〇一四

福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 21

— 南館部分の調査 (3) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1248集

2014

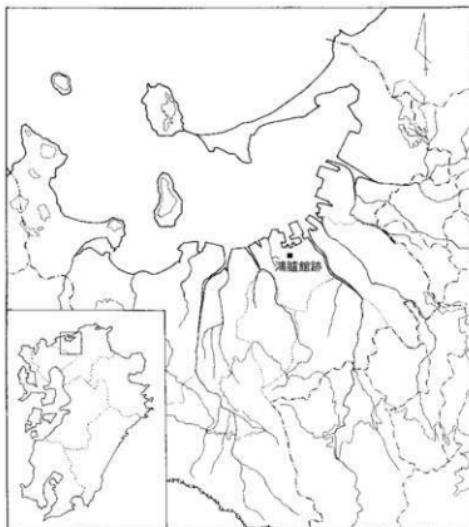
福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 21

— 南館部分の調査 (3) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1248 集



遺跡番号 KRE-4・5・6・7・9・17・21

遺跡調査番号 8829・8910・9005・9130・

9240・9910・0309

2014

福岡市教育委員会



鴻臚館跡史跡指定地内調査区全景（デジタル合成）

巻頭図版 2



(1) SK15027 (西より)



(2) SK15257 青磁水注出土状況 (北より)



(1) SK15017 出土唐三彩盤



(2) SK15014 出土イスラム陶器片



(3) SK15014 出土青磁香炉蓋



(4) SK15027 出土溶解炉羽口

卷頭図版 4



(1) SK15257 出土青磁水注



(2) SD15267 出土土鍾（左上より右下で…遺物番号 2001 ~ 2078 Tab.20 参照）

序

7世紀後半に那の津を見下ろす小高い丘を切り開いて造られた筑紫館、のちの鴻臚館は我が国古代の外交施設として、中国・朝鮮半島から来日する使節にとっての玄関口、あるいは遣唐使・遣新羅使等の出国と帰国の拠点としての役割を担っていました。遣唐使の派遣停止など、外交使節の往来が途絶える9世紀には、これに替わって「唐物(からもの)」を始めとする唐文化を日本へもたらす中国や朝鮮の商人らの交易の場へと役割が変わって行きました。

約400年間にわたって日本の古代外交を支えた鴻臚館は、その後土の中に埋もれてやがて福岡城の一部となり、近代には陸軍兵営、戦後には舞鶴公園へとかわり、鴻臚館の遺跡は壊滅したかに見えましたが、昭和63年から続く発掘調査によって遺構や遺物が残っていることが分かりました。27年に及ぶ発掘調査により、鴻臚館には南北二つの施設があったこと、東に向に建っていたこと、丘陵を巧みに取り込んだ立体的な構造であったことなどが明らかになり、平成16年には史跡福岡城跡三の丸の一角が鴻臚館跡として国史跡に二重指定されました。

鴻臚館跡は日本の古代外交史を考える上で重要な史跡であるとともに、市民にとって貴重な歴史遺産でもあります。鴻臚館を現代によみがえらせ、福岡城跡とともに歴史公園として整備公開していくことが、今求められていますが、整備を行う上で鴻臚館跡の発掘記録をまとめた調査報告書を作成することが不可欠であるため、福岡市ではこの作業を進めているところです。本書は「南館」についての3冊めの報告書であり、主に平和台野球場跡地内で行った調査についてまとめたものです。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。調査に関わられた全ての方々に対し深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査本報告書である。
2. 鴻臚館跡の発掘調査報告書は平成2（1990）年度から継続して刊行し本書が21冊めであるが、多くは年次ごとの概要報告書であり、本報告書は本書を含め以下の5冊である。
 - 『鴻臚館跡II』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集）（平和台野球場外野席の調査）
 - 『鴻臚館跡18-谷（堀）部分の調査-』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1022集）
 - 『鴻臚館跡19-南館部分の調査(1)』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1175集）
 - 『鴻臚館跡20-南館部分の調査(2)』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1213集）
 - 『鴻臚館跡21-南館部分の調査(3)』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1248集）：本書
3. 本報告書の刊行計画については本文3ページに示した通りである。調査が長期にわたり出土遺物に相当の分量があるため分割刊行を進めており、遺構の性格により区分した「谷部分」、「南館（仮称）部分」、「北館部分」の順に計画的に刊行を行っている（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している）。
4. 上記のうち、本書は「南館部分」の第3分冊である。第1分冊である『鴻臚館跡19』では南館の建物遺構について、第2分冊である『鴻臚館跡20』では南館の建物遺構以外の遺構のうち第I期・第III期調査分について報告を行った。本書では、南館の建物遺構以外の遺構のうち第IV期調査分の報告、及び前年度までの補足報告を行う。なお、南館部分の古代遺構についての報告は本年度で完了となる（第I・III・IV期調査範囲については本文1ページを参照）。
5. 史跡鴻臚館跡の発掘調査及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
6. 本書に使用した遺構実測図の作製は、各年度の調査担当者及び調査員・作業員が行った。
7. 本書に使用した遺物実測図の作製は、各年度の調査担当者及び山口譲治・吉岡涼子・富永静子・安田美哉・吉本久美子・徳田裕子・吉野満美子が行った。
8. 本書に使用した図の製図は、大庭康時・吉武学・吉岡・吉野が行った。
9. 本書に用いた座標系は平面直角座標系第II座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Y軸）を示し、この地域では真北より0°19' 西偏し、磁北より6°02' 東偏する。
10. 本書に使用した写真は池崎謙二・大庭・吉武が撮影した。
11. 本書の執筆は第四章を大庭が、他を吉武が行い、第三章は池崎の協力を得た。
12. 瓦の分類は「大宰府史跡出土軒瓦・敲打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館2000に掲げる。
13. 本書の編集は吉武が行った。
14. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理する。

本書に所収の調査一覧

鴻臚館跡第4～7・9・11～13・17・21次調査（福岡城跡10・13・15・17・20・27・31・35・43・50次調査）

遺跡調査番	8829・8910・9005・9130・9236・9420・9537・9620・9910・0309
遺跡略号	KRE（鴻臚館跡）、FUE（福岡城跡）
調査地地籍	中央区城内1-1
調査対象面積	48,027m ² （史跡指定面積）
調査期間	合計11,511m ² (本文2頁、Tab.2参照)

目 次

第一章 はじめに	1
1. 鴻臚館跡の調査計画	1
2. 調査体制	2
3. 報告書の作成	3
4. 鴻臚館跡の調査の概要	4
第二章 第4次～9次調査の出土遺物（補足）	6
1. 追加報告遺物	6
2. 南館出土瓦の敲打痕分類と出土状況	14
3. 小結 - 南館出土の軒瓦 -	42
第三章 第 17 次調査の検出遺構と出土遺物	58
1. 調査の概要	58
2. 検出遺構と出土遺物	60
SK 1014	60
SK 1015	61
SK 1016	63
SK 1039	63
SK 1041	65
SK 1058	71
SK 1072	72
3. その他の出土遺物	73
4. 小結	77
第四章 第 21 次調査の検出遺構と出土遺物	78
1. 調査の概要	78
2. 鴻臚館以前の地形と景観	80
3. 検出遺構と出土遺物	81
SK 15014	81
SK 15015A	95
SK 15015C	100
SK 15017	115
SK 15023	118
SK 15027	122
SK 15027B	146
SK 15028	148
SK 15041	160
SK 15068	163
SK 15185	167
SK 15186・SX15193	168
SK 15122 (23 次調査)	172
SK 15257 (23 次調査)	178
SK 15269 (23 次調査)	189
4. 小結	194
梵鐘鋳造遺構に関する若干の検討	194
(1) 課題の整理	194
(2) SK15027 の年代について	195
鴻臚館跡第 21 次調査 SK15027 出土炭化材の放射性炭素年代測定 (株式会社古環境研究所)	195
出土遺物から見た年代比定	197
SK 15122 における自然科学的分析	197
鴻臚館跡第 23 次調査 SK15122 埋土の自然科学的分析 (株式会社古環境研究所)	197

挿図目次

Fig. 1 鴻臚館跡発掘調査計画図（平成 26 年 3 月現在）	1
Fig. 2 周辺遺跡分布図（1/200,000）	4
Fig. 3 検出構造配置図（1/500）	（折り込み）
Fig. 4 鴻臚館跡の建物構造の概略図（1/1,000）	5
《第4次～9次調査の出土遺物（補足）》	
Fig. 5 軒瓦実測図（1/4）	7
Fig. 6 敷打痕文字瓦・線刻文字瓦実測図（1/4）	8
Fig. 7 丸瓦実測図1（1/4）	9
Fig. 8 丸瓦実測図2（1/4）	10
Fig. 9 丸瓦・平瓦実測図（1/4）	11
Fig. 10 道具瓦実測図（1/4）	12
Fig. 11 古墳時代遺物実測図（1/3）	13
Fig. 12 瓦の敲打痕1（1/4）	18
Fig. 13 瓦の敲打痕2（1/4）	19
Fig. 14 瓦の敲打痕3（1/4）	20
Fig. 15 瓦の敲打痕4（1/4）	21
Fig. 16 瓦の敲打痕5（1/4）	22
Fig. 17 瓦の敲打痕6（1/4）	23
Fig. 18 瓦の敲打痕7（1/4）	24
Fig. 19 瓦の敲打痕8（1/4）	25
Fig. 20 瓦の敲打痕9（1/4）	26
Fig. 21 瓦の敲打痕 10（1/4）	27
Fig. 22 瓦の敲打痕 11（1/4）	28
Fig. 23 瓦の敲打痕 12（1/4）	29
Fig. 24 瓦の敲打痕 13（1/4）	30
Fig. 25 瓦の敲打痕 14（1/4）	31
Fig. 26 瓦の敲打痕 15（1/4）	32
Fig. 27 瓦の敲打痕 16（1/4）	33
Fig. 28 南館出土の軒丸瓦1（1/4）	44
Fig. 29 南館出土の軒丸瓦2（1/4）	45
Fig. 30 南館出土の軒丸瓦3（1/4）	46
Fig. 31 南館出土の軒丸瓦4（1/4）	47
Fig. 32 南館出土の軒平瓦1（1/4）	48
Fig. 33 南館出土の軒平瓦2（1/4）	49
Fig. 34 南館出土の軒平瓦3（1/4）	50
Fig. 35 南館出土の軒平瓦4（1/4）	51
Fig. 36 南館出土の軒平瓦5（1/4）	52
Fig. 37 南館出土の軒平瓦6（1/4）	53

《第17次調査の検出遺構と出土遺物》	
Fig.38 第17次調査下層遺構全体平面図 (1/500)	58
Fig.39 土坑SK 1014 実測図 (1/40)	60
Fig.40 SK 1014 出土遺物実測図 (1 ~ 4 は 1/3、他は 1/4)	60
Fig.41 土坑SK 1015 実測図 (1/20)	61
Fig.42 SK 1015 出土遺物実測図 (7 ~ 8 は 1/3、他は 1/4)	62
Fig.43 土坑SK 1016 実測図 (1/40)	63
Fig.44 土坑SK 1039 実測図 (1/40)	64
Fig.45 SK 1039 出土遺物実測図 (18 は 1/3、他は 1/4)	64
Fig.46 土坑SK 1041 実測図 (1/40)	65
Fig.47 SK 1041 出土遺物実測図1 (1/3)	67
Fig.48 SK 1041 出土遺物実測図2 (1/3)	68
Fig.49 SK 1041 出土遺物実測図3 (1/4)	69
Fig.50 SK 1041 出土遺物実測図4 (1/4)	70
Fig.51 土坑SK 1058 実測図 (1/20)	71
Fig.52 SK 1058 出土遺物実測図 (79 は 1/3、他は 1/4)	72
Fig.53 土坑SK 1072 実測図 (1/40)	72
Fig.54 SK 1072 出土遺物実測図 (1/4)	72
Fig.55 その他の出土遺物1 (1/3)	74
Fig.56 その他の出土遺物2 (1/3)	75
Fig.57 その他の出土遺物3 (1/4)	76
Fig.58 その他の出土遺物4 (155 は 1/2、その他は 1/4)	77
《第21次調査の検出遺構と出土遺物》	
Fig.59 第21次調査遺構全体図	79
Fig.60 旧表土測量図	80
Fig.61 土坑 SK15014 実測図 (1/30)	82
Fig.62 SK15014 出土遺物実測図1 (1/3)	85
Fig.63 SK15014 出土遺物実測図2 (1/3、36~1/4)	86
Fig.64 SK15014 出土遺物実測図3 (1/3)	88
Fig.65 SK15014 出土遺物実測図4 (1/4)	89
Fig.66 SK15014 出土遺物実測図5 (1/4)	91
Fig.67 SK15014 出土遺物実測図6 (1/4)	92
Fig.68 SK15014 出土遺物実測図7 (1/4)	93
Fig.69 SK15014 出土遺物実測図8 (1/4)	94
Fig.70 土坑 SK15015A 実測図 (1/30)	96
Fig.71 SK15015A 出土遺物実測図1 (1/3)	97
Fig.72 SK15015A 出土遺物実測図2 (1/4)	98
Fig.73 SK15015C 出土遺物実測図1 (1/3)	101
Fig.74 SK15015C 出土遺物実測図2 (1/4)	102
Fig.75 土坑 SK15017 実測図 (1/40)	104

Fig.76 SK15017 出土遺物実測図1 (1/3)	106
Fig.77 SK15017 出土遺物実測図2 (1/3、156 ~ 161・1/4)	107
Fig.78 SK15017 出土遺物実測図3 (1/4)	108
Fig.79 SK15017 出土遺物実測図4 (1/4)	109
Fig.80 SK15017 出土遺物実測図5 (1/4)	110
Fig.81 SK15017 出土遺物実測図6 (1/4)	111
Fig.82 SK15017 出土遺物実測図7 (1/4)	113
Fig.83 SK15017 出土遺物実測図8 (1/4)	114
Fig.84 土坑 SK15022 実測図 (1/20)	115
Fig.85 SK15022 出土遺物実測図1 (1/3、202 ~ 204・1/4)	116
Fig.86 SK15014 出土遺物実測図2 (1/4)	117
Fig.87 土坑 SK15023 実測図 (1/20)	118
Fig.88 SK15023 出土遺物実測図1 (214 ~ 217・1/3、218・219・1/4)	120
Fig.89 SK15014 出土遺物実測図2 (1/4)	121
Fig.90 土坑 SK15027 土層実測図 (1/20)	122
Fig.91 土坑 SK15027 実測図 (1/30)	123
Fig.92 SK15027 鋼型位置関係実測図 (1/5)	128
Fig.93 SK15027 定盤実測図 (1/30)	129
Fig.94 SK15027 床面実測図 (1/30)	130
Fig.95 SK15027 出土遺物実測図1 (225・1/5、226・1/4)	132
Fig.96 SK15027 出土遺物実測図2 (1/3)	134
Fig.97 SK15027 出土遺物実測図3 (1/3)	135
Fig.98 SK15027 出土遺物実測図4 (1/3)	136
Fig.99 SK15027 出土遺物実測図5 (1/3)	138
Fig.100 SK15027 出土遺物実測図6 (1/4)	139
Fig.101 SK15027 出土遺物実測図7 (1/4)	140
Fig.102 SK15027 出土遺物実測図8 (1/4)	141
Fig.103 SK15027 出土遺物実測図9 (1/4)	142
Fig.104 SK15027 出土遺物実測図10 (1/4)	143
Fig.105 SK15027 出土遺物実測図11 (1/4)	144
Fig.106 SK15027 出土遺物実測図12 (1/4)	145
Fig.107 SK15027 出土遺物実測図13 (1/4)	146
Fig.108 SK15027B 出土遺物実測図 (1/3、367 ~ 369・1/4)	147
Fig.109 土坑 SK15028 実測図 (1/30)	148
Fig.110 SK15028 出土遺物実測図1 (1/3)	150
Fig.111 SK15028 出土遺物実測図2 (1/3)	151
Fig.112 SK15028 出土遺物実測図3 (1/3)	153
Fig.113 SK15028 出土遺物実測図4 (1/4)	154
Fig.114 SK15028 出土遺物実測図5 (1/4)	155
Fig.115 SK15028 出土遺物実測図6 (1/4)	156

Fig.116 SK15028 出土遺物実測図 7 (1/4)	157
Fig.117 SK15028 出土遺物実測図 8 (1/4)	158
Fig.118 SK15028 出土遺物実測図 9 (1/4)	159
Fig.119 土坑 SK15041 実測図 (1/20)	160
Fig.120 SK15041 出土遺物実測図 1 (456 ~ 460・1/3、461 ~ 467・1/4)	161
Fig.121 SK15041 出土遺物実測図 2 (1/4)	162
Fig.122 土坑 SK15068 実測図 (1/20)	163
Fig.123 SK15068 出土遺物実測図 1 (472・1/3、1/4)	164
Fig.124 SK15068 出土遺物実測図 2 (1/4)	165
Fig.125 SK15068 出土遺物実測図 3 (1/4)	166
Fig.126 土坑 SK15185 実測図 (1/20)	167
Fig.127 SK15185 出土遺物実測図 (1/3)	168
Fig.128 SX15186・SX15193 実測図 (1/40)	169
Fig.129 SX15193 敷石遺構実測図 (1/30)	170
Fig.130 土坑 SK15122 実測図 (1/30)	172
Fig.131 SK15122 出土遺物実測図 1 (1/3)	174
Fig.132 SK15122 出土遺物実測図 2 (502・1/3、1/4)	176
Fig.133 SK15122 出土遺物実測図 3 (1/4)	177
Fig.134 土坑 SK15257 実測図 (1/30)	178
Fig.135 SK15257 出土遺物実測図 1 (1/3)	180
Fig.136 SK15257 出土遺物実測図 2 (1/3)	182
Fig.137 SK15257 出土遺物実測図 3 (544 ~ 547・1/3、548 ~ 552・1/4)	183
Fig.138 SK15257 出土遺物実測図 4 (1/4)	184
Fig.139 SK15257 出土遺物実測図 5 (1/4)	185
Fig.140 SK15028 出土遺物実測図 6 (1/4)	186
Fig.141 SK15028 出土遺物実測図 7 (1/4)	188
Fig.142 溝 SD15269 土層実測図 (1/20)	189
Fig.143 溝 SD15269 実測図 (1/30)	189
Fig.144 SD15269 土錐集中部分実測図 (1/30)	191
Fig.145 SD15269 出土遺物実測図 (1/3)	192
Fig.146 梵鐘铸造模式図	195

図版目次

卷頭図版1 鴻臚館跡史跡指定地内調査区全景 (デジタル合成)	
卷頭図版2 (1) SK15027 (西より) (2) SK15257 青磁水注出土状況 (北より)	
卷頭図版3 (1) SK15017 出土唐三彩盤 (2) SK15014 出土イスラム陶器片 (3) SK15014 出土青磁香炉蓋 (4) SK15027 出土溶解炉羽口	
卷頭図版4 (1) SK15257 出土青磁水注 (2) SD15267 出土土錐 (左上より右下で…遺物番号 2001 ~ 2078 Tab.20 参照)	
Ph. 1 追加報告遺物 (縮尺不同)	13
Ph. 2 瓦凸面の敲打痕 (1) (2)	34 ~ 35
Ph. 3 瓦凸面の敲打痕 (3) (4)	36 ~ 37
Ph. 4 瓦凸面の敲打痕 (5) (6)	38 ~ 39
Ph. 5 瓦凸面の敲打痕 (7) (8)	40 ~ 41
Ph. 6 軒丸瓦1	54
Ph. 7 軒丸瓦2	55
Ph. 8 軒平瓦1	56
Ph. 9 軒平瓦2	57
Ph.10 第17次調査区下部検出遺構	59
Ph.11 SK1014 (東から)	60
Ph.12 SK1015 (南から)	61
Ph.13 SK1016 (南から)	63
Ph.14 SK1039 (北から)	64
Ph.15 SK1039 出土遺物	64
Ph.16 SK1041 (西から)	65
Ph.17 SK1041 出土遺物	68
Ph.18 SK1058 検出状況 (南から)	71
Ph.19 SK1058 完掘状況 (北から)	71
Ph.20 その他の出土遺物	77
Ph.21 第21次調査区全景 (北より)	78
Ph.22 旧表土検出状況 (西より)	80
Ph.23 石棺蓋石出土状況 (北より)	80
Ph.24 石棺蓋石土層断面 (西より)	80
Ph.25 SK15014・SK15015・SK15017 付近 (南より)	81
Ph.26 SK15014 検出状況 (東より)	83
Ph.27 SK15014 完掘状況 (北西より)	83
Ph.28 SK15014 遺物出土状況	84
Ph.29 SK15014 出土遺物1	87
Ph.30 SK15014 出土遺物2	90
Ph.31 SK15015A 検出状況 (北西より)	95

Ph.32 SK15015A 出土遺物	99
Ph.33 SK15015C 検出状況（北西より）	100
Ph.34 SK15015C 掘り上げ状況（北西より）	100
Ph.35 SK15017 検出状況（北東より）	103
Ph.36 SK15017 瓦堆積断面（北より）	105
Ph.37 SK15017 完掘状況（北東より）	105
Ph.38 SK15017 遺物出土状況	105
Ph.39 SK15017 出土鉄鏃	107
Ph.40 SK15017 出土遺物	112
Ph.41 SK15022（南より）	115
Ph.42 SK15023 瓦集中部分（東より）	119
Ph.43 SK15023 出土遺物	119
Ph.44 SK15027 調査状況1	124
Ph.45 SK15027 調査状況2	125
Ph.46 SK15027 調査状況3	126
Ph.47 SK15027 調査状況4	127
Ph.48 SK15017 出土遺物1	133
Ph.49 SK15017 出土遺物2	137
Ph.50 SK15028	149
Ph.51 SK15028 遺物出土状況1	152
Ph.52 SK15028 出土遺物2	159
Ph.53 SK15041（北より）	160
Ph.54 SK15068（南より）	163
Ph.55 SK15068 出土遺物	166
Ph.56 SK15185（東より）	167
Ph.57 SK15185 出土遺物	168
Ph.58 SX15186・SX1519	171
Ph.59 SK15122	173
Ph.60 SK15122 出土遺物	175
Ph.61 SK15257（北西より）	179
Ph.62 青磁水注出土状況	179
Ph.63 SK15257 出土遺物1	181
Ph.64 SK15257 出土遺物2	187
Ph.65 SD15269	190
Ph.66 SK15257 出土遺物1	193

表目次

Tab. 1 調査計画表（平成 26 年3月現在）	1
Tab. 2 鴻臚館跡調査一覧（平成 26 年3月現在）	2
Tab. 3 鴻臚館跡関係調査報告書一覧	3
Tab. 4 鴻臚館跡調査報告書刊行計画	3
Tab. 5 鴻臚館跡検出遺構の変遷表	4
Tab. 6 鴻臚館跡（南館）瓦凸面の敲打痕分類基準（縄目を除く）	16 ～ 17
Tab. 7 文字瓦出土状況	17
Tab. 8 南館（第 4 ～ 14 次調査）の遺構出土瓦の敲打痕分類（1）（2）	38 ～ 41
Tab. 9 南館（第 4 ～ 14 次調査）出土軒瓦集計表	43
Tab.10 第 17 次調査報告遺構一覧表	59
Tab.11 第 17 次調査出土瓦敲打痕分類表	76 ～ 77
Tab.12 SK15014 出土瓦分類	84
Tab.13 SK15015 出土瓦分類	99
Tab.14 SK15017 出土瓦分類	114
Tab.15 SK15022 出土瓦分類	116
Tab.16 SK15027 出土瓦分類	131
Tab.17 SK15028 出土瓦分類	153
Tab.18 SK15041 出土瓦分類	162
Tab.19 SK15068 出土瓦分類	165
Tab.20 SD15269 出土土鍾計測表	191

第一章 はじめに

1. 鴻臚館跡の調査計画 Fig.1, Tab.1

福岡市では昭和 63 年度から鴻臚館跡の全容解明のための発掘調査を進めてきたが、中期計画の第 V 期調査である平和台野球場跡地北半の調査は本年度（平成 25 年度）をもって終了する。この間、平成 16 年度には鴻臚館跡が国史跡指定を受け、同 18 年度からは「調査計画（国史跡鴻臚館跡の「保存管理計画」に代わるもの）」を策定して調査を継続してきたが、今後は史跡指定地外の遺構確認調査（第 VI 期調査）の継続とともに、発掘調査が終了した史跡指定部分の環境整備にどのように取り組んでいくかが課題となっている。このため、本年度にはこれまでの「鴻臚館跡調査研究指導委員会」に代わって新たに「鴻臚館跡整備検討委員会」を組織し、発掘調査や今後の整備について学識経験者等の指導・助言を受け、また文化庁や福岡県とも協議を行いながら事業を進めているところである。なお、第 V 期までに調査を行った史跡範囲については、早期に整備事業を推進するため「鴻臚館跡整備基本構想」を策定中である。

Tab.1 調査計画表（アミ部は調査終了）

平成 26 年 3 月現在

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第Ⅰ期	平和台野球場南側	4,585m ²	昭和63～平成4年度	鴻臚館跡の遺構有無と範囲の確認
第Ⅱ期	舞鶴公園西広場	1,400m ²	平成5～6年度	鴻臚館跡跡の範囲確認、 及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主邸の確認
第Ⅲ期	平和台野球場南側土塁ほか	2,114m ²	平成7～10年度	平和台球場南側土塁下の遺構確認・ 平和台球場解体工事立会・試掘
第Ⅳ期	野球場跡南半分	15,095m ²	平成11～17年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・ 鴻臚館時代の地形復元
第Ⅴ期	野球場跡北半分	6,534m ²	平成18～25年度	鴻臚館北館の構造確認と北側汀線の確認、 外郭施設の検出
第VI期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積 12,000m ²	平成26～30年度	鴻臚館跡史跡指定地に隣接する関連遺構の確認
第VII期	福岡高等裁判所とその周辺	対象面積 12,000m ²	平成31～39年度	鴻臚館中島館の可能性が指摘されており、その確認

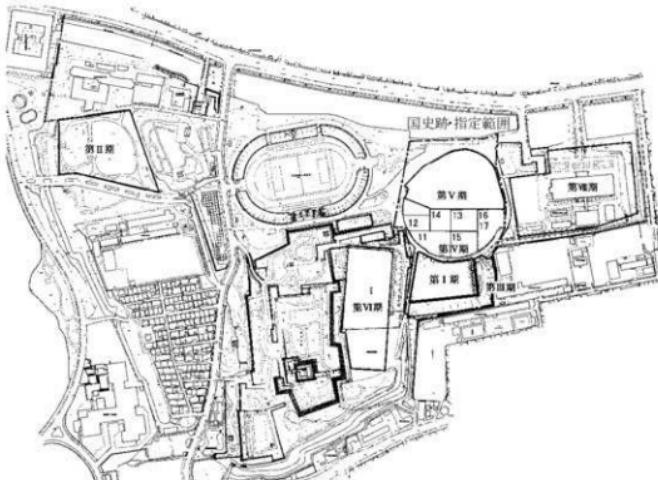


Fig.1 鴻臚館跡発掘調査計画図（平成 26 年 3 月現在）

2. 調査体制

平成 24 年度までの組織体制については既刊の報告書に詳しい。平成 25 年度は「鴻臚館跡整備検討委員会」、文化庁、福岡県の指導・助言のもと、以下の調査体制で事業を行った。

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 経済観光文化局文化財部長 西島祐二

大規模史跡整備推進課長 田中壽夫

調査担当 鴻臚館跡整備係長 菅波正人

専門調査員 山口謙治、池崎謙二

整理協力 吉岡涼子（技能員）、徳田裕子、富永静子、安田美哉、吉野満美子、吉本久美子

【鴻臚館跡整備検討委員会】

岩永省三（考古学）、小田富士雄（考古学 / 委員長）、包清博之（環境設計学）、狩野 久（国史学）、河原純之（考古学）、坂上康俊（国史学）、佐藤 信（国史学 / 副委員長）、杉本正美（造園学）、

鈴木嘉吉（建築史）、箱崎和久（建築史）、松村恵司（考古学）(五十音順、敬称略)

Tab.2 鴻臚館跡調査一覧 次アミは本書に関係する調査

平成 26 年 3 月現在

年度	調査番号	鴻臚館跡調査次数	福岡城跡調査次数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
S.26	5102	1		三の丸中央部	テニスコート建設		5108(3日間)	九州文化総合研究所
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会
S.62	8747	3	9	三の丸中央部	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学
S.63	8829	4	10	三の丸中央部	範囲確認	856	880727～881210	山崎純男・吉武学
H.1	8910	5	13	三の丸中央部	範囲確認	1,200	890420～891207	山崎純男・吉武学
H.2	9005	6	15	三の丸中央部	範囲確認	1,300	900409～910131	山崎純男・吉武学
H.3	9130	7	17	三の丸中央部	範囲確認	1,000	910501～920331	山崎純男・瀬本正志
	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615～921030	山崎純男・瀬本正志
H.4	9236	9	20	三の丸中央部	範囲確認	430	920910～930331	山崎純男・瀬本正志
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816～940228	田中壽夫・瀬本正志
	9420	11	27	三の丸中央部	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀬本正志
H.6	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801～950320	田中壽夫・瀬本正志
	9463	11	30	三の丸東郭土塁	範囲確認	60	950201～950217	田中壽夫・瀬本正志
H.7	9537	12	31	三の丸西郭・中央部	範囲確認	300	951101～960329	田中壽夫
H.8	9620	13	35	三ノ丸中央郭	範囲確認	450	960704～961204	田中壽夫
H.9	9736	14	39	三ノ丸中央郭	範囲確認	204	970818～980131	田中壽夫
H.10	9807	15	41	野球場解体	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎謙二
H.931	9831	16	42	野球場跡全体	試掘	930	980922～990120	塙屋勝利・池崎謙二
H.11	9910	17	43	野球場跡南北	範囲確認	3,500	990422～000315	塙屋勝利・池崎謙二
H.12	0008	18	44	野球場跡南北	範囲確認	1,750	000425～010316	塙屋勝利・池崎謙二
H.13	0109	19	47	野球場跡南北	範囲確認	2,000	010521～020329	折尾 学・池崎謙二
H.14	0218	20	49	野球場跡南北	範囲確認	1,200	020513～030331	折尾 学・大庭康時
H.15	0309	21	50	野球場跡南北	範囲確認	2,425	030506～040331	折尾 学・大庭康時
H.16	0415	22	51	野球場跡南北	範囲確認	2,110	040401～050331	折尾 学・大庭康時
H.17	0502	23	52	野球場跡南北	範囲確認	2,110	050404～060331	横山邦継・大庭康時
H.18	0617	24	57	野球場跡南北	範囲確認	820	060401～070331	大庭康時・中村啓太郎
H.19	0706	25	59	野球場跡南北	範囲確認	504	070401～080331	吉武学・中村啓太郎
H.20	0821	26	60	野球場跡南北	範囲確認	860	080701～090331	吉武学・中村啓太郎
H.21	0906	27	61	野球場跡南北	範囲確認	900	090401～100331	吉武学・中村啓太郎
H.22	1013	28	62	野球場跡南北	範囲確認	970	100602～110331	吉武学・久住延雄
H.23	1116	29	65	野球場跡南北	範囲確認	500	110601～111222	常松幹雄・吉武学
H.24	1205	30	69	野球場跡南北	範囲確認	1,180	120417～130329	吉武学
H.25	1314	31	70	野球場跡南北	範囲確認	800	130701～140328	菅波正人

3. 報告書の作成 Tab. 3・4

史跡指定地内の発掘調査が終了し、今後は指定地の環境整備と活用を行っていくが、整備を行うにあたっては、検出遺構と出土遺物の詳細な検討、及び総括を行う正式報告書の刊行が不可欠である。鴻臚館跡では発掘調査により自然地形を利用した谷（堀）を挟んで南北に相似形の施設があったことが判明し、北の施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南の施設を「南館」と仮称している。発掘調査は「南館」が先行して平成15年度に終了し、「谷（堀）」部分は17年度終了、「北館」についても25年度に終了した。よって調査が先行した谷部分・南館部分の報告書作成にまず取り組み、次に北館へと移行するものとして、20年度に『鴻臚館跡18- 谷（堀）部分の調査』を刊行し谷部分の報告を行った。ついで23年度に『鴻臚館跡19- 南館部分の調査（1）』により南館部分の建物遺構について、24年度の『鴻臚館跡20- 南館部分の調査（2）』では建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ・Ⅲ期調査分について報告した。本書はこれに引き続き、建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ期調査分（平和台野球場跡地南半）について報告するものである。本書の刊行により、南館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となる。

Tab.3 鴻臚館跡関係調査報告書一覧

No.	発行	報告書名	刊行年
1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集 1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	稿本 1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集 1983
4	池崎謙二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」	福岡市第101集 1983
5	弓場知紀	「出土美術館の高野コレクション」	福岡市第101集 1983
6	田畠博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」	福岡市第101集 1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡I 発掘調査概報」	福岡市第270集 1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡II」	福岡市第315集 1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡III」	福岡市第355集 1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4 平成4年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集 1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5 平成5年度発掘調査概報」	福岡市第416集 1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6 平成6年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集 1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7 -鴻臚館跡1期整備報告-」	福岡市第487集 1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8 -平成7・8年度発掘調査概要報告-」	福岡市第545集 1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9 平成9年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集 1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10 平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集 1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11 平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集 2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12 平成12年度発掘調査報告」	福岡市第733集 2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13 平成13年度発掘調査報告」	福岡市第745集 2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」	福岡市第783集 2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡15 平成14年度発掘調査報告書」	福岡市第838集 2005
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡16 平成15年度発掘調査報告書」	福岡市第875集 2006
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡17 平成16・17年度発掘調査報告書」	福岡市第968集 2007
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡18 谷（堀）部分の調査」	福岡市第1022集 2009
25	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡19 南館部分の調査(1)」	福岡市第1175集 2012
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡20 南館部分の調査(2)」	福岡市第1213集 2013
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡21 南館部分の調査(3)」	福岡市第1248集(本書) 2014

Tab.4 鴻臚館跡調査報告書刊行計画

区分	年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
谷		←	→							
		報告書18								
南 館		←					報告書19	報告書20	報告書21	
北 館		←								報告書22



Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/200,000)

A 滝鍬船跡 B 佐多瀬遺跡 C+D+I 五箇 F 木城 G 大野城 H 大野城跡
 I 元岡・兔島遺跡 J 佐土城跡 K 有原・M 遺跡 (早良郡) L 遺跡 M 三宅庵寺跡
 6 多ヶ島田遺跡 N 海の名古屋跡 O 荒河瓦窯跡 P 斜ヶ瀬瓦窯跡 Q 女房瓦窯跡

4. 鴻臚館跡の調査の概要 Fig.3・4、Tab.5

これまでの調査で確認した鴻臚館関連遺構は5時期に区分しており、主要な建物遺構はFig.4及びTab.5の通り。各時期の遺構の詳細については既刊の報告書に詳しいので、本年度で終了した第V期調査について概略をまとめておく。鴻臚館は砂丘や低湿地に囲まれた比高差4mほどの台地上に造営されていたことが明らかになった。北館第I期の柱列は東西約57m、南北約43mの長方形区画で、東辺に門がある。第II期の北館東門は南館とほぼ同規模で建て替えの痕跡があり、北館布掘り塀の北西外で便所遺構を新たにひとつ確認した。第III期では北館の礎石や礎石据付穴をいくつか確認した。北館東門から東へ下る斜面が雄壇状に落ちる構造であることが分かったが、残念ながら入り口通路部分は後に破壊されていた。北館の北では台地が落ち、約4mの段差で砂丘へと続く。台地下には瓦を敷き詰めた通路状の遺構が巡り、その更に北の砂丘上には粘土による整地層が認められたが、これが外郭施設（築地塀）か否か、なお検討を要する。

Tab.5 鴻臚館跡検出遺構の変遷表

鴻臚館跡区分		第I期		第II期		第III期		第IV期		第V期	
年代	7世紀後半～8世紀初頭			8世紀		9世紀		10世紀		11世紀	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
北庭面	削り出し			瓦敷き(道?)		整地+埴地塀?					
北館	掘立柱建物1、柱列+東門			布掘り塀+東門1、便所3		礎石建物1		土坑		土坑	
中央谷	西			8世紀初頭までに大造成して敷地拡張、石積み		池2、陸橋		池1?、陸橋		陸橋	
	中央	自然谷+石垣		堀十石堆		土盛り+土留め石列		埋没が進む		大走りまで埋没	
	東			土堆1+五輪塗		木橋		排水溝		木橋	
南館	掘立柱建物5			布掘り塀+東門1、便所3		礎石建物3		土坑		区画溝、土坑	
さらに南				布掘り状遺構		(推定南門遺構)					

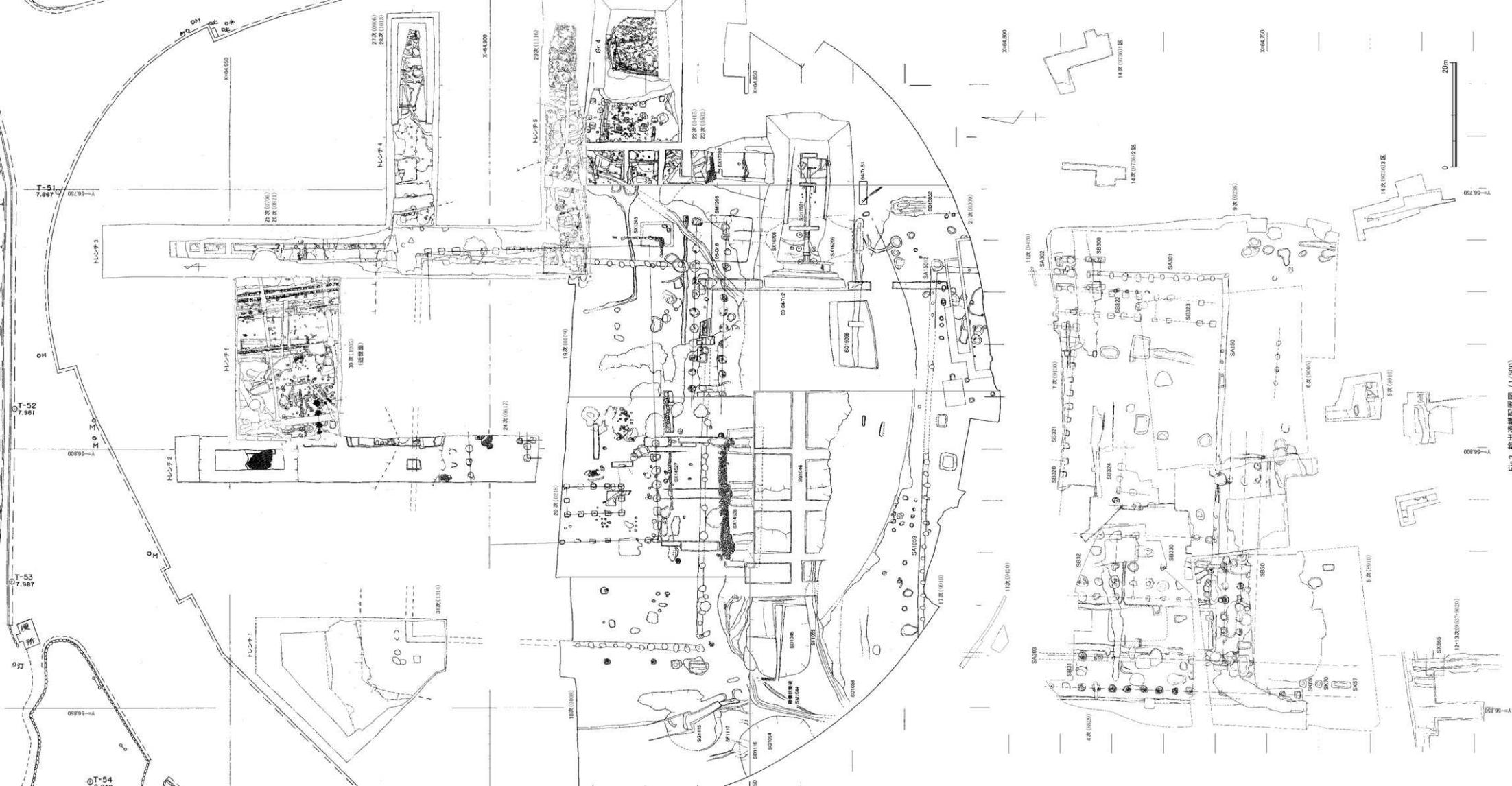


Fig.3 掘出遺構記測図 (1/500)

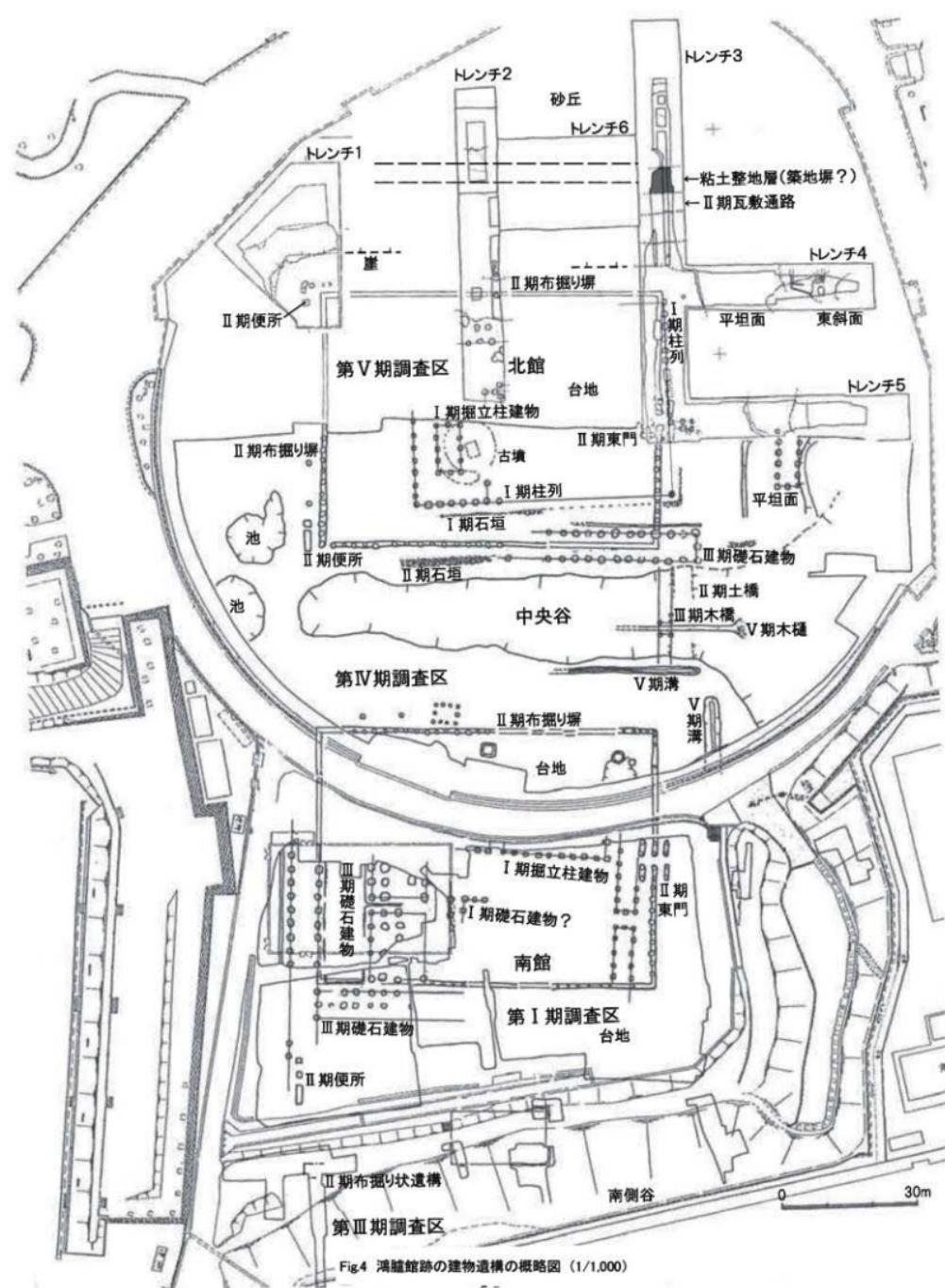


Fig.4 鴻臚館跡の建物造構の概略図 (1/1,000)

第二章 第4次～9次調査の出土遺物（補足）

『鴻臚館跡19 - 南館部分の調査（1）』では南館の建物遺構について報告した。続く『鴻臚館跡20 - 南館部分の調査（2）』では建物以外の遺構のうち、第4～9次調査検出遺構（主に土坑）とその出土遺物についての報告を行ったが、特に瓦類の整理について不充分であったため、本年度にその補足報告を行うものである。なお軒瓦・文字瓦の分類は『大宰府史跡出土軒瓦・敲打痕文字瓦型式一覧』（2000 九州歴史資料館）による。

1. 追加報告遺物 Fig.5～11, Ph.1

前年度までに掲載できなかった出土遺物のうち、報告が必要なものについて補足する。

1～9は軒丸瓦である。1は049型式である。中央谷や北館では多数が出土するが、南館ではこの1点のみである。2は065型式である。磨滅している例が多いが、この1点は中房の珠文や連弁の鎬が明晰に残る。3は082B型式で磨滅する。4は132型式で、中央谷と南館で1点ずつ出土している。5は135Bb型式、中房蓮子に追刻のない135Ba型式も出土している（P45）。6は143b型式。7は170A型式。8は鴻臚館式軒丸瓦（223a型式）。9は小片だが外区珠文数が多く、224a型式であろう。3や8などは南館で多くが出土するが、他の型式はいずれも数点の出土である。10～14は軒平瓦である。10は鴻臚館式軒平瓦（635型式）で、平瓦凸面に小さな単位の網目叩きを施す。11は662Ab型式で、磨滅が著しい。12は601A型式、磨滅して調整不明。13・14はともに775型式で、14は頸部に網目叩きを施す。南館出土の軒丸瓦・軒平瓦については42～57頁にまとめてある。

15～28は敲打痕文字瓦である。15・17・25は丸瓦、他は平瓦で、18・22は側面調整があり、他は側面に破面を残す。15・16は「平井（左字）」で901J型式。17・18は「佐」で902E型式。19～21は同じく「佐」で902J型式。22は「賀茂」で903D型式。23も「賀茂」で903G型式。24は「大國（左字）」で907型式。25は「介」で912型式。26～28は「伊貴作瓦」で大宰府分類なく、福岡市西区の斜ヶ浦瓦窯跡に類例がある。29～31は焼成前に線刻を施した瓦である。29は丸瓦で「杉」様の文字があるが不明確。30も丸瓦で斜格子目叩きの脇に「南」と読める線刻がある。31は5A類の敲打痕（29頁参照）と「米」様の線刻がある。

32～36は丸瓦の全体形を知り得る資料で、いずれも玉縁式である。32・35は凸面に網目叩きを施しナデ調整を加える。凹面にコピキ痕と布目を留める。他は斜格子目叩きで、36は「佐」902Eの文字のある叩き（5D類）を施す。瓦の全長と玉縁部分を除く長さは、32が36.0cmと28.5cm、33が34.5cmと30.0cm、34が35.5cmと30.3cm、35が推定で37.8cmと30.2cm、36が33.2cmと28.5cmであり、いずれの丸瓦も玉縁を除く長さが1尺（約30cm）に近い。37は平瓦の全形を知りうる資料で、凸面は網目叩き。長33.8cm、幅28cm前後である。

38～44は面戸瓦で、全て凸面の網目叩きにナデ調整を加えた焼成前の丸瓦を加工したものである。鴻臚館跡の南館から出土する面戸瓦はこの種の叩きにはば限られる。45～48は熨斗瓦である。46のみ格子目叩き（61類）で他は網目叩きである。面戸瓦と異なり熨斗瓦には網目叩き以外の例も多い。49は鬼瓦の可能性もあるが小片のため不明確である。竹管を押圧して施文する。

50は古墳時代前期の土器器二重口縁壺か。51は古墳時代後期の須恵器高杯である。接合しない2片を図上合成した。52は円筒埴輪で、磨滅して調整痕は残らない。鴻臚館造営前、あるいは福岡城築城前に丘陵上に前方後円墳が存在していたことを示唆する遺物であろう。

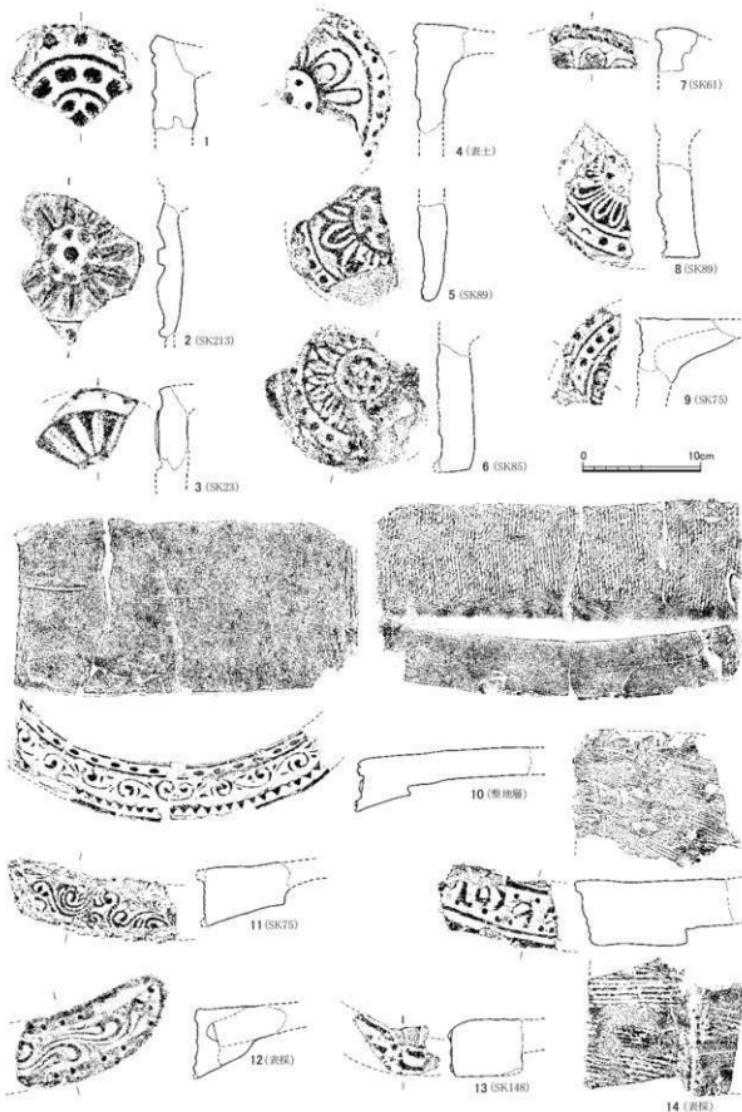


Fig.5 軒瓦実測図 (1/4)

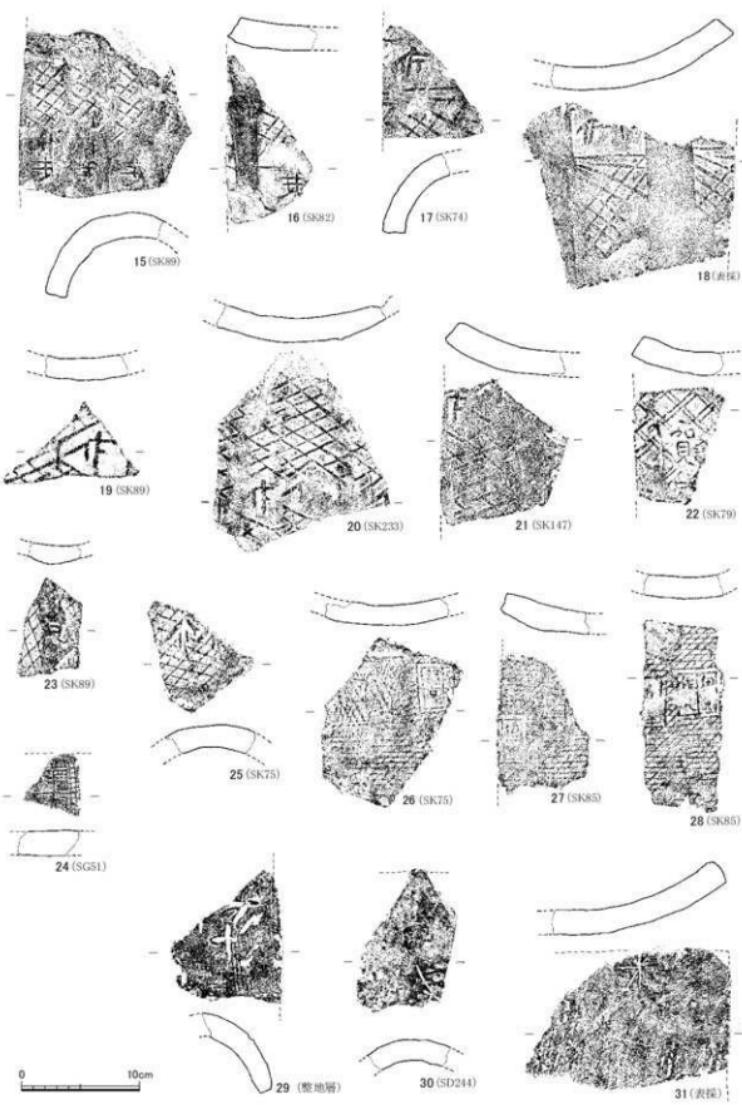
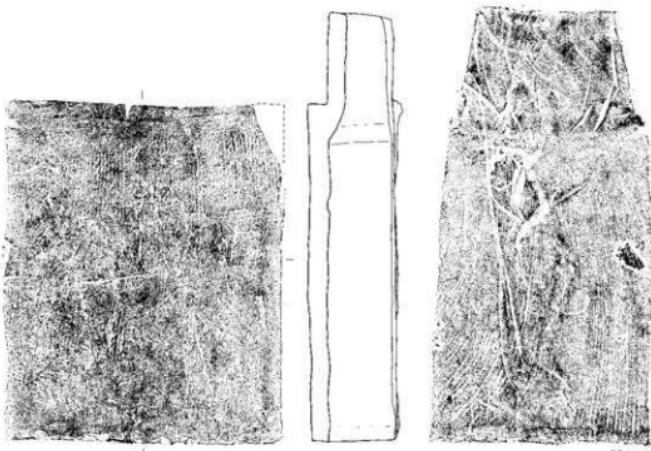
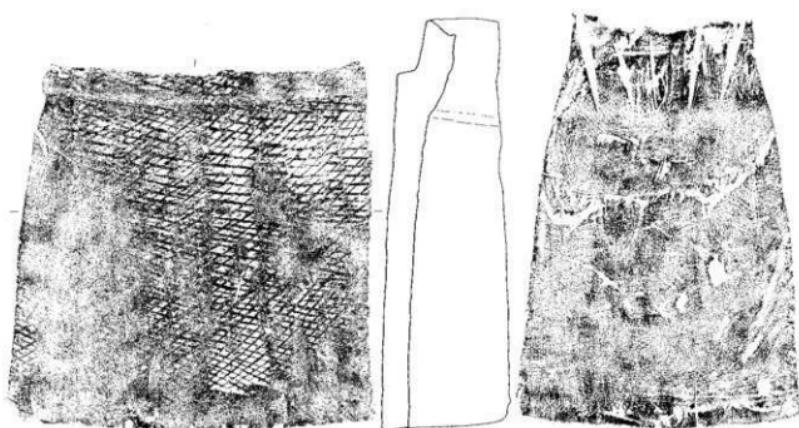


Fig.6 敲打痕文字瓦・線刻文字瓦実測図 (1/4)



32 (SK257)



33 (SK364)

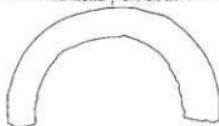


Fig.7 丸瓦実測図1 (1/4)

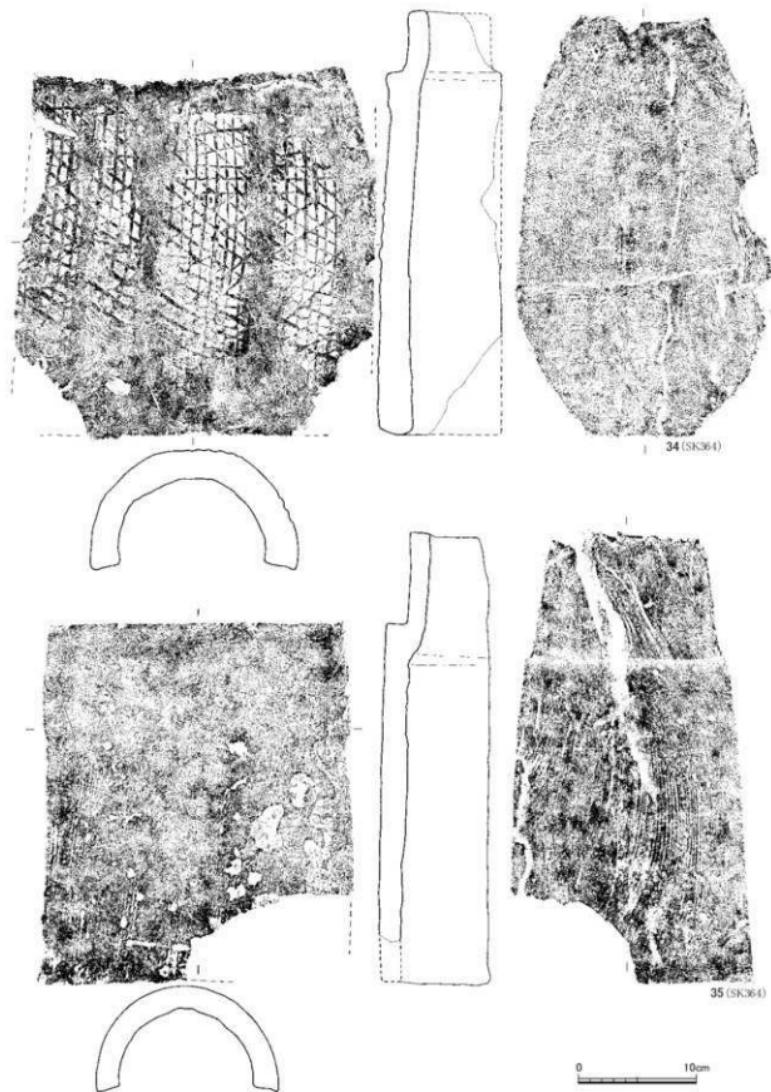
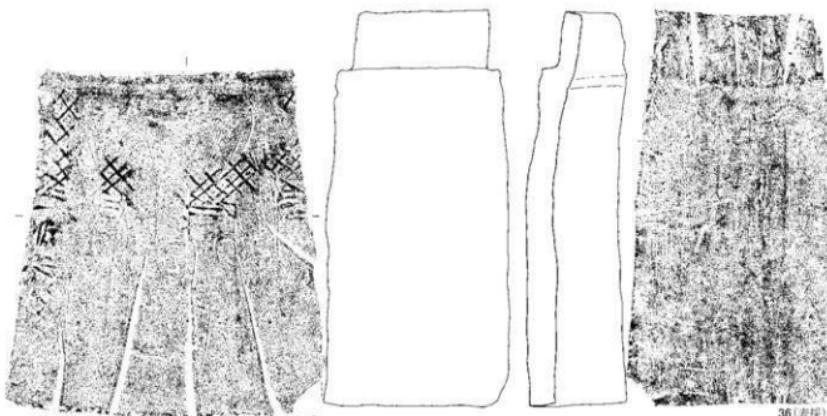
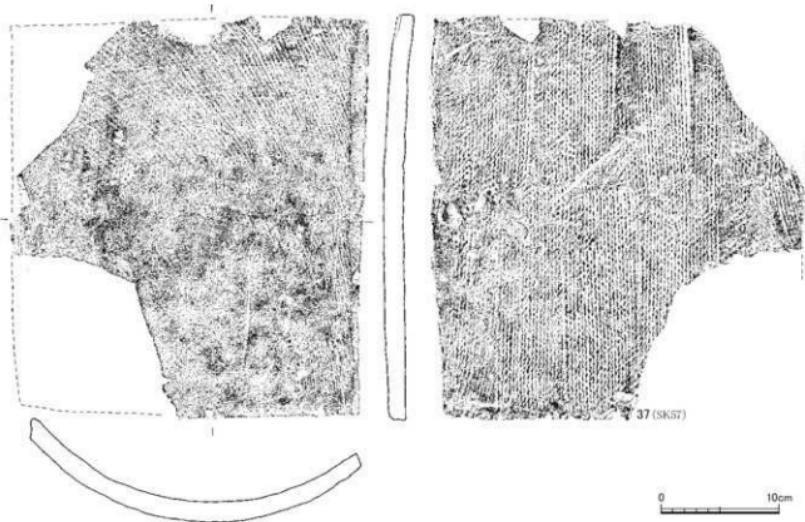
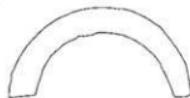


Fig.8 丸瓦実測図2 (1/4)



36(表様)



37(SK57)



Fig.9 丸瓦・平瓦実測図 (1/4)

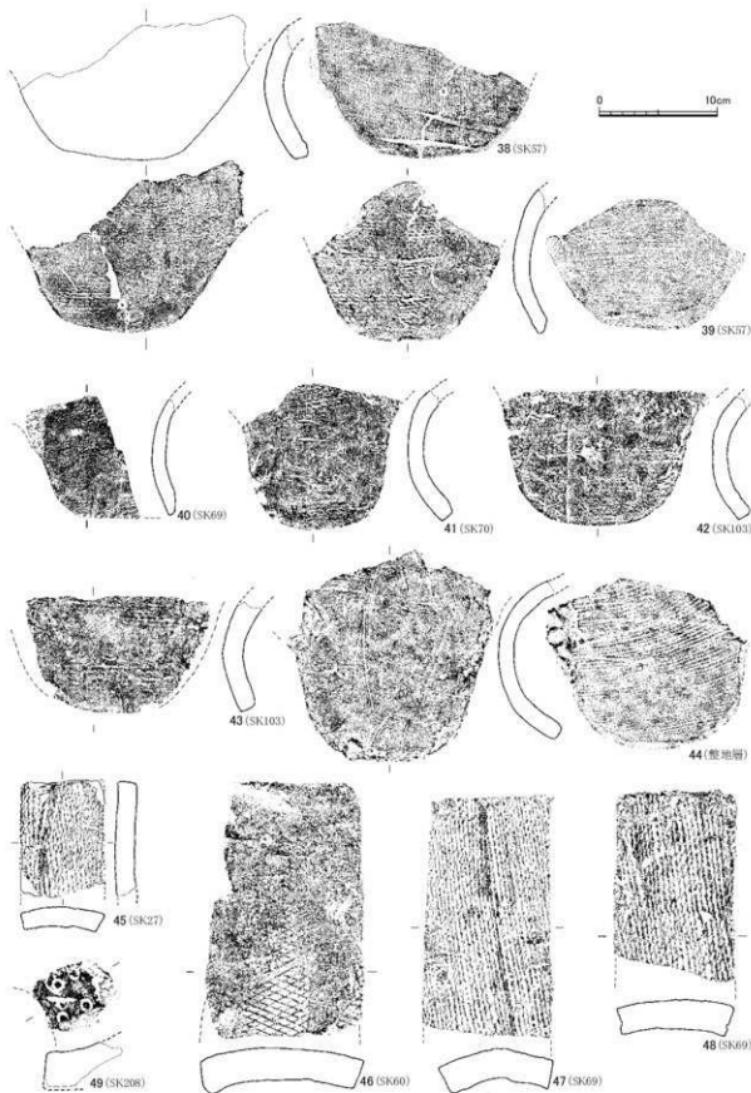


Fig.10 道具瓦実測図 (1/4)

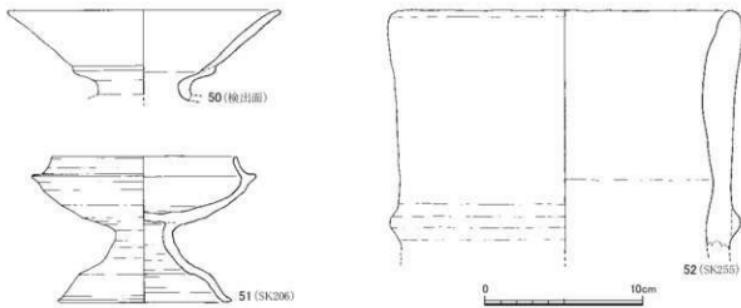


Fig.11 古墳時代遺物実測図 (1/3)



Ph.1 追加報告遺物 (縮尺不同)

2. 南館出土瓦の敲打痕分類と出土状況 Fig.12～27, Ph.2～5, Tab.6～8

1)はじめに

鴻臚館跡では南館と北館の出土瓦の様相の違いを明確にすることが重要である。このため、南館部分の第4～9次調査で出土した瓦凸面に残る敲打痕について、遺構ごとの出土状況の集計を行ったので報告する。これまで中央谷、南館の順に整理作業を進めてきており、現時点での敲打痕は88種類以上を数える。この分類に当たるまらない敲打痕もなおあるが、瓦が小片で不明瞭なものには割愛した。

2)分類の方法と課題

分類基準をTab.6に示す。鴻臚館跡出土瓦の敲打痕については『鴻臚館跡12』で示した分類（1～6類型に区分）を基本とし、その後分類作業を進めていく中で新類型の追加などを行っている。製作技法とリンクした体系的なものではなく、分類記号なども便宜的なものであるが、過去の集計データとの整合性をはかる意味から分類方法の見直しや記号の整理などは行わざそのまま使用している。鴻臚館跡では北館出土瓦の整理も今後行う予定であるが、斜ヶ浦・元岡・女原瓦窯等の調査・整理報告により判明した新見もあり、将来的には体系だった再分類を行う必要があろう。

縄目を除く敲打痕については、主に格子の形と大きさ、線の方向と数、整・不整ないし独特な文様などの特徴により分けている。叩き板単位まで分類することが望ましいが、敲打痕は種類が多く、似たような叩きが多数あるなかでの個体識別と欠損部位の検索による叩き板原体の復元は容易ではない。特に単線の斜格子（3A類）については小片では仕分けが困難で、ひとつの分類として括った中にも更に細かく分けるものもある。また格子の大きさで分けている3Aa～3Acについては同一の原体内で大きさが不規則に変異するもの多く、製作工程における収縮や歪みを考慮すると小片による分類には限界がある。また、小片をもとに型式設定したものが他の型式と同一の板であることが判明した例（3Ac2-2類と3Bc類）もあり、他にも3Ab3・3Bc類などは一類型をなさない可能性もある。一方では女原瓦窯の調査成果により単独の叩き板に特定できる特徴的な敲打痕も多数認められる。今回、特徴的な文様で個体識別が容易なもの（6C類）については拓本の合成復元を行った。

3)各分類について

各分類の代表例をFig.12～27に図示する。小片資料が大半を占め、叩き板全体が把握できる資料が少ないが、完形品を中心とするなるべく広い範囲が理解できる資料を選び出して掲載した。このため、過去に報告した遺物の再掲を含む。基本的に南館出土資料を掲示したが、欠落するものは中央谷や北館の出土瓦で補った。北館では今回破片で提示した瓦よりも良好な資料が出土しており、北館の報告時に全体を取りまとめたい。

1類及び2類については叩き板全体を同える資料が少ない。1は1A類の大きな破片だが、ナデ調整を加えており文様が不鮮明である。4と5（1C類）は同じ叩きで「大國」（大宰府分類907）の文字がある。6も1C類だが格子がやや大きくなる原体である。7は更に格子が大きく、縄目叩きを重ねて施している。8（2A類）や9（2B類）は小さな単位（短板）の原体とみられる。2B類についてはFig.34-36に全体が分かるものを掲載しており（紙面の都合で上部を省略）、長さ約5cm、幅6cm以上の単位の叩きを図の下→上、左→右の順でやや弧状に施す。12・13の3Aa老類も小さな単位の叩き板であり、13は瓦の凸面に焼成前に鳥がついばんだとみられる産みがある珍品である。この他、縄目叩きの中に短板による叩きと認められるものがあるが、以下の3A類～6類の格子叩きのほとんどは長板原体であるとみられる（ただし小片については不明）。単線の斜格子である3Aa～3Ac類は格子の大きさで区別しており、上に述べたように小片では正鶴を得た分類とはならないが、22（3Aa1-3）、48・49（3Ab5）、58～62

(3Ac2) 等は小片でも見分けが容易である。46 は 3Ab4b 類の敲打痕のある軒平瓦であるが、同様の敲打痕を持つ丸瓦には 47 の瓦当がつく。3B 類（二重線格子）から 6 類まで（64～99）は文様が特徴的で区別が容易であるが、3Bb 類や 4 類は南館ではほとんど出土していないため北館出土瓦による検討が必要である。5 類は格子に縦横線が加わるグループで、5D 類（「佐」銘の文字瓦）は正確にはこの範疇を外れるものであるが、文字銘を含まない小片の場合は 3A 類と区別がつかない。61 類についても同様に小片では 3Aa 類との混同があるだろう。なお、3B 類は斜ヶ浦瓦窯で生産されたものを多く含むと考えられ、原瓦窯から供給されたとみられる瓦については Tab.6 の備考に示した。

縄目叩きについては Fig.27 の他にも、Fig.32～34 に老司式軒平瓦や鴻臚館式軒平瓦に伴った縄目叩きを図示している。奈良時代と考えられる鴻臚館式軒平瓦（Fig.34～38）では、叩きが重複して判別し難いが長さ 7cm 強の短い板による叩きで、図の下→上、左→右へ弧状に縄目叩きを施している。また凹面には布の隙間があり幅 2.5～2.8 cm の板状の模骨痕が認められる。Fig.37～48 は第Ⅳ～V 期（9 世紀後半～11 世紀前半）の遺構からのみ出土している軒平瓦 775 型式で、凸面の頭部分まで縄目叩きを施す。長さ 15 cm 以上、幅 7 cm 以上の長方形原体を用い、縦 2 段に分けて下→上、左→右に叩いたとみられる。縄目叩きについては出土量が膨大であるため今回は細かく分類を行う余裕がなく、敲打具原体や模骨、製作技法と結びつけた細分については今後の課題であろう。

4) 文字瓦

南館で出土した敲打痕文字瓦は Tab.7 にあげた 13 種類がある。この他「大十」（敲打痕 4 類）、「Y」（同 6D 類）、「J」（同 6F 類）などの記号状の文様もこれに含まれるかもしれない。南館では「佐」（3 種類あり）、「伊賀作瓦」、「賀茂」、「賀」の文字瓦が比較的多く出土している。次年度以降に整理を行う予定である北館出土の文字瓦には「今行（左字）」がよく見受けられ、この他「門司」も出土しているが、南館では「今行」は 1 点のみ、「門司」にいたっては全く出土していない。また逆に北館では出土しない種類の文字瓦がある可能性もあり、南館と北館で差異が認められる。

5) 遺構ごとの敲打痕分類と出土傾向

Tab.8 に遺構ごとの出土瓦の敲打痕分類を示す。うち SK23～SK148 については概ね正確な分類を行うことができたと考えているが、その他の遺構については諸般の事情により誤謬を含む可能性がある。例えば小片である場合に 3A 類（格子の大きさで a～c に細分）を小さく認定したり大きく認定したり、5B 類を 5A 類と誤認したりしている可能性がある。また作業を進める中で分類が細分化したため、初期に作業を行った資料については仕分けが不充分なものもある（作業は SK368～SK23 の逆順で実施した）。

出土傾向を見ると、普遍的に最も多く出土するものは縄目叩きであるが、これと逆に稀なものとして格子叩きの 3Ac2 類、4 類、6 類の一部（Ab, E, F, G, J）などがある。特に 3Ac2-1・3Ac2-2・4Ba 類については南館の遺構では全く確認することができなかった（Tab.8 には項目がない）。一方、今後に整理を行う予定の北館から出土する瓦には 3Ac2 類、4 類などが普遍的に認められることから、南館・北館で出土する瓦の様相に差異があるものと考えられる。上に述べた文字瓦や、次項で述べる軒瓦についても同様の現象をうかがうことができ、南館と北館で使用された瓦の種類が一様でなかったことが明らかである。今後北館出土瓦の分類を行うことにより、南館と北館で出土する瓦の様相の違いをより明確にできるものと考えている。

6) 廃棄時期について

Tab.8 に各遺構の時期を示したが、土器が少なく時期が詳細でない遺構も多い。第Ⅱ期（8 世紀前半）の遺構であるトイレ遺構（SK57・69・70）は上層に 9 世紀代の埋土があり出土遺物に一括性を欠くが、鴻臚館式軒平瓦 635 型式に伴う敲打痕である縄目、1C 類の一部、2A 類、2B 類、老司式に伴う 3Aa 老

Tab.6 鴻臚館跡（南館）瓦凸面の敲打痕分類基準（純目を除く）

分類	大きさや特徴による細分	図 Fig.12~23	備考
1 叩き板の軸と平行する線による方形の格子	A 格子の形状が不揃いな方形 B 格子の大きさが不揃いな方形（複数種類あり） C 細線の小さな正方形格子（「大國」銘（複数種類あり）	1 2・3 4~6	軒平635型式に伴う例あり
2 平行な線（格子にならない）	A 太線 B 細線（須恵器の叩きに近い） C 極太で間隔が広い平行線（複数種類あり）	8 9 10・11	軒平635型式に伴う例あり 軒平635型式に伴う例あり
3 叩き板の軸に斜交する格子			
A 単線の斜格子（以下、格子の大きさによりa~cに区分）	a 小:格子の長辺が15mm以下 老「老式式」平瓦に特徴的な方形斜格子 1:格子の長辺が10mm以下 1)長辺5mm以下（複数種類あり） 2)長辺5~10mm（複数種類あり）（「伊賀作瓦」銘） 3)一部が平行線となる	12・13 14 15~21 22	
	2:格子の長辺が10mm~15mm 1)a:長辺13mm以下（複数種類あり）（「介」「賀茂903G」銘） 1b)歪んだ格子（複数種類あり）（「平井901E・J」銘） 1c)片方が細線の格子 2)長辺13~15mm（複数種類あり）（「今行」銘）	23~28 29~32 33 34~36	女原瓦窯G型含む
	b 中:格子の長辺が15~20mm 1)長辺が15mm~18mm（複数種類あり） 2)長辺が18mm~20mm（複数種類あり） 3)格子とクロスする細線を加える（6Hの一部？） 4)格子と平行な線を加える（複数種類あり） 5)格子の長辺が20mmで、細長い菱形をなす 6)格子内部にさらに細線の格子を加える（複数種類あり）	37~41 42・43 44 45~47 48・49 50・51	女原瓦窯E型含む (小片のため不明確) 48は女原瓦窯D型 51は女原瓦窯F型
	c 大:格子の長辺が20mm以上 1:区画内文様なし（格子及び格子に平行する線のみ） 1)格子の長辺が20~23mm（複数種類あり、細線の入るものあり） 2)23mm以上（複数種類あり） 3)不規則な大格子（複数種類あり）	52~54 55・56 57	女原瓦窯A型・B型含む
	2:格子とは別に区画内に文様がある 1)「×」文様 2)花弁文様等 3)短い細線（3a1~1の一部？） 4)「×」「×」文様（1と同じ可能性もある）	58 59・60 61 62・63	(南館には無い) (南館には無い) (小片のため不明確)
B 二重線の斜格子	a 規則的な斜格子 1 特大で整った斜格子 2-1 方形に近い整った斜格子（「賀茂/903D」銘） 2-2 方形に近いやや不整な斜格子（「賀茂」銘） 3 菱形に近いやや不整な格子（文字認めず） 4 菱形の複線斜格子に細線の斜格子を重ねる（文字あり）	64 65 66 67 68	
	b 不規則な斜格子 1 線の間隔が一定しない菱形 2 線の間隔が一定で、平行四辺形	69 70	(小片のため不明確) (小片のため不明確)
	c (3Ac2-2と同一のため除外)		
	d 片方の斜線が3本線（文字あり）	71	
	e 片方の斜線が2本線の格子(3Ab6の一部?)	72	(小片のため不明確)

分類	大きさや特徴的な叩き等による細分	図 Fig.23~27	備考
4 区画内に「十・大」文様のある特徴的な特大斜格子			
A 斜格子に縦平行線加え、格子内に「大」「十」「×」等		73	
B 斜格子のみ			
a 菱形に近い格子、格子内に「大」「十」「◆」等		74	(南館には無い)
b 方形に近い格子、格子内に「十」「×」等		75	
5 斜格子に縦・横・平行線を加える			
A 斜格子とほぼ同じ間隔の縦線を入れる		76	
B 斜格子により多く縦線を入れ、斜格子の一部を横線・単独斜線に替える		77	女原瓦窯M型
C 縦線に横線・斜線を加えた記号様の独特な叩き		78~79	女原瓦窯L型
D 斜格子の中央部を横線等で区画し、「佐」(902E-F-J)を入れる(3種類あり)		80~82	
E 5AIに類似するが線の間隔が広く粗雑		83	
6 その他(極めて特徴のある文様でいずれも一種類の板)			
A a 左上がり平行線にクロスする一本線を加える		84~85	軒平663型式に伴う例あり
b 行線と右上がりで線が太い		86	
B 斜線が平行でなく、不揃いで不整な斜格子		87~88	女原瓦窯K型
C 右上がり斜線・斜線・横線・縦線を加えた記号様の独特な叩き		89~90	
D 不等間隔の斜線に「Y」字様の文様を加える		91	女原瓦窯J型
E 不整斜格子		92~93	
F 不整斜格子に「J」字様の文様等を加える		94	
G 「J」「×」の文様等を挟んで向きが異なる独特な單線斜格子		95	
H 文様等を挟んで上下で向きが異なる独特で不整な單線斜格子		96~97	軒平663型式に伴う例あり
I 斜格子・正格子・平行線を組み合わせた独特な格子		98	
J 特徴的な文様のある不整斜格子		99	

Tab.7 文字瓦出土状況

文字銘	大宰府分類 (敲打痕分類)	図	種類	調査区							計	備考
				8829 4次	8910 5次	9005 6次	9130 7次	9236 9次	9420 11次	9736 14次		
平井(正字)	901E	Fig.17-32	丸瓦			1					1	1点のみ
平井(左字)	901J	Fig.17-31	丸瓦 平瓦	1	1	1	3				7	
佐(正字)	902E	Fig.24-80	丸瓦 平瓦		2	1	18	3			30	SK208から15点
佐(左字)	902F	Fig.24-82	丸瓦 平瓦			1		2			3	
佐?(正字)	902J	Fig.24-81	丸瓦 平瓦	2	2	4	5	1			34	SK208から14点
賀茂(正字)	903D	Fig.22-65	丸瓦 平瓦	1	10		4	9	1		26	
賀茂(正字)	903G	Fig.16-25	丸瓦 平瓦		1		1				10	
賀(左字)?	(3Ba2-2)	Fig.22-66	丸瓦 平瓦	2	4	2					26	不明瞭1含む
大国(左字)	907	Fig.12-4	平瓦		1		1				2	
介(正字)	912	Fig.16-24	丸瓦 平瓦			1	2				4	
今行(左字)	913	Fig.17-34	平瓦					1			1	
伊賀作瓦(正字)		Fig.15-18	平瓦	1	11	4	3	2	1	22	不明瞭1含む	
(賀茂?)	(3Bd)	Fig.23-71	丸瓦 平瓦	4	1		1	2			10	

類などは第Ⅱ期に属するものと考えられる。第Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）の遺構である礎石建物SB50に伴う溝からは縄目・2B類に加え単線の小さな格子である3Aa1～3Aa2類と5A類が出土しているが、第Ⅲ期には良好な一括資料を出土する廐棄土坑などの遺構が少なく詳細が不明である。その他の敲打痕の大半は第Ⅳ期（9世紀後半～10世紀前半）以降に出現するが、5D類は第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）の遺構からのみ出土し、4類も第Ⅴ期まで下るものである。

鴻臚館跡のこれまでの調査では第Ⅳ～Ⅶ期（9世紀後半～11世紀前半）の建物遺構は見つかっていないが、出土する瓦はむしろこの時期になって一気に多様化する。瓦葺き建物が存続したことは間違いない、建物の修理等のため複数の瓦窯からたびたび瓦が供給されたことを示すものと考えられる。

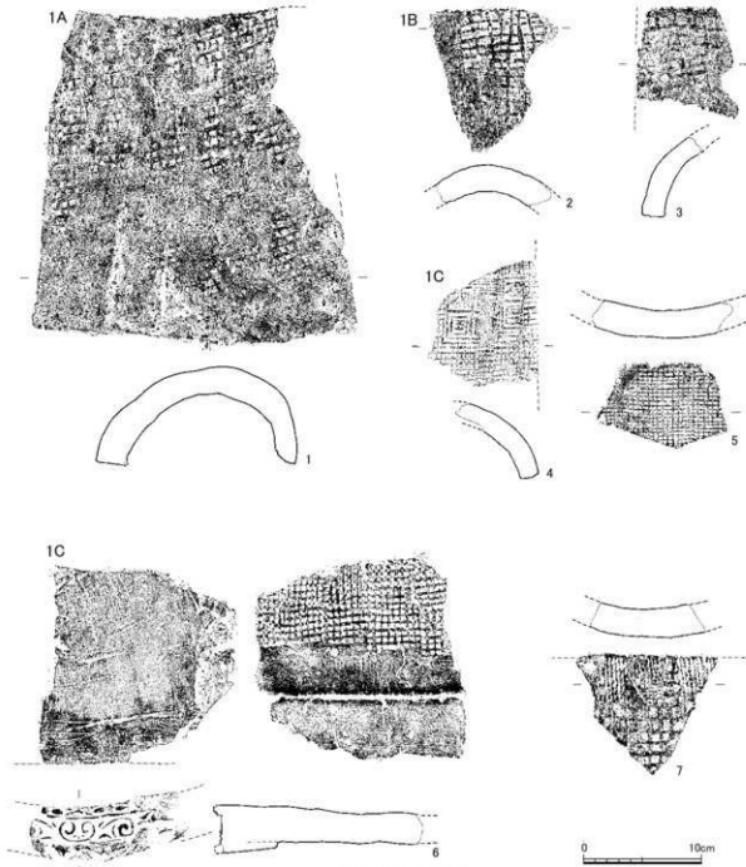


Fig.12 瓦の敲打痕 1 (1/4)

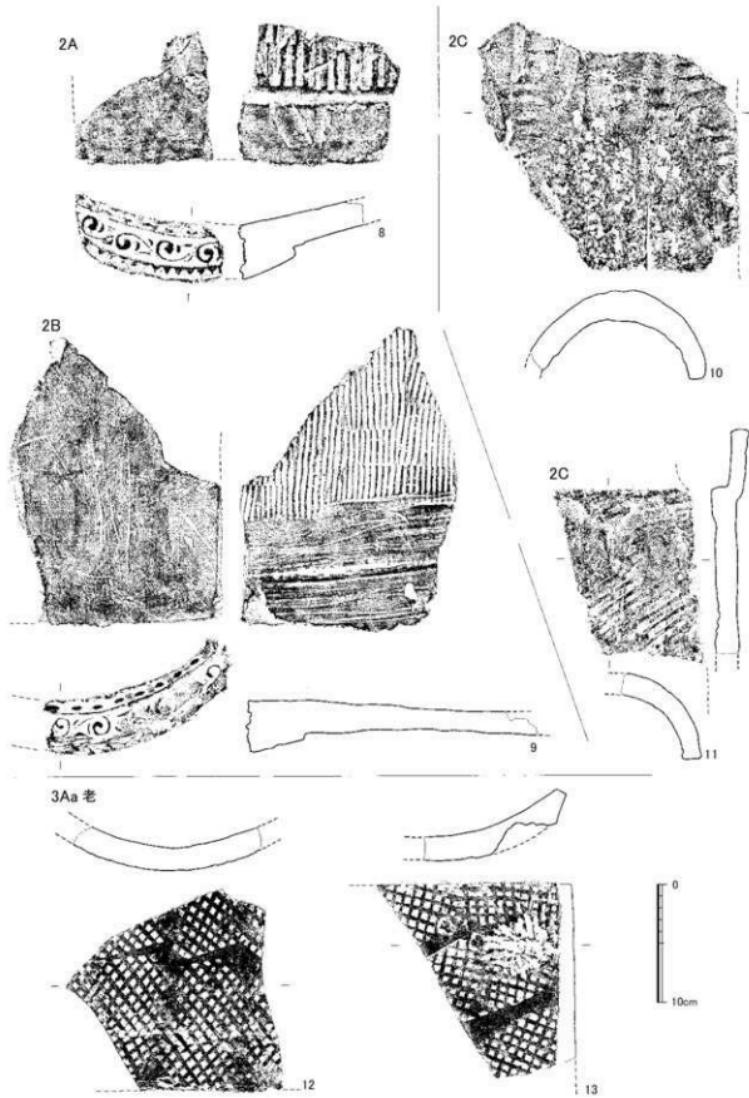
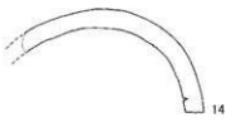


Fig.13 瓦の敲打痕 2 (1/4)

3Aa 1-1



3Aa 1-2

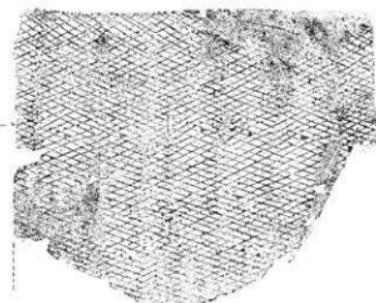


16

3Aa 1-2



15



17



Fig.14 瓦の敲打痕 3 (1/4)

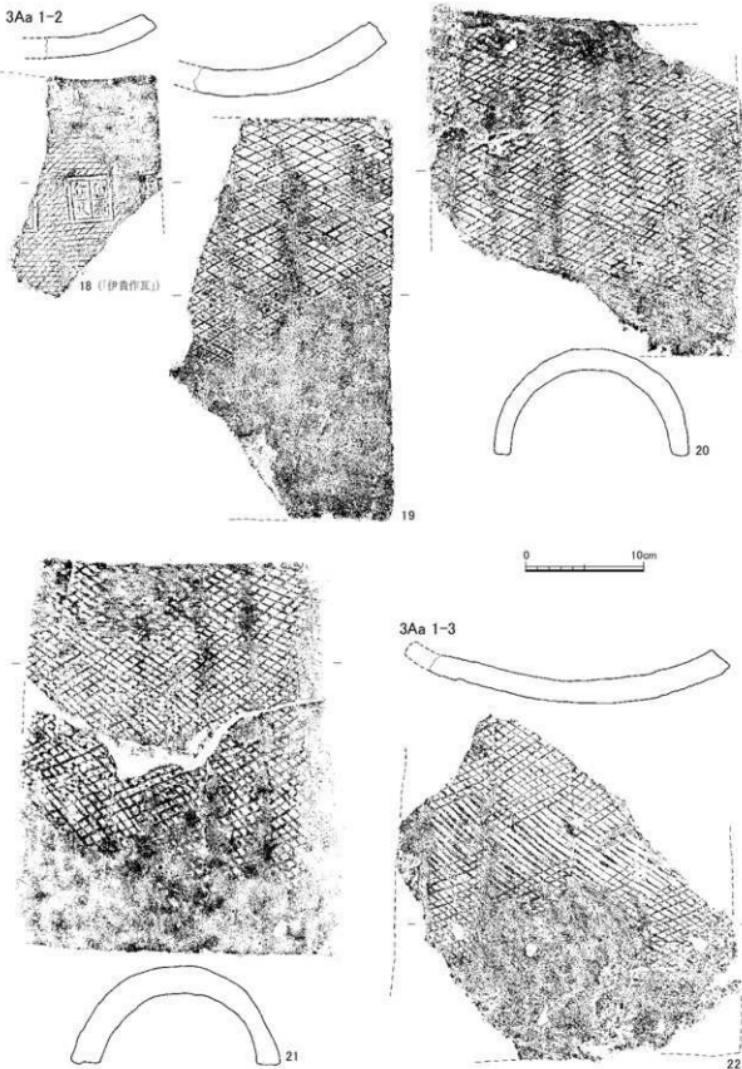


Fig.15 瓦の敲打痕 4 (1/4)

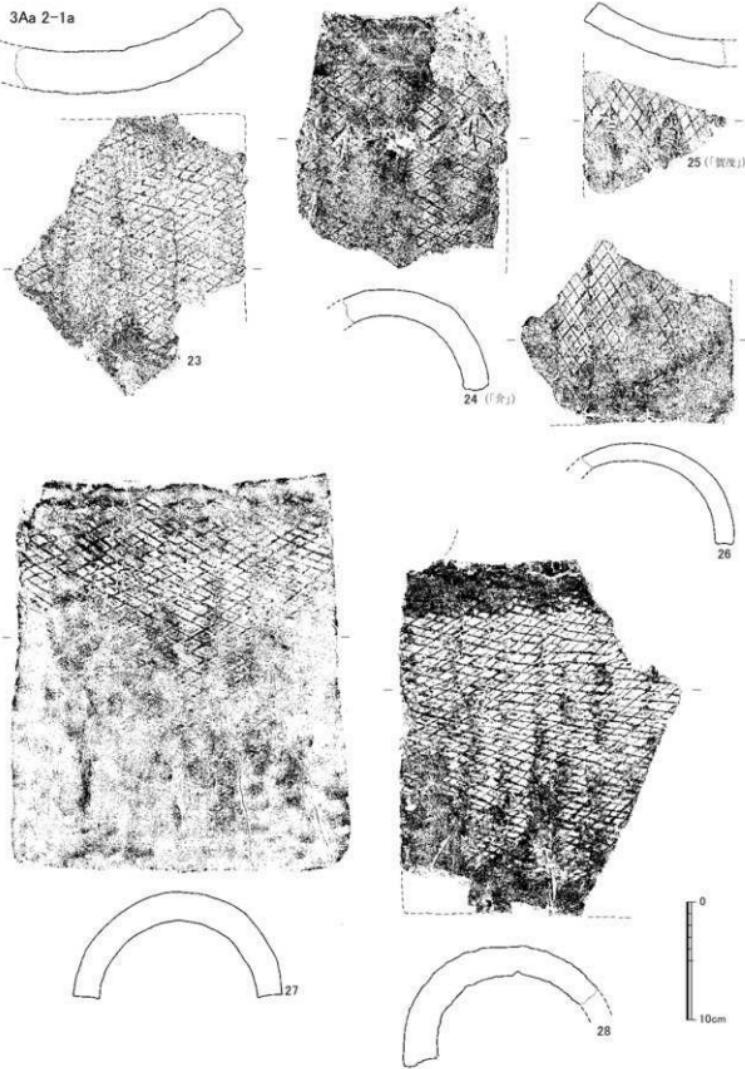


Fig.16 瓦の敲打痕 5 (1/4)

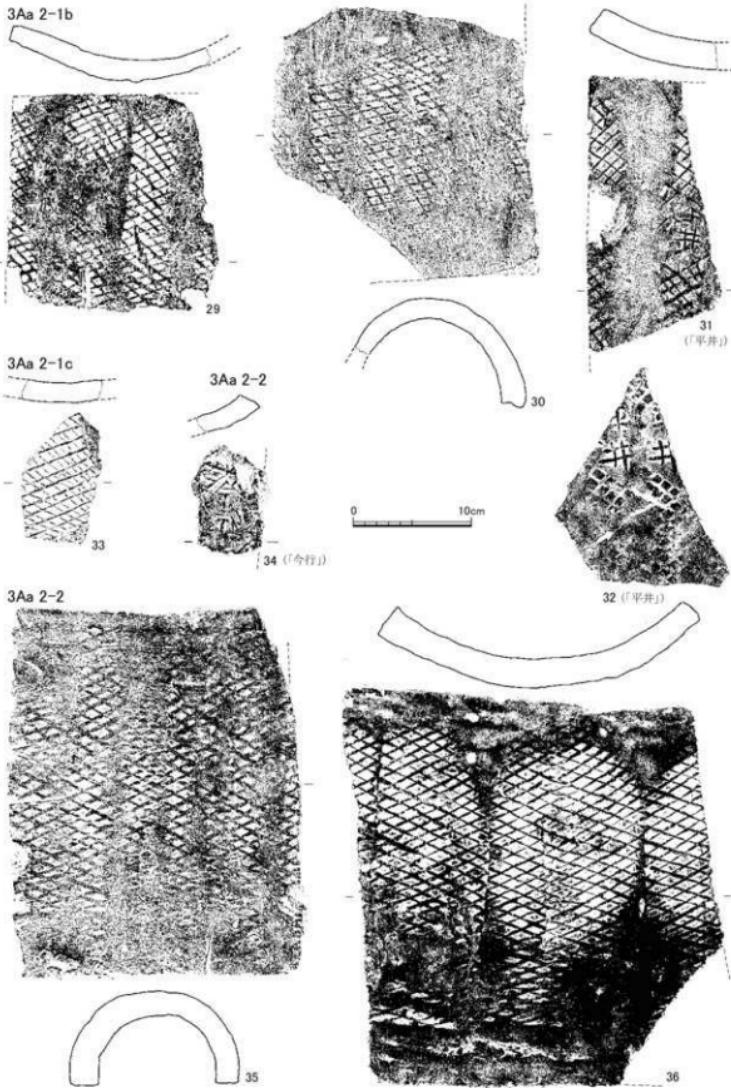
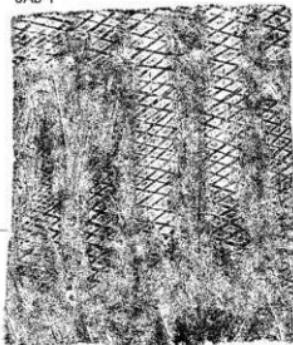
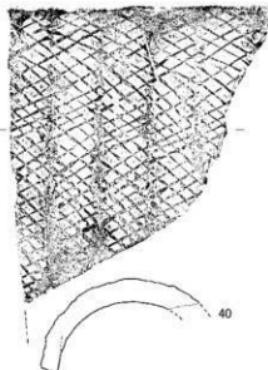


Fig.17 瓦の敲打痕 6 (1/4)

3Ab 1



39



40



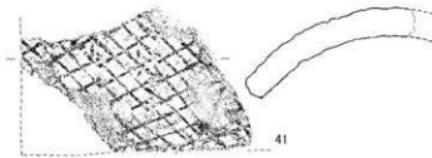
37



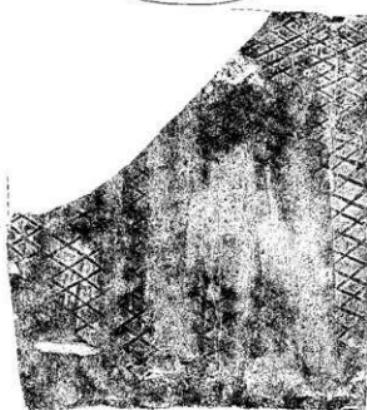
3Ab 2



38



41



42

Fig.18 瓦の敲打痕 7 (1/4)

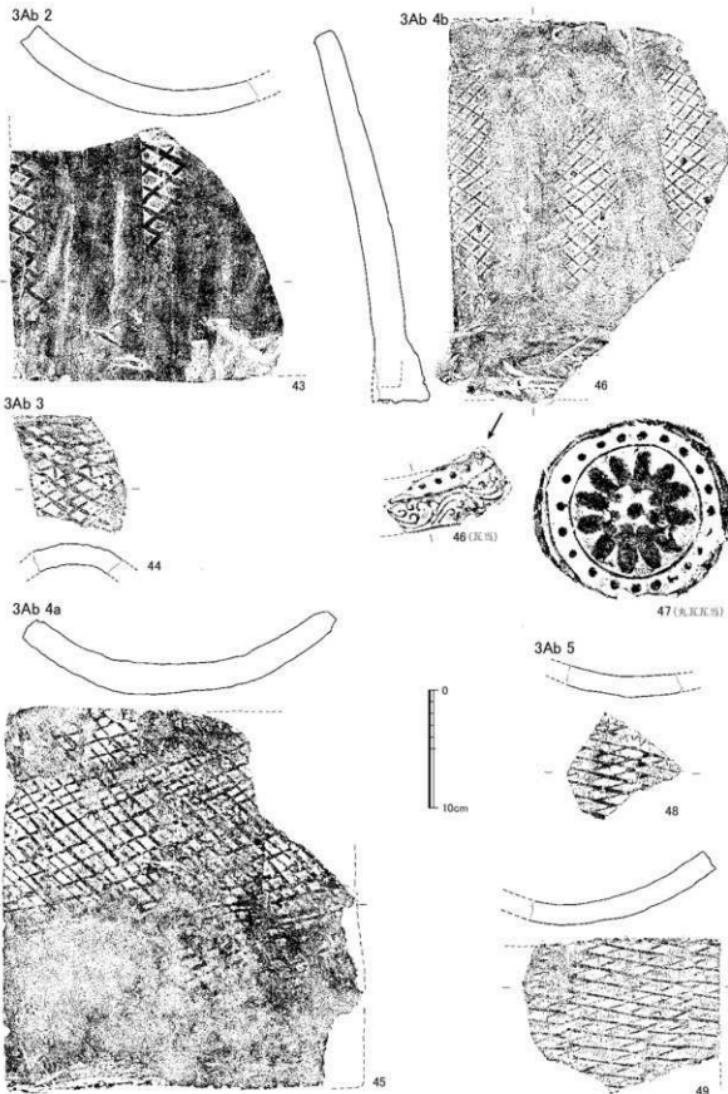


Fig.19 瓦の敲打痕 8 (1/4)

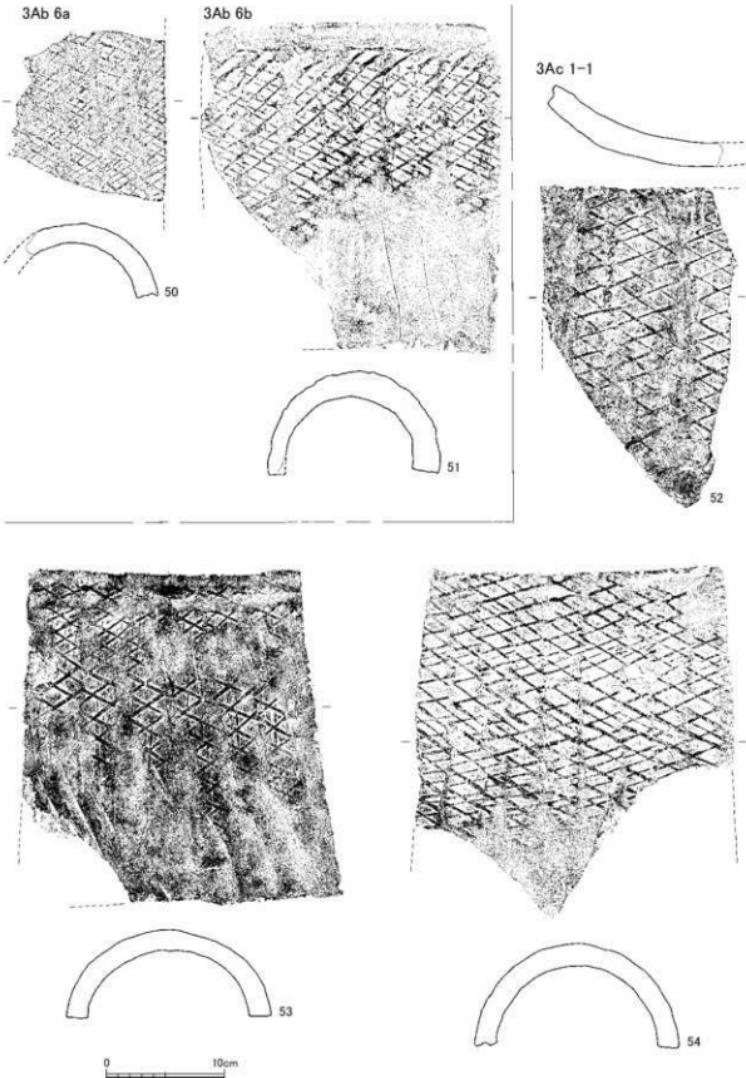
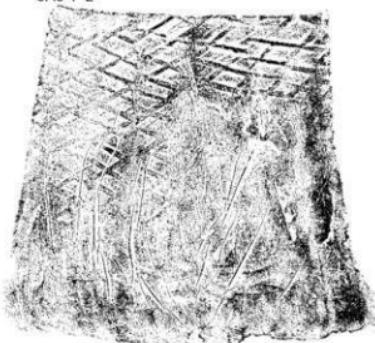
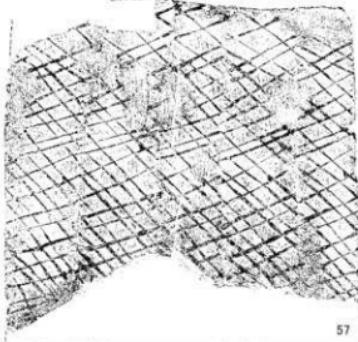


Fig.20 瓦の敲打痕 9 (1/4)

3Ac 1-2



3Ac 1-3

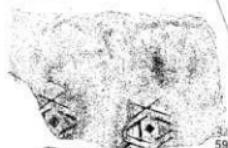


0 10cm

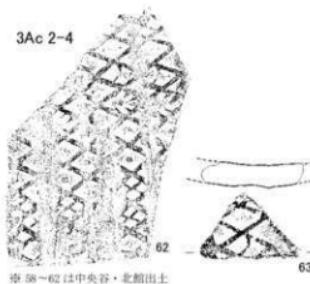
3Ac 2-1



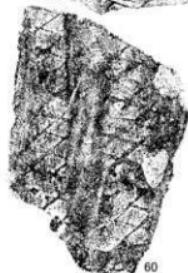
3Ac 2-2



3Ac 2-4



3Ac 2-3



※ 58~62 は中央谷・北館出土

Fig.21 瓦の敲打痕 10 (1/4)

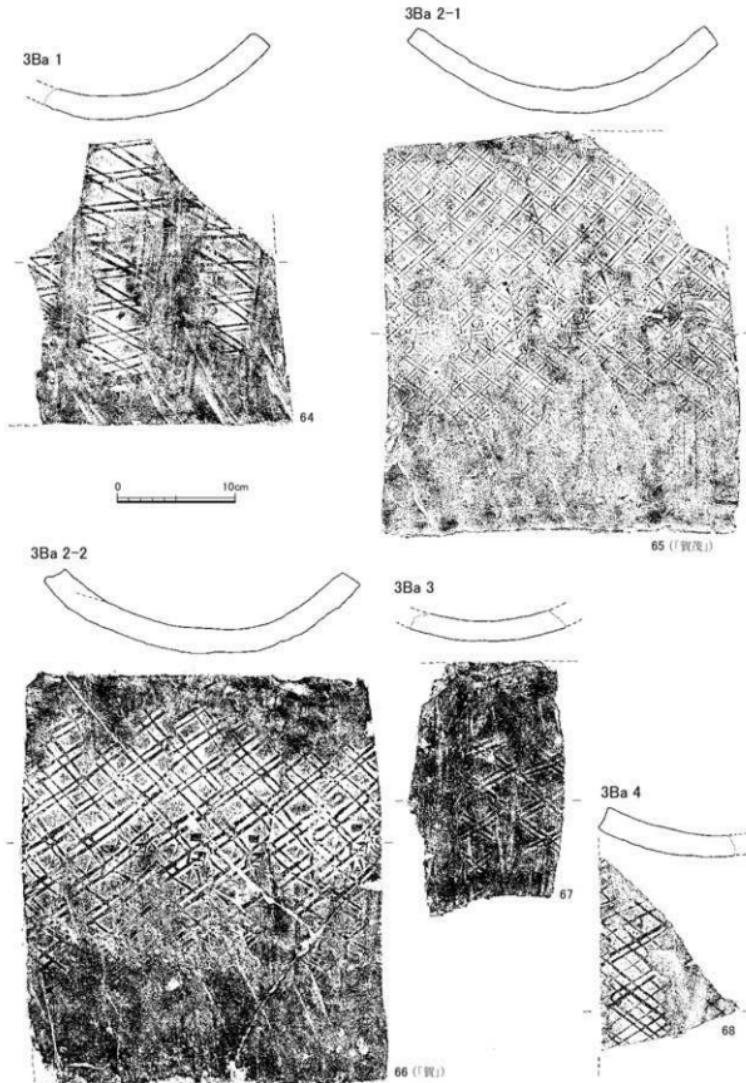


Fig.22 瓦の敲打痕 11 (1/4)

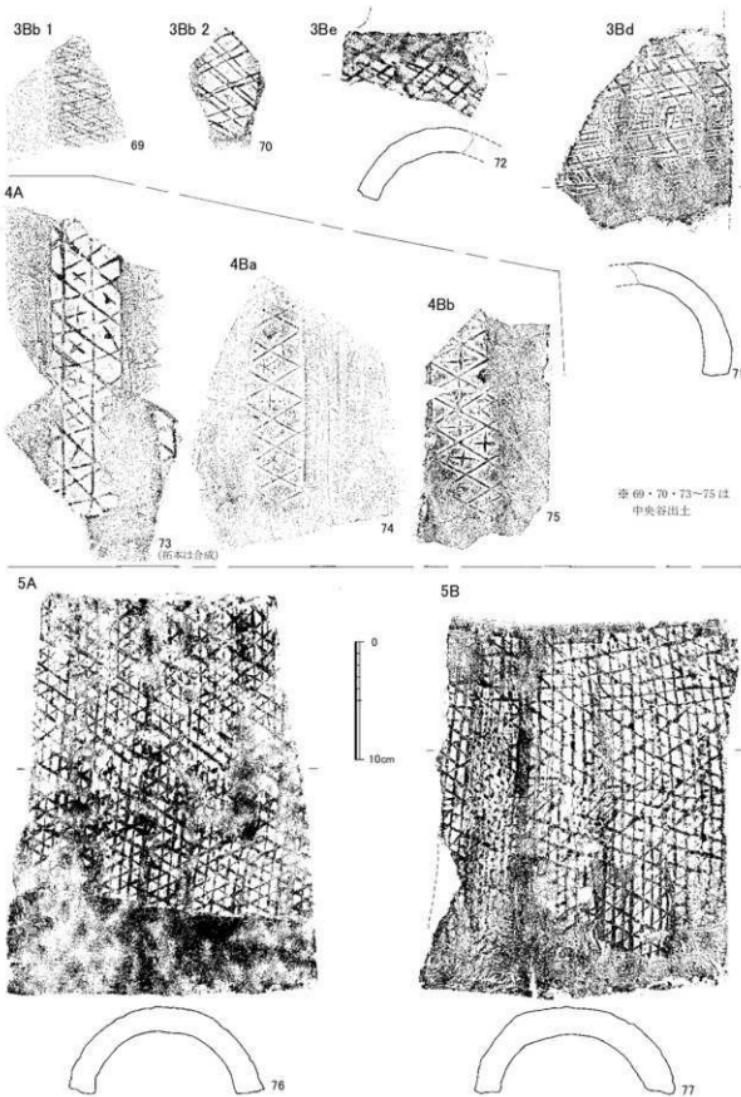


Fig.23 瓦の敲打痕 12 (1/4)

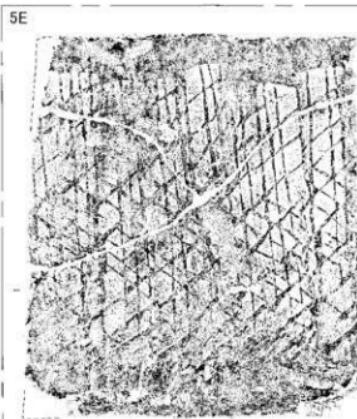
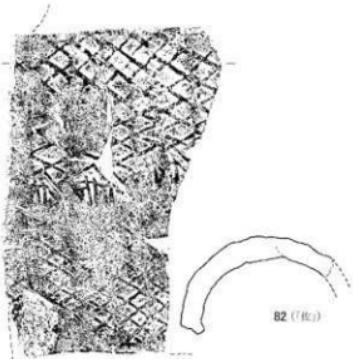
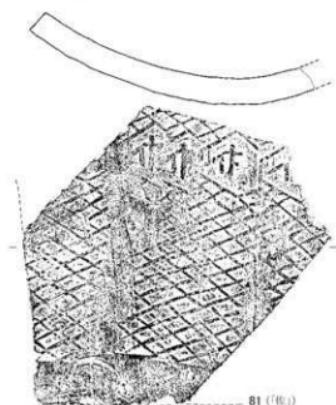
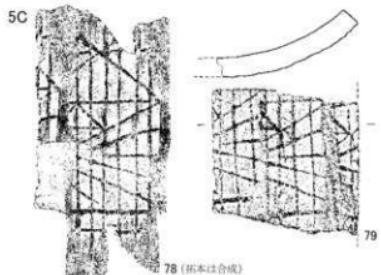


Fig.24 瓦の敲打痕 13 (1/4)

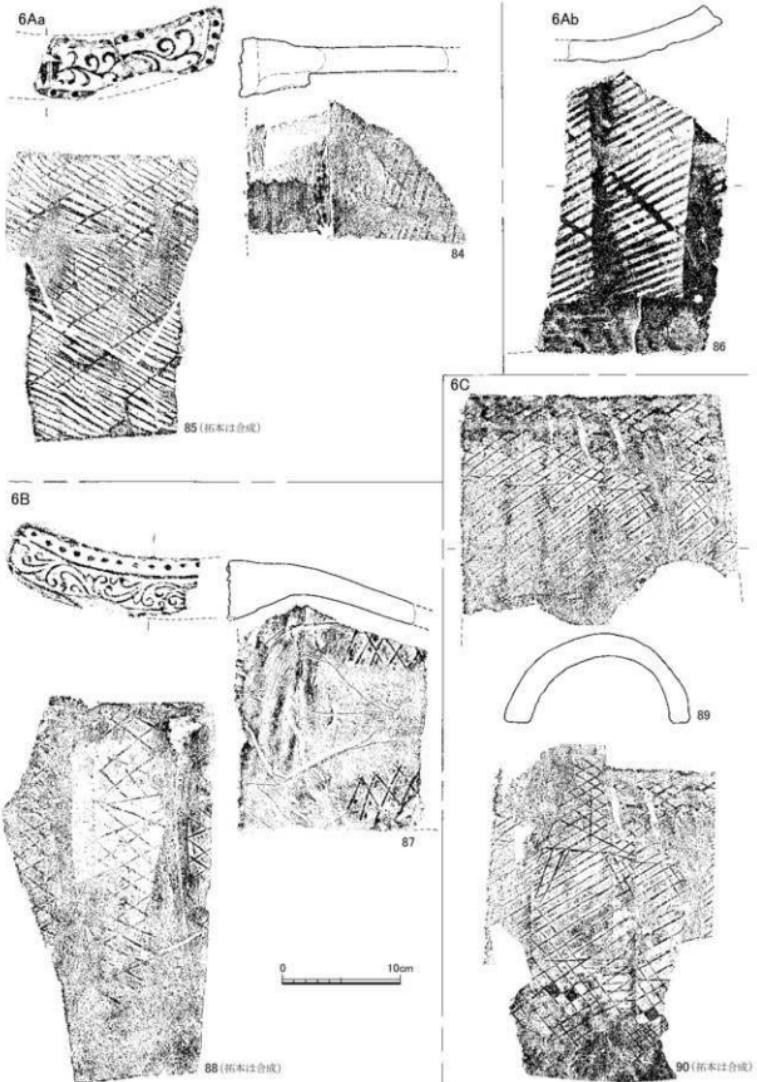


Fig.25 瓦の敲打痕 14 (1/4)

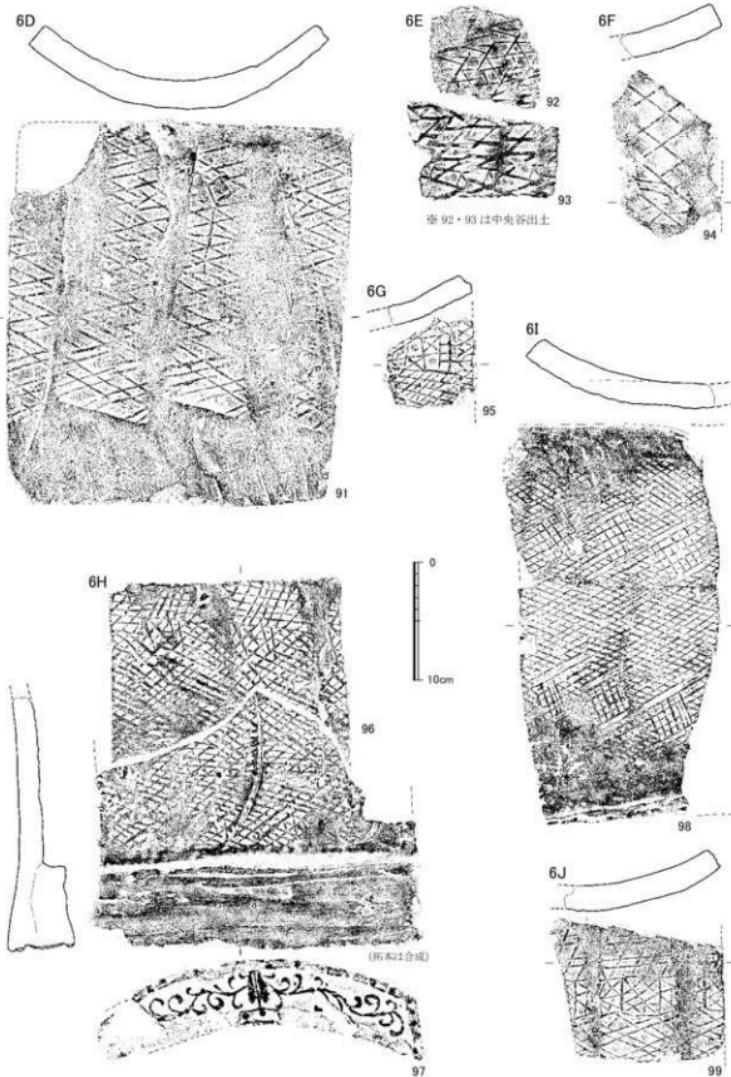
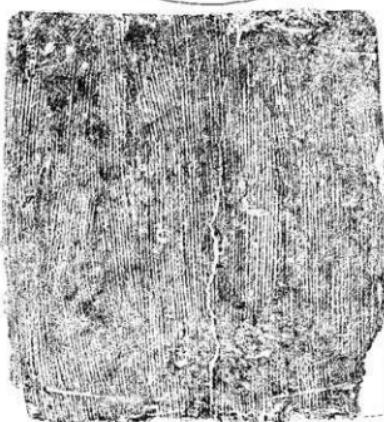


Fig.26 瓦の敲打痕 15 (1/4)

繩目



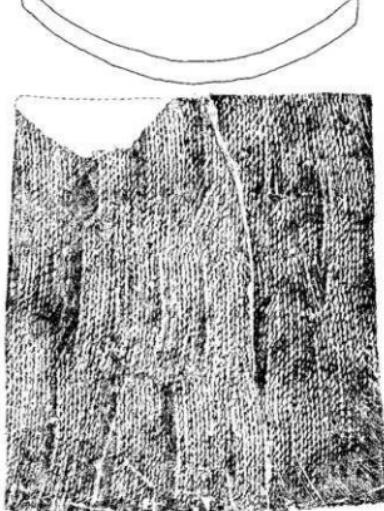
100



102



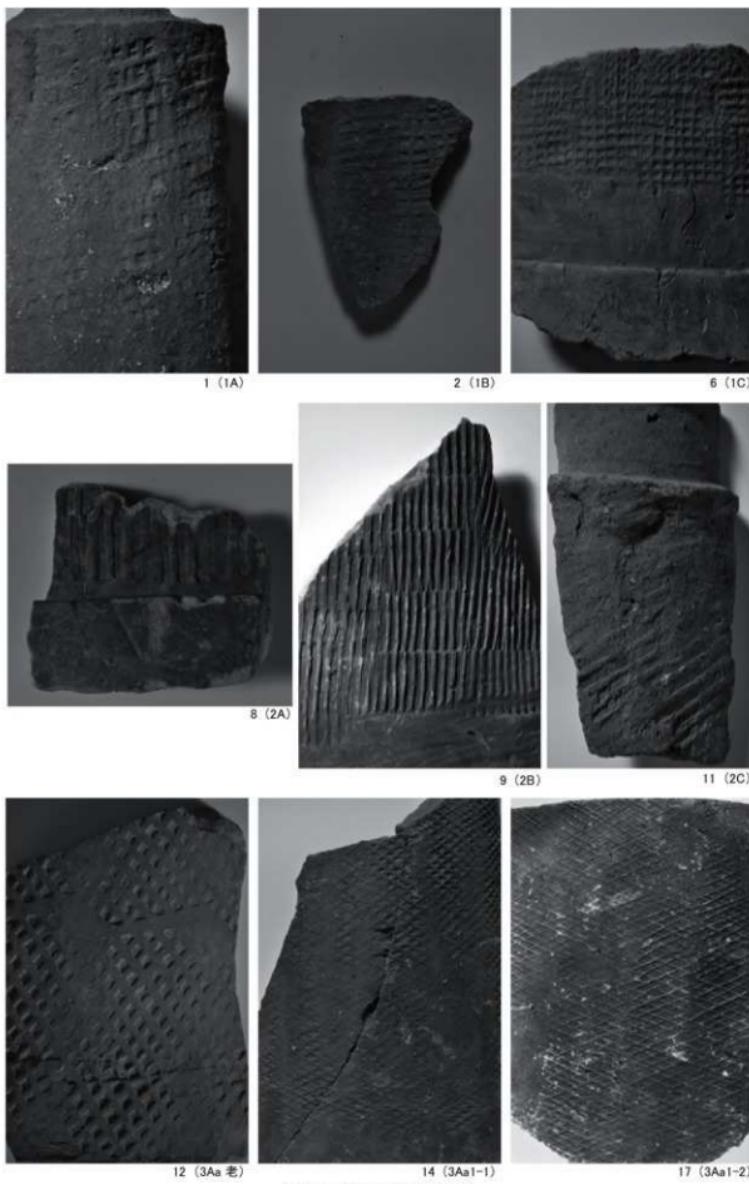
103



101



Fig.27 瓦の敲打痕 16 (1/4)



12 (3Aa)

14 (3Aa1-1)

17 (3Aa1-2)

Ph.2-1 瓦凸面の敲打痕 (1)



20 (3Aa1-2)



22 (3Aa1-3)



24 (3Aa2-1a 「介」)



27 (3Aa2-1a)



28 (3Aa2-1a)



29 (3Aa2-1b)



33 (3Aa2-1c)



36 (3Aa2-2)



38 (3Ab1)

Ph.2-2 瓦凸面の敲打痕 (2)



39 (3Ab1)



40 (3Ab1)



42 (3Ab2)



45 (3Ab4a)



46 (3Ab4b)



49 (3Ab5)



50 (3Ab6a)

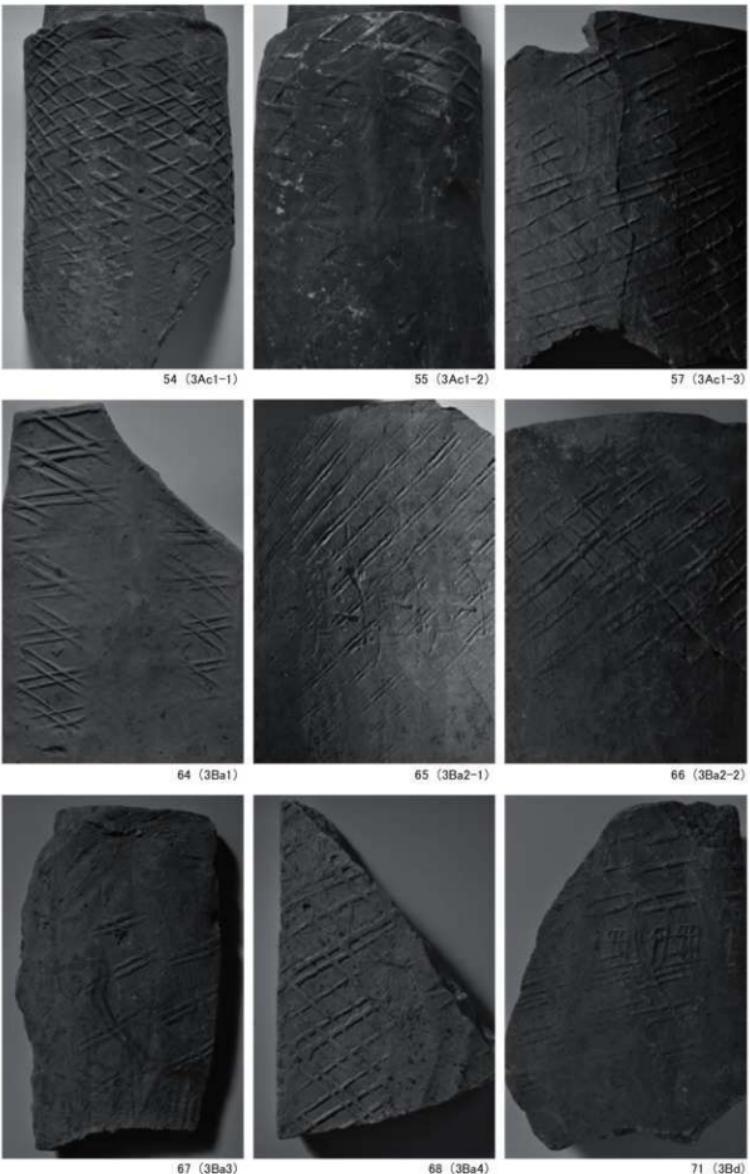


51 (3Ab6b)



53 (3Ac1-1)

Ph.3-1 瓦凸面の敲打痕 (3)



Ph.3-2 瓦凸面の敲打痕 (4)

Tab.8-1 南館（第4～14次調査）の遺構出土瓦の敲打痕分類（1）

遺構名	遺構の時期 (I～Vは地盤変動時期区分)	縦目	1			2			3Aa						3Ab						3Ac					
			A B C			A B C			I 1 2 3 1a 1b 1a 2			I 2 3			4 a b			B e b			I 1 2 3 3 4					
			I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	4		
SK_23	不詳		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
SK_24	V 11a前半		○	○	○																					
SK_27	V 11a前半		○	○	○																					
SK_36	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_38	IV 9c後半～10a前半		○	○	○																					
SK_49	V 11a前半		○	○	○																					
SK_53	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_56	IV 9c後半～10a前半		○	○	○																					
SK_57	II 8c前半～上部は9c(?)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
SK_68	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_69	II 8c前半～上部は9c(?)		○	○	○																					
SK_81	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_82	IV 9c後半～10a前半		○	○	○																					
SK_88	不詳		○	○	○																					
SK_73	不詳		○	○	○																					
SK_74	不詳		○	○	○																					
SK_75	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_76	不詳		○	○	○																					
SK_80	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_81	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_82	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_83	不詳(?)		○	○	○																					
SK_84	不詳(?)		○	○	○																					
SK_85	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_86	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_87	V 11a前半		○	○	○																					
SK_88	V 11a前半		○	○	○																					
SK_90	IV 不詳(?)		○	○	○																					
SK_91	V 11a前半		○	○	○																					
SK_92	IV 不詳(?)		○	○	○																					
SK_93	V 10c後半～11c前半		○	○	○																					
SK_94	不詳		○	○	○																					
SK_95	不詳		○	○	○																					
SK_100	IV 9c後半～10a前半		○	○	○																					
SK_103	V 11a前半		○	○	○																					
SK_106	不詳		○	○	○																					
SK_107	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_107	不詳		○	○	○																					
SK_119	不詳		○	○	○																					
SK_120	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_147	V 11a前半		○	○	○																					
SK_148	V 11a前半		○	○	○																					
SK_152	V 11a前半		○	○	○																					
SK_153	V 11a前半		○	○	○																					
SK_154	V 11a前半		○	○	○																					
SK_155	V 11a前半		○	○	○																					
SK_156	V 11a前半		○	○	○																					
SK_157	V 11a前半		○	○	○																					
SK_158	V 11a前半		○	○	○																					
SK_159	V 11a前半		○	○	○																					
SK_160	V 11a前半		○	○	○																					
SK_203	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_204	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_211	V 10c後半～11a前半		○	○	○																					
SK_224	五?		○	○	○																					
SK_229	IV 9c後半～10a前半		○	○	○																					



76 (5A)



77 (5B)



79 (5C)

Ph.4-1 瓦凸面の敲打痕 (5)

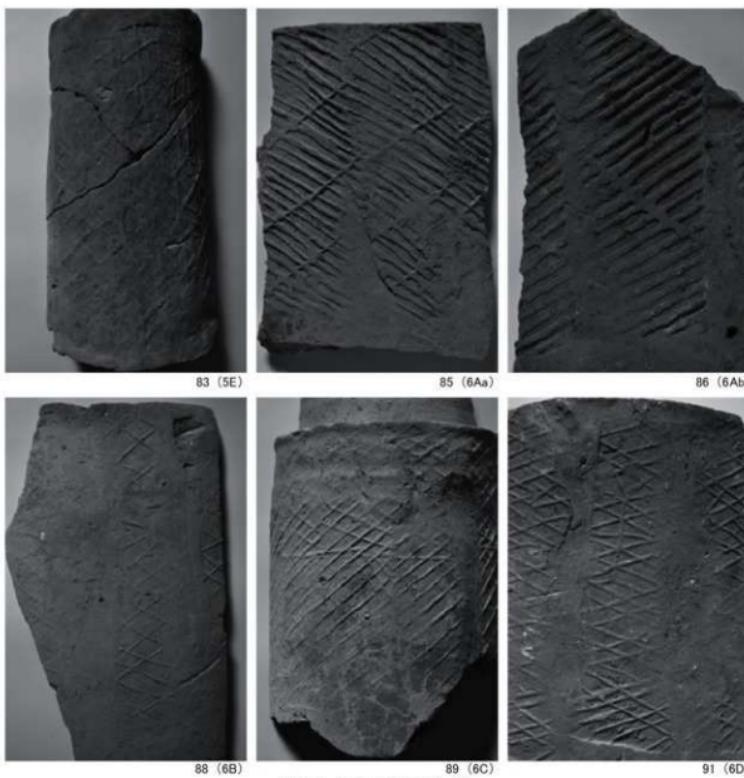
遺構名	38a		38b		38c		38e		4		5		6		7		漢文	大字五		五面数 その他					
	2-1	2-2	3	4	1	2	A	Bb	A	B	C	D	E	G	H	I	J	不詳	甲	乙	丙	丁	戊		
甲丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	11	
SK 23	○						○											○							3
SK 24	○						○											○							4
SK 26							○	○	○									○						4	
SK 38							○		○	○								○						12	
SK 40	○	○					○		○	○								○						29	
SK 54							○		○		○	○						○						9	
SK 55	○						○			○	○		○					○						8	
SK 56							○		○	○		○						○						1	
SK 57							○		○		○							○						53	
SK 58							○		○		○							○						31	
SK 59							○		○		○							○						9	
SK 60							○		○		○							○						2	
SK 61							○		○		○							○						22	
SK 62							○			○								○						25	
SK 66							○		○		○							○						8	
SK 70							○		○		○							○						7	
SK 72							○		○		○							○						12	
SK 73							○		○		○							○						2	
SK 74										○	○														1
SK 75	○		○				○	○	○	○	○							○						合 67	
SK 76							○											○							0
SK 77							○											○							5
SK 81							○		○		○							○						2	
SK 82	○		○				○			○		○						○						28	
SK 83							○			○		○						○						1	
SK 84							○		○		○							○						2	
SK 85							○	○		○	○						○	○						16	
SK 86							○		○		○							○							7
SK 88	○	○					○		○		○							○	○	○				4	
SK 90			○				○		○		○							○						7	
SK 91							○		○		○							○						2	
SK 92							○		○		○							○						2	
SK 94							○			○								○						1	
SK 95	○						○			○								○						3	
SK 98																			○						4
SK 100																			○						4
SK 103							○		○		○							○						20	
SK 104																			○						5
SK 105							○		○		○							○						18	
SK 107																			○						2
SK 119							○			○								○						4	
SK 129							○		○		○							○						4	
SK 147							○		○		○							○						1	
SK 148	○																		○						10
SK 152																			○						18
SK 153																			○						27
SK 155	○	○																	○						9
SK 159	○	○																							平均9.0E 17
SK 160	○	○																							20
SK 207																									20
SK 211	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	合 破	
SK 224							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	
SK 225							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								12	
																								2	



Ph.4-2 瓦凸面の敲打痕 (6)

Tab.8-2 南館（第4～14次調査）の遺構出土瓦の敲打痕分類（2）

遺構名	遺構の特徴 〔1～Vは施設部2002に伴う遺構〕	編目	1			2			3Aa						3Ab						3Ac														
			A B C			A B C			老			1	2	3	1a	2	1a	2	1	2	2	1	2	2	4	5	a	b	1	2	3	3	4		
			A	B	C	A	B	C	老	1	2	3	1a	2	1a	2	1b	1a	2	1	2	2	1	2	2	4	5	a	b	1	2	3	3	4	
SK_235	V (施設部2002に伴う遺構)	○																																	
SK_239	V 11号窓	○																																	
SK_243	V 11号窓	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_246	IV 5号窓	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_247	IV 5号窓	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_252	IV 5号窓	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_254	V 11号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_256	IV 9C側半(11号窓)	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_257	IV 9C側半(11号窓)	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_270	III (施設部2002に伴う遺構)	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_271	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_272	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_273	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_274	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_275	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_276	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_277	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_278	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_279	V 10号窓	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_280	V 不規	○																																	
SK_281	/V 9C側半(11号窓)	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK_282	V 10号窓	○																																	
SK_283	4-B	○																																	
SK_284	V 10号窓	○																																	
SK_285	不規																																		



遺構名	38a		38b		38c		38e		4		5					6					7		文字五 不規		其他 不明		
	2-1	2-2	3	4	1	2	A	Bb	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	G	H	I	J	1	2	3		
SD_239	○	○	○																								1
SK_239																											2
SK_243	○	○	○																								20
SK_246										○																	3
SK_247																											1
SD_252			○							○																	4
SK_254																											1
SK_255	○	○	○	○	○	○				○																37	
SK_256																											3
SD_257																											10
SD_270																											1
SK_281	○	○	○																								21
SK_282	○	○	○	○	○	○																				31	
SK_283	○	○	○																								18
SK_284	○	○	○																								8
SK_285	○	○	○																								12
SK_286	○	○	○																								4
SD_297	○	○	○																								53
SK_298	○	○	○																								22
SK_299	○	○	○																								2
SK_300	○	○	○																								10
SK_301																											1



Ph.5-2 瓦凸面の敲打痕 (B)

3. 小結－南館出土の軒瓦－ Fig.28～37, Ph.6～9, Tab.9

今後整理を行う北館との対比が不可欠であるため、南館で出土した軒瓦の出土状況について整理しておきたい。軒瓦の分類は『大宰府史跡出土軒瓦・敲打痕文字瓦型式一覧』(2000 九州歴史資料館)に準拠してを行い、この分類にない型式のものや出土状況について説明を加える。掲載した図は南館出土資料を用い、不足するものは中央谷（堀）出土資料で補った。Tab.9 は遺構外出土の軒瓦を含む第4～14次調査の破片の点数を調査区分と出土遺構の時期別に集計したもので、個体数を示すものではないが、軒瓦の使用比率や廃棄時期をある程度反映するものと考えられる。

1) 軒丸瓦

19 型式以上がある。従来から言われているように鴻臚館式軒丸瓦（223 型式）が最も多く、型式不明を除く336 点の64%がこれに相当し、ついで 082A 型式 14%、082B 型式 10%である。この3 型式で全体の9割弱を占めており、その他の瓦はいずれも数点の出土に留まる。

1 は 049 型式で、南館では1点のみの出土だが、中央谷や北館ではかなりの数が出土する。3～5 は 082A 型式であるが、4 は中房がやや高く、頂部に1個の珠文が付される。他の特徴は3と同一。5 は瓦当径がやや小さく、外縁上の珠文が小さく数が多い。7 は放射状の単弁と考えたが、弁の外端が浅く産む部分があり輪郭が消失した複弁かもしれない。中房の蓮子は4で、外区の珠文数は21か。瓦当復元径 17.8 cm。9 は大宰府分類で「まだ出土していない」とされた 135Ba 型式で、中房の蓮子に追刻がされていない。10 は蓮子を追刻した 135Bb 型式である。15～19 は 223 型式（鴻臚館式）で複数の瓦范があり、『鴻臚館跡4』で細分類（15～18）も試みられている。18 のみ径が一回り大きい。19 は更に径が大きい 223L 型式であるが、南館では明確な資料を見いだせなかつた。21 は中房に1:6 の蓮子を配し、内区の弁数が2→3→1→2と変わるもので、外区珠文は20を数える。瓦当復元径 15.2 cm。24 は中世の花卉文軒丸瓦で、中央谷から1点のみ出土している。25 は軒瓦ではないが参考のため掲示する。平瓦に軒丸瓦の瓦范を押してたもので、瓦凸面の湾曲により端部は文様が浅くなる。

2) 軒平瓦

22 型式以上がある。鴻臚館式（635 型式）が圧倒的に多く（60%）、662 型式（17%）、663 型式（13%）がこれに続く。数量、及び胎土・色調からも明らかに 223 と 635、082A と 662、082B と 663 が組みになる鴻臚館の主たる軒先瓦で、この3組で全体の9割を占め、その他はいずれも少数である。

29～31 は老司系の 560 型式である。同じく老司系の軒丸瓦 291 型式とともに北館から中央谷に流れ込む溝からまとめて出土している。南館からは 31（560Ba' 型式）と 23（軒丸瓦 291 型式）の各1点が出土したのみであり、基本的に北館のみに使用された型式である。34・35 の 605 型式も南館では出土例がなく、これと組になる軒丸瓦 049 型式や、34 の平瓦凸面にみえる敲打痕分類 4A 類を用いた瓦も南館ではほとんど出土しない。北館のみの使用瓦とみられる。なお 35 は文様の右端が切られており、2種類あるとみられる。36～38 は 635 型式（鴻臚館式）である。瓦当右下の鉢形文の有無等により A～C 型式に分類されているが、南館では B 型式は確認できなかつた。36 と 37 は同じ A 型式であるが、瓦当幅は 37 がやや長いにもかかわらず唐草文の右端が切れており、文様が間延びしている。鴻臚館式軒丸瓦 223 型式と同様、複数の瓦范が存在すると考えられるが、完形資料が少ないため細分は今後の課題である。また、平瓦凸面の敲打痕は縄目が多いが、平行叩き（2A・2B）や平行格子（1C）もある。637 型式は過去の表採資料中にあるが今回も図示していない。43 は 663 型式で、平瓦凸面には特徴的な敲打痕 6H 類を使用する例が多い。49 は幾何学的な文様の瓦当で、范ズレがある。46～49 は方形の段顎で、いずれも顎下面まで縄目叩きを施す共通性がある。

Tab.9 南館（第4～14次調査）出土軒瓦集計表

※数字は破片の点数であり、個体数を示すものではない。

大宰府分類	Fig.	遺物番号	詳細	調査区別の点数							時期別の点数				計		
				8829 4次	8910 5次	9005 6次	9130 7次	9236 9次	9420 11次	9736 14次	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	V期			
049型式	1	913090510+ 991090002					1								1	1	
065型式	2	913090106				2	6							2	6	8	
082A型式	3～5	9005900058 900590014 900590019		7	5	15	12	8				1	16	30	47		
082B型式	6	900590010		6	5	20	3					1	15	18	34		
(該当なし)	7	882990268		1									1	1			
132型式	8	913090197+ 991090038					2					1	1	2			
135B型式	9	913090177	135Ba			1							1	1			
143b型式	10	913090107	135Bb	1	1	2	2					3	3	6			
170A型式	11	900590049		1	1							2	0	2			
208Bb型式	12	913090109		1		3						1	3	4			
217型式	13	973690034							1				1	1			
瓦	217型式	874790013	中央谷の池SG1115(=SD08)出土												0		
			223	16	22	13	15	9	1		3	7	7	58	76		
			223か	20	12	42	12	4			3	2	8	33	44		
			223型式 (溝縫無)	900590086 891090095 890590119 891090090	223a	12	5	17	4		3	3	8	24	38		
			15～18	900590086 891090095 890590119 891090090	223aか	7	1	1	1		1		5	4	10		
			19	041521001	223L	中央谷(堀)出土											
			224a型式	882990144	224a	2		2	3			2	5	7			
			(該当なし)	21	900590060		1					1	1	2	4		
			243a型式	22	913090512			1				1	1	1			
			291型式 (老司系)	23	891090117+ 000890011		1						1	1			
瓦	型式不明	無紋			15	13	9	9			2	1	8	6	46		
			無紋	26	900590167		1						1	1			
				27	891090176	515D	1						1	1			
			515型式	28	900590243+ 991090064	515E		2	1				1	2	3		
			560型式 (老司系)	29	000890017	560a(老司I)	中央谷(堀)出土							0			
				30	000890006	560Ba(老司II)	中央谷(堀)出土							0			
			600A型式	31	923690041+ 000890003	560Ba'			1		1			1			
			600A型式	32	882990132		1		2	1			1	2	1		
			601A型式	33	913090281+ 913090301				3					3	3		
			605型式	34	991090009	(2種あり)	中央谷(堀)出土							0			
瓦	635型式 (溝縫無)	635型式 (溝縫無)			635(右端欠損)	55	48	54	33	34		3	2	21	48	150	224
				36	991090011	635か	21	5	11	4	5	2	1	5	7	31	46
				37	900590192	635A		2	7			1	5		3	9	
				38	913090243	635C		1	1			1	1	1	2		
			637型式			探集資料(大場資料)								0			
			657b型式	39	900590204		1	3	3	2			1	2	6	9	
					662	10	11	13	6	3			7	10	26	43	
			662型式	40	900590217	662Aa	1	1	1	1				1	3	4	
				41	882990085	662Ab	7	5	5	1	3		2	5	14	21	
				42	991090065	662Bb		1	6	3			1	4	5	10	
瓦	663型式	663型式		43	900590218		11	11	29	10	1			9	25	28	62
				44	913090242+ 900590299	666Ab	1		2	6	1			3	7	10	
				45	913090214+ 991090063	666B	1		1	2	1			2	3	5	
			668Aa型式	46	900590225			1						1	1		
			771型式	47	891090207		1							1	1		
			775型式	48	900590165		1	1	4	1			1	4	2	7	
			(該当なし)	49	900590211			1						1	1		
			式不明				12	5	7	3	1	1		5	24	29	

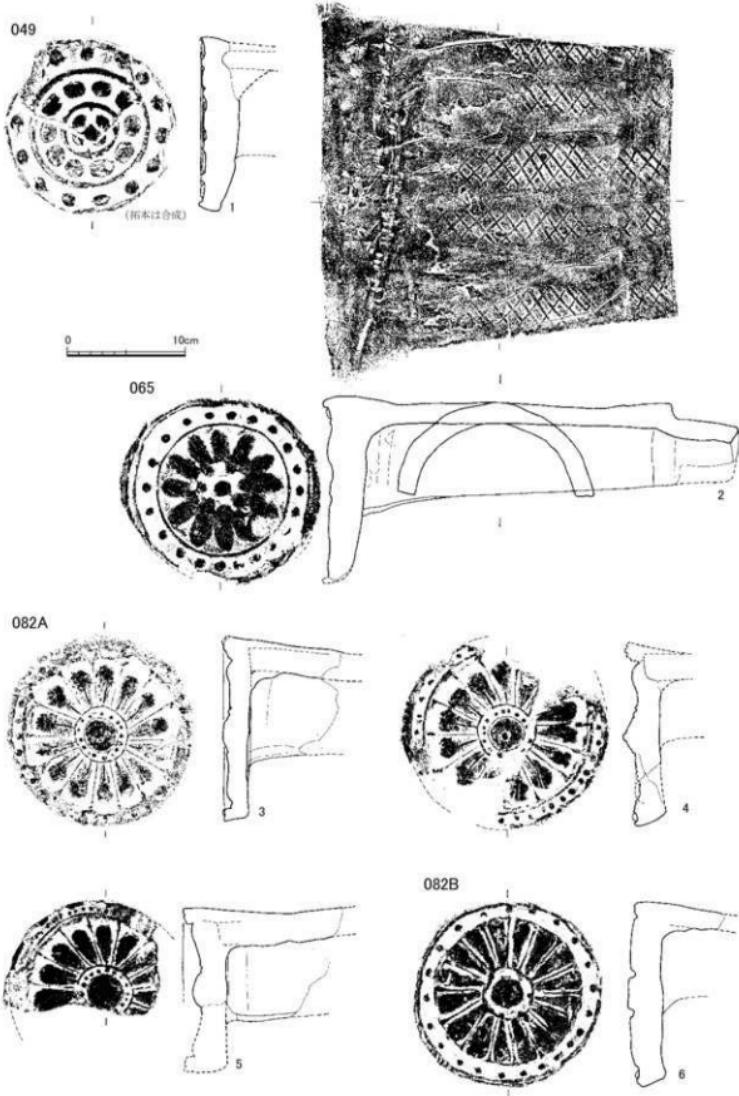
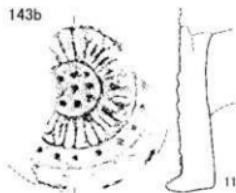
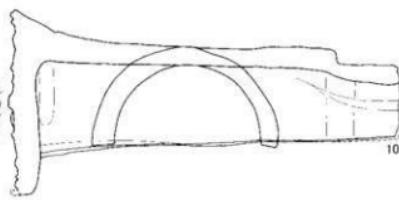
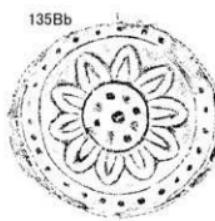
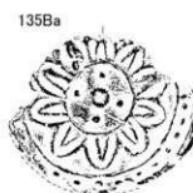
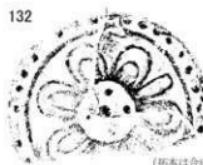
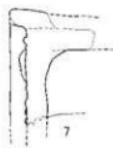
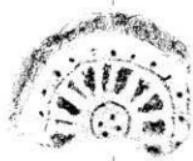


Fig.28 南館出土の軒丸瓦 1 (1/4)



0 10cm



Fig.29 南館出土の軒丸瓦 2 (1/4)

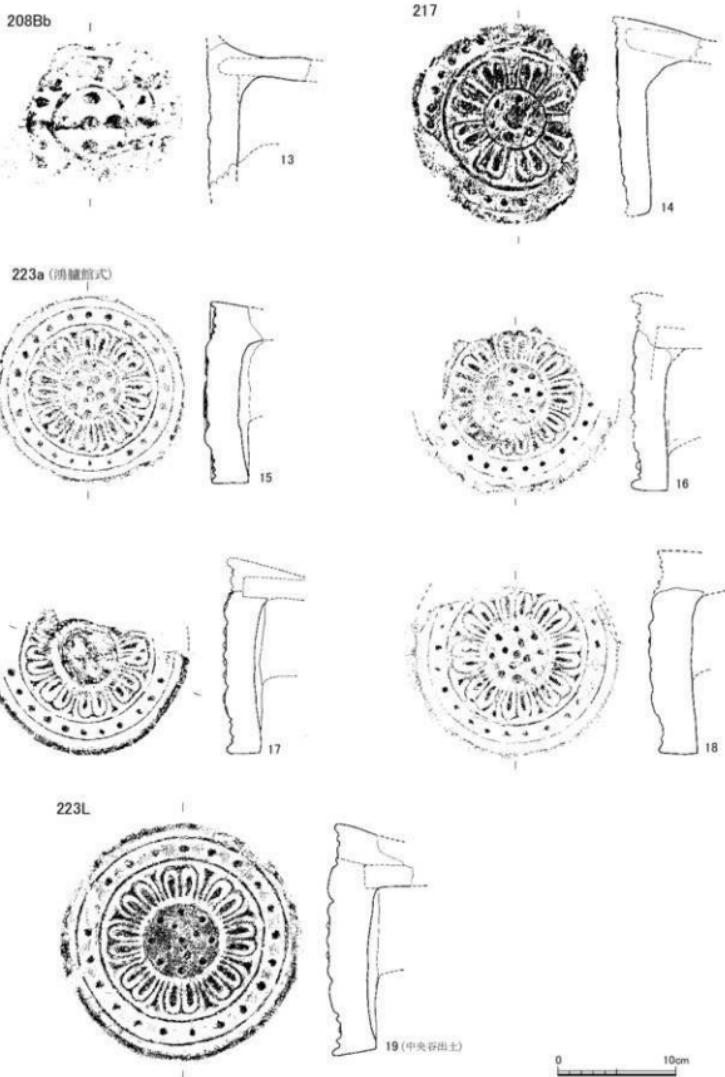


Fig.30 南館出土の軒丸瓦 3 (1/4)

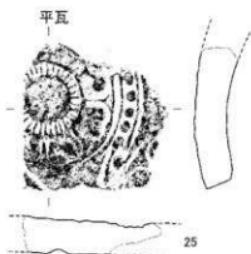
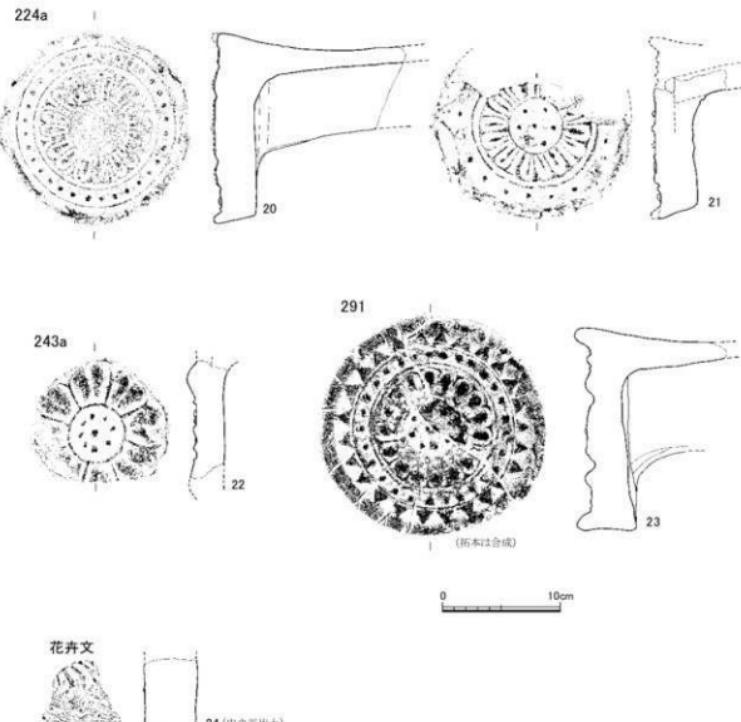


Fig.31 南館出土の軒丸瓦 4 (1/4)

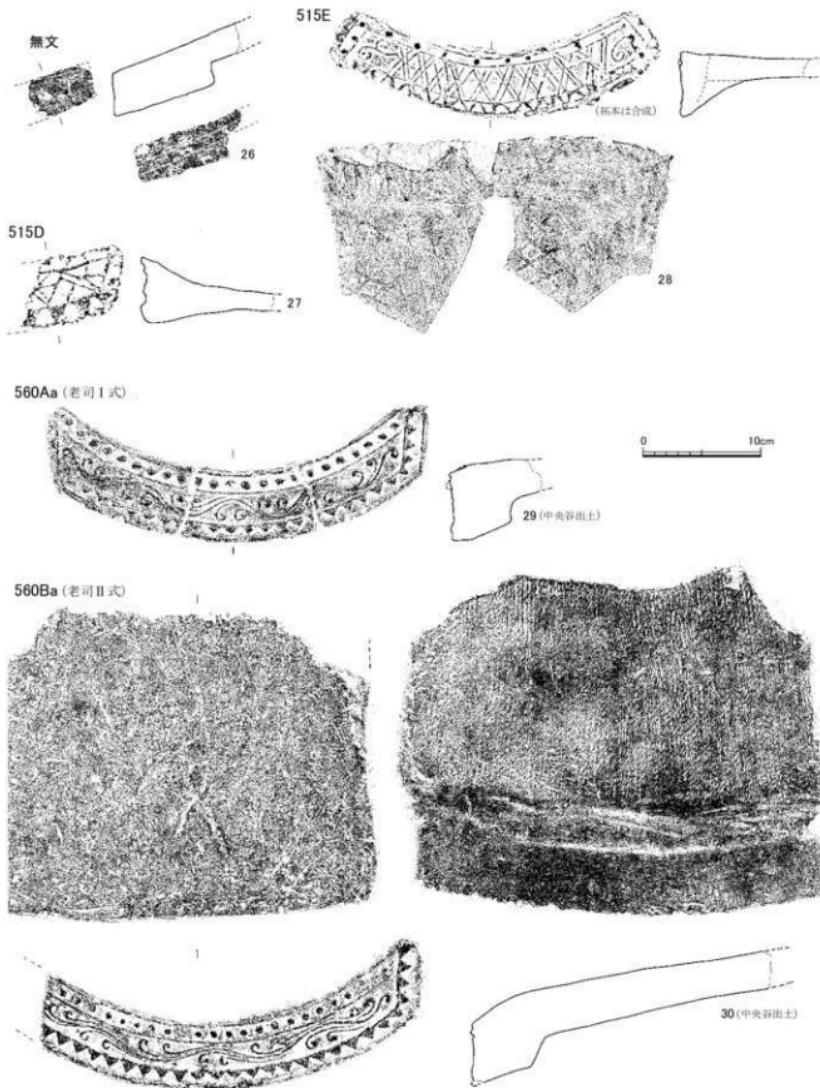


Fig.32 南館出土の軒平瓦 1 (1/4)

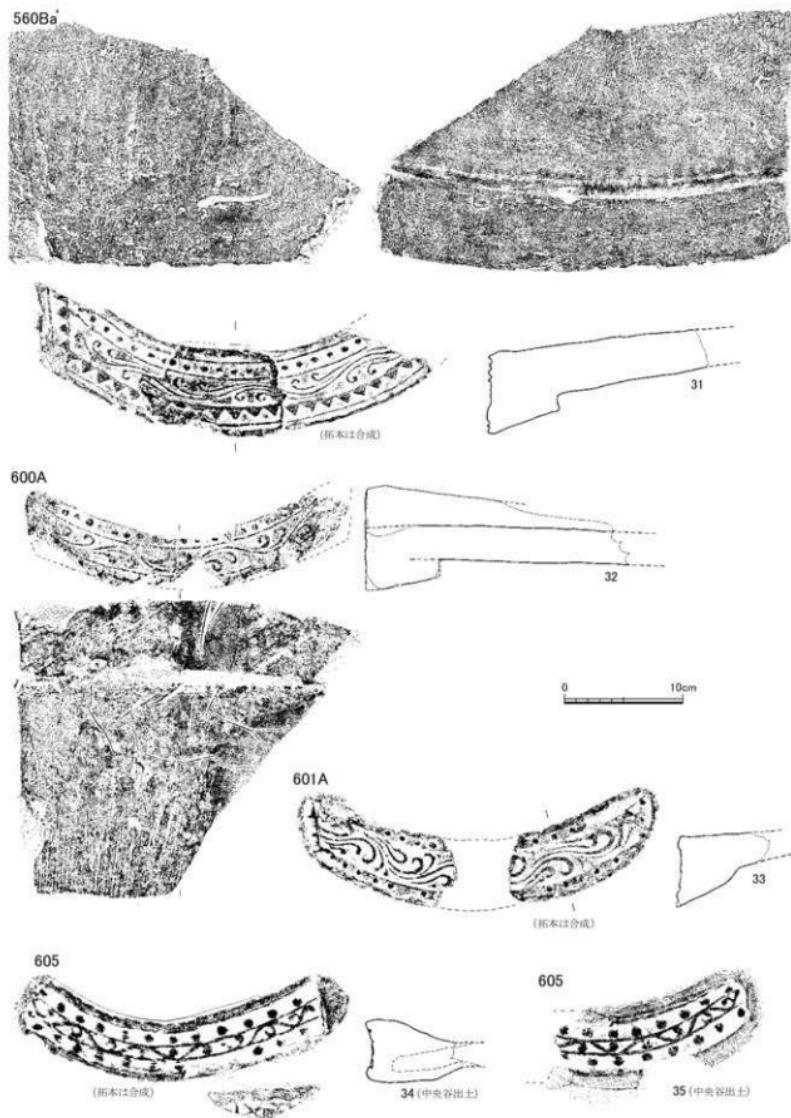
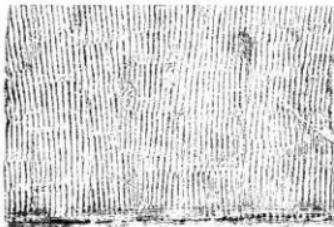
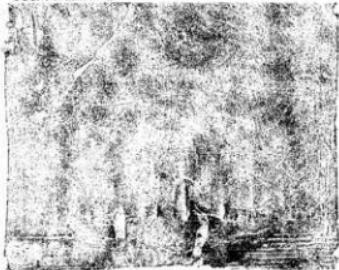


Fig.33 南館出土の軒平瓦 2 (1/4)

635A (海龍筒式)



36 (中央谷出土)

0 10cm

635C (海龍筒式)

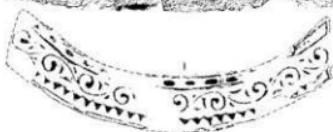
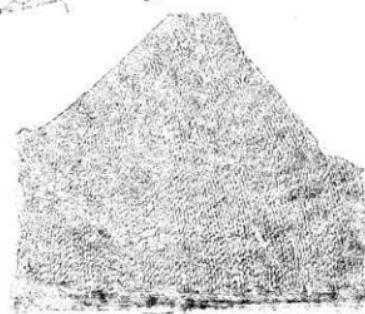


Fig.34 南館出土の軒平瓦 3 (1/4)

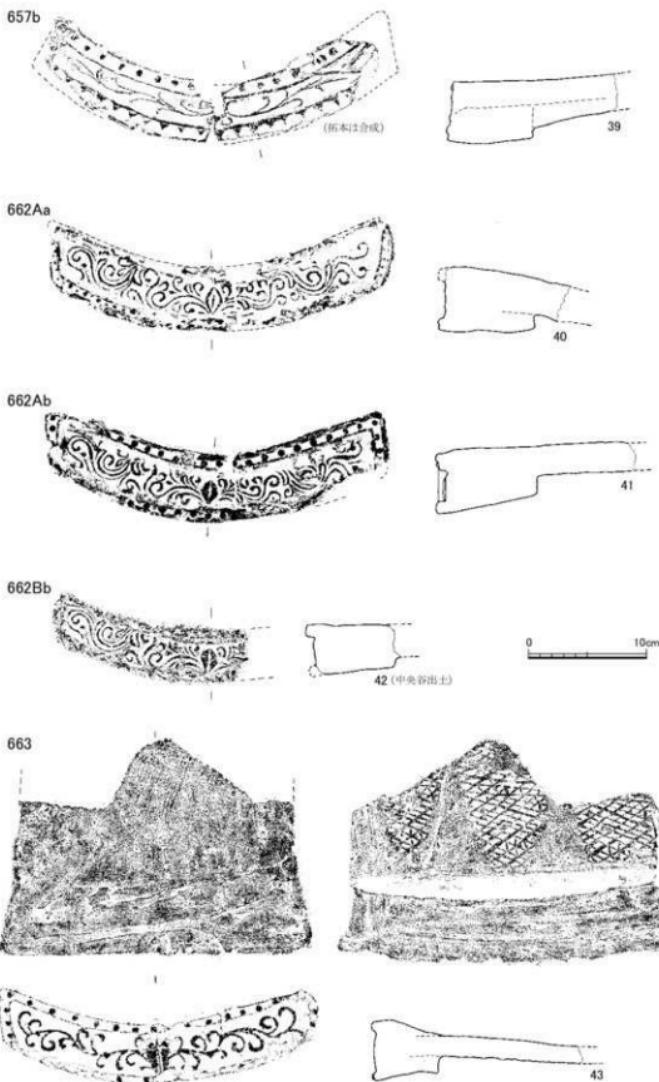


Fig.35 南館出土の軒平瓦 4 (1/4)

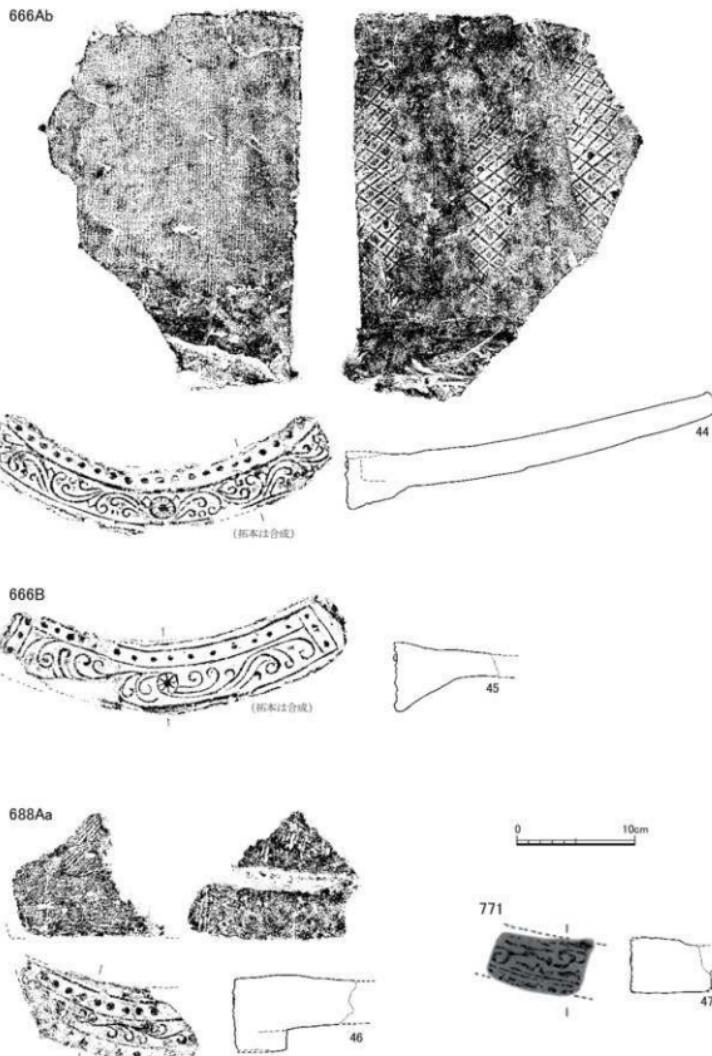


Fig.36 南館出土の軒平瓦 5 (1/4)

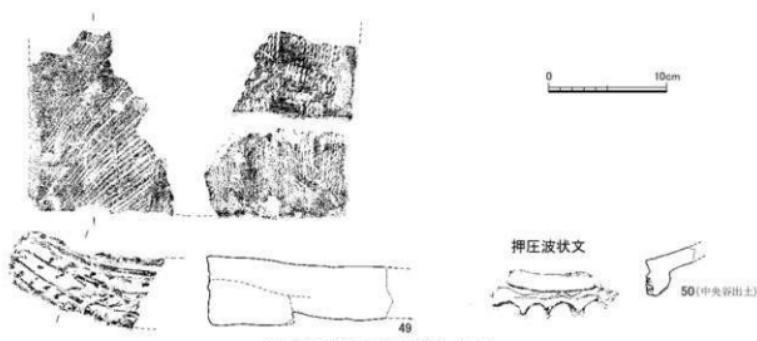
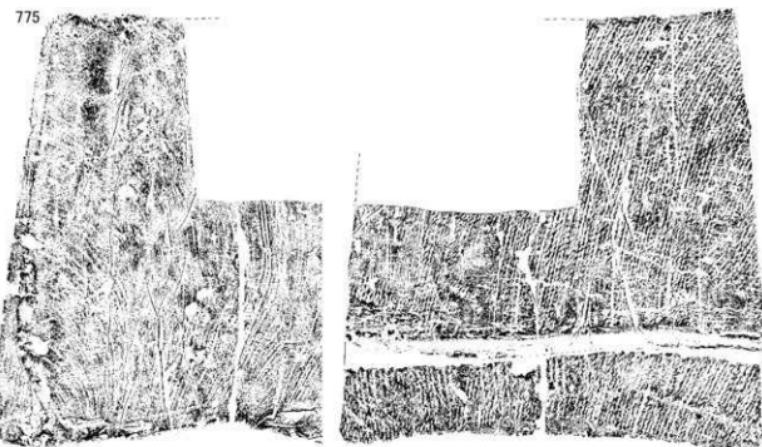


Fig.37 南館出土の軒平瓦 6 (1/4)



2



3



4



5



6



7



9



10

Ph.6 軒丸瓦 1



11



12



23



15



16



18



20



21



22

Ph.7 軒丸瓦 2



26



27



28



31



32



39



33



33



37



38

Ph.8 軒平瓦 1



Ph.9 轩平瓦 2

第三章 第17次調査の検出遺構と出土遺物 (福岡城跡第43次調査／9910)

1. 調査の概要 Fig.38、Ph.10、Tab.10

第17次調査は平和台野球場跡地の本格的発掘調査の初年次であり、それ以前の調査で確認していた筑紫館・鴻臚館遺構の北側への広がりを探る目的で、第IV期調査地南西側1/4の約3,500 m²を対象に実施したものである。旧野球場の右中間スタンド及びグランド部分に相当し、野球場建設等による削平・破壊を受けしており、南館礎石建物などの遺構が良好に残っていた第4次調査区と比べると、残りの良いスタンド部分でも遺構面が60 cm低く、グランド部分は更に約1m低い。谷の造成土が分布する範囲を除き、遺構面は全て風化頁岩岩盤である。

検出した筑紫館・鴻臚館に関する遺構は、造成地業跡、造成によって自然谷地形を利用して造られた堀（南館と北館を隔てる）と池、陸橋状築堤、南館第II期布掘り塹の北西部分、掘立柱建物1、柱穴、通路（瓦敷遺構を含む）、瓦溜を含む土坑である。また古代以外の遺構として、鴻臚館庭廄後～福岡城築城前に鴻臚館の堀（谷）跡を造成して再利用した池、近世福岡城の家老屋敷に関わる遺構、明治～戦前の陸軍歩兵24連隊の被服庫に関わる建物基礎等、土坑、造成跡等を確認した。

第17次調査検出の古代遺構については、その性格に基づき中央谷（堀）に関係する遺構（『鴻臚館跡18』）、南館建物に関係する遺構（『鴻臚館跡19』）、及びそれ以外の遺構（本書）に3分割して本報告を行っており煩雑である。Tab.10に示した報告書を参照頂きたい。本書では土坑7基を報告する。

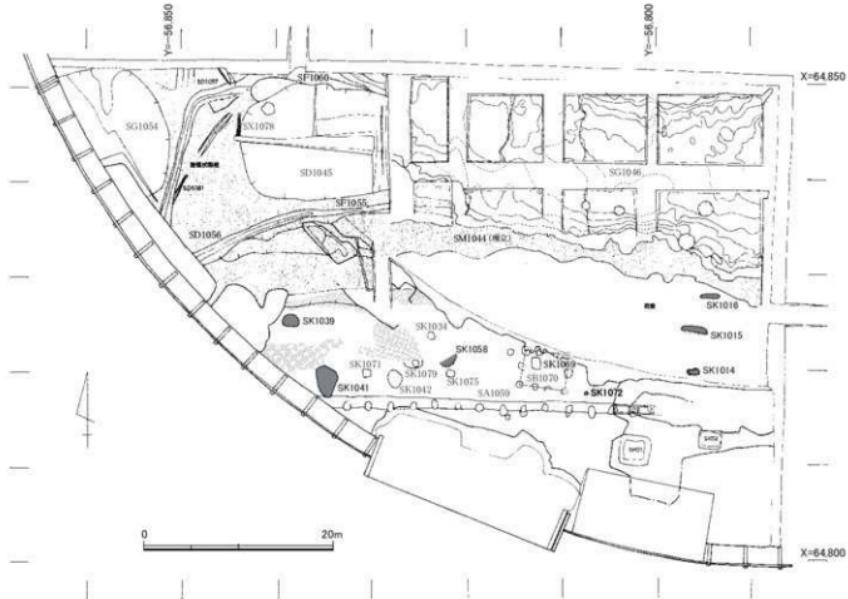


Fig.38 第17次調査下層遺構全体平面図 (1/500)

Tab.10 第17次調査報告遺構一覧

報告書の詳細はTab.3 参照

遺構番号	遺構の内容	時期	報告書名
SK 1014	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1015	土坑	9世紀代	『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1016	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1034	土坑(柱穴)	平安時代(詳細時期不明)	『鴻臚館跡19』
SK 1039	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1041	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1042	土坑(礎石据付け穴を転用か)	9世紀～10世紀初頭頃(第IV期)	『鴻臚館跡19』
SM 1044	埋立造成地業	I期～II期の間(8世紀初頭頃)	『鴻臚館跡18』
SD 1045	SM1044により造られた堀	8世紀前半～11世紀半ば	『鴻臚館跡18』
SG 1046	中世の池(SD1045の上層)	鴻臚館廃絶後～福岡城築城前	『鴻臚館跡18』
SG 1054	水溜遺構(池)	8世紀前半～半ば	『鴻臚館跡18』
SF 1055	SD1045中段の犬走り	11世紀前半	『鴻臚館跡18』
SD 1056	SF1055の側溝	11世紀前半	『鴻臚館跡18』
SK 1058	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SA 1059	布掘り堀	II期(8世紀前半)	『鴻臚館跡19』
SF 1060	中世流路	16世紀代	『鴻臚館跡18』
SK 1069	土坑(大型柱穴)	10世紀後半～11世紀前半(第V期)	『鴻臚館跡19』
SB 1070	掘立柱建物		『鴻臚館跡19』
SK 1071	土坑(柱穴又は礎石据付け穴転用か)	奈良時代か	『鴻臚館跡19』
SK 1072	土坑		『鴻臚館跡21』(本書)
SK 1075	土坑(柱穴又は礎石据付け穴転用か)	奈良時代か	『鴻臚館跡19』
SK 1076	土坑(礎石据付け穴か)	II～III期(8世紀～9世紀前半)	『鴻臚館跡19』
SX 1078	谷頭の瓦敷き遺構	平安時代	『鴻臚館跡18』
SK 1079	土坑+柱穴	平安時代(詳細時期不明)	『鴻臚館跡19』



Ph.10 第17次調査区下部検出遺構

2. 検出遺構と出土遺物

土坑 SK1014 Fig.39, Ph.11

調査区南東部の旧野球場グラウンド部分とスタンド部分の境付近に位置し、1m以上の著しい削平を受けたとみられる土坑である。東西に長い不整な隅丸長方形プランを呈し、東側がやや膨らむ。長径1.3m、短径0.75mを測る。壁面はほぼ垂直に落ち、底面は皿状に窪む。遺構検出面から底面まで最大75cmが残るが、本来は2m近い深さの遺構であったと考えられる。

SK1014 出土遺物 Fig.40, Tab.11

須恵器小片、中国産陶磁器（白磁、越州窯系青磁、陶器）が少量、瓦がコンテナ1箱出土した。

1は白磁碗である。口縁直下を浅く削り小さな玉縁口縁につくる。2・3は精製（A群）の越州窯系青磁碗である。2は輪状高台で全釉。3は平底で外底露胎、内底に目跡がある。4是中国産陶器の底部で、甕であろうか。内底に滴状の黄釉の落下痕跡がある。胎土に気泡が入る。

5・6は平瓦の小片で、凹面に布目が、凸面に格子目の敲打痕が残る。6は格子目に記号を加えた敲打を施す。その他の出土瓦の敲打痕分類はTab.11（76～77頁）に示す（以下の遺構の遺物説明においても同じ）。

第IV～V期の遺構とみられるが、出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

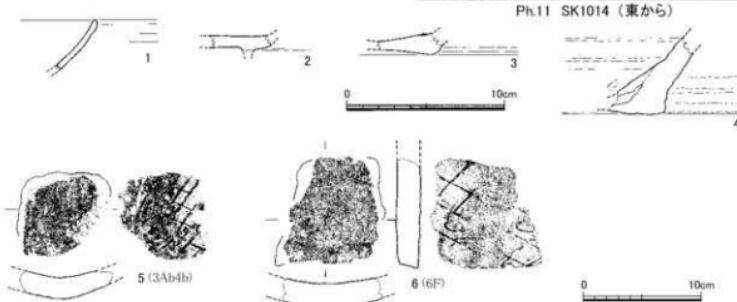
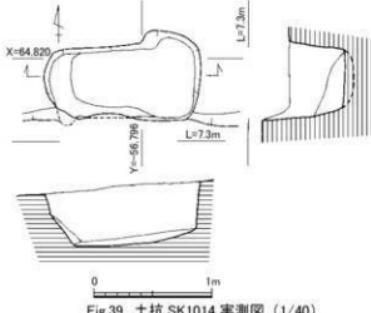


Fig.40 SK1014 出土遺物実測図 (1～4は1/3、他は1/4)

土坑 SK1015 Fig.41、Ph.12

調査区南東部、SK1014 の北側約 5 m に位置する。旧野球場グランド部分の岩盤削平部で検出されたものである。遺構の南半部分は野球場配水管によりざっくりと破壊されている。東西に細長い溝状のプランを

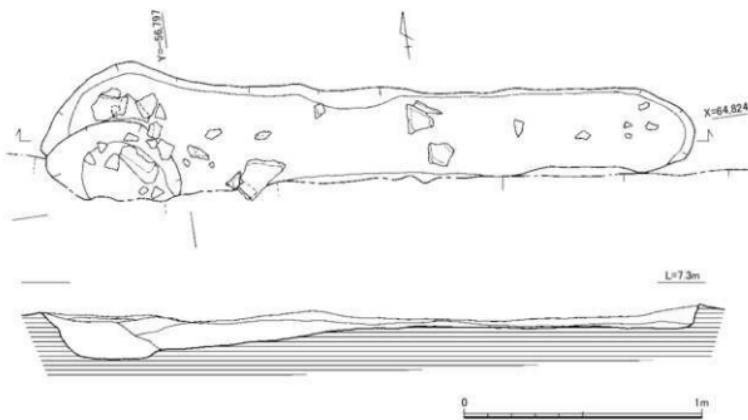


Fig.41 土坑 SK1015 実測図 (1/20)



Ph.12 SK1015 (南から)

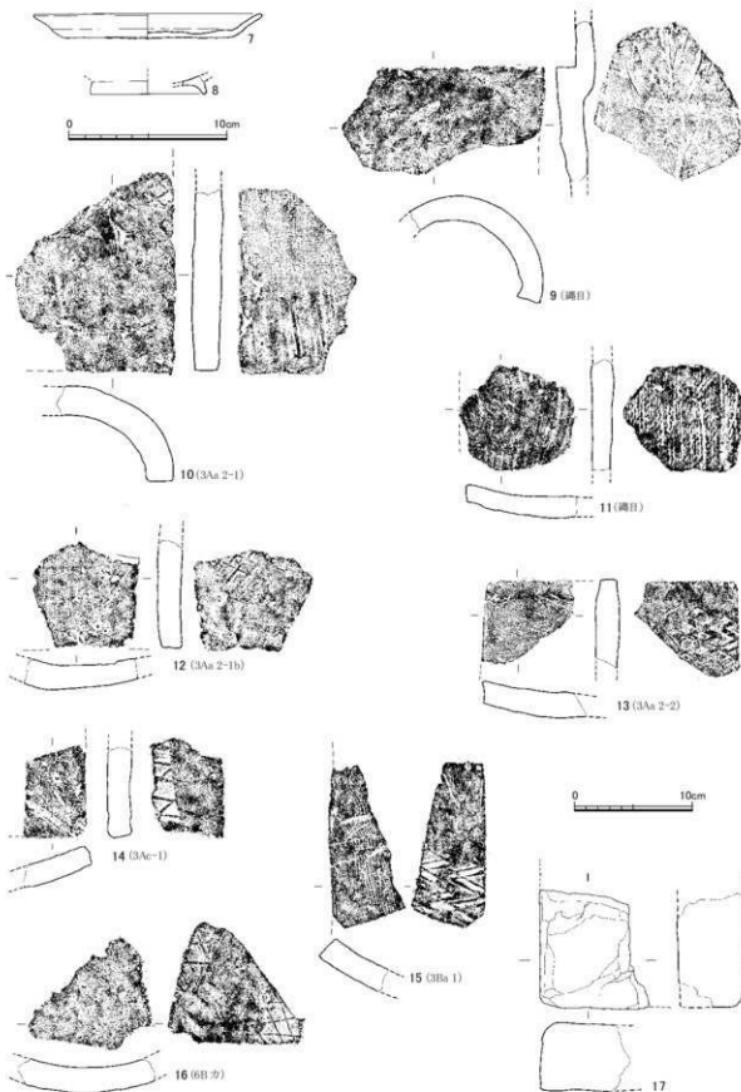


Fig.42 SK1015 出土遺物実測図 (7 ~ 8 は 1/3、他は 1/4)

なし、東西 2.8 m、南北 0.6 m 以上を測る。本来の掘り方は 1m 以上あつたものと推定されるが、削平により底部がかろうじて残る程度である。西端部分には径約 60 cm の円形の浅い窪みが穿たれている。遺構の主軸方位は座標北から 82° 西偏し、鴻臚館跡の建物群とは主軸が一致しない。埋土からは土師器や瓦小片などが出土している。なお概報『鴻臚館跡 11』では SK1015 と SK1016 の遺構・遺物の文章説明が逆になっており、こちらが正である。

SK1015 出土遺物 Fig.42, Tab.11

土師器（皿・壺・碗）、須恵器小片、近世陶磁器小片が少量、瓦片がコンテナ 2 箱出土した。

7 は土師器皿である。概報『鴻臚館跡 11』では 2 点の土師器として報告していたが、その後の整理作業で同一個体であることが分かった。底部ヘラ切り離して、磨滅が著しい。復元口径 14.5 cm、器高 1.6 cm。8 は土師器碗で、高台部のみの小片である。内外磨滅する。

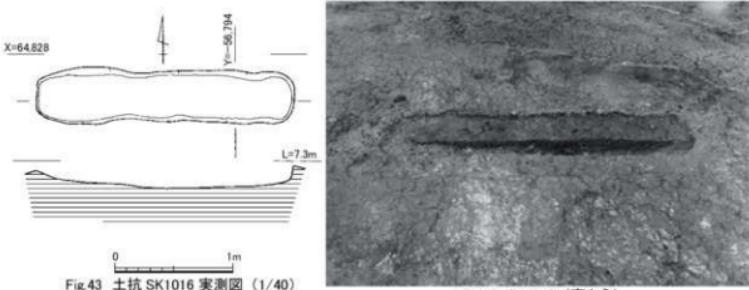
9・10 は丸瓦、11～16 は平瓦の小片である。瓦凸面の敲打痕は 9・11 が網目、他は格子目で、分類は図に示した通りであるが、10・16 は小片のため不確実である。側面が残る瓦では、11 と 15 がヘラ調整、他はいずれも載面と押し割りによる破面を残す。17 は素文磚の残欠である。

出土した土師器皿により 9 世紀代の土坑と考えられる。

土坑 SK1016 Fig.43, Ph.13

SK1015 の北東に約 3 m 離れて位置する。グランド岩盤削平面でわずか 10 cm 程の掘り方が確認できた。東西に細長い梢円形プランの土坑で、東西 2.2 m、南北 0.45 m を測り、底面は平坦である。削平されていることを考慮すると本来の掘り方は 1m 以上あつたものと考えられる。土坑軸線は第 II 期遺構布掘り廻の軸線とほぼ一致しているが建物遺構との関係は不明である。また、南館の推定南門部分を北へ折り返した対応する位置にある遺構だが、周辺に門などに関連する遺構は認められない。

出土遺物は皆無である。



土坑 SK1039 Fig.44, Ph.14

調査区南西部に検出した。旧スタンド部分に位置しており削平消失を免れている。東西にやや長い不整形梢円形プランの土坑で、北東側を擾乱溝に切られる。東西 1.8 m、南北 1.2 m を測る。遺構保存のため表面の確認に留め、掘り下げを行っていないので深さは不明である。

SK1039 出土遺物 Fig.45, Ph.15, Tab.11

遺構検出時に出土した遺物である。土師器（皿・碗）、須恵器（壺・甕）、中国産陶磁器（白磁、越州窯系青磁、長沙窯系青磁）、近世陶磁器が少量、瓦がコンテナ 2 箱分出土した。土器類はいずれも小

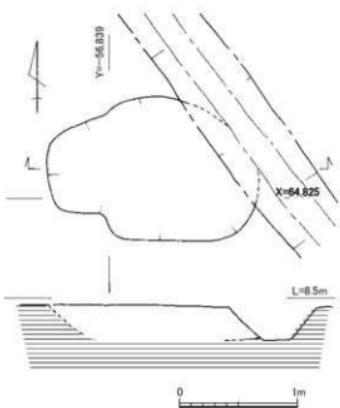


Fig.44 土抗 SK1039 実測図 (1/40)



Ph.14 SK1039 (北から)

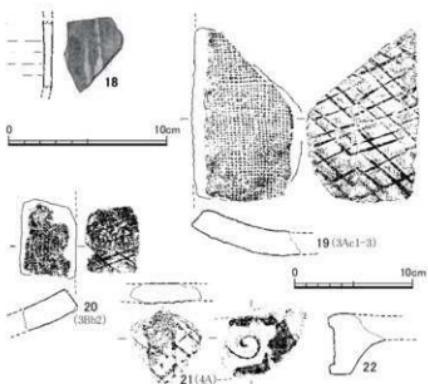


Fig.45 SK1039 出土遺物実測図 (18は1/3、他は1/4)
片のため図化した遺物は少ない。

18は長沙窯系褐彩水注もしくは壺の胴部片である。

19～21は平瓦で、いずれも凸面に格子目の敲打痕がある。21は4A類で（第二章17・29頁参照）、北館に多く出土するが南館には稀な種類である。20は側面調整を施す。その他の出土瓦の敲打痕についてはTab.11に示した。

22は近世福岡城の軒平瓦である。

近世陶磁器と瓦は擾乱溝からの混入遺物であろう。遺構を掘り下げていないので詳細時期は不明である。



Ph.15 SK1039 出土遺物

土坑 SK1041 Fig.46, Ph.16

調査区南東部の削平が少ないスタンド部分に検出した。陸軍建物基礎や戦後の溝に切られているが、全体的に保存状態は良い。岩盤を掘り込んだ廃棄土坑で、南北に長い不整形プランをなし、南北長3.4m、東西長2.1m。深さ30cmで、底面は平坦である。覆土の最下層には木炭、焼土がみられる。遺物はこの層に集中しており、瓦、陶磁器、礫石等とともに、生活残滓である焼けた獸骨や魚骨（タイを含む）、サンショウウ、ウリ等の植物種子が出土している。火災等による廃棄土坑ではなく、生活に伴うゴミ廃棄土坑であろう。

SK1041 出土遺物

Fig.47～50, Ph.17, Tab.11

土師器（皿・椀、黒色土器A類椀）、中国産陶磁器（景德鎮窯白磁、青白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ2箱、瓦がコンテナ11箱出土した。出土遺物には興味深いものが多い。

23～30は土師器である。23は壺、24は皿、26は大振りの壺で、いずれもヘラ切り底である。25は外底が剥離しているが、本来は高台付きの椀とみられる。外底部にのみ煤が付着し、剥落がみられる。煮沸用に転用されたものであろう。27・28は椀である。28は高台がバチ形に外方に大きく開く。29・30は内面を黒く焼いた黒色土器A類の椀である。接合しないが同一個体の可能性もある。

31・32は朝鮮半島産陶器である。31は肩部に外耳の一部が残る。四耳壺であろうか。内面に指押さえ痕が残る。外面は艶やかな黒色で、上半は灰被り。32は黒釉を施した甕もしくは壺である。平底で外底端部に重ね焼きの痕跡が残る。

33は白磁碗である。全体に薄胎で、淡い青みを帯びた青白釉が内面全面と体部外面下半まで施釉される。高台は断面台形の

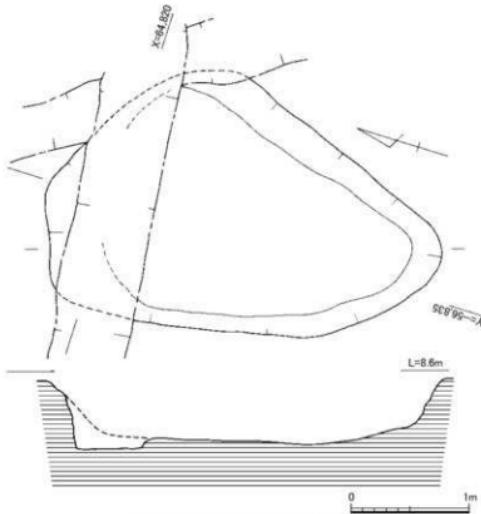


Fig.46 土坑 SK1041 実測図 (1/40)



Ph.16 SK1041 (西から)

削り出し輪状高台であるが、疊付は外側を斜めに削っている。体はやや丸みを持ち、口縁端部は外方に開く。口唇部に6ヶ所の刻みを入れ輪花となし、その直下に外方から押圧を加えて瓜状の体とする。外底高台内には鉄錆様の窯道具痕跡がある。**34**は大型の白磁合子の蓋で、極めて珍奇な器形である。天井部分はやや丸みを持ち、肩から下は直に立つ。頂部には貼付による圓線状の高まりをつくり、形式的な振みをしている。胎土はやや軟質だが精良で、体は厚めである。次の小坏(35・36)に似た軸が外面にのみ薄く施され、二次的被熱によるものか軸下に黒斑が生じている。身との合わせ面は丁寧に研磨されている。**35・36**は同形同大の青白磁小坏である。器壁は最大厚でも2mmという薄胎で、非常に軽量である。軸は全面に薄くかけられ、二次的被熱によりややくすんでいる。青味はほとんどないが器形としては青白磁の範疇に含めるべきものであろう。なお、35・36は接合しないため別個体として扱っているが、同一個体の可能性もある。

37～51は越州窯系青磁である。**37**は粗製(B群)碗の口縁部で、軸下に白化粧を施し、体外下面半は露胎である。**38～40**は優品の碗である。疊付を除き全面施釉され、内底に目跡はない。**39**は体部に外からヘラ押しを加え輪花とする。**40**も同じ手法で輪花とし、内底に精緻な線彫りで花文を描く。高台は細く高く、高台内の外底に目跡を残す。**41～48**は精製(A群)の碗の底部である。**41～45**はやや高い高台を持つもので、全面施釉、疊付のみ軸を引き取り、疊付と内底に目跡を残す。**46～47**は低い輪状高台で外底無釉、疊付と内底に目跡を持つ。**48**は平底で疊付を斜めに面取りし、外底無釉である。**49**は蓋付き罐の身である。陶質薄胎で**51**の胎土に似る。青磁軸がかかるが受け部のみ軸をふき取る。胴の上端に小さなヘラ押しを加えて瓜状に装飾している。**50**は粗製(B群)の水注の口縁部である。**51**は緑褐彩を施した水注で、把手と外耳周辺の袖溜まりは澁青釉風の青味を持つ。内面は頸部下まで袖垂れがみられる。胎土は磁灶窯系陶器に似た白粒を含む陶質で灰色、焼成は堅緻であるが火膨れがみられる。**52**は青磁水注の底部か。軸は認められない。

53は黒褐釉陶器壺の口縁部片である。**54**は褐釉陶器の灯蓋である。胎土は粗く、外底は露胎である。**55～59**は共通の胎土を持つ陶器である。長石や白・黒色粒子が混じる褐～暗灰色の粗い胎土で、磁灶窯系陶器に似る。**55**は極めて特異な器形をした大型の鉢で、口径48cm、器高25cmを測る。捏鉢(58・59)と泉州磁灶窯で代表される黄釉鐵絵盤との中間的な器形を持つ。胴は球形に膨らみ、斜め上方に伸びる幅広の锷を持つ。外底脇はヘラ削りして平底とする。外面は露胎であるが口縁直下には化粧土と軸の垂れがみられる。内面は化粧土を施したのち、黒味を帯びた緑褐釉がかけられ、内面屈曲部の上下に鉄彫が帶状にかけられ、屈曲部には大きな目跡が付着する。**56・57**は無釉の盤口水注の胴部、底部である。把手の一部が残る。**58・59**は中国産陶器の捏鉢である。内面に使用による磨滅は認められない。

60は軒丸瓦の残片で、08ZA型式。磨滅が著しい。**61・62**は丸瓦片である。**63～70**は平瓦片で、63・64・69・70の側面には押し割りによる破面が残る。瓦凸面の敲打痕分類は図に記した通りである。**71～76**は文字瓦で、**71**は「伊貴作瓦」、**72～74**は「佐」の902E型式、**75・76**は同じく「佐」の902J型式である。**77・78**は素文磚の小片で別個体である。敲打痕分類をTab.11に示したが、鴻臚館末期の遺構であるためか多くの種類の敲打痕が認められる。

本遺構の出土遺物の年代は11世紀前半から半ばまでに求められ、北宋前半期の一括遺物として重要な資料的価値を持つものであろう。すなわち当該期の遺構として、越州窯系青磁A1-5群^{註1}と景德鎮窯白磁との共伴が第3次調査SK01等において既に確認されているが、本遺構では更にこれに青白磁、福建省南部の陶器が共伴することが明らかとなった。博多遺跡群出土遺物との類似性が認められ、このことは鴻臚館の終焉から中世博多への貿易拠点の移動の流れと中国側の貿易体制の変化をみるとうえで重要と考えられる。

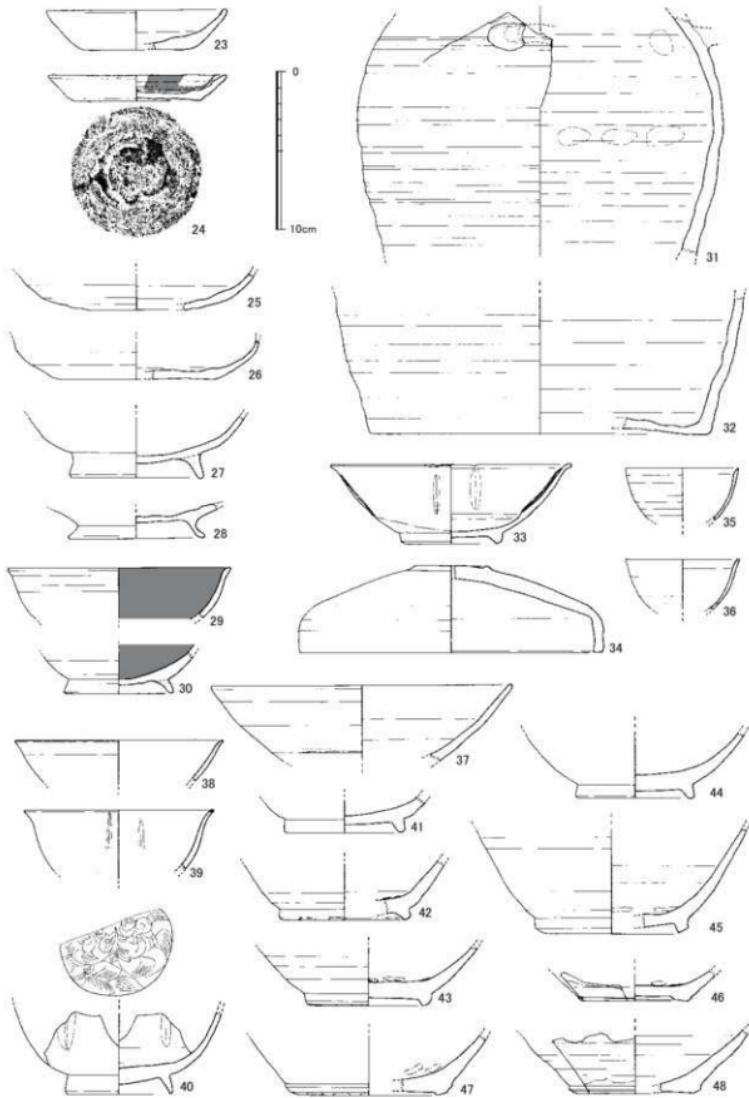


Fig.47 SK1041 出土遺物実測図 1 (1/3)

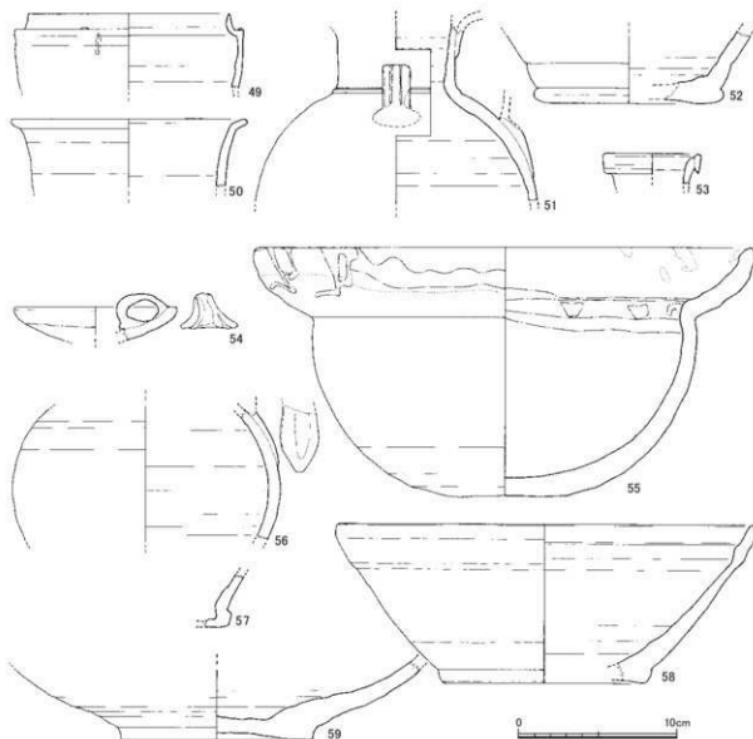
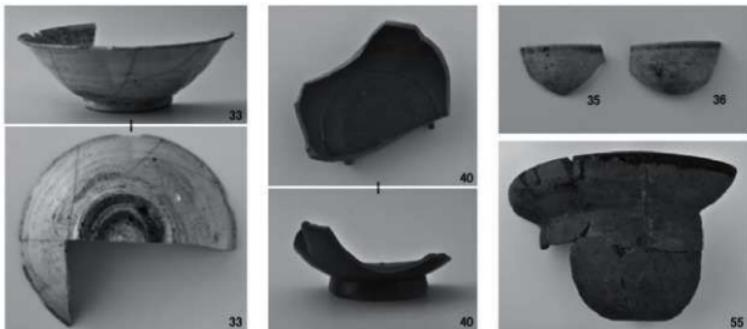


Fig.48 SK1041 出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph.17 SK1041 出土遺物

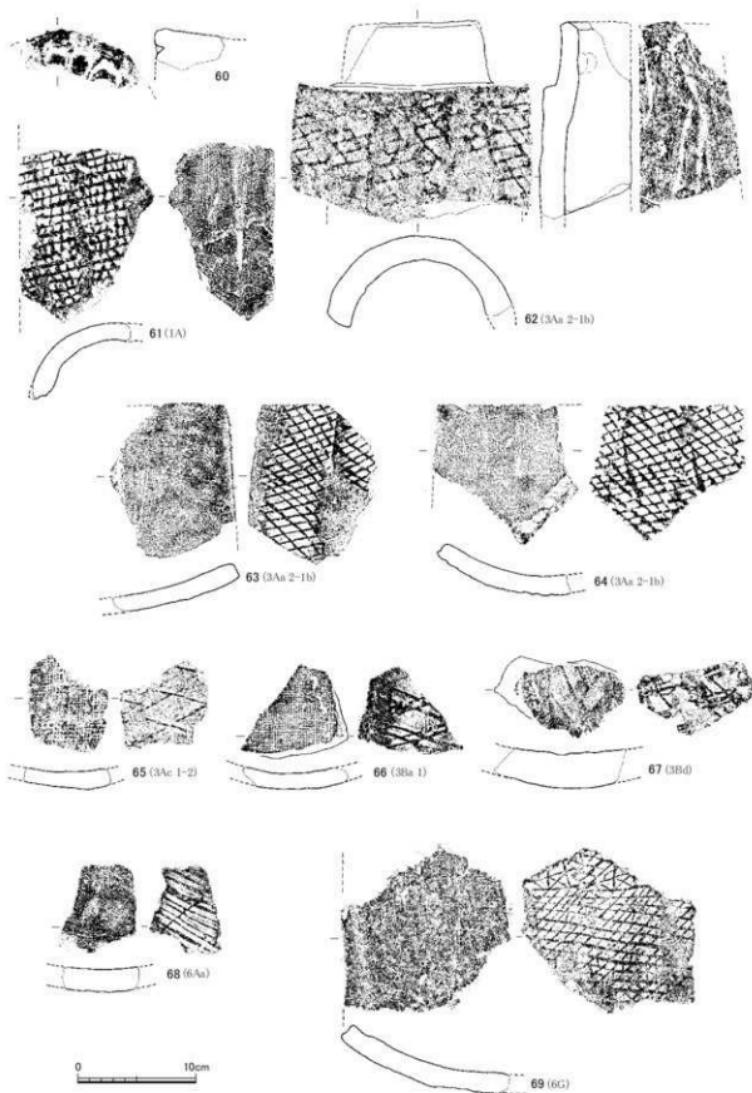


Fig.49 SK1041 出土遺物実測図 3 (1/4)

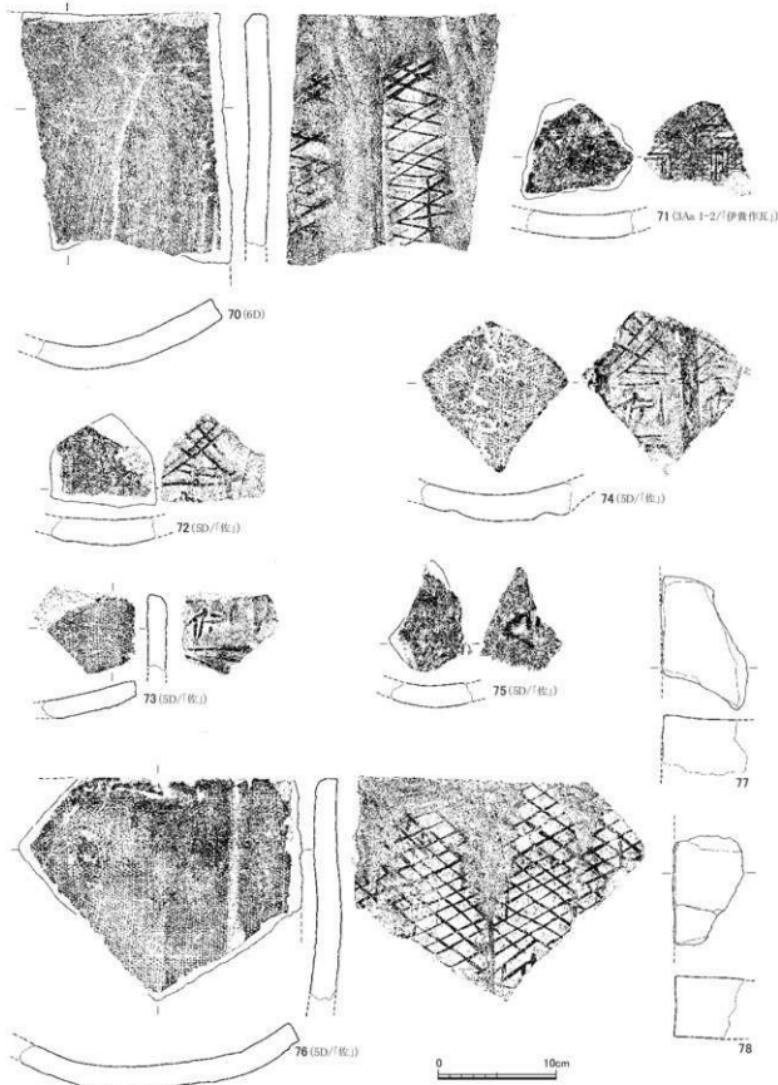


Fig.50 SK1041 出土遺物実測図 4 (1/4)

土坑 SK1058 Fig.51, Ph.18・19

調査区中央南寄りの旧スタンド部分に位置する。擾乱によって遺構の大半は消失している。明確な掘り方ではなく、浅い岩盤の窪みに湧氣館に関係する瓦と大礫が炭化物混じりの風化粘土とともに堆積しているものである。瓦はさほど密でなく、二次的に被熱している。時期は明確にしがたい。陸軍建物基礎及び野球場バックスクリーン基礎に切られているが、陸軍建物建設時あるいは福岡城に関する整地の可能性もある。

SK1058 出土遺物 Fig.52

中国産陶磁器（越州窯系青磁）と朝鮮半島産陶器が少量、瓦がコンテナ 2 箱出土した。古代以外の遺物の混じりはない。

79 は精製の越州窯系青磁碗で、削り出しの輪状高台である。全軸で、高台の軸を搔き取る。内底と墨付に目跡がある。他に越州窯系青磁の合子、壺類の小片が少量出土している。

80～82 は丸瓦、83～85 は平瓦である。図の敲打痕は全て単線の斜格子であるが、他に網目や老司系の叩き、無紋等の種類がある。また、側面が観察できる瓦においては全て押し割りによる分割が行われている。

第IV～V 期の遺構の可能性があるが、詳細は不明である。

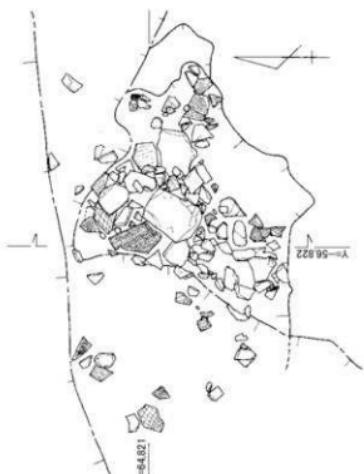


Fig.51 土坑 SK1058 実測図 (1/20)



Ph.18 SK1058 検出状況 (南から)



Ph.19 SK1058 完掘状況 (北から)

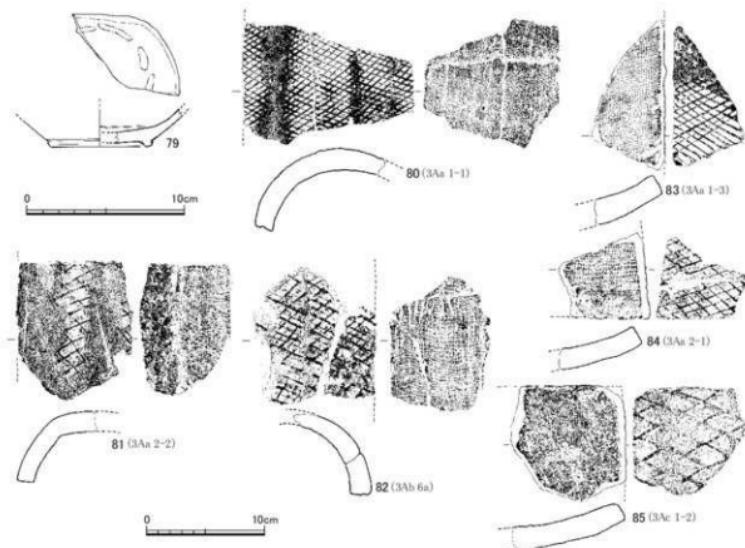


Fig.52 SK1058出土遺物実測図 (79は1/3、他は1/4)

土坑 SK1072 Fig.53

調査区南東の旧スタンド部分に位置する。陸軍連隊建物基礎や擾乱溝に切られて造構の残りが悪い。柱穴状の小土坑で、径 40 cm の円形プランをなす。断面逆台形で、深さ 30 cm。

SK1072出土遺物 Fig.54

土器類は出土していない。瓦が 3 点のみ出土した。

86 は平瓦で、凸面に繩目叩きを施す。他に平瓦が 2 点あり、ひとつは繩目叩き、もうひとつは磨滅が著しいが格子目叩きであろう。

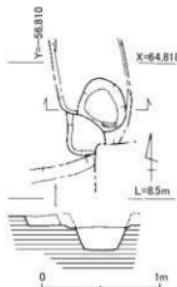


Fig.53 土坑 SK1072 実測図 (1/40)

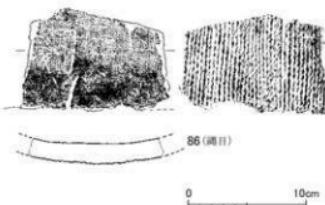


Fig.54 SK1072出土遺物実測図 (1/4)

3. その他の出土遺物

中世～現代の遺構・擾乱、整地層、表土、詳細時期不明の遺構等から出土した遺物を報告し、あわせて既報告遺構の出土遺物についても補足報告する。

87～92 は須恵器である。**87** は大型の壺の口縁部片で、端部が屈曲外反し、外面に突線を巡らす。口縁端部内面に焼成時の付着物がある。**88** は坏蓋、**89** は坏身の口縁部小片である。**90** は平版の胴部で、内面に当て具痕があり、外面はカキ目を施す。**91・92** は壺である。外面平行叩きにカキ目を加え、内面は当て具痕が残る。

93～110 は白磁である。**93～97** は邢窯系白磁碗で、口縁端部を折り返して小さな玉縁口縁とする。**93** は削り出しの蛇の目高台で、体部外面の高台まわりは露胎である。**98～101** はやや幅広の玉縁口縁の景德鎮窯白磁碗である。**102** は小碗。**103** は福建産の白磁碗か。**104** は体部外面にヘラ押しを加え、口縁を小さく切り込んで輪花口縁とした碗である。**105～108** は景德鎮窯白磁碗の底部で、体外面下半ないし高台脇以下は露胎とする。**105～107** は内底に沈圓線が巡る。**108** は高台外面に施釉時の挟み具の圧痕を留める。**109** は白磁碗の口縁部小片で中世遺構から出土した。**110** は中世の口禿白磁坏で、内底に沈圓線を回す。全体に施釉する。

111～139 は越州窯系青磁である。**111～116** は精製A群碗の口縁部片である。**111** は薄い玉縁口縁で、体外面下半以下は露胎。内底に白土目が残る。**112～116** は全軸。**114** は輪花口縁で、体外面にもヘラ押しで施す。111・114・116 は二次被熱を受ける。**117** は粗製（B群）碗で、胎土に挟雜物を含み粗い。内外面施釉で二次被熱する。**118・119** は小碗で、内面にヘラ彫りの花文を施す。**120** は優品の碗の口縁部で、沈圓線を外面に1条、内面に2条巡らせ、内面の沈線間に唐草文を毛彫りする。**121** は碗底部で蛇の目高台であろう。全軸で、施釉後外底に削りを加えている。二次被熱する。**122** は碗底部を打ち欠いて遊具としたもので、蛇の目高台であろう。**123・124** は平底碗で、外底まわりは露胎。**123** は内外底に、**124** は内底に目跡が残る。**125～131** は輪状高台の碗である。**126** は優品（A1群）で、全軸で疊付は拭き取る。高台端と内底に目跡がある。**127** は高台外面まで施釉し、砂目跡が付く。二次被熱する。**128** はA1群碗で、オリーブ色透明釉を全体にかけ、疊付は拭き取る。内底と疊付に目跡がある。**129** は全軸で疊付の釉を拭き取る。内底と疊付に目跡がある。**130** は全軸で疊付は搔き取り。内底と疊付に目跡がある。**131** は全軸で、施釉後疊付に削りを加える。内底と疊付に目跡がある。**132・133** は細い輪状高台の碗で、**132** は全軸で疊付は拭き取り。内底と疊付に目跡がある。**133** は疊付に目跡がある。**134** は小碗で、低い輪状高台。全軸で疊付の釉を搔き取る。**135** は浅碗で、削り出しの輪状高台。疊付は露胎で砂目跡が付着する。**136** は坏の底部か。全軸で外底端部を搔き取った痕跡があるが、二次加熱により釉が沸騰し飛んでいる。**137** は双耳又は四耳壺で、茶味のあるオリーブ色釉を全体に薄く均等にかける。**138・139** は水注の把手で**139** は二次被熱する。

140・141 は長沙窯系青磁である。**140** は褐釉貼付文を施した水注か。意匠は獅子とみられる。**141** は二彩の壺又は水注で、磁質に近いやや粒の粗い灰色の胎土に白化粧を施し、緑味のある青釉をかける。内面に丁寧な巻き上げ痕跡が残る。**142** は青磁壺の底部か。磁質の胎土にオリーブ色の釉をかけるが、二次被熱により破碎する。**143** は中国産陶器の鉢で磁杜窯か。内外面横ナデで無釉。**144** は陶器の四耳壺か。外面施釉で二次的に被熱する。**145** は中世龍泉窯系青磁の香炉である。内面下半は露胎である。

146・147 は軒丸瓦で、ともに鴻臚館式（223a型式）である。**146** は近世遺構出土。**147** は瓦当部分が完存する表採遺物である。胎土は細砂粒を少し含むが精良である。丸瓦凸面の叩きはナデ消す。

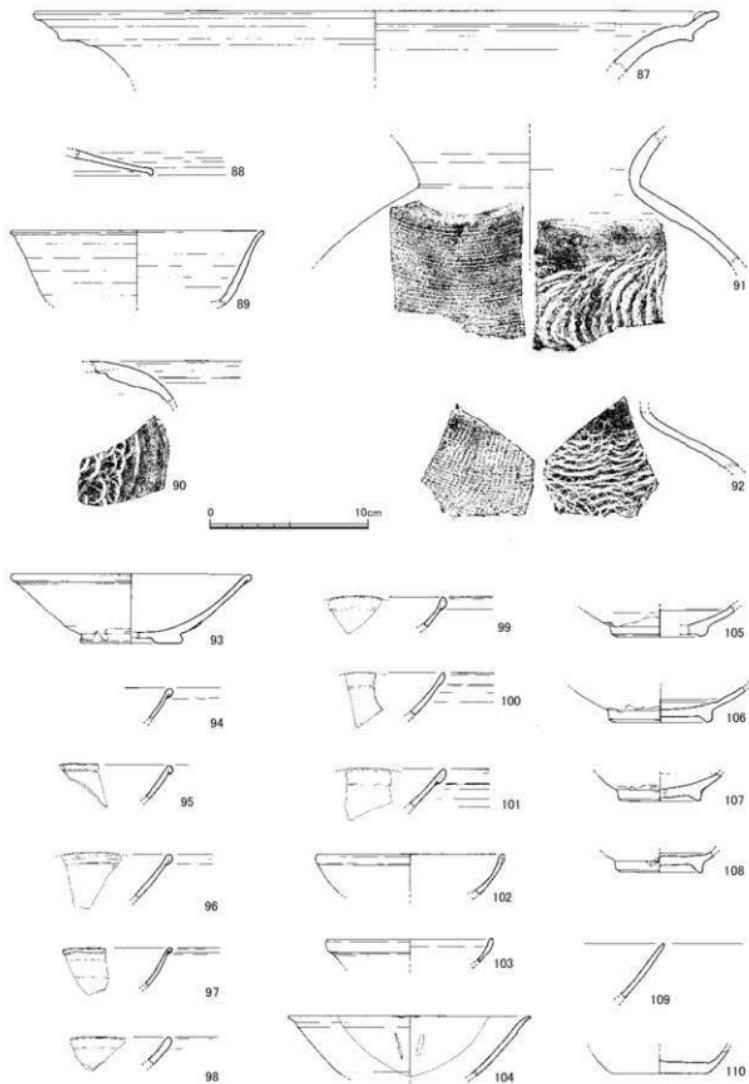


Fig.55 その他の出土遺物 1 (1/3)

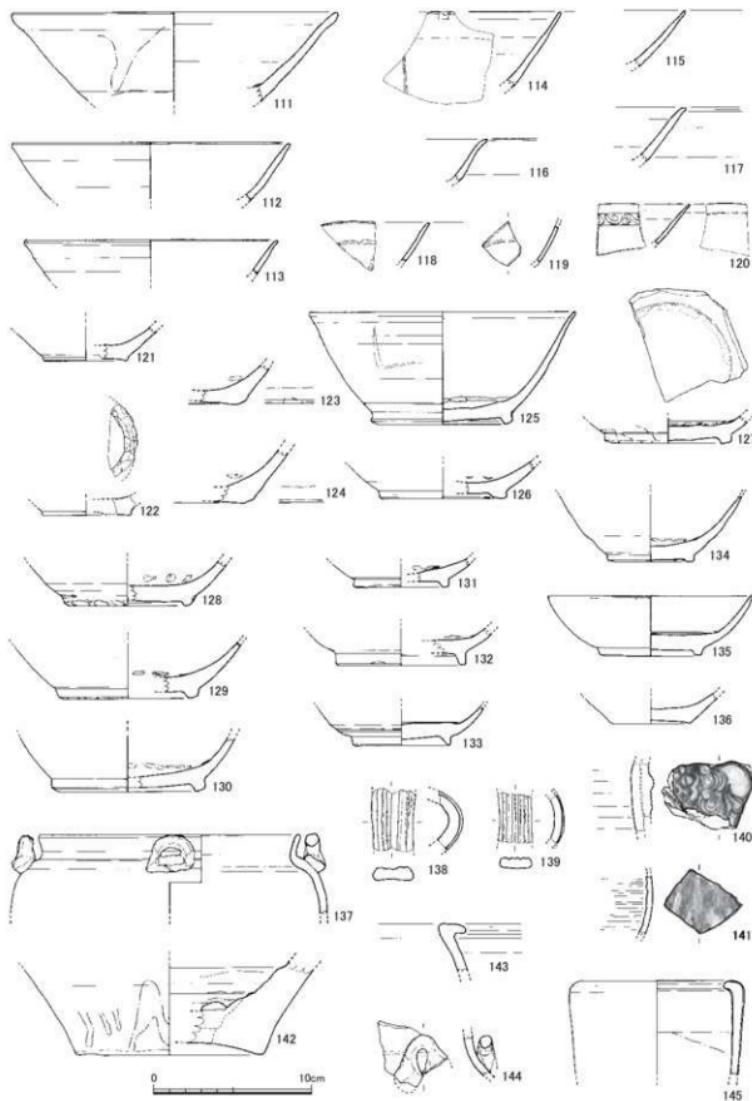


Fig.56 その他の出土遺物 2 (1/3)

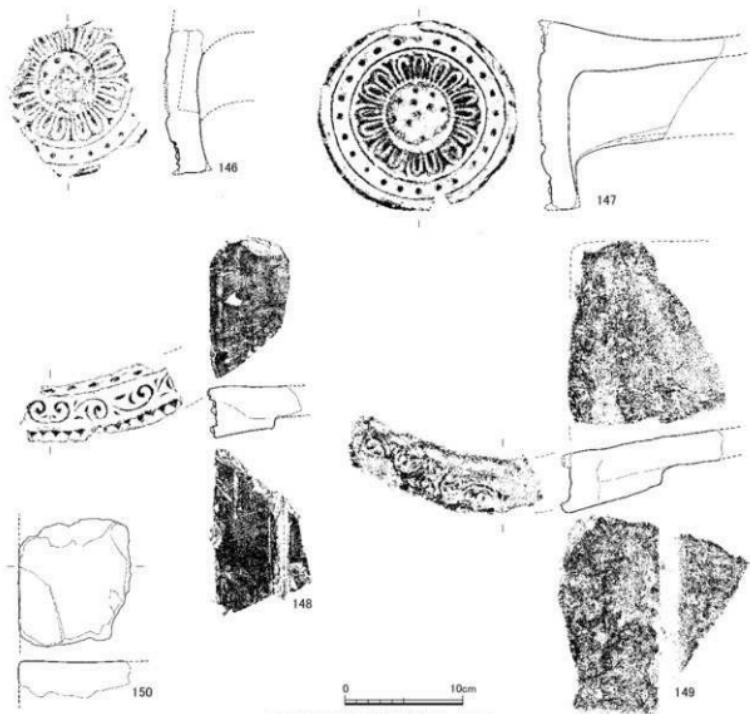


Fig.57 その他の出土遺物 3 (1/4)

Tab.11 第17次調査出土瓦の敲打痕分類 (出土している種類のみ表示)

遺構名	時期	掲 目	3Aa										3Ab									3Ac					
			1		2		老	1		2		1	2	3	4		6		1	2	3						
			A	C	B	C		1	2	3	1	1b	2														
SK 1014	第IV～V期		平丸	平丸	平丸	平丸	平丸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK 1015	9世紀代		○○																								
SK 1039	不詳		○					○	○	○	○		○	○	○												
SK 1041	11世紀前半		○○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
SK 1058	第IV～V期		○○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
SK 1072	不詳		○					○																			

(以下は)鴻臚館跡19号遺構・遺物を報告済み)

SK 1034	不詳	○																							
SK 1042	第IV期	○○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
SK 1069	第V期		○		○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○
SK 1071	奈良時代か	○																							
SK 1075	奈良時代か	○																							
SK 1076	第II～III期	○						○	○							○	○								
SK 1079	平安時代	○																							

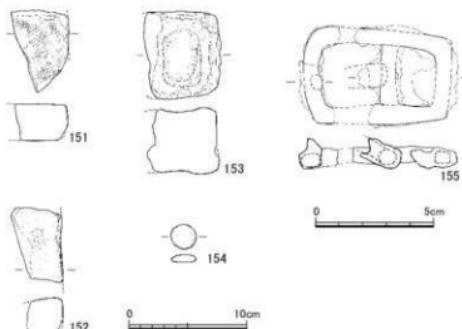
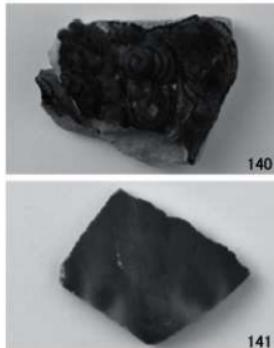


Fig.58 その他の出土遺物 4 (155は1/2。他は1/4)



Ph.20 その他の出土遺物

磨滅が著しく、二次被熱により瓦当面が劣化する。瓦当径 16.0 cm。148 は鴻臚館式軒平瓦（635 型式）で、表様遺物、胎土に砂粒をほとんど含まず精良。平瓦凸面の縄目はナデ消す。149 は軒平瓦で 662Ab 型式。著しく磨滅し、布目と敲打痕は残らない。150 は素文磚の残欠である。

151～154 は石製品である。151・152 は砥石、153 は回石で、砂岩製。いずれも SD1045 の下層から出土し、古代もしくはそれ以前の遺物と考えられる。154 は黒色の墓石だが時期不明で近世遺物の可能性もある。155 は鉸具とみられる鉄製品である。長さ 6.1 cm 前後。古代の遺構から出土した。

4. 小結

第 17 次調査は平和台野球場撤去後に最初に行われた調査であり、鴻臚館が谷を隔てて南北に存在することが判明するなど、多くの調査成果を挙げた。検出した古代遺構については 3 分割して本報告を行っており煩雑である。Tab.10 に示したそれぞれの報告書を参照頂きたい。

註 1. 越州窯系青磁の分類については『鴻臚館跡 20』P190～193 を参照

註 2. 『鴻臚館跡 II』

遺構名	3B					4					5					6									無文・ 不明	文字瓦	瓦 箱數	
	a	b	c	d	e	A	A	B	C	D	A	B	C	D	F	G	H	I										
	1	2-1	2			平丸																						
SK 1014						○																			○○		1	
SK 1015	○																								○		2	
SK 1039	○	○				○																			○○		2	
SK 1041	○		○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○○○	伊賀作瓦、佐902E-J	11		
SK 1058																									○○		2	
SK 1072																										少量		

SK 1034																									○		少量
SK 1042						○		○	○		○	○	○				○	○	○							12	
SK 1069																○									○ 平井(陰)901F	6	
SK 1071																									○		少量
SK 1075																									○		少量
SK 1076																									○		2
SK 1079	○							○							○										○		2

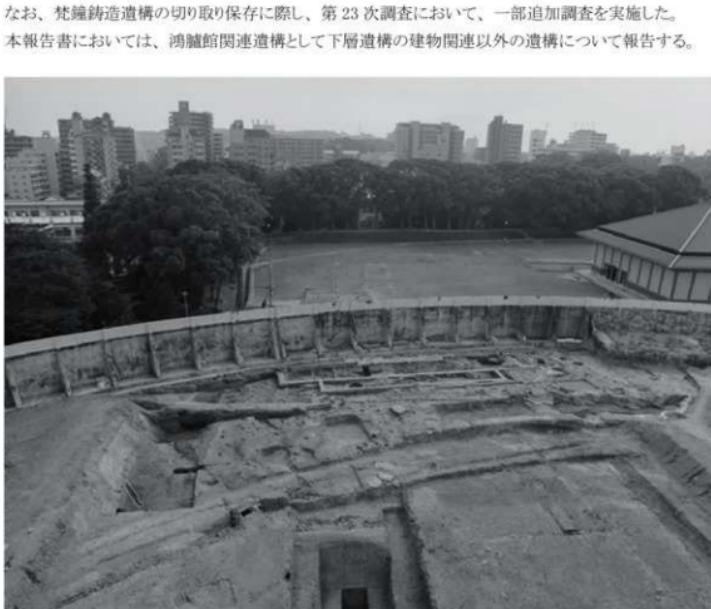
第四章 第 21 次調査の検出遺構と出土遺物

1. 調査の概要

第 21 次調査地点においては、自然地形の岩盤は、調査区西側の一部に見られるだけであり、鴻臚館関連遺構の大部分は、丘陵の尾根部を削って谷を埋め立てた造成面の上に営まれている。この造成土は丘陵の高所側からの細かい単位の斜堆積として現れている。第 II 期の布掘り掘立柱列 SA15012 はこの造成土に切り込んでおり、造成が少なくとも第 II 期以前（8 世紀前半以前）に行われたことを示している。その後、少なくとも中世後半までは谷部分を除いて大きな造成ではなく、谷を大規模に埋め立て、平坦な地表面を作り上げたのは、近世初頭の福岡城築城による。

上層遺構は近世福岡城関連遺構と陸軍 24 連隊関連遺構であり、旧平和台球場外野スタンドの盛土下において検出した。中世の遺構として、地下式横穴 SK15013 を検出したが、崩落の危険から完掘は断念した。

下層遺構は、鴻臚館跡関連遺構である。鴻臚館第 I 期に該当する遺構は、検出されていない。鴻臚館第 II 期の遺構としては布掘り掘立柱列、鴻臚館第 III 期では SK15014 などの廃棄土坑、鴻臚館第 IV 期では廃棄土坑と梵鐘鋳造遺構、鴻臚館第 V 期では廃棄土坑と区画溝を検出した。布掘り掘立柱列・区画溝については『鴻臚館跡 20』福岡市報第 1213 集で報告したところである。



Ph.21 第 21 次調査区全景（北より）

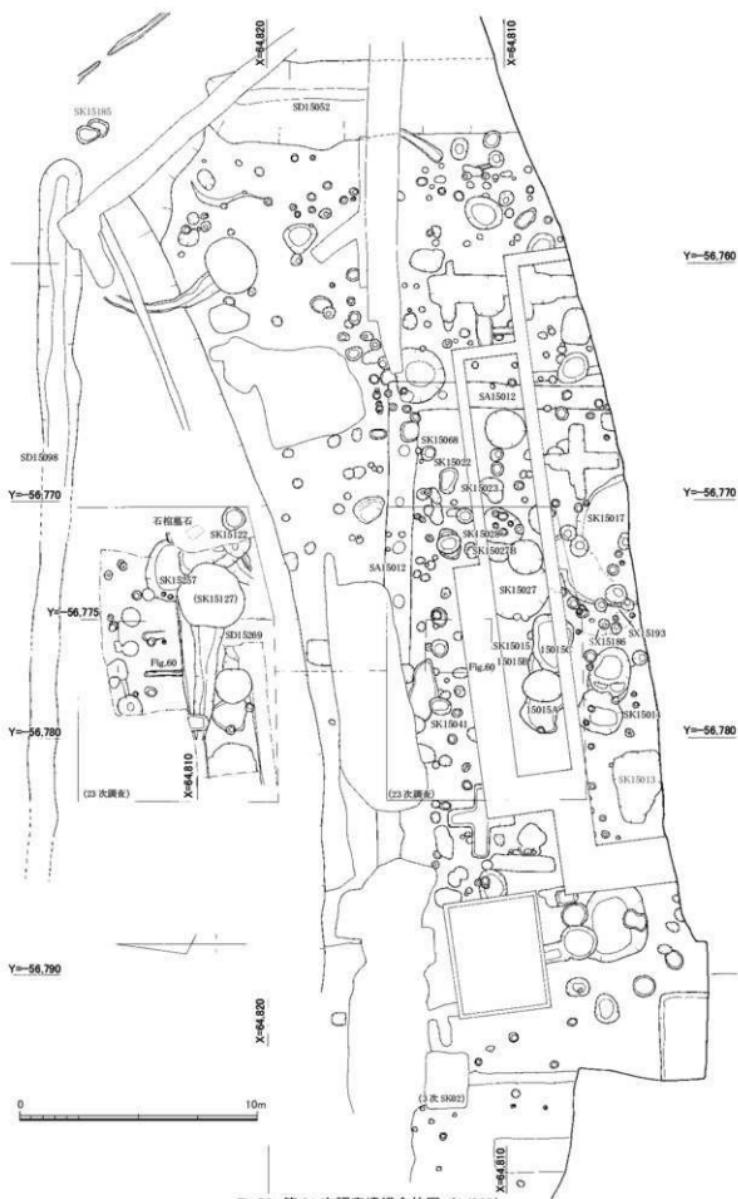


Fig.59 第21次調査造構全体図 (1/200)

2. 鴻臚館以前の地形と遺構

(1) 旧表土の検出

梵鐘鋳造遺構 SK15027 を切り取り保存するに当たって、型枠を設置し切り取り作業をするため、SK15027 の西側を大きく掘削することになり、調査を実施した。その際、鴻臚館の造成土の下から、旧表土と思われる暗褐色土層を検出したため、2.4m × 2.3m の範囲で旧表土の検出確認調査を行った。

旧表土は、南西から北東に下降する形で傾斜しており、鴻臚館の南館と北館を分かつ中央谷の斜面を検出したものである。

(2) 鴻臚館以前の遺構

鴻臚館は、史料上は日本書紀持統天皇二年（688年）紀に「筑紫館」と見えるのが初出であり、また発掘調査の所見からは、7世紀後半に第Ⅰ期施設が営まれたものと推測されている。また、これまでの発掘調査で、鴻臚館の造営に先立って、丘陵上に古墳群が営まれていたことが明らかとなっている。

第21次調査においても、SK15028の下層から、鴻臚館の造成土に含まれる形で、石棺の蓋石が出土した。斜面に落とされた状態で傾いて出土したもので、石の下面には全面に赤色顔料が塗布されていた。75×60cmの長方形を呈する玄武岩の板石である。



Ph.22 旧表土検出状況（西より）

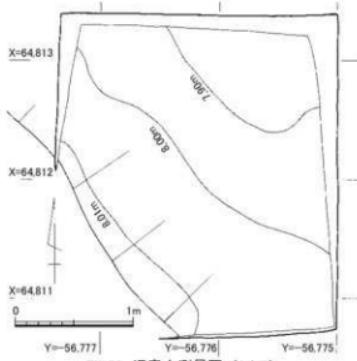


Fig.60 旧表土測量図 (1/40)



Ph.23 石棺蓋石出土状況（北より）



Ph.24 石棺蓋石土層断面（西より）

3. 検出遺構と出土遺物

第21次調査で検出した古代の土坑としては、瓦溜り土坑、池状土坑、梵鐘鋳造遺構などがある。そのほか、遺物の出土が少なく、時期を決めがたい古代の土坑があるが、おおむね廃棄土坑であろう。

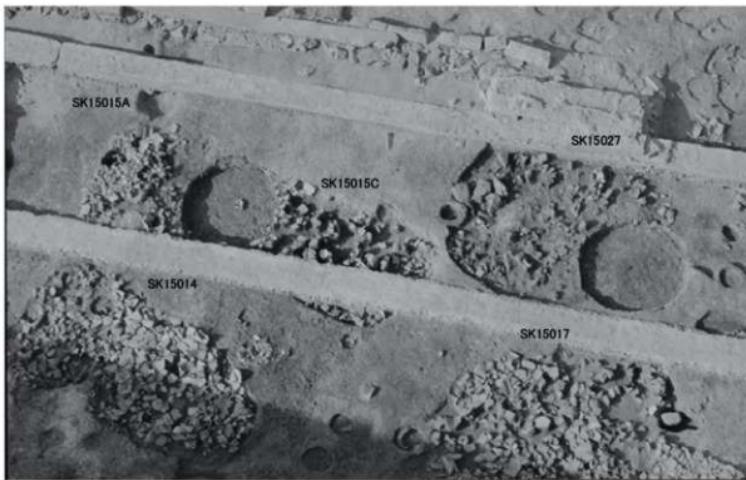
SK15014 Fig.61, Ph.25 ~ 28

平成15年度調査区の南辺近くで検出した瓦の廃棄土坑である。検出段階からひょうたん型の平面形を呈し、二つの土坑が重複しているという予想はついたが、瓦が境目なく分布し区別がつけがたかった。その状況は、断面観察でも大差ない。しかし、掘り上げたところ、ほぼ同規模の土坑が接するように重なっている状況が確認できた。瓦の入り方や廃棄され堆積した状況を観察すると、東側土坑の瓦が、西側土坑の上に被さっている状況が看取できた。

遺物の取り上げに際しては、東側土坑をSK15014A、西側土坑をSK15014Bとして、区別した。しかし、実際には両方から出土した遺物が接合できる例が多く、時間差を持った廃棄とは考えにくい。SK15014Bが掘られた後SK15014Aが掘られたのは確かであるが、遺物の廃棄に時間的な空隙はほとんどないものと思われる。

SK15014 出土遺物 Fig.62 ~ 69, Ph.29 ~ 30

SK15014Aの出土遺物を1~36、51~52・54~59、60~73、80に示す。1~6・13は、土師器である。1~4は、坏である。腰部に丸みを持つ1~3と、底部から直線的に開く4がある。4は砂っぽくて粗く赤みが強い胎土で、他の土師器・黒色土器と生産地を異にすると思われる。5~6は椀である。表面は磨滅し、調整は不明である。7~12は、黒色土器A類椀である。小型の椀と(7~9)と大型の椀(10~12)がみとめられる。体部外面は横撫で調整、内面は、表面が剥離気味であるが、へら磨きを施している。12の内面は、器壁に沿って4~5分割した横方向のへら磨きがみられる。13は、



Ph.25 SK15014・SK15015・SK15017付近(南より)

土師器の甕である。体部内面はケズリ、外面は叩き調整する。

14・15は、新羅陶器の小片である。印花文がみられる。

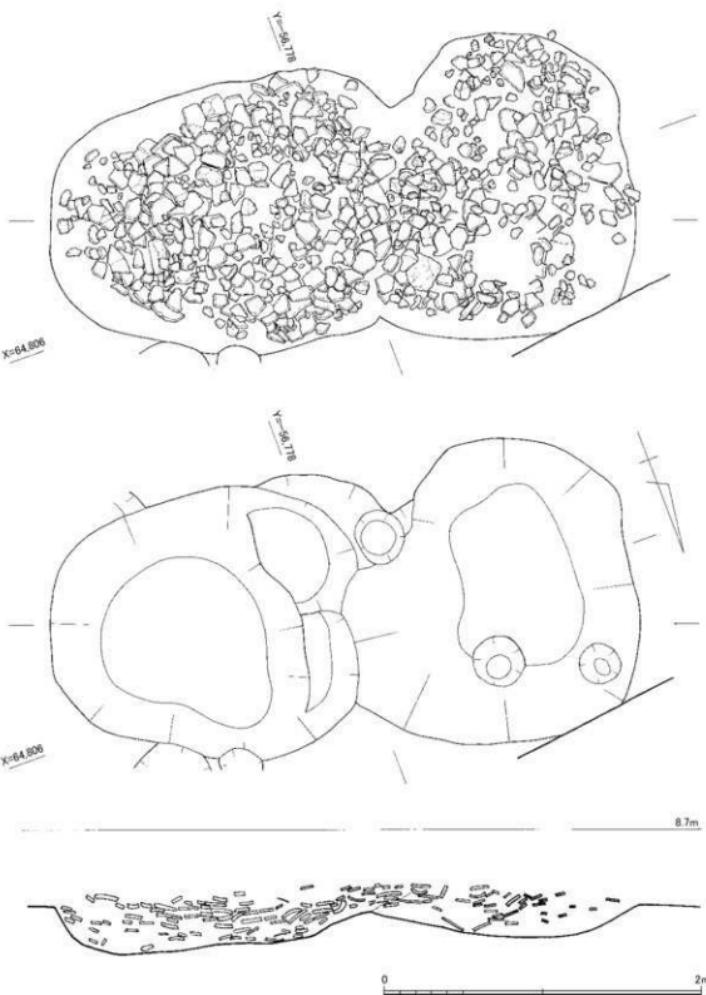
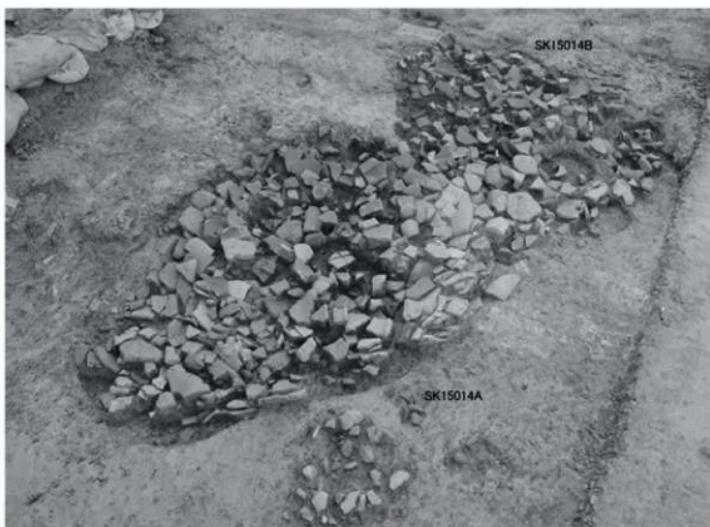


Fig.61 土坑 SK15014 実測図 (1/30)



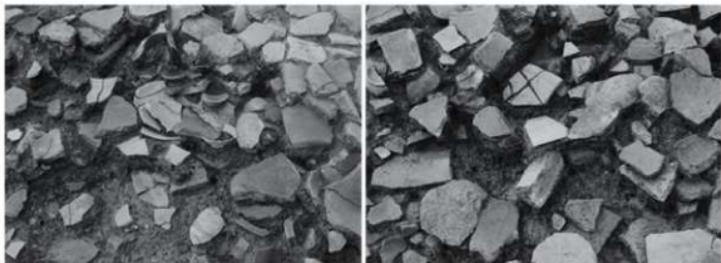
Ph. 26 SK15014 検出状況（東より）



Ph.27 SK15014 完掘状況（北西より）

16～29は、越州窯系青磁である。16は、蓋のつまみである。17は合子の蓋で、合せ口から内面は露胎となる。18は、水注の把手の破片である。19～21は皿である。21は、全面に施釉する。22～29は碗である。22～24は全面施釉の精製品、25～29は体部下位から外底部を露胎とする粗製品である。30～32は、白磁碗である。30は、輪花の小碗で、純白な胎土に透明感の強い釉がかかる精製品である。体部下位から高台は、露胎となる。31は、口縁を小さく折り返し、玉縁に作る。32の口縁は内湾気味に直行するが、肥厚する。33は、褐釉陶器の小型壺である。白化粧した上に褐釉を施す。双耳壺になると思われる。34・35は、無釉陶器の鉢である。焼成は堅緻で、焼き締まる。35は、大型の捏ね鉢である。

36は、銅錢である。磨れて字画がつぶれていますが、「開元通寶」と判読できる。鴻臚館跡での銅錢の出土は、珍しい。



Ph.28 SK15014 遺物出土状況

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa 老		3Ab		3Acl	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014									○	○			○		○	○	○	
SK15014A							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
SK15014B							○	○	○		○	○	○		○			

叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014															○	○		
SK15014A															○			
SK15014B															○			

叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014									○				○					○
SK15014A									○	○	○			○				
SK15014B									○	○				○			○	

叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		繩目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014											○	○		
SK15014A											○	○		
SK15014B											○	○		

Tab.12 SK15014 出土瓦分類

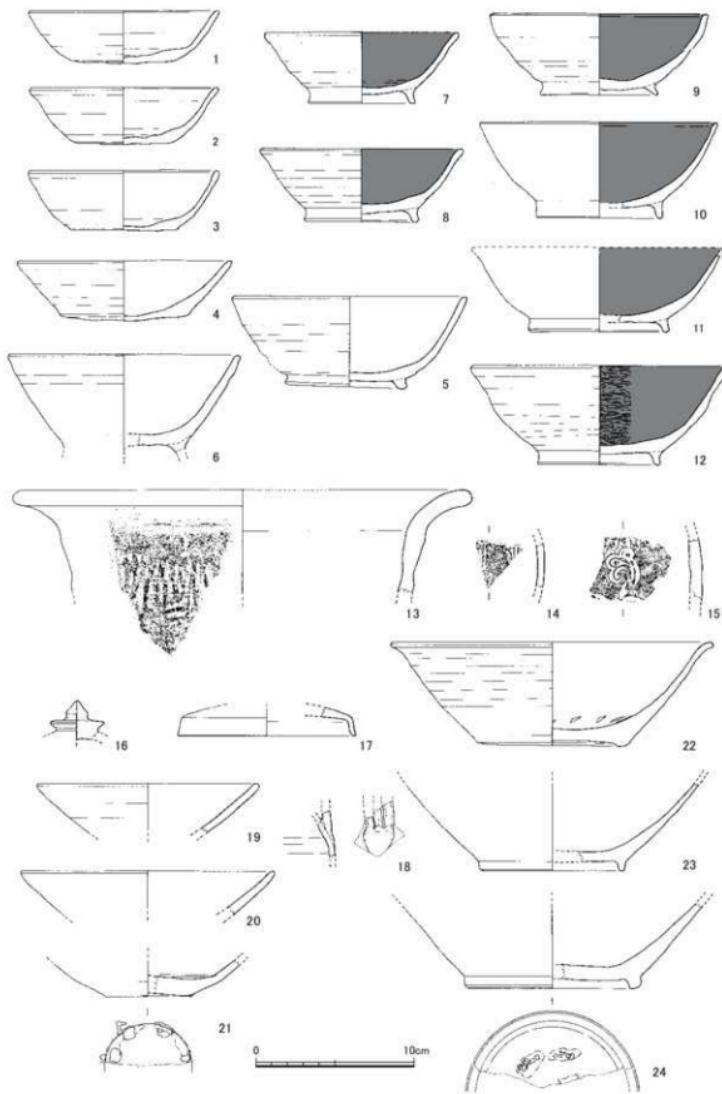


Fig.62 SK15014 出土遺物実測図1 (1/3)

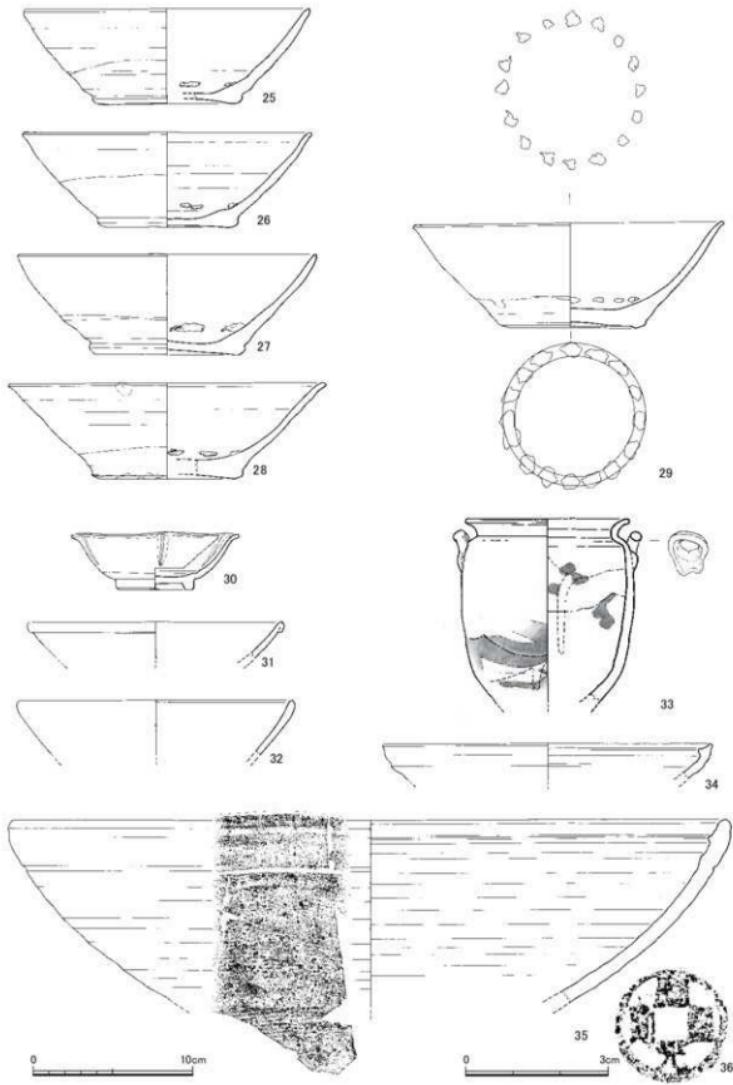
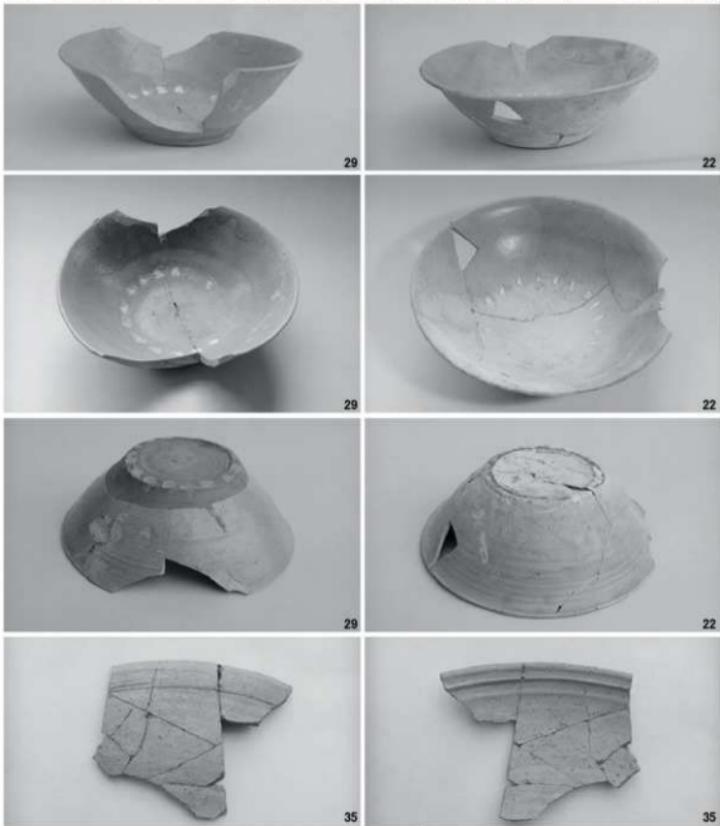


Fig.63 SK15014 出土遺物実測図2 (1/3、36…1/1)

50～52は鴻臚館式軒丸瓦、54は鴻臚館式軒平瓦である。55・56は、均等唐草文の軒平瓦である。周囲の縁に珠文をめぐらす。57・Ph.30～80は、瓦磚である。長軸方向に丁寧になで調整し、整った直方体につくる。長辺約27.5cm、短辺約16.5cm、高さ約5.0cmをはかる。58は、文字銘を持つ平瓦である。二重線で縁取った方形の区画を十字に分割し、「伊貴作瓦」の文字を配する。59は、自然釉がかかった平瓦であるが、撫で調整で精緻な成形がなされている。60～71は平瓦、72・73は丸瓦である。瓦については、叩き文様による分類表をTab.12に示す。

SK15014Bの出土遺物を37～49、53、74～79に示す。37は、土師器の脚付皿である。鼎状に短い脚が付くが、折損している。38は、黒色土器A類の椀である。内面はへら磨きと思われるが、磨滅が激しい。

39・40は白磁である。39は、平底の稜花皿である。見込みには、陽刻で花文をあしらう。外底部は



Ph.29 SK15014 出土遺物1

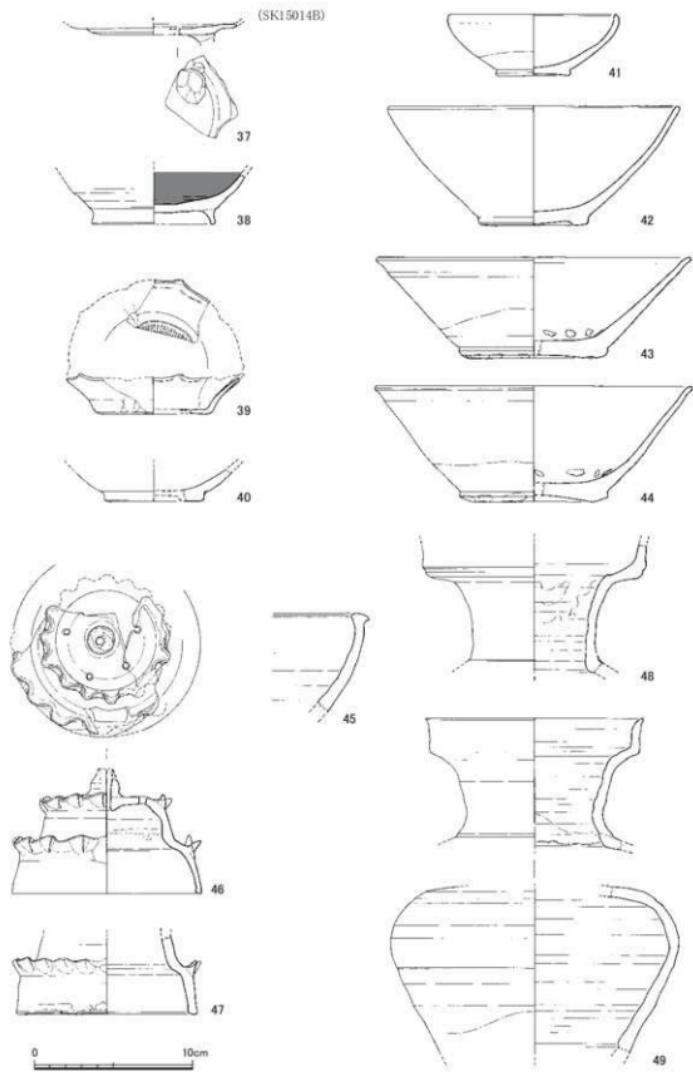


Fig.64 SK15014出土遺物実測図3 (1/3)

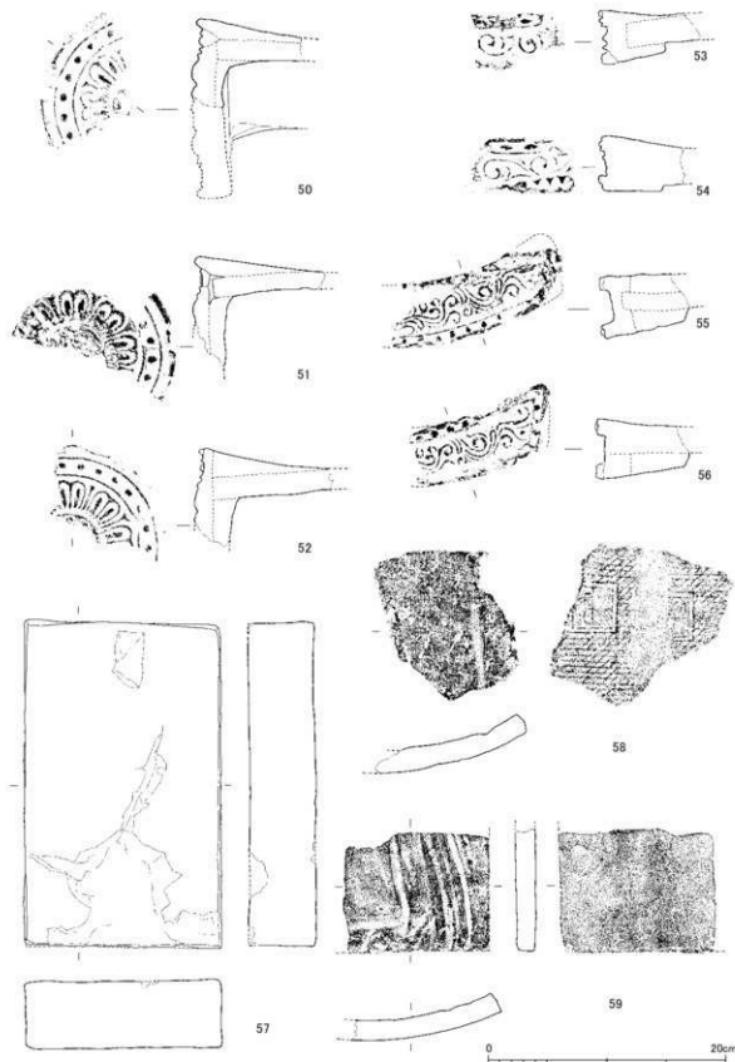


Fig.65 SK15014出土遺物実測図4 (1/4)

露胎となる。40は、碗である。高台は玉壁高台で、露胎となる。41～48は、越州窯系青磁である。41～44は、碗である。42は全面施釉の精製品である。口縁部破片と体部破片に分かれている、直接接合はできない。45は、鉢の小片である。46・47は、香炉の蓋である。形態的には同形だが、別固体である。二段に盛り上がった天井部の各段に鐔を貼り付け、指で押してフレア一状にする。46は摘みから天井にかけて、褐彩を加える。48は、盤口壺である。49は、褐釉陶器の盤口壺である。口縁か



Ph.30 SK15014出土遺物2

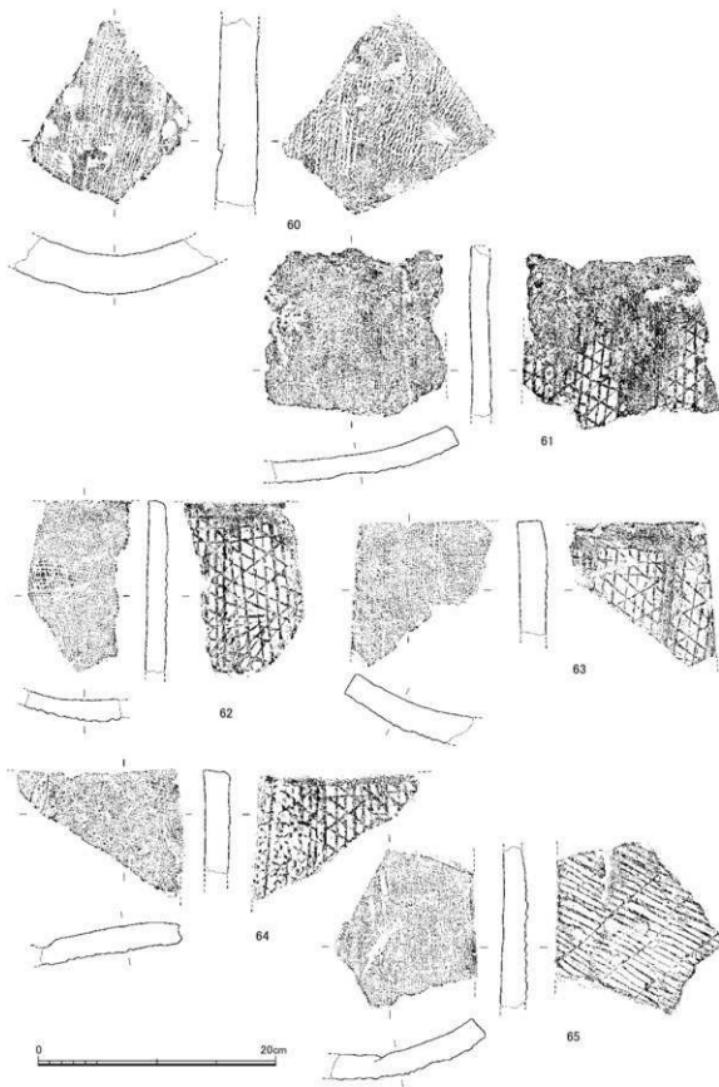


Fig.66 SK15014出土遺物実測図5(1/4)

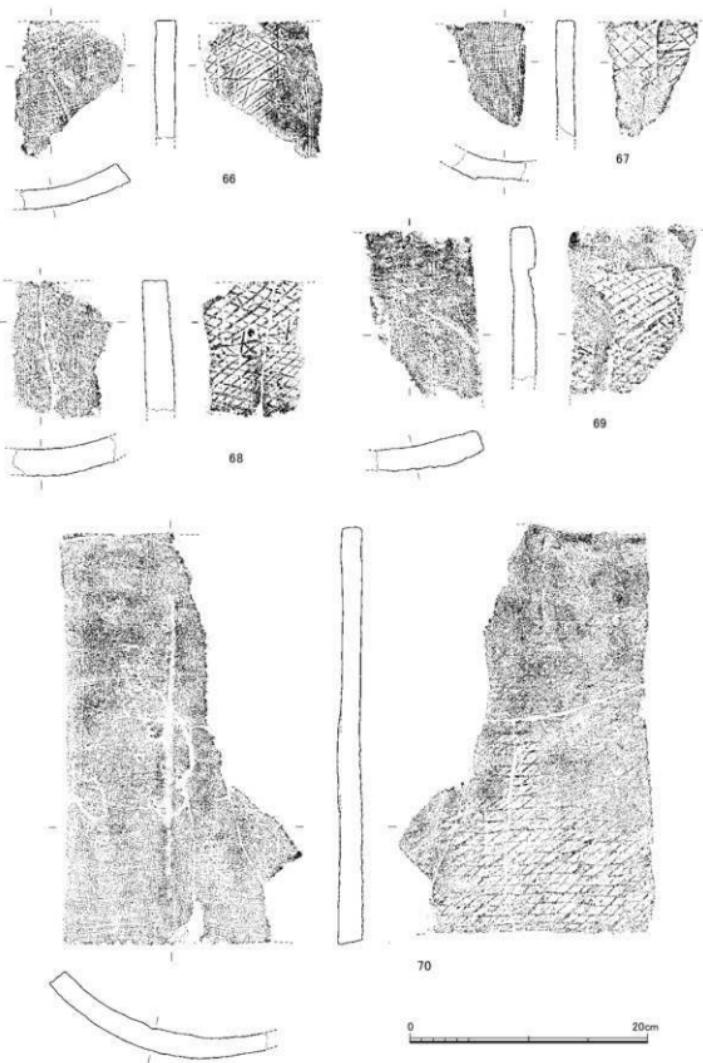


Fig.67 SK15014出土遺物実測図6(1/4)

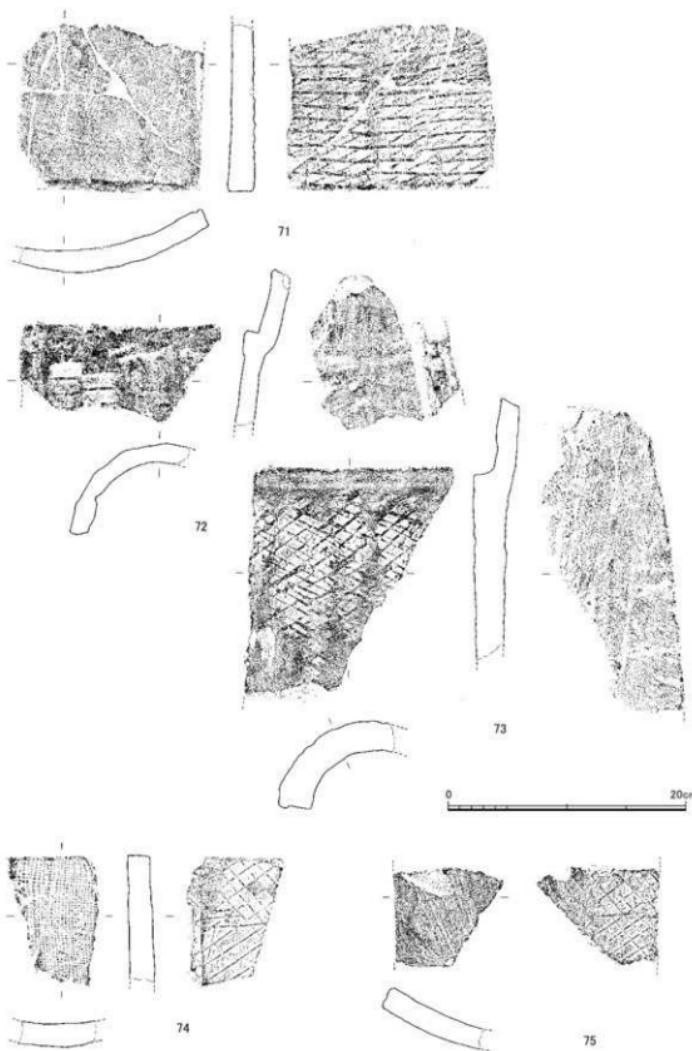


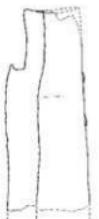
Fig.68 SK15014出土遺物実測図7(1/4)



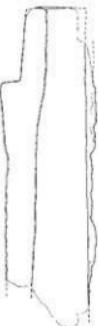
76



77



78



79

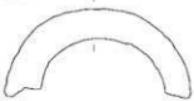


Fig.69 SK15014出土遺物実測図8(1/4)

ら頸部にかけてと、体部片に分かれて接合できないが、同一個体と思われる。白色粒子が多い粗い胎土に緑褐色の釉を薄く施す。

53、74～79は、瓦である。53は、鴻臚館式軒平瓦の小片である。74・75は平瓦である、76～79は丸瓦である。分類表は、Tab.12に示す。

青磁・陶器のほとんどが二次的に火熱を受け、釉表が荒れている。これは、廃棄のきっかけとして、火災にあったことを示している。また、26～28、43・44などは重ね焼きの窯道具をはずしただけで、目を落していない。すなわち、商品として出荷前の状態にあったと考えられる。

なお、41・43・44・46・48・49などは、SK15014AとSK15014Bなどで接合できた遺物である。これらの土師器や黒色土器の特徴により、9世紀前半から中頃の廃棄土坑であると考えられる。

SK15015A Fig.70, Ph.31

当初 SK15015として検出した一見東西に長い長方形を呈した土坑は、遺物の集中状況、土坑床面の高低、精査して検出した土坑壁の形状から、3つの遺構に分かれた。よって、これをSK15015A・B・Cとして、別個の遺構として調査を進めた。結局、SK15015Aは第IV期、SK15015Cは第V期の土坑であることが判明したため、それぞれに報告することとする。ただし、SK15015Bについては、SK15015Cに先行することは切りあい関係から明らかだが、明瞭に時期を示す遺物がなく、また形状も不明のため省略する。

SK15015Aは、切り合い関係や兵舎基礎による搅乱のため全形を知りがたいが、おおよむね一辺 200cm の略方形を呈する。検出面から床面までの深さは、約 20cm である。土坑の特に西半分にかたまつて遺物が廃棄されていた。



Ph. 31 SK15015A検出状況(北西より)

SK15015A 出土遺物 Fig.71・72, Ph.32

81～83は土師器である。81・82は壺で、直線的に立ち上がる体部を持つ。84～86は、黒色土器A類碗である。全体に磨滅気味だが、体部外面は横拂で、内面はへら磨きで調整している。碗の体部は丸みが強く、口縁は軽く外反する。87は、須恵器の甕である。

88・89は白磁である。88は輪花の壺で、底部を欠くが輪状高台であろう。89は、玉璧高台の碗である。

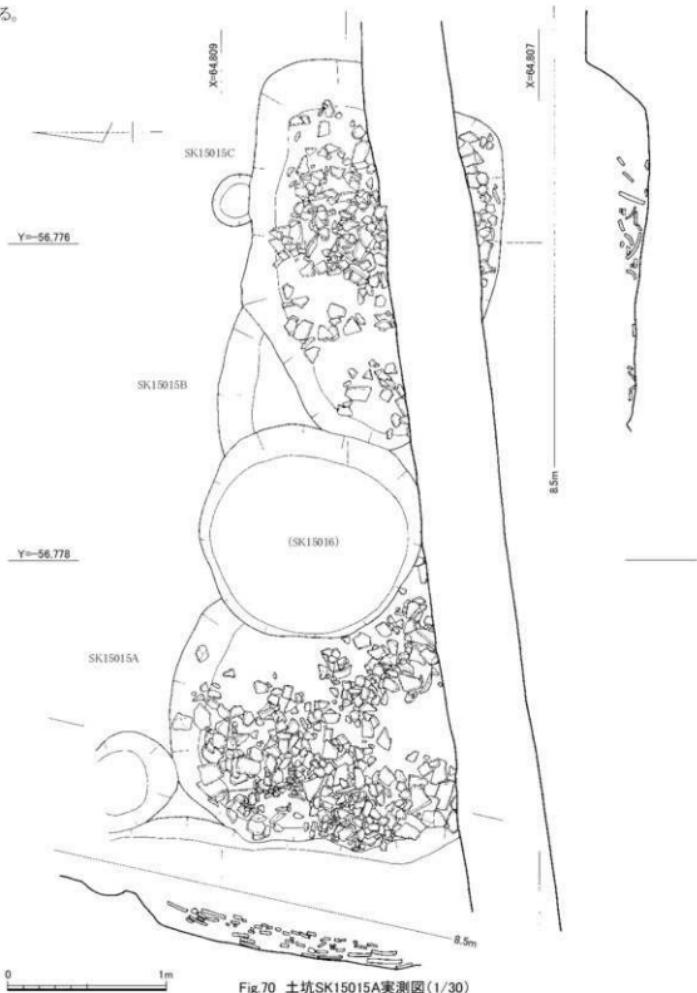


Fig.70 土坑SK15015A実測図(1/30)

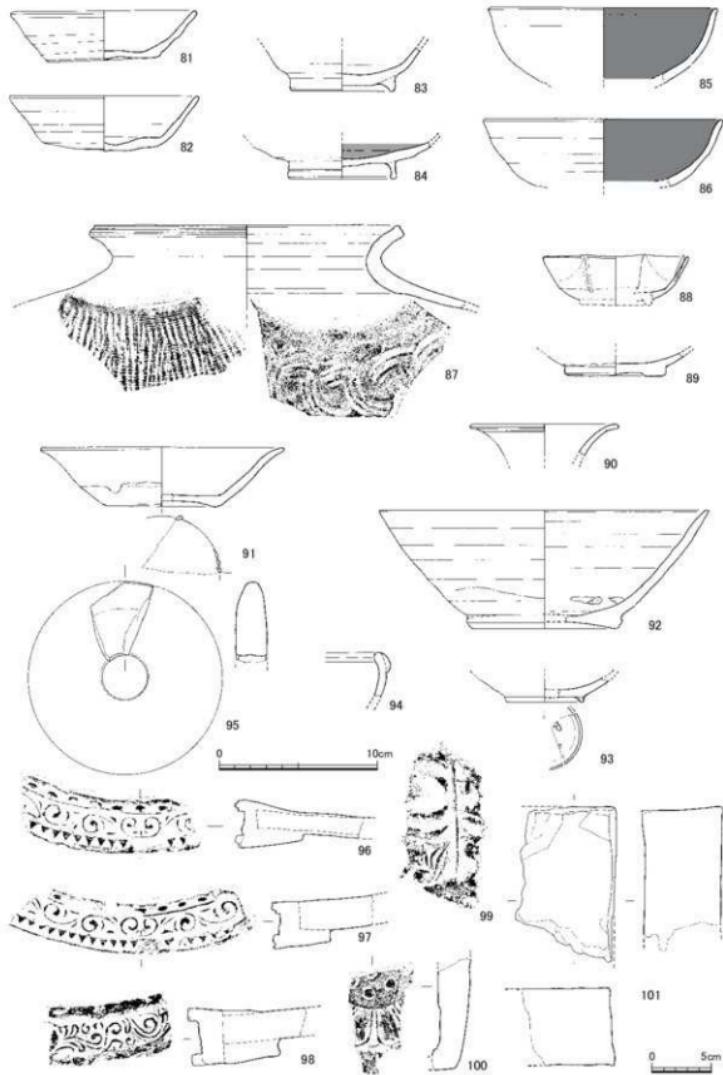


Fig.71 SK15015A出土遺物実測図1(1/3、96~101…1/4)

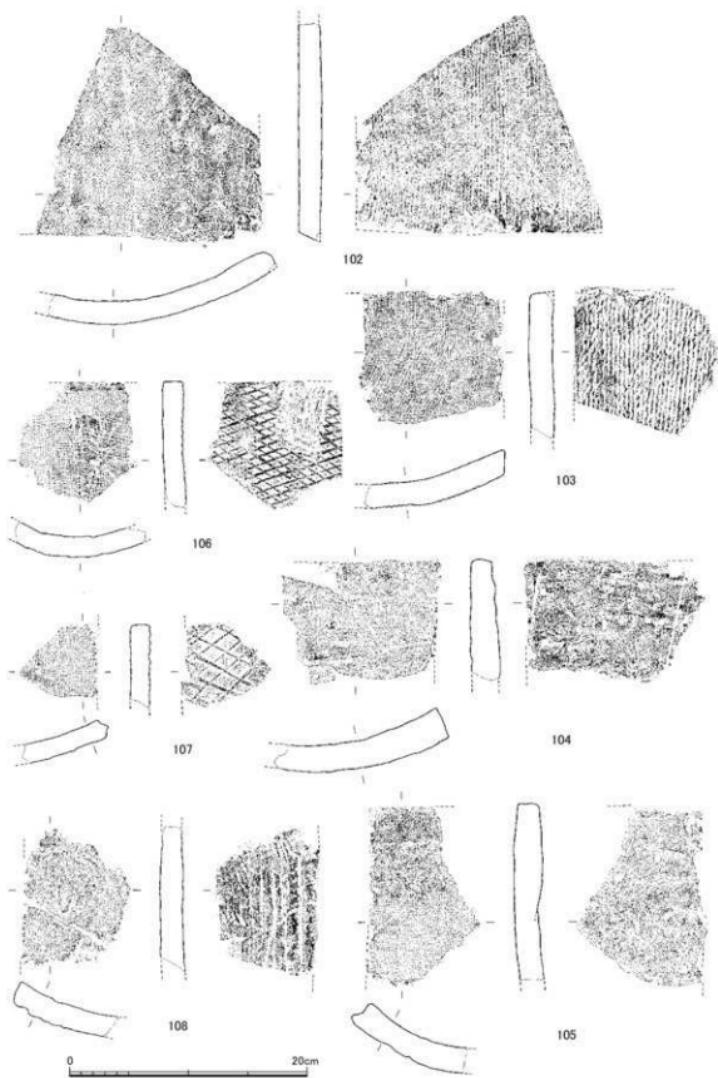


Fig.72 SK15015A出土遺物実測図2(1/4)



Tab.32 SK15015A出土瓦分類

Tab.13 SK15015出土瓦分類

叩き分類	1	2A	2B	2C	3Aa1	3Aa2	3Aa 老	3Ab	3Ac1
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15015A					○	○	○	○	○
SK15015C	○				○	○	○	○	○
叩き分類	3Ac2	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb1	3Bb2	3Bc	3Bd	3Be
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15015A		○							
SK15015C		○	○		○				○
叩き分類	4A	4Ba	4Bb	5A	5B	5C	6A	6B	6C
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15015A					○	○	○		○
SK15015C	○				○	○	○	○	
叩き分類	6D	6E	6F	6G	6H	網目	無文		
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15015A					○		○	○	
SK15015C							○	○	

90～93は、越州窯系青磁である。90は水注の口縁部、91は皿、92・93は碗である。93は、高台の内側に目跡が見られ、年代的に新しい要素を示す。94・95は無釉陶器である。94は鉢、95は茶展輪の破片である。95の縁辺部には使用痕が顕著に見られる。

96～108は瓦である。96・97は鴻臚館式軒平瓦、98は均等唐草文軒平瓦である。99は鬼瓦の破片である。側面も背面も剥離し表面のみの破片のため、実測を行わず拓本のみを示した。縁辺の珠文と鬼面の飾付近が残っているものと思われる。100は単弁の軒丸瓦で、全面に灰緑色の自然釉がかかる。101は、瓦磚である。角の破片であるが、Fig.65～57に比べ、厚く整えられている。102～108は平瓦である。このほかに出土した多量の平瓦・丸瓦については、叩き文様による分類表をTab.13に示す。

土師器や黒色土器椀の特徴から、9世紀前半に位置づけるのが妥当であろう。

SK15015C Fig.70, Ph.33・34

前述したようにSK15015から分離した土坑で(P.95参照)、長辺230cm 短辺150cmのひずんだ長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは40cm程度で、埋土の下半分に、瓦を主とした遺物が廃棄されていた。

SK15015C 出土遺物 Fig.73・74

109～116は、土師器である。109～111は壺で、腰の丸みが強く、器高は高く、口縁は外反する。112は小椀で、低い高台が付く。器面は荒れ、調整不明。114～115は椀で、外方に踏ん張った細く高い高台を持つ。壺と同様に、体部下半の丸みが強い。115の腰部には、内外面ともに指押さえの痕跡が見られる。116は、脚付の鉢である。底部から体部に移行する内面には、絞り痕跡が並ぶ。117は、黒色土器B類椀である。内外面ともにへら磨きされる。

118～120は、越州窯系青磁碗である。118の見込みには、毛彫りで草文が描かれる。121・122は、白磁の大型鉢である。

123は、鴻臚館式軒平瓦である。小口は、へらで面取りした後、縦方向に撫でを加える。124は、瓦磚である。なで調整で成型する。高さ約7cm。

125～129は平瓦、130は丸瓦



Ph.33 SK15015C検出状況(北西より)



Ph.34 SK15015C掘り上げ状況(北西より)

である。平瓦・丸瓦については、叩き文様による分類表をP.99、Tab.13に示している。
土師器・黒色土器、越州窯系青磁の特徴から、10世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

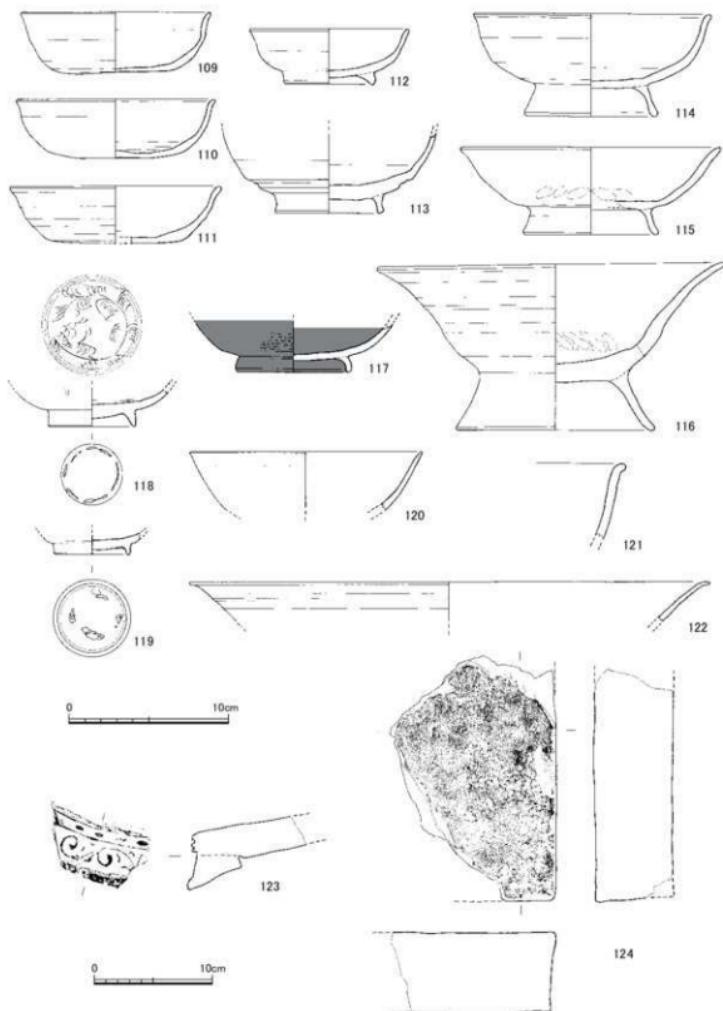


Fig.73 SK15015C出土遺物実測図1 (1/3, 123-124-1/4)

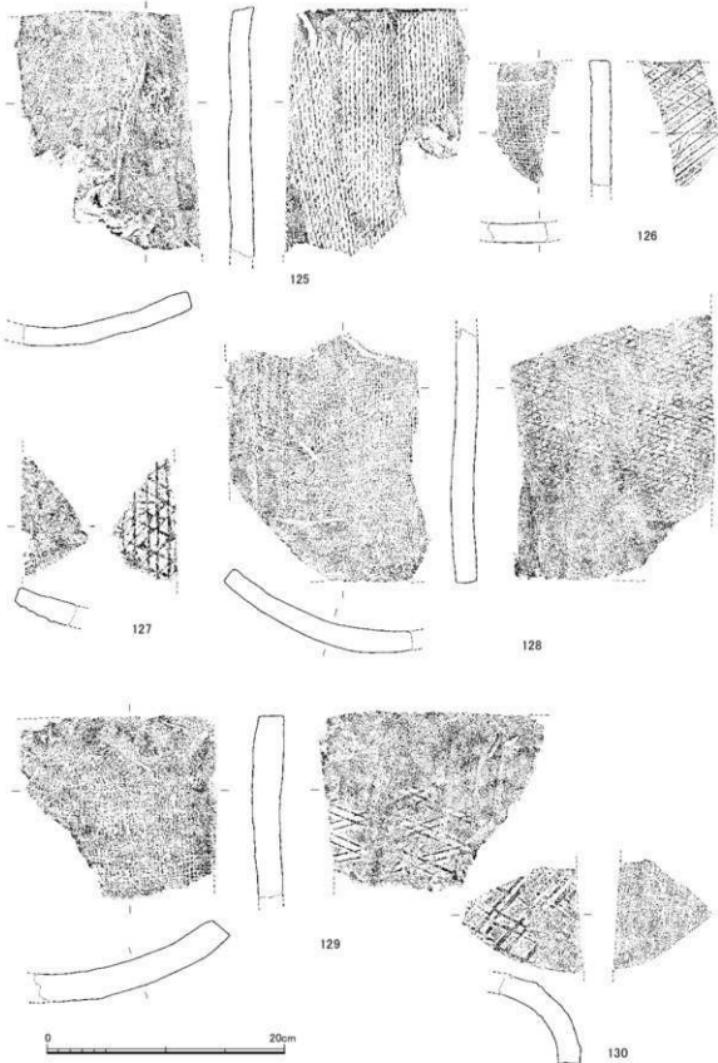


Fig.74 SK15015C出土遺物実測図2(1/4)

SK15017 Fig.75、Ph.35～38

調査区南辺から検出した瓦溜りである。廃棄された瓦の粗密から、A～Cに分けたが、完掘したところ、AとCは一連の遺構である。各遺構に顕著な時期差は認められない。深さ15～20cmほどの浅い土坑に、瓦を主とした遺物が、ほとんど隙間なく詰められたように出土している廃棄土坑である。

SK15017 出土遺物 Fig.76～83、Ph.39・40

SK15017Aの出土遺物をFig.76に示す。131は、土師質の土製品で猿面鏡であろう。上面は、指で押さえられて瘤む。132～135は、土師器の碗である。高台径は小さくなるが、逆に高台は高く外方に踏ん張る。136・137は、須恵器の甕である。

138～146は、越州窯系青磁である。138は合子の蓋、139は皿、140～146は碗である。141・142・144・145は、全面施釉する精製品である。147～148は、無釉陶器のこね鉢である。149は、唐三彩の盤である。白化粧した白地に緑釉・黄釉で斑点を打つ。胎土は緻密で、硬質に焼成される。晚唐の三彩と思われる。

Fig.77～150～153は、SK15017Bの出土遺物である。150は、鐵鏹である。茎の一部を欠くが、出土状況から、全長18.25cmに復元できる。151・152は越州窯系青磁である。151は、長頸瓶の口縁部である。152は玉壁高台の碗で、全面に施釉する。153は掲釉陶器の壺または瓶の底部である。

155・158は、SK15017Cの出土遺物である。155は越州窯系青磁で全面施釉の碗、158は鴻臚館式軒平瓦の残片である。

154は、SK15017Aに切り込んだ柱穴SP15154から出土した越州窯系青磁輪花碗で、細く高い高台の



Ph.35 SK15017検出状況(北東より)

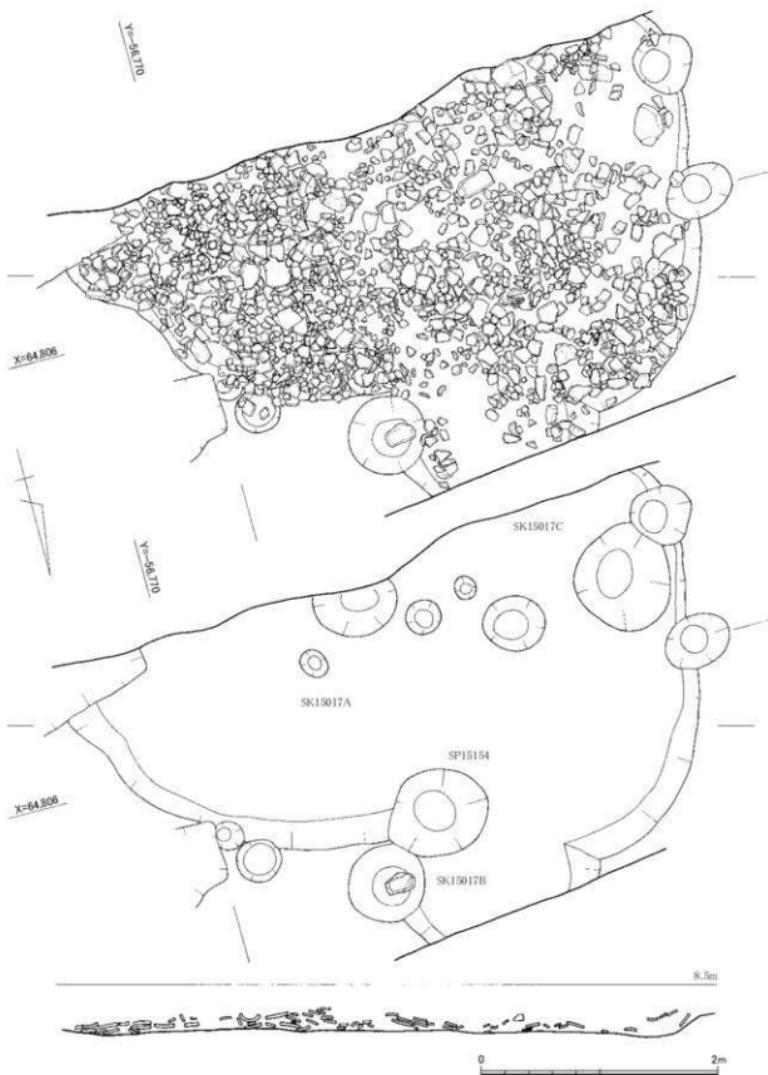


Fig.75 土坑SK15017実測図(1/40)



Ph.36 SK15017 瓦堆積断面（北より）



Ph.37 SK15017 完掘状況（北東より）



Ph.38 SK15017 遺物出土状況

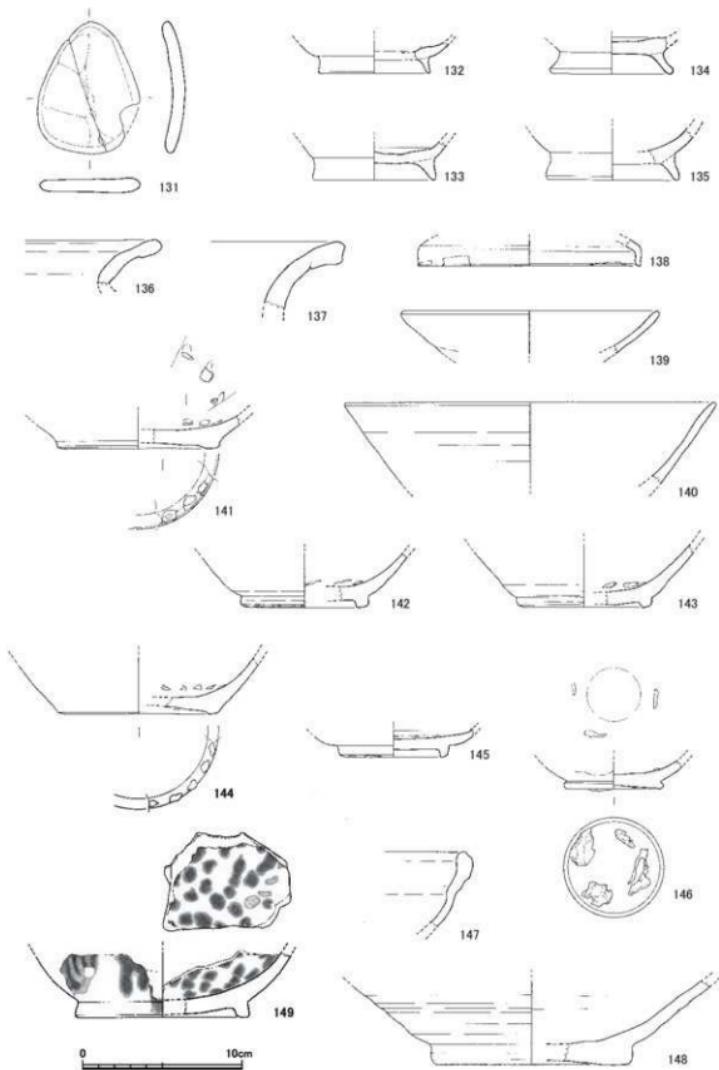


Fig. 76 SK15017 出土遺物実測図1 (1/3)



Ph.39 SK15017 出土鉄器

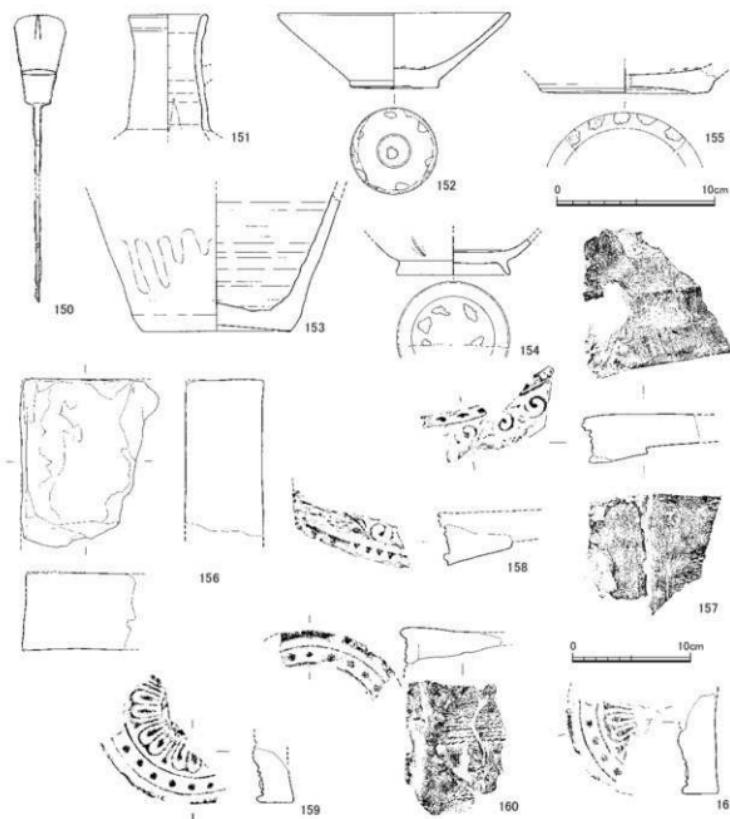


Fig.77 SK15017 出土遺物実測図2 (1/3、156 ~ 161…1/4)

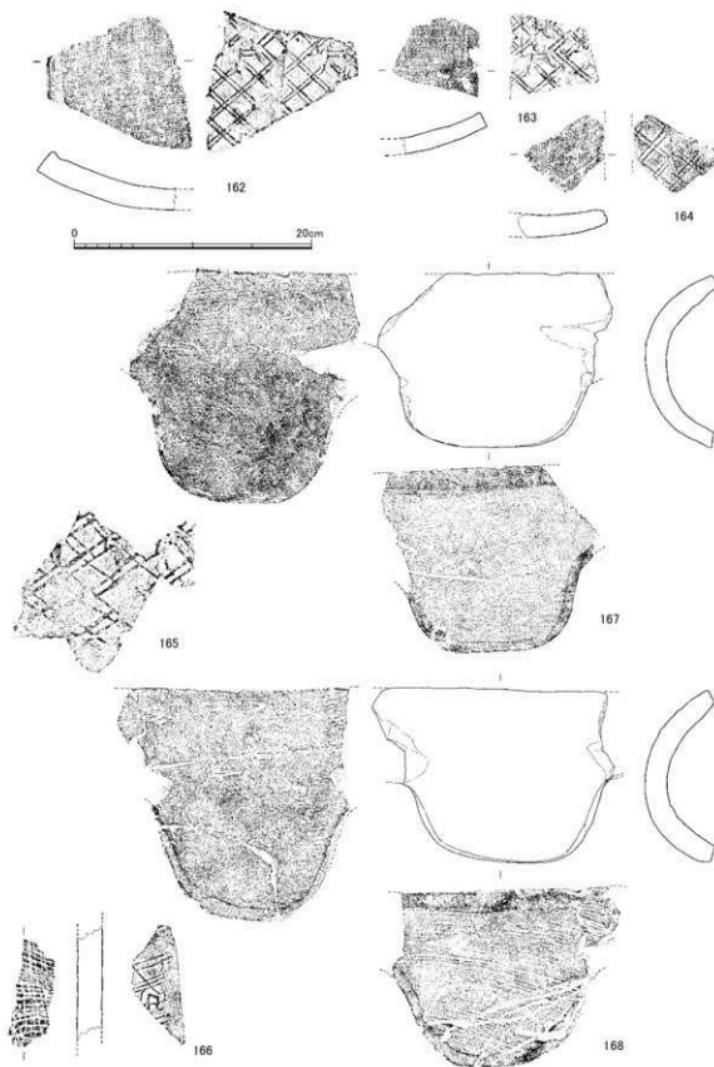


Fig.78 SK15017 出土遺物実測図3 (1/4)

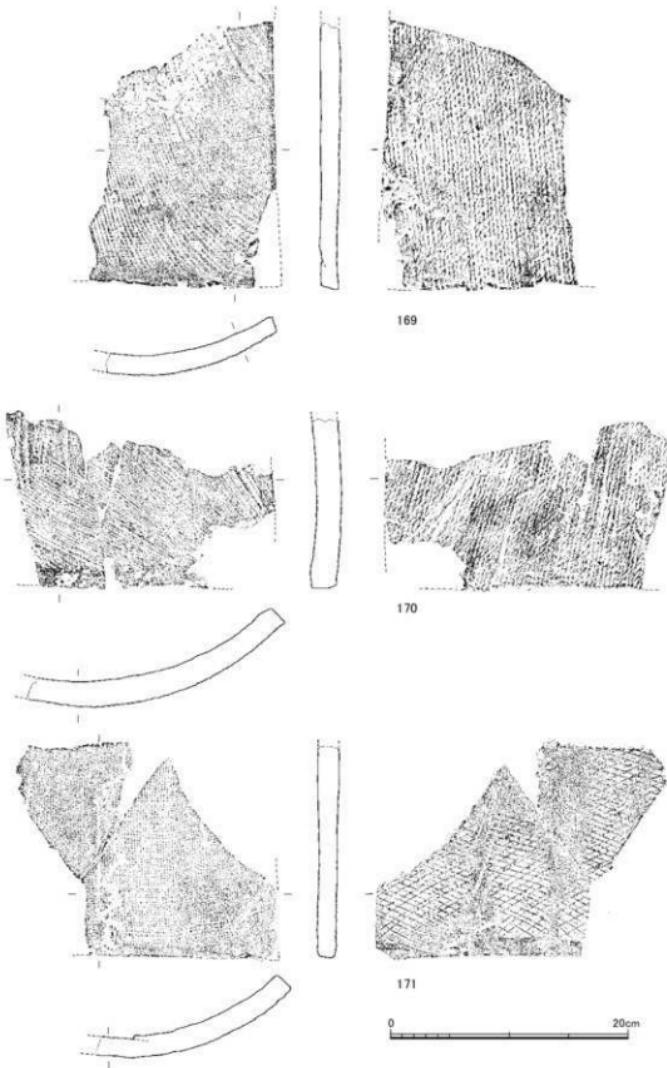


Fig.79 SK15017 出土遺物実測図4 (1/4)

内側に目跡が並ぶ。時期的には鴻臚館第V期（10世紀後半～11世紀前半）に降る遺物である。
156は、瓦磚である。なで調整で平滑に成型する。**157**は鴻臚館式軒平瓦、**159～161**は鴻臚館式軒丸瓦である。
Fig.78～83には、瓦を示した。SK15017AとCは一連の遺構であることから特に区別せず図示し、SK15017AとBについて叩き文様による分類をTab.14に示した。**162～166**は文字銘をもつ平瓦で、**162・163**は「賀茂」銘、**165**は文字の残画は見えるが判読不能である。**167・168**は面戸瓦である。

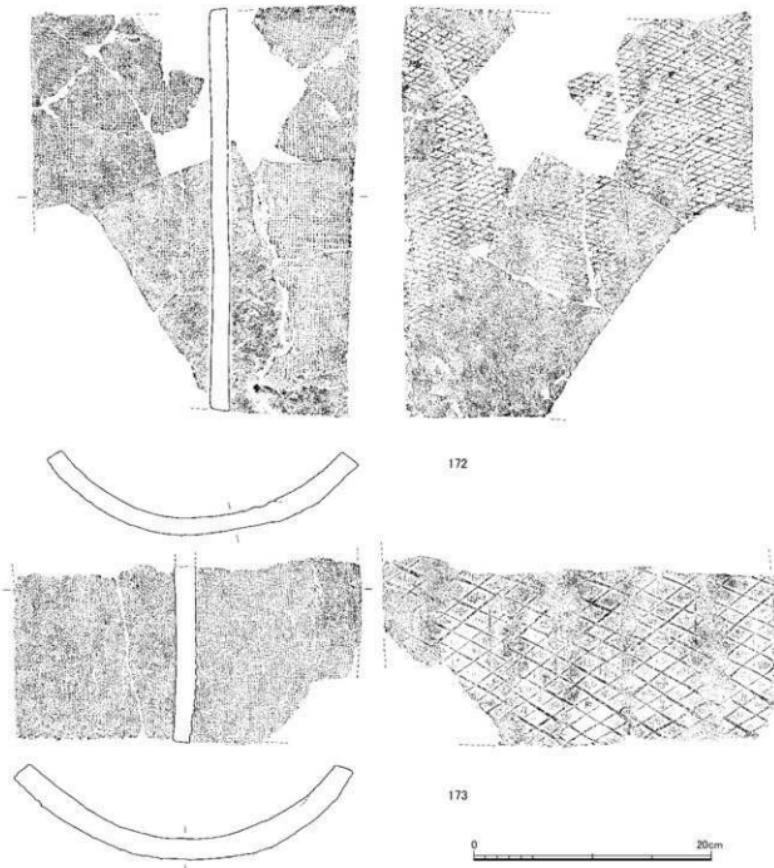


Fig.80 SK15017 出土遺物実測図5 (1/4)

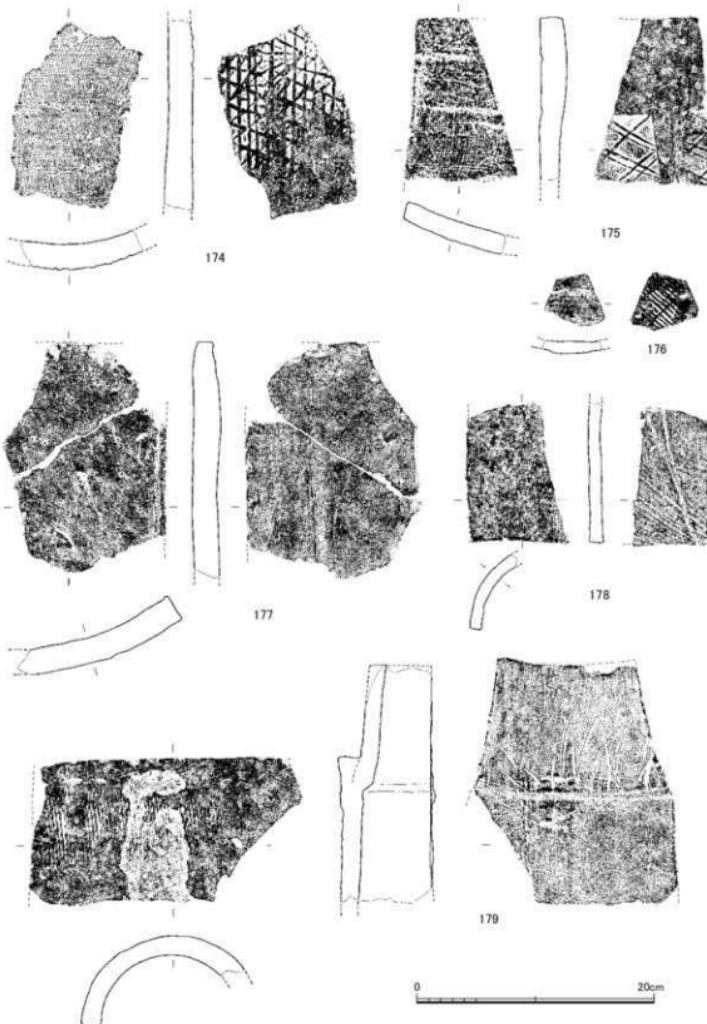
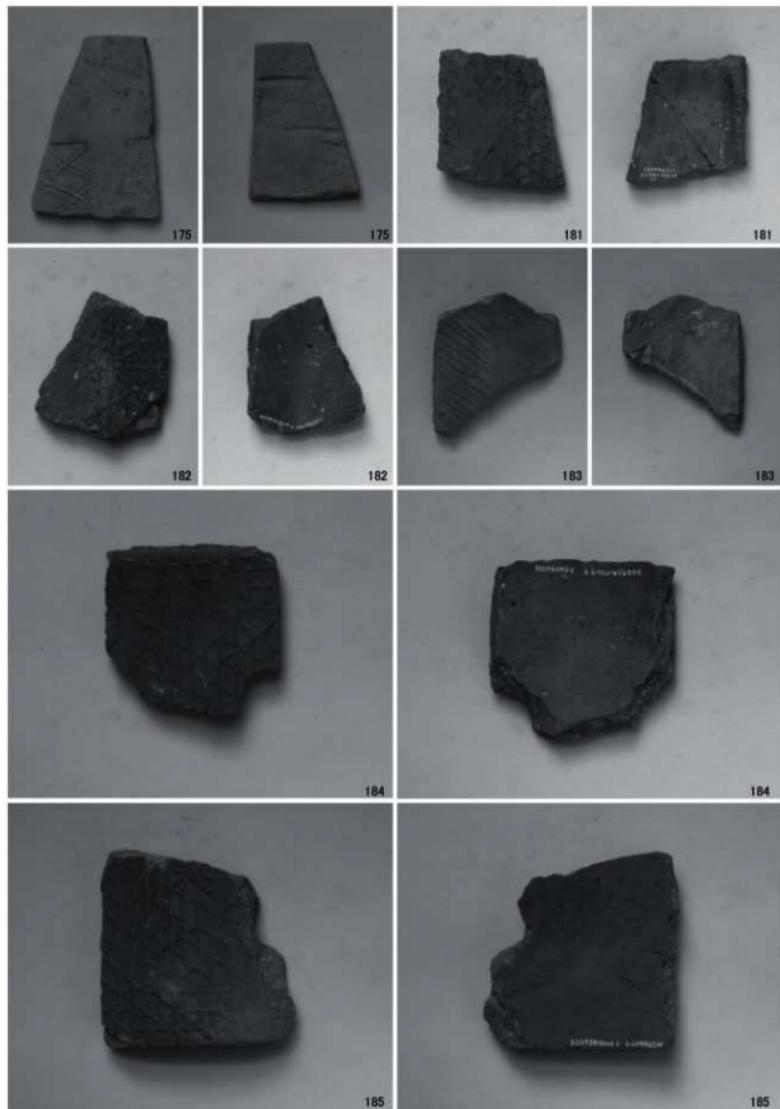


Fig.81 SK15017 出土遺物実測図6 (1/4)



Ph.40 SK15017 出土遺物

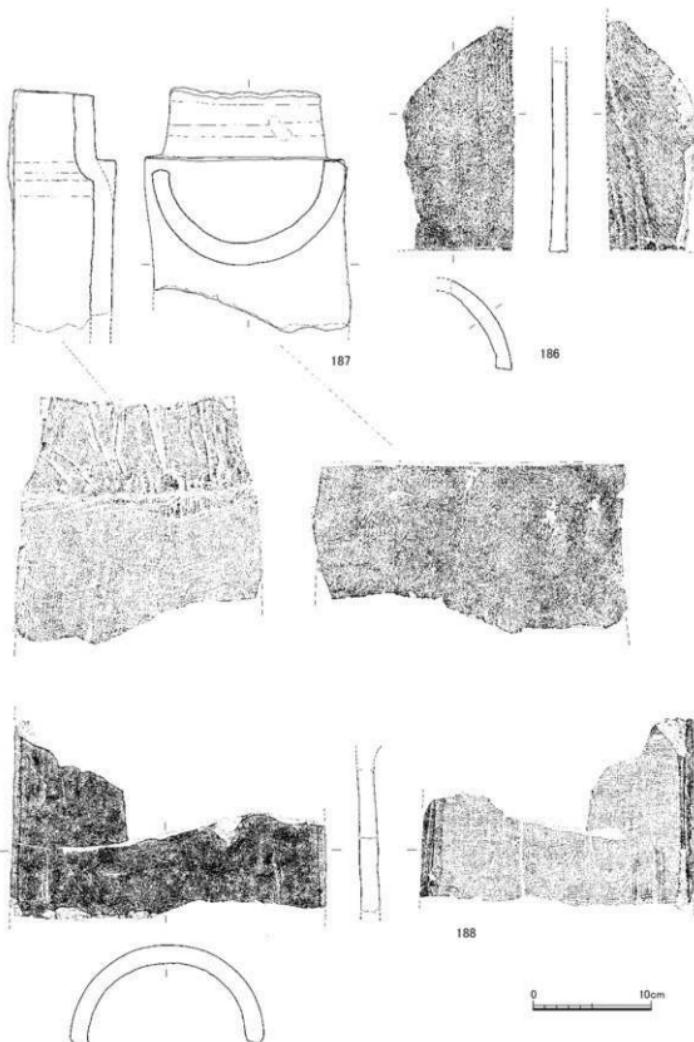


Fig.82 SK15017 出土遺物実測図7 (1/4)

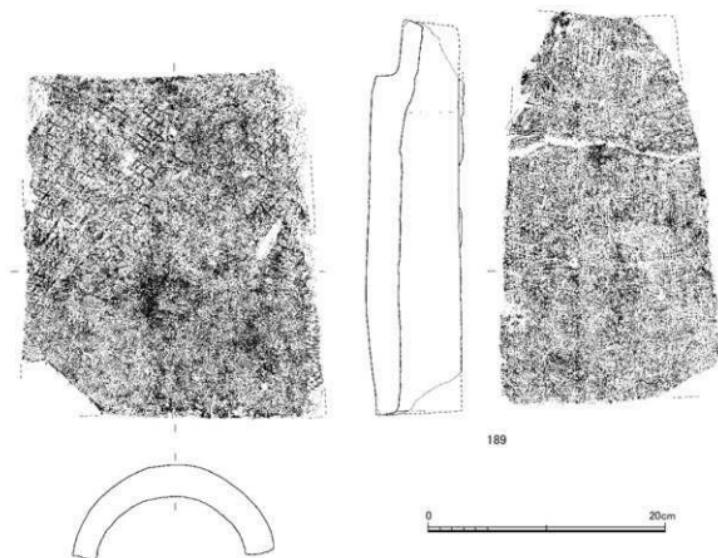


Fig.83 SK15017 出土遺物実測図8 (1/4)

Tab.14 SK15017 出土瓦分類

叩き分類	1	2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa 老		3Ab		3Ac1		
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	
SK15017A									○	○	○	○	○		○	○	○	
SK15017B									○	○							○	
叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A			○								○						○	
SK15017B																		
叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A							○		○	○		○	○	○	○	○		
SK15017B																		
叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文					
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A			○										○					
SK15017B													○					

丸瓦のように大きい弧を描くが、その外面は縄目叩き、内面は糸切り痕跡に布目が重なる。169～177は、平瓦である。172は、瓦一枚の全体がほぼわかる瓦で、長さ約34cm、幅約26.5cm。小口はへらで面取りするが、断面図左側の長辺のみ、内側から三分の一ほど切れ目を入れ、折割っている。178～189は、丸瓦である。178は、薄手の瓦であるが、胎土はきめ細かく精良で、須恵質に焼成される。189は、ほぼ完形品である。長さ約38cm、幅約17cmをはかる。

これらの出土遺物から、9世紀末～10世紀初頭の瓦溜りである。

SK15022 Fig.84, Ph.41

長軸122cm、短軸72cmの小判形を呈した土坑で、検出面からの深さは約30cmをはかる。埋土上半には瓦を主とした廃棄が見られるが、下半部には焼土が残る。本来火を焚いた土坑の跡に、遺物を廃棄したものと思われる。

SK15022 出土遺物 Fig.85・86

190～197は、土師器である。190～

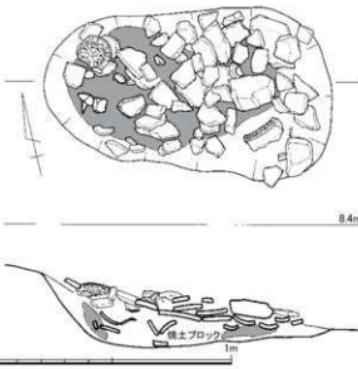


Fig.84 土坑 SK15022 実測図 (1/20)



Ph.41 SK15022 (南より)

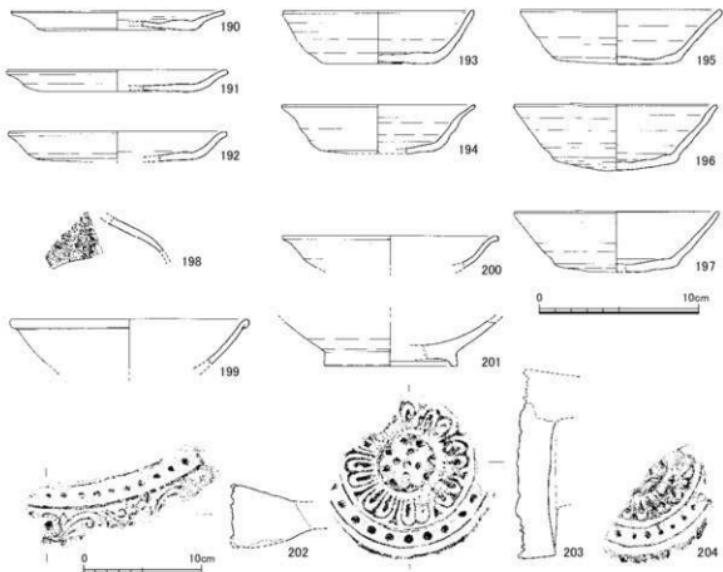


Fig.85 SK15022 出土遺物実測図1 (1/3、202～204-1/4)

Tab.15 SK15022 出土瓦分類

叩き分類	1	2A	2B	2C	3Aa1	3Aa2	3Aa 老	3Ab	3Ac1	3Ac2
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15022		○			○	○		○		

叩き分類	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb1	3Bb2	3Bc	3Bd	3Be	4A	4Ba	4Bb
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15022					○	○					

叩き分類	5A	5B	5C	6A	6B	6C	6D	6E	6F	6G	6H	縄目	無文
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15022											○	○	

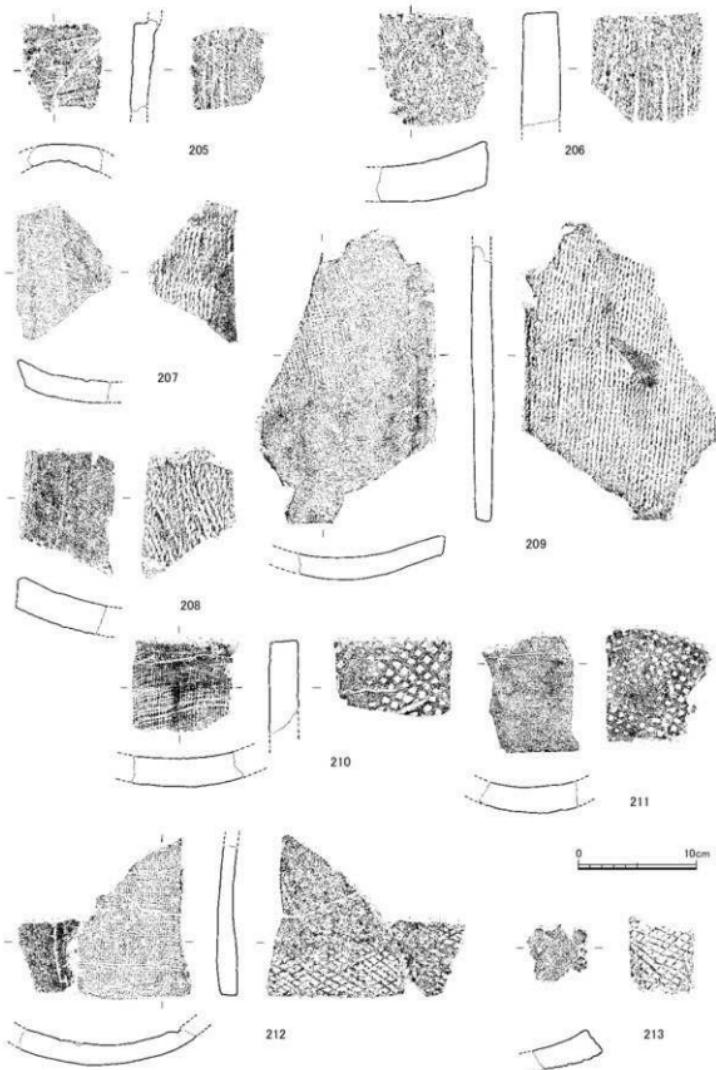


Fig.86 SK15022 出土遺物実測図2 (1/4)

192 は皿で、口径 $13.5 \sim 14.0$ cm をはかる。193 ～ 197 は壺である。口径 $12.0 \sim 12.2$ cm とやや小さめの 193・194 と、 $12.7 \sim 13.0$ cm で大きめの 195 ～ 197 がある。194 は口縁部が外反し、器壁が薄い。

198 は、新羅陶器である。壺の肩部であろう。連続馬蹄形文が印花される。

199 は、白磁である。口縁は小さく折り返して、玉縁に作る。200・201 は、越州窯系青磁の皿と碗である。201 は全面施釉で、高台置付のみ軸を剥いで露胎とする。

202 は、均等唐草文の軒平瓦である。遺存部位は少ないが、瓦に向かって右側の小口は、その上端部分が残っている。203・204 は鴻臚館式軒丸瓦である。205 は、丸瓦の小片である。206 ～ 213 は平瓦である。その他、図示できなかった瓦を含め、Tab.15 に叩き文様による分類を示す。

10 世紀前半の廃棄土坑であろう。

SK15023 Fig.87, Ph.42

長辺約 160 cm、短辺約 150 cm の長方形を呈する土坑で、検出面からの深さは 40 cm 前後をはかる。埋土下半において、比較的大振りな瓦の破片が出土した。

SK15023 出土遺物 Fig.88・89, Ph.43

214 ～ 216 は、越州窯系青磁碗である。体部下位から外底部を露胎とする粗製品である。217 は、

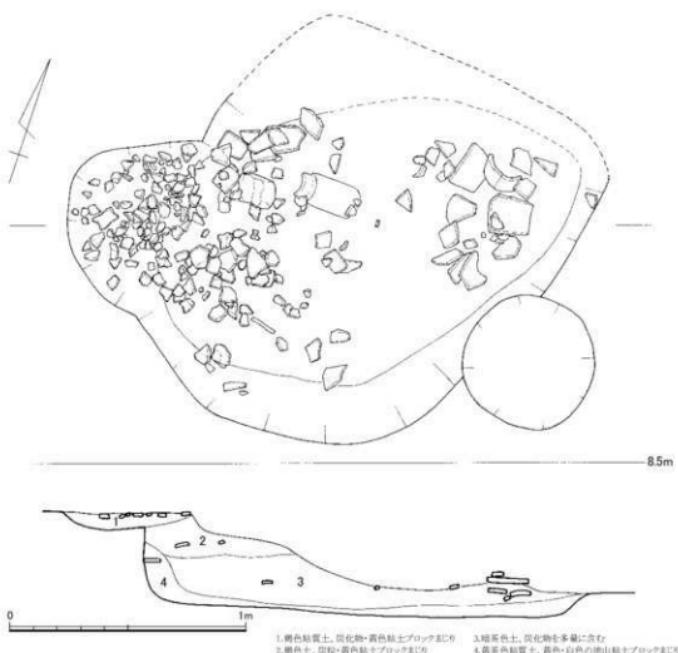
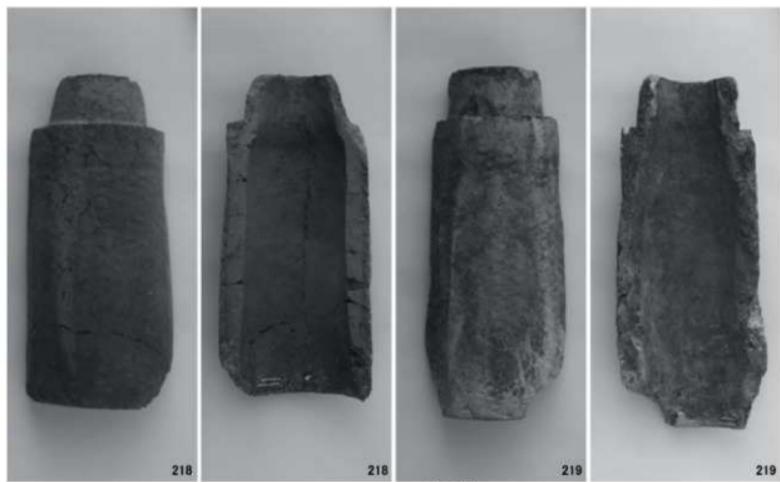


Fig.87 土坑 SK15023 実測図 (1/20)



Ph.42 SK15023 瓦集中部分（東より）



Ph.43 SK15023 出土遺物

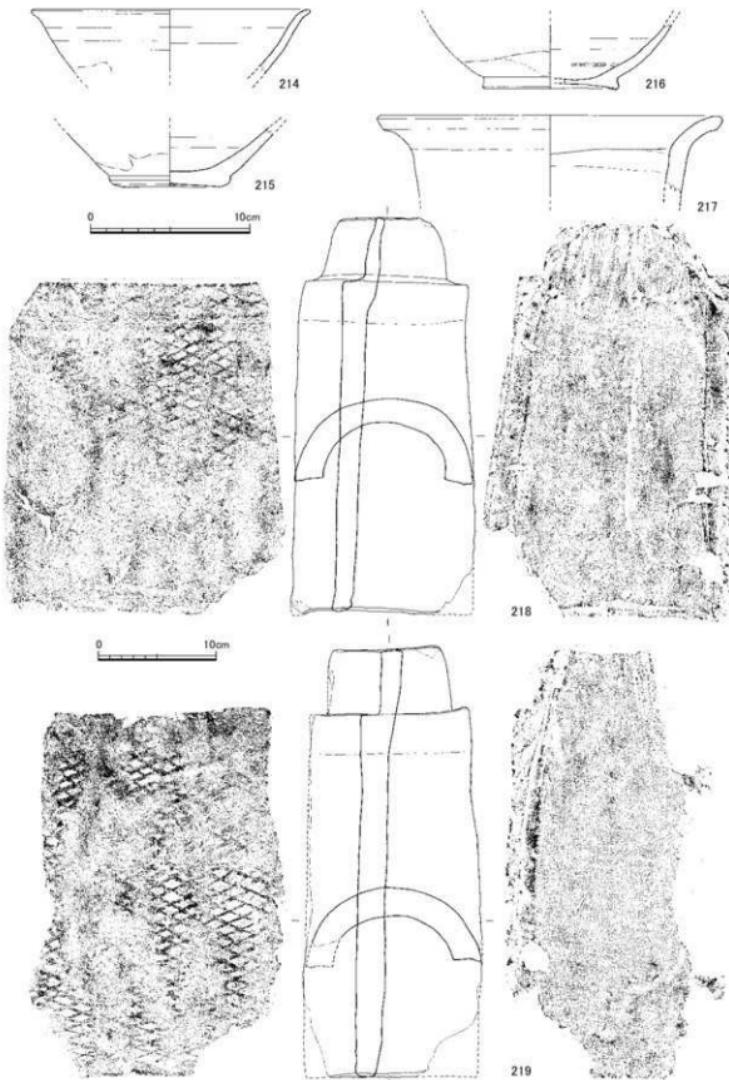


Fig.88 SK15023 出土遺物実測図1 (214 ~ 217・1/3、218・219・1/4)

土師器の甕である。外面は磨滅し調整不明、体部内面は横方向に箇削りする。

218～219は、ほぼ完形品の丸瓦である。218は全長33.0cm、219は36.5cmだが、幅はともに約15cmで、叩き目等の調整も共通する。220～224は平瓦である。瓦の叩き文様としては、縄目・無文・2C・3Aa1・3Aa2・3Aa老司式・3Ab・5A・5Bなどがみられた。

また、埋土には、炭化物や骨片が含まれており、残滓の廃棄をうかがわせる。

時期を限定する資料を欠くが、9世紀から10世紀前半の幅で位置付けられる廃棄土坑であろう。

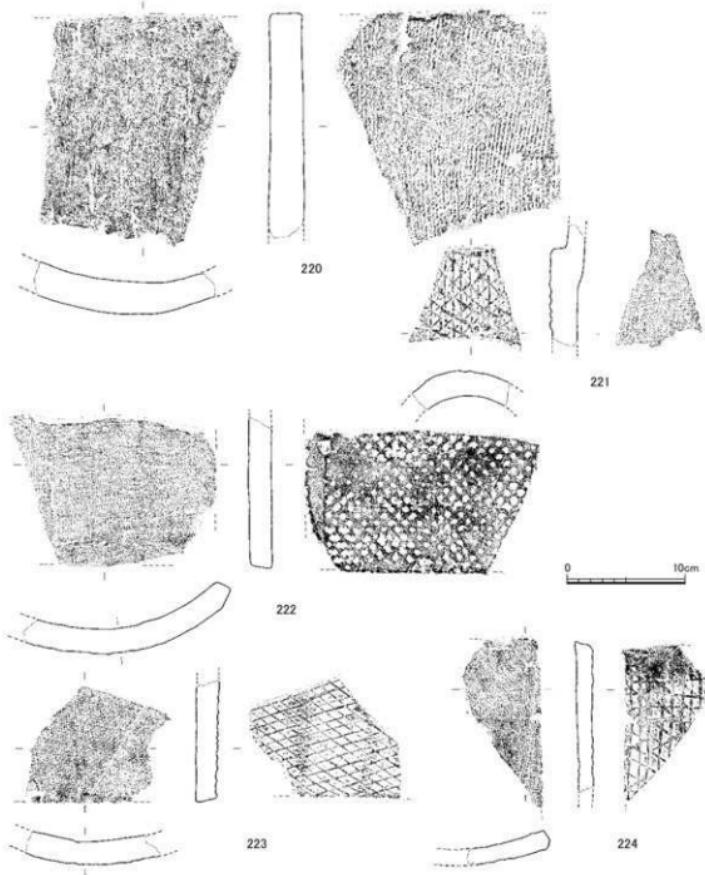


Fig.89 SK15023 出土遺物実測図2 (1/4)

SK15027 Fig.90 ~ 94, Ph.44 ~ 47

SK15027 は、梵鐘鑄造遺構である。

平成 15 年度調査の終盤になって出土し、精査したもので、途中悪天候のため一部が崩壊する状況に陥りながらも、平成 16 年度鴻臚館跡調査研究指導委員会の審議を受けて保存処理の方針が決定し、平成 17 年度で調査と遺構切り取りが終了した。

SK15027 は、直径 270cm、深さ 120cm をはかる円形の土坑である。遺構検出段階では埋土の表面に多数の瓦片・陶磁器片が散乱しており (Ph.44-(1))、大型の廃棄土坑と認識していた。遺構検出面から 40cm ほど掘り下げたあたりで鉢型が輪状に露出したため (Ph.44-(3))、その中央を縱断する形で幅 10 cm ほどの小トレンチを入れたところ、梵鐘鉢型の縦帯部分の沈線が現れ、梵鐘鑄造遺構であるという認識を持った。外型の遺存状況は比較的良好で、池の間以下の外型が、全周の 80% 分ほど遺存していた。しかし、外型の内側を半削して鉢型面の約二分の一をほぼ検出したところで (Ph.45-(1))、豪雨にあい、雨水がたまり完全に水没、外型表面の鉢物土が溶け崩落した (Ph.45-(2))。保存を講じるため、いったん埋め戻し、保存方針が決定した後調査を再開、遺構は型取りしてレプリカを作成した後、切り取り保存した。

梵鐘鑄造遺構としては、円形の土坑の中央に、梵鐘の外型が原位置からややずれた形で、ほぼ直立し

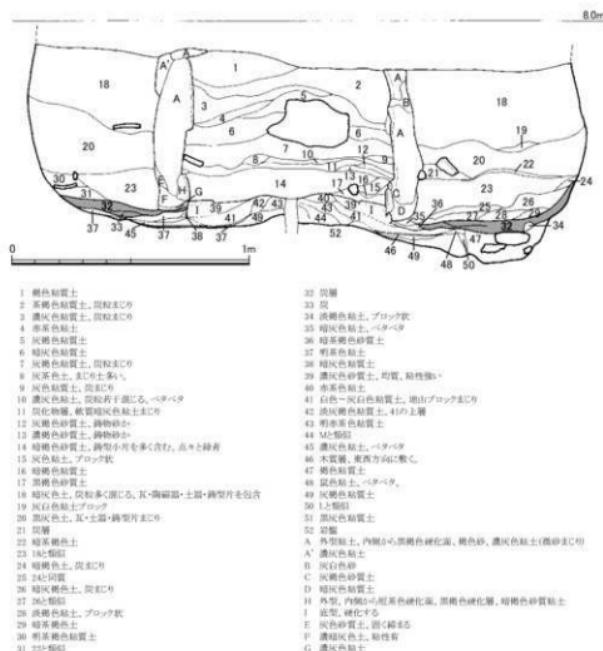


Fig.90 土坑 SK15027 土層実測図 (1/20)

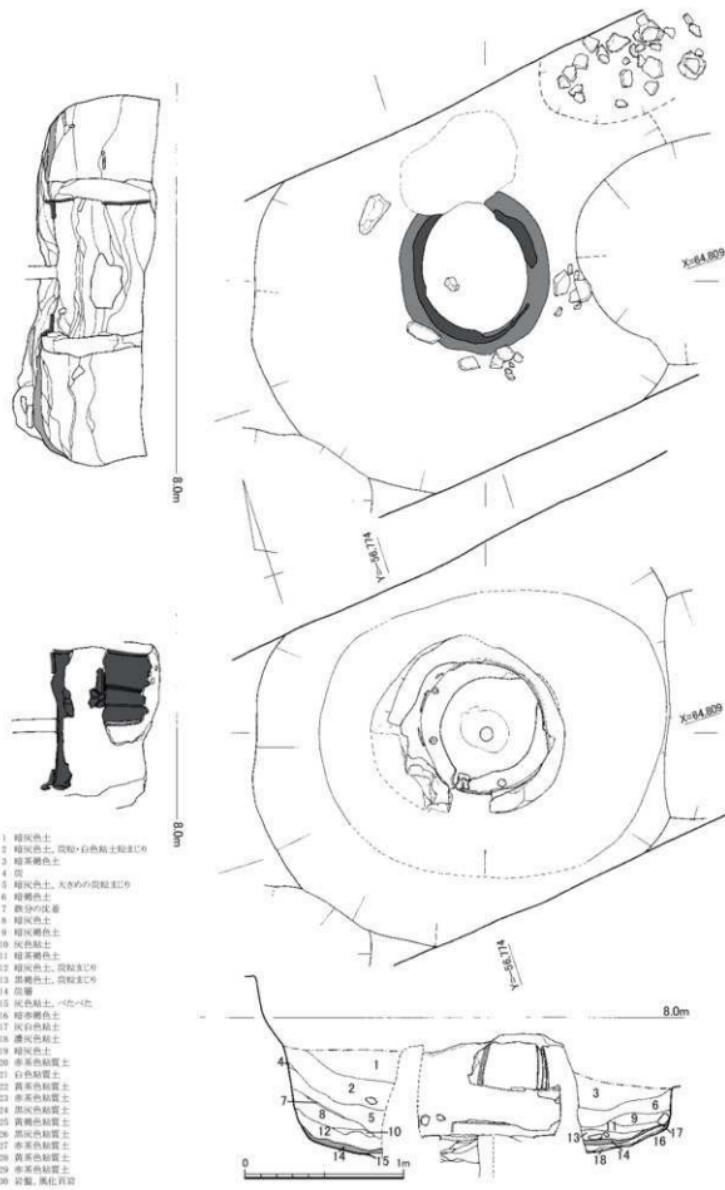


Fig.91 土坑 SK15027 実測図 (1/30)

て出土したもので、基盤と底型は原位置をとどめている。以下、部分ごとに概要を記す。

① 外型

SK15027 を遺構検出面から 40cm ほど掘り下げたあたりで輪状に粘土が露出した。顔をのぞかせた外型の上面はほぼ平坦であり、池の間をふくむ部分の外型の上端とおもわれる。調査が進んだところで、池の



(1) 検出状況（北より）



(2) SK15027B（南より）



(3) 錫型確認状況（南東より）



(4) 池の間錫型上端確認状況（南より）



(5) 下部炭層検出状況（北西より）



(6) 底面溝状造構・土器器腕出土状況（北西より）

間の鋳型はやや内側にずれて、若干落ち込んだ状態であることが判明したが、池の間以下の外型が、一部を欠くとはいへば遺存していたことになる (Fig.90・91)。

鋳型は、その表面に薄く鋳物土を用い、その背面には一様に厚く粘土を貼り付けていた。鋳物土の厚さは 0.5 ~ 0.7cm、粘土の厚さは 15cm をはかる。なお、鋳型表面には水平方向の旋条痕がみとめられる。



(1) 池の間鋳型調査状況（北東より）



(2) 同左部分、雨による崩落後（南より）



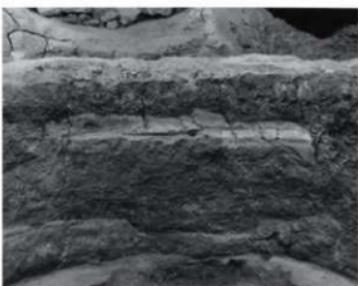
(3) 鋳型遺存状況（南西より）



(4) 池の間・中帯・下帯・底型遺存状況（南西より）



(5) 池の間鋳型の奥から出土した中帯鋳型（西より）



(6) 中帯鋳型（西より）

外型の成形にあたっては、挽き型を回転させて挽き出したことを示す。

② 池の間・縦帶鋳型

全周の約 80% 分が遺存したが、平成 16 年 8 月の悪天候のため、その 2 分の 1 が崩壊した。縦帶は 4ヶ所で、中央の縦線は一条、左右の縦線は二条からなる (Fig.91)。



(1) 底型と下帯鋳型のかみ合せ状況（南西より）



(2) 底型外周の挽き型痕跡（南より）



(3) 定盤（北西より）



(4) 定盤の板痕跡（南より）



(5) 定盤の板痕跡と下型の溝状造構（北より）



(6) 定盤の板痕跡（北より）

③ 中帶

ごく一部が残ったのみで、大半は鋳造後の梵鐘本体について、持ち上がってしまったものと思われる。中帶の下半分程度が遺存しており、原位置を保つ可能性が高い (Ph.45-(4) ~ (6))。

④ 下帶・駒の爪

下帶は、底型からやや外傾気味に立ち上って上部の横線部分まで確認できる (Ph.45-(4))。もとより確実に原形を保っていると思われる部分で、高さ 10cm をはかる。明瞭な駒の爪はなく、若干下端が張り出す程度にとどまる。(Fig.92)

下帶の鋳型は、底型とは直接には強固に組み合わず、下帶鋳型の内側端部が底型の外端に引っかかるように接するのみであった (Ph.46-(1) ~ (2))。

⑤ 底型

外径は 82cm、幅 10.5cm の環状を呈する。表面には、ごく一部だが、緑青が残る。また、丸いくぼみが 30cm 間隔で 4ヶ所に見られる。南西と北東の相対する部分がくぼむように破損しており (Ph.46-(3))、梵鐘の取り出しに際して生じたものと考えたい。旋条痕が認められ、挽き型を回転させて成形したものである。

⑥ 定盤・軸穴

土坑掘り方の床面に、板を敷き、地山粘土を貼り付けて基盤を作る (Fig.90・93、Ph.47)。板を敷いた



(1) 定盤断面



(2) 定盤断面（左）



(3) 定盤断面（右）

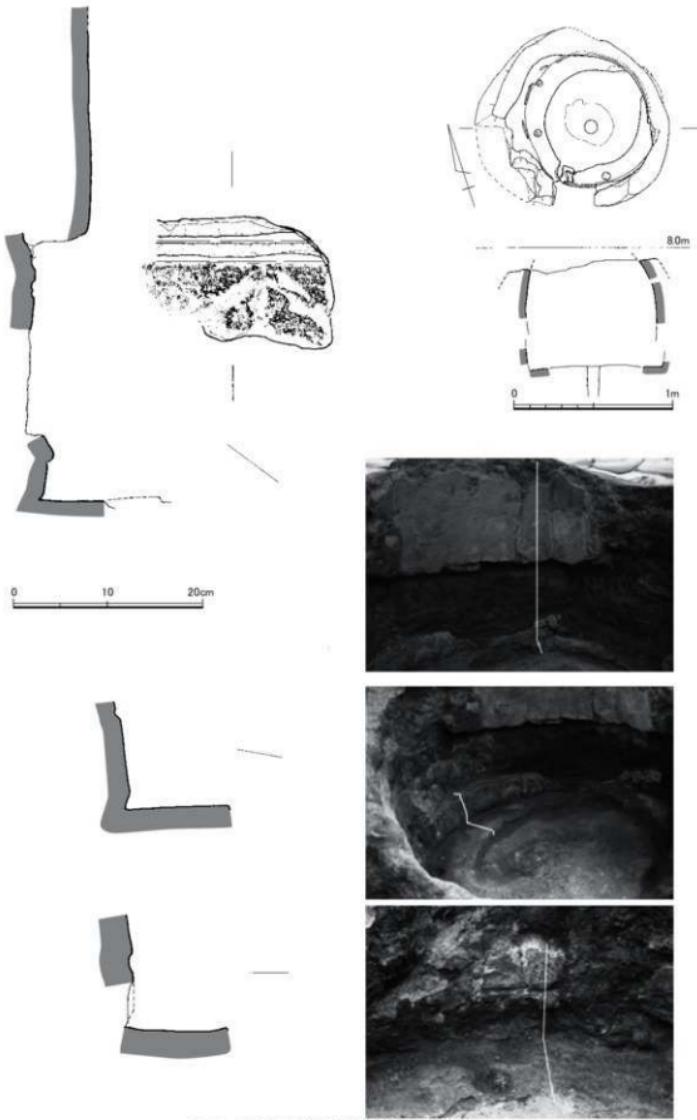


Fig.92 SK15027 鋳型位置関係実測図 (1/5)

理由は、鋳型に流した銅の重量による不等沈下を防ぐためであろうか。

定盤のほぼ中央に、軸穴が深く穿たれている（深さ15cm以上）。当初は、底型や内型を挽き出す際の回転軸を据えた穴と考えたが、底型との位置関係を見ると、底型の中央からは南西にずれていて、軸穴とは考えにくい（Fig.93、Ph.45-(3)）。

⑦ 挖りかた

直径270cmの円形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは、120cmをはかる。

底面には、円形や溝状の掘り込みが見られる（Fig.94）。しかし、これらの掘り込みを覆って、真っ黒の炭層が広がっており（Ph.44-(5)・(6)）、鋳造の操業に関連した掘り込みや掛け木とは考えられない。この掘りかたの下層に見られる炭層は、全体にくまなく広がっている。さらにこの炭層は定盤の上に伸び、外型の下に入り込む。したがって、定盤を据えた後で、外型を置く前に堆積した炭層である。内型のから焼きに由来する炭と思われる。

以上の各部の特徴から、梵鐘铸造に当たっては、大型の円筒形の土坑を掘削し、その底面に板を敷き粘土を盛って、定盤を作ることから始まったと推定できる。底型は、挽き型を回転させて作ったが、回転軸は特にその痕跡が見られないので、目皿を置いて受けたものと思われる。

次に内型を据えるわけだが、内型は全く出土していないので実態は不明である。ただ、底型が環状をしているので、その内縁にかかるように据えたことは想像に難くない。内型を据えた後、空焼きを行ったため掘り方全面を炭層が覆っている。

その後、外型を据える。外型は土坑外で挽き型を用いて成形したものであろう。鋳型の遺存状態から、駒の爪から横帯やや上まで、その上から池の間まで、乳の間以上の三部分、あるいは笠型を加えた四部分からなっていたことが推測される。

外型をかぶせたところで、外型と掘り方の間を埋めたものと思われる。すなわち、前述したように掛け木を用いたとは考えられない。また、外型は、内側にずれて落ちかかる形で残っていた。外側に倒れた鋳型はなかつ

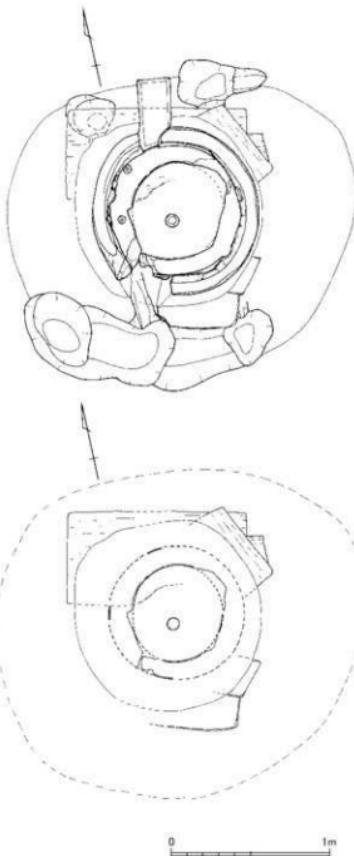


Fig.93 SK15027 定盤実測図 (1/30)

たわけで、これは外型の背面が開放されていなかったことを示している。

中国の華北の民俗事例では、外型背面を埋め込んでしまう事例が紹介されている（吉田晶子・五十川伸矢「鉄物生産の民俗例一覧」『鉄造遺跡研究資料』2003）。この事例では、鐘の原型から外型を作った後、外型にあわせて内型を作り、その表面を鐘の厚さ分割りこんで内型を成形する方法を取るが（込削り中子式）、内型を支持するために内部に鉄芯が通され、基盤まで突き刺さっている。このように内型に通

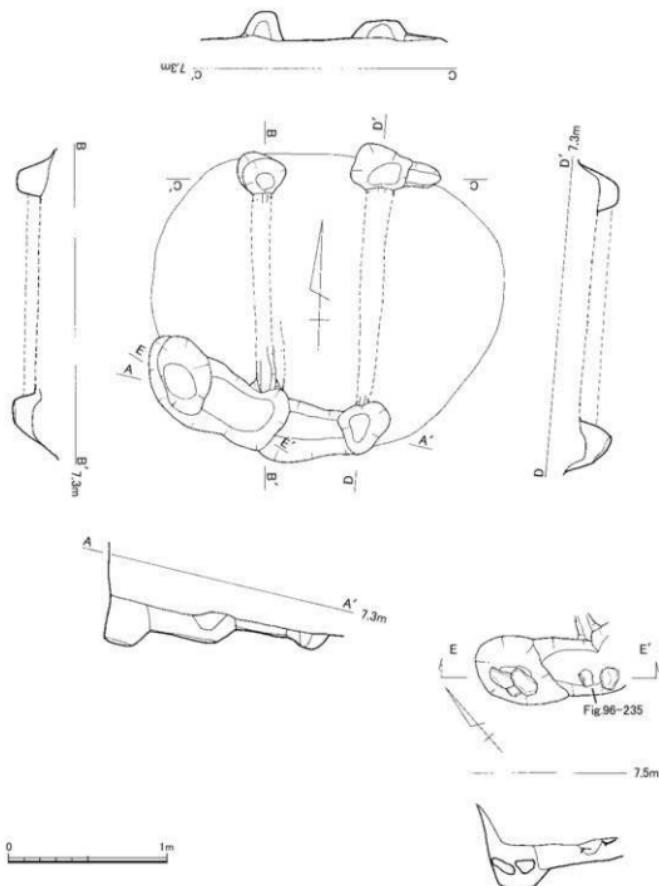


Fig.94 SK15027 床面実測図 (1/30)

した芯の痕跡であれば、必ずしも底型の中心に穿たれている必要もないわけで、SK15027 の定盤に見られた細く深い堅穴の説明もつく。

梵鐘の取り出し方法であるが、最初に土坑を検出した時点では、外型はまったく姿を見せていなかった。鋳型片や溶解炉片が炭混じりの土に散らばっていた状態で、40cmほど掘り下げたあたりで輪状に外型の粘土が顔を出した。この点から見て、笠型と乳の間の鋳型をはずした後、出来上がった梵鐘をほぼ真上に引き上げたものと思われる。

この際、前後に揃さぶりつつ引き上げたようだ、底型の相対する二ヶ所がくぼむように破損している点や外型が正円ではなく若干楕円形を呈している点は、このことを示すものであろう。

なお、遺存する鋳型から想定される梵鐘は、底径（駒の爪の外径）84cm、駒の爪は突出が少なく下端が張り出す程度で下帯となり、下帯の高さ約10cm、遺存部位から欠失部を推定して、草の間の高さは10cm、中帯は幅約20cm、中帯から池の間の鋳型継ぎ目までの間は欠失して不明、池の間は下部の鋳型継ぎ目から上部の鋳型継ぎ目の間がほぼ遺存し高さ35cm、それから乳の間、上帯、笠型、竜頭を欠失する。以上から遺存部位は梵鐘下半分の80cm程度で、そこから推定して、総高は150cmにせまる大型の梵鐘であったと思われる。

SK15027出土遺物 Fig.95～107, Ph.48～50

225は、保存処理の過程で遭構から切りとて取り上げた池の間の外型である。二ヶ所の縦帶が見られる。縦帶は中央が一条、左右が二条の縦線からなる。226は、ふいごの羽口片である。溶解炉に挿入された部分の破片であり、図の右二分の一ほどにベッタリと溶融した銅が付着する（巻頭図版3-(4)）。図の

Tab.16 SK15027 出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa 老		3Ab		3Ac1	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
掘りかいた			○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
掘りかいた上層									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
最下部・炭層下									○	○					○	○	○	○
鋳型内埋土																		

叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
掘りかいた																		○
掘りかいた上層																		
最下部・炭層下																		
鋳型内埋土																		

叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
掘りかいた									○	○	○				○			○
掘りかいた上層									○	○	○			○				
最下部・炭層下									○	○	○			○				
鋳型内埋土																		

叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		繩目		無文					
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
掘りかいた											○		○	○				
掘りかいた上層											○	○	○	○				
最下部・炭層下									○				○	○				
鋳型内埋土													○	○				

下面是平坦であり、据えられた溶解炉の基部付近に装着されたことが窺われる。227～229は、溶解炉の炉壁片である。

230～248は、土師器である。230～234は杯である。235～248は、碗である。235は、掘りかたの掛け木の掘り込みの底で出土したものである (Fig.94)。249・250は、黒色土器A類碗である。

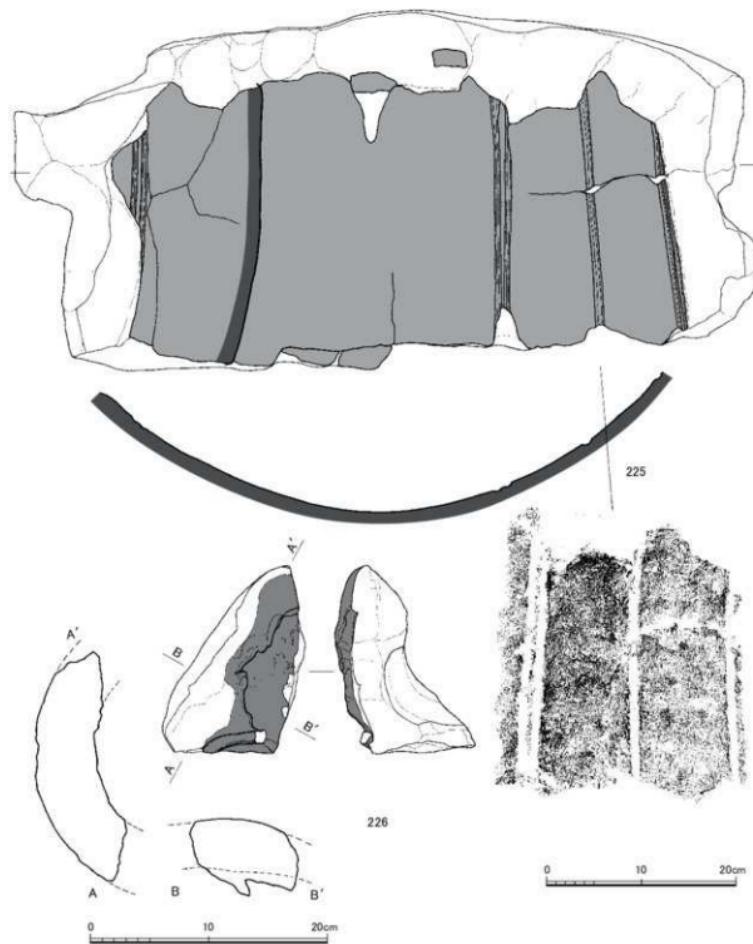


Fig.95 SK15027 出土遺物実測図 1 (225…1/5、226…1/4)



226



226



227



227



228



229

Ph.48 SK15027 出土遺物 1

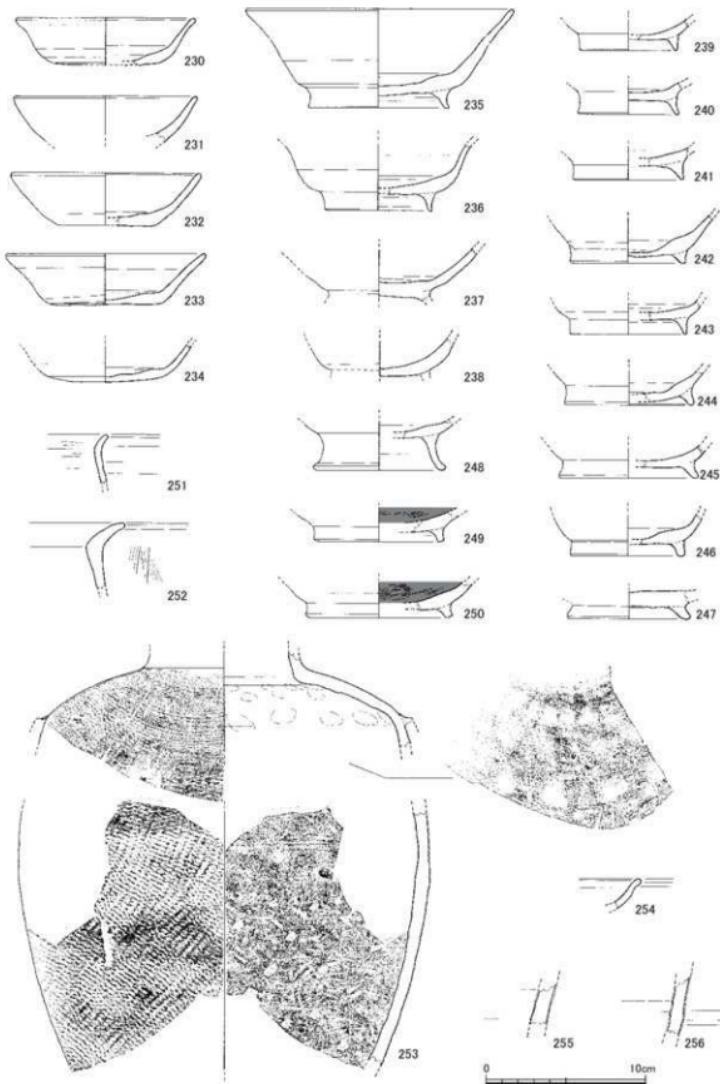


Fig.96 SK15027 出土遺物実測図 2 (1/3)

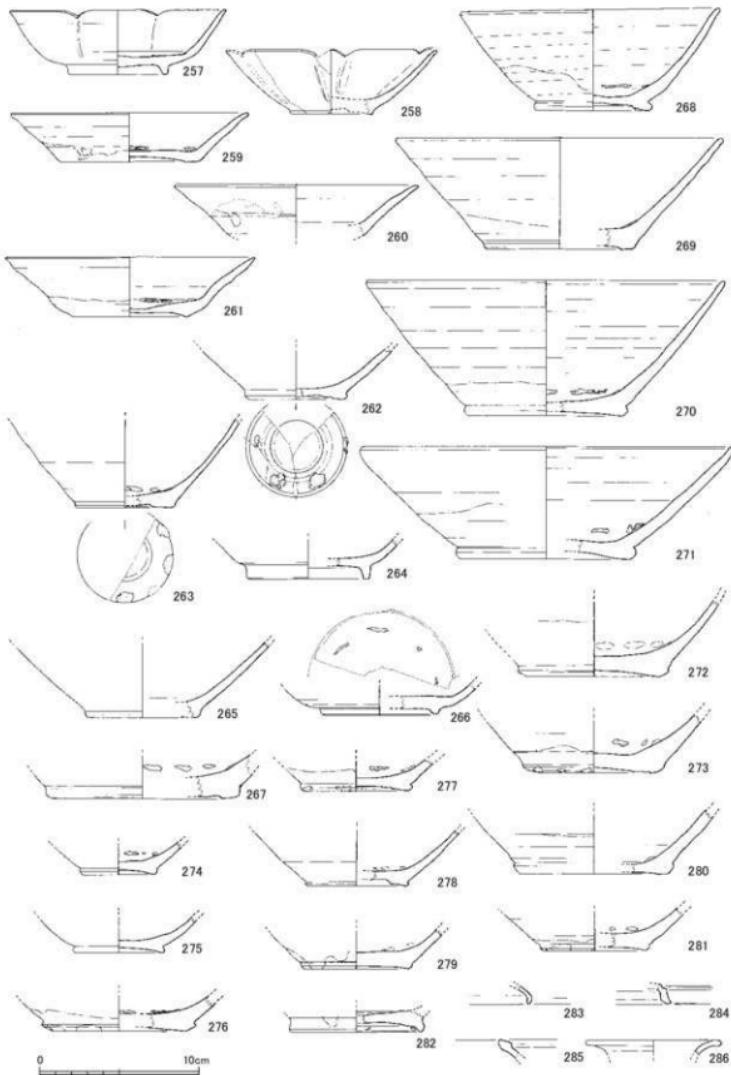


Fig.97 SK15027 出土遺物実測図 3 (1/3)

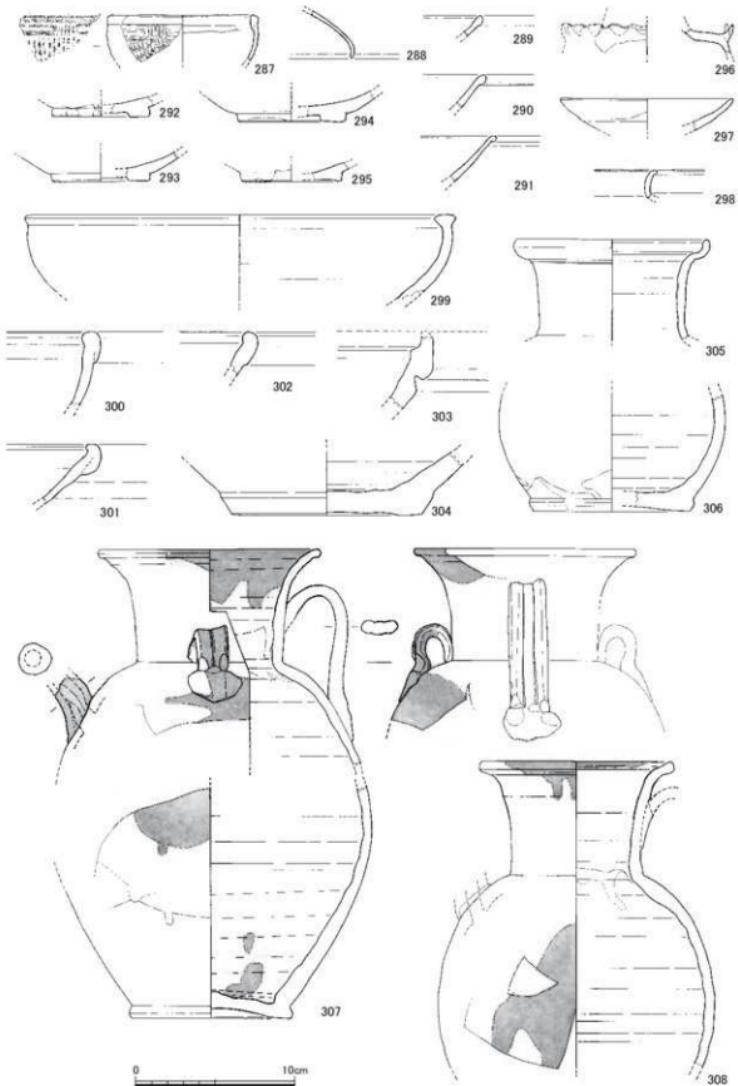
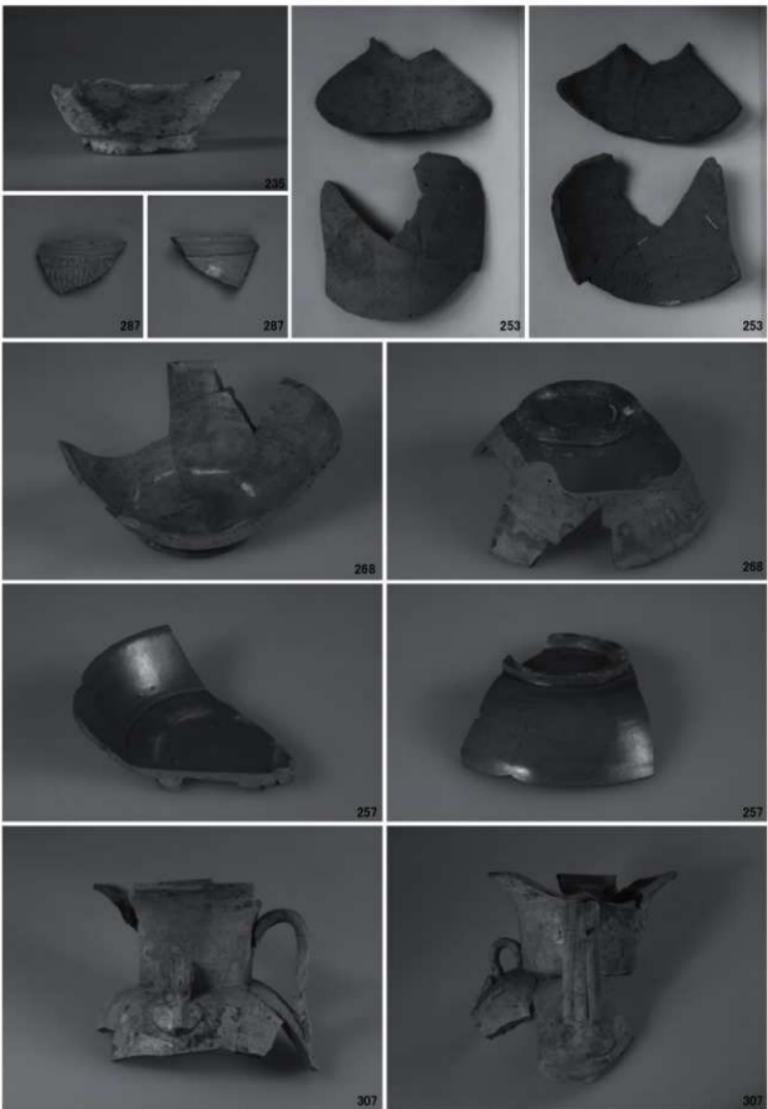


Fig.98 SK15027 出土遺物実測図 4 (1/3)



Ph.49 SK15027 出土遺物2

内面はへら磨き、外面は横なで調整する。251・252は、土師器の甕である。253は、新羅陶器の壺である。外面は細かい格子叩き、内面は同心円叩きをなで消す。縦耳の痕跡が残る。254は、国産緑釉陶器の皿である。須恵質の胎に、濃緑色の釉が薄くかかる。長門産と思われる。255・256は、イスラム陶器壺の小片である。イスラム陶器では、もう一片、小片が出土している（巻頭図版3-(2)）。

257～286は、越州窯系青磁である。257・258・262～267は、全面施釉の精製品である。259～261・268～281は、体部下位から外底部を露胎とする粗製品である。283・284は合子の蓋、285・286は、壺の口縁である。287～295は、白磁である。287は、型作りの小碗である。口縁部は、内側に折り返して、肥厚する。288は、合子の蓋である。全面施釉で口縁部のみ釉をふき取って露胎とする。296～309は、陶器である。296は、香炉の蓋の破片である。Fig.63-46に類する器形の天井部付近に当たる。300～305は、無釉陶器である。306～308は、白化粧した褐釉陶器である。307・308は、白化粧に透明釉をかけ、褐色釉を流しかける。309は、大型甕である。外面は平行叩き目の上から、褐色釉に鉄漿を流れ掛けする。

310は、滑石製の石鍋である。成型は丁寧で、口縁やや下に鈎状の突帯が巡る。器面は、削り目が見えないほどに平滑に仕上げる。石鍋の編年では、縦耳から鈎状という変遷が説かれるが、福岡市域では、海ノ中道遺跡や湧臘館跡において、縦耳の石鍋が先行する鈎状突帯の石鍋が出土している。型式学的な検討は今後の課題であるが、出土事例として注目する必要がある。

311～361は瓦である。311は、均當唐草文軒平瓦である。312は、「伊貴作瓦」銘の平瓦である。313は、瓦磚である。厚さ、6.3 cm。314は、道具瓦であろう。板状の平坦面に、粘土紐を貼り付けて文様を作る。全形および意匠は不明。315は、熨斗瓦である。幅約 10.8 cm。316～327は丸瓦、328～361は平瓦である。叩き文様による瓦の分類を、Tab.16に示す。

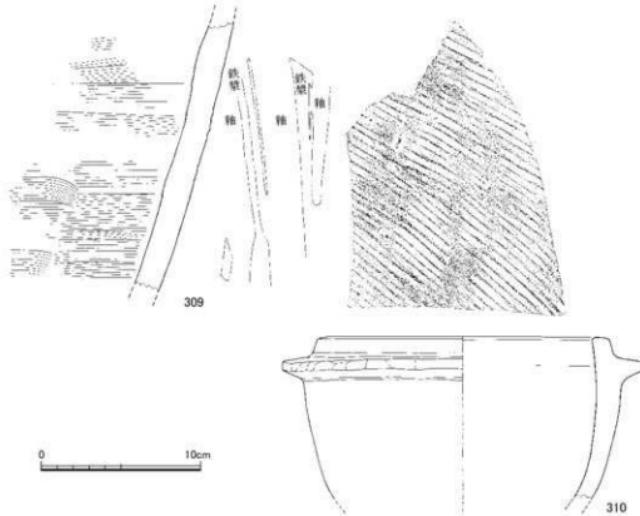


Fig.99 SK15027 出土遺物実測図 5 (1/3)

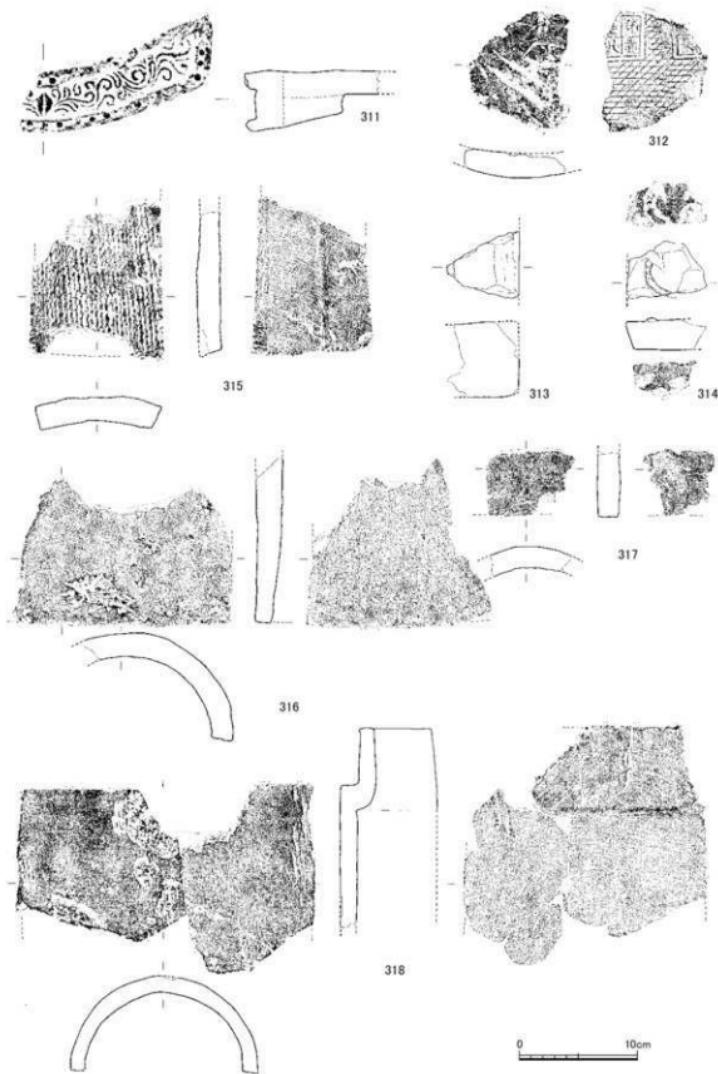


Fig.100 SK15027 出土遺物実測図 6 (1/4)

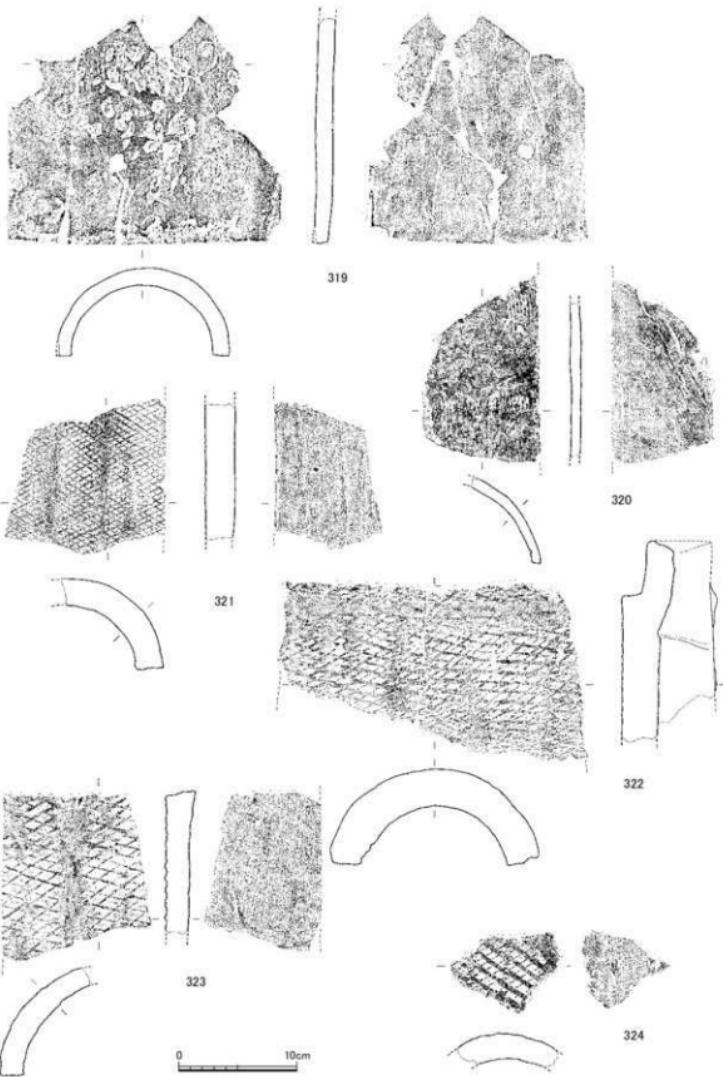


Fig.101 SK15027 出土遺物実測図 7 (1/4)

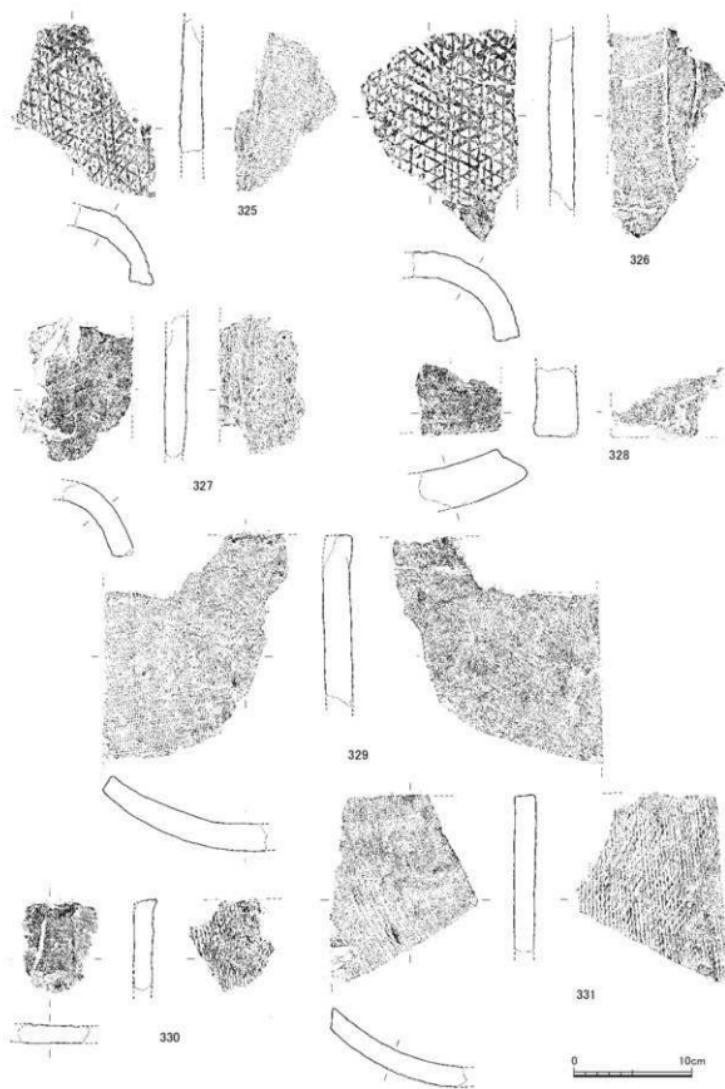


Fig.102 SK15027 出土遺物実測図 8 (1/4)

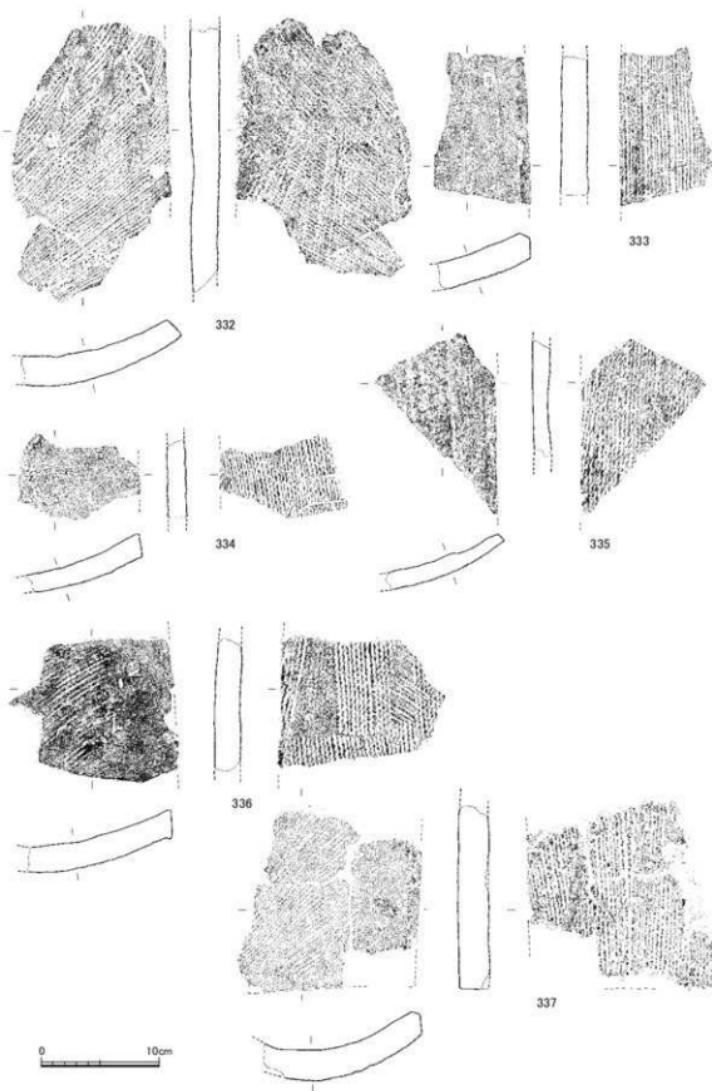


Fig.103 SK15027 出土遺物実測図 9 (1/4)

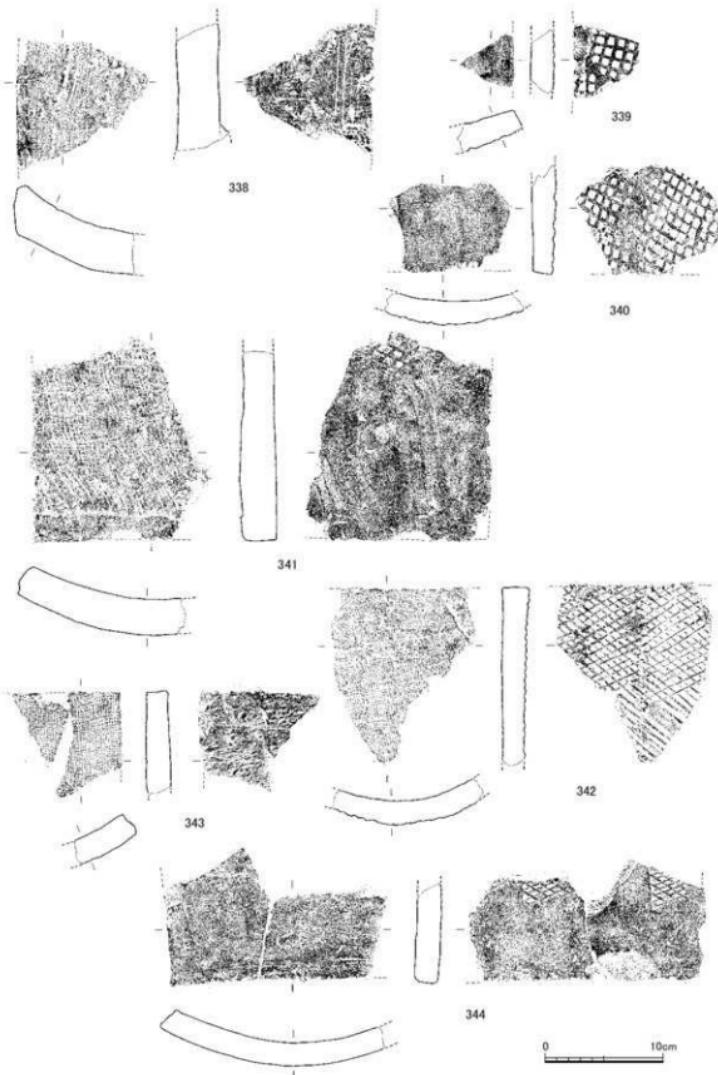


Fig.104 SK15027 出土遺物実測図 10 (1/4)

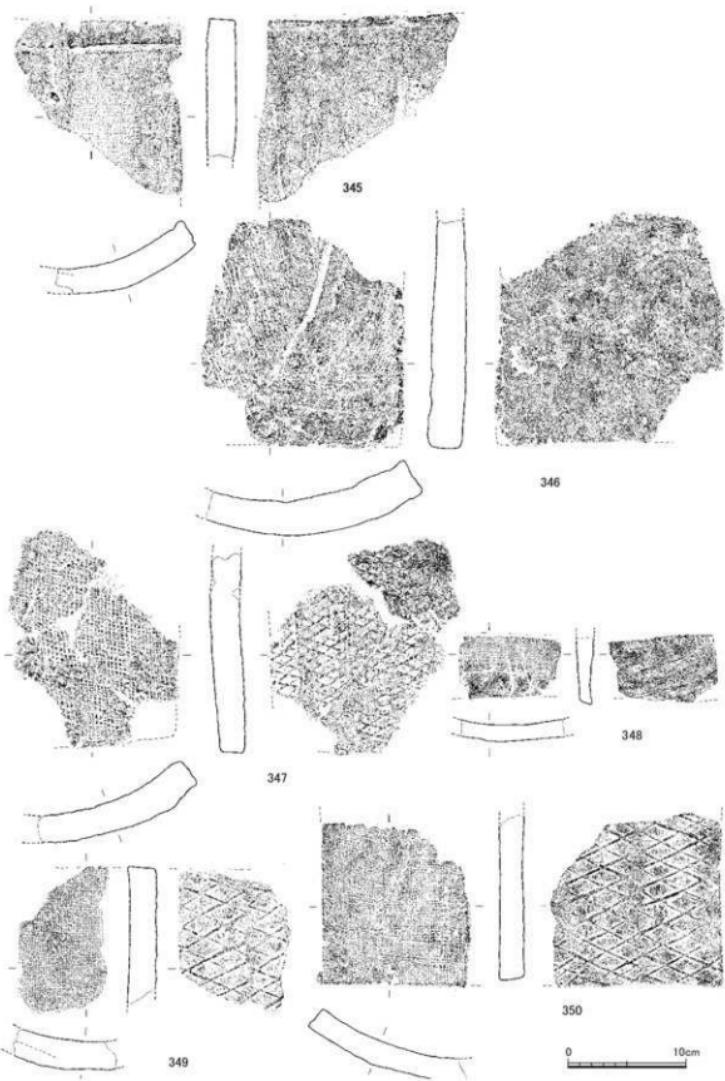


Fig.105 SK15027 出土遺物実測図 11 (1/4)

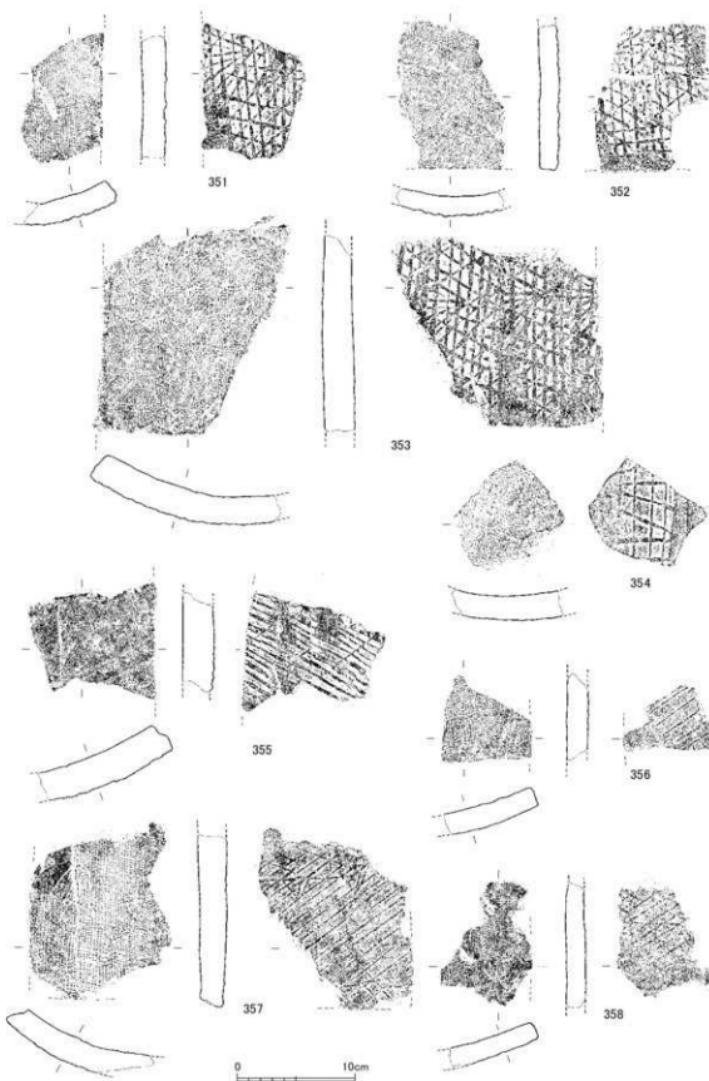


Fig.106 SK15027 出土遺物実測図 12 (1/4)

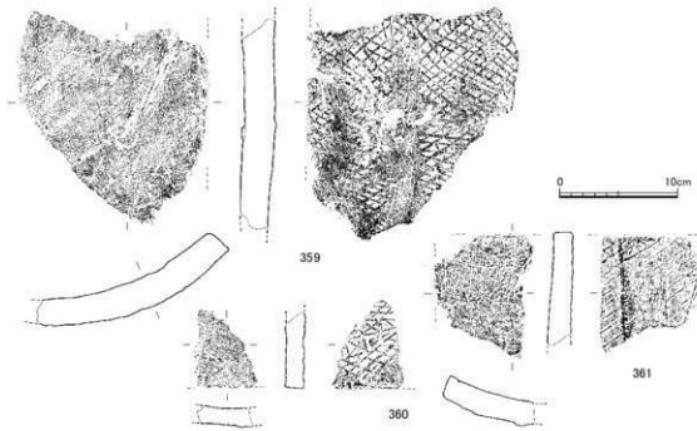


Fig.107 SK15027 出土遺物実測図 13 (1/4)

SK15027 の時期比定については、次節の「小結」で検討するが、9世紀前半に掛木を用いた梵鐘鋳造がなされ、10世紀前半ころに土坑を再利用して鋳造を行ない、鋳型が残されたものと考える。

なお、大雨による冠水で鋳型面が流れ落ちたことから、さらなる崩壊を防ぎ、遺構の現況を保存するため、遺存状況の完全な記録保存、遺存した鋳型の保護、遺構の切り取りを実施することとした。まず、掘方埋土の東側半分を残した状態で、鋳型面を検出して型取りし、レプリカを作成した。ついで、埋土を振り上げつつ、池の間、中帶の鋳型取り上げを行った。下帯鋳型の上端まで取り除いたところで、SK15027から西側にかけて約 200 mについて追加調査を実施(23次調査グリッド7)、SK15027 の周囲 4.6 × 3.0 m を SK15027 の基底面以下まで掘削、鋳造遺構定盤部分を FRP で保護した上で定盤の 30 cmほど下に鉄板を敷き込み、定盤中央で半切する形で、2分割して取り上げを行った。

SK15027B Ph.44-(1)・(2)

梵鐘鋳造遺構 SK15027 を切る土坑である。当初 SK15027 と合わせて単一の遺構と考えたが、遺物の出土状況、埋土の堆積状況から切り合い関係が判明した。ただし、SK15027 とは接合できる遺物もあり、大きな時期差はないものと考えられる。また、東側では、SK15028 に切られる。

SK15027B出土遺物 Fig.108

362 は、土師器の小蓋である。手捏ね成型。363 は新羅陶器の蓋である。天井部に連続刺突文が垂下する。364 は、須恵器壺の頸部である。

365・366 は、越州窯系青磁碗である。体部下位から外底部は、露胎となる。二次的に火熱を受けており、釉は荒れる。366においては、目土を落とさず、大きく盛り上がって残っている。

367 は丸瓦、368・369 は平瓦である。367・369 は、格子目叩きである。368 は、上面は布目、下面はコピキ底に網目叩き痕が重なる。

瓦・初期貿易陶磁器・土師器・獸骨などを廃棄した土坑で、10世紀前半代に当たれよう。

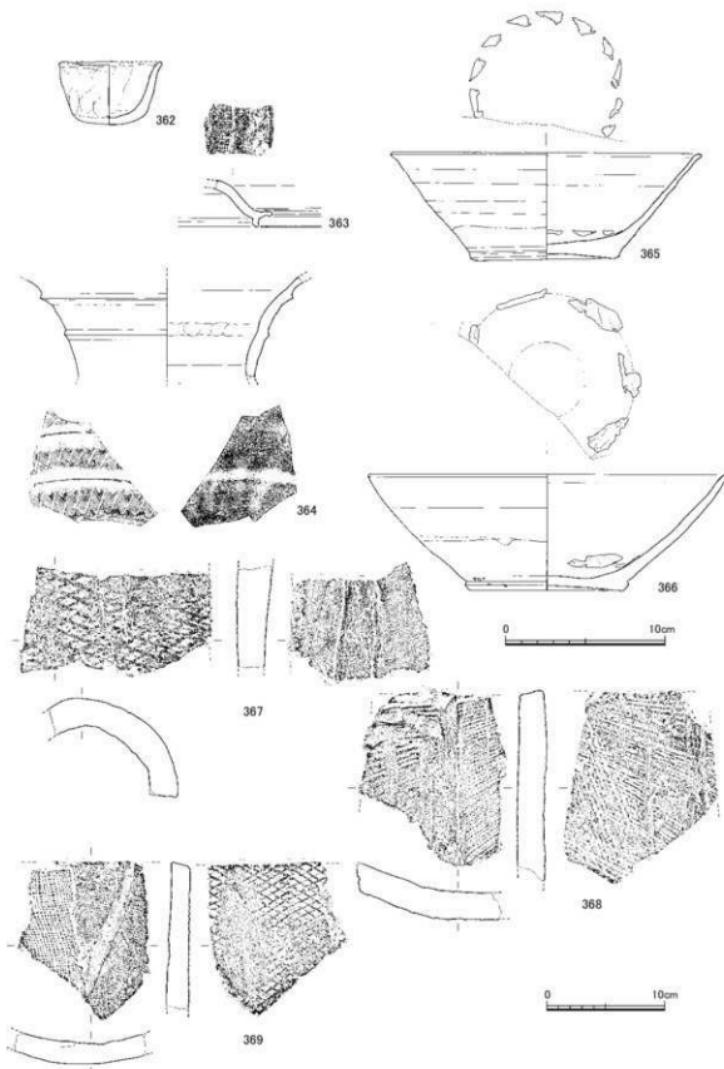


Fig.108 SK15027B 出土遺物実測図 (1/3、367～369…1/4)

SK15028 Fig.109, Ph.50

SK15027Bを切る円形土坑である。埋土中には、二層にわたって炭・灰層が広がっていた。上層の炭層は、土坑埋土のほぼ中位をほぼ全面に広がって検出された。炭層中には無作為な方向で繊維状の目が認められ、半ば炭化した藁束を不規則に投棄したものと考えられる。炭層の直下からは、びつりと瓦・陶器が出土した。下層の炭層は、遺物層の下で部分的に見られたものである。また、遺物にまじって獸骨が含まれるなど、食物残滓を廃棄した様子が認められた。

なお、実測図の最下段平面図に見られる疊群は、SK15028床面直下の造成土中から出土したもので、SK15028に伴うものではない。この疊群のさらに下層、鴻臚館の造成土中から石棺蓋石が出土したことは、すでに述べたところである（p.80）

SK15028出土遺物 Fig.110～118

370～383は、土師器である。370～373は、杯である。374～383は、椀である。高台が細く直立する377・378・381、細くて高い高台が外方に踏ん張る379・380、低くて厚みがある断面三角形の高台を持つ382・383の三タイプが見られる。

384・385は、黒色土器A類椀である。384は丸みがある深碗で、内外面とも密に笠磨きする。385は、体部下位の破片であるが、丸みは弱いようで、高台径は広い。内面は笠磨き、外面は横なで調整する。

386は、土師器の壺である。387は、須恵器の甕口縁である。

388は、土師質の紡錘車である。推定復元径5.0cm。

389～409は、越州窯系青磁である。389は皿、390～404は碗である。389～399は、全面施釉の精製品である。400～404は、体部下

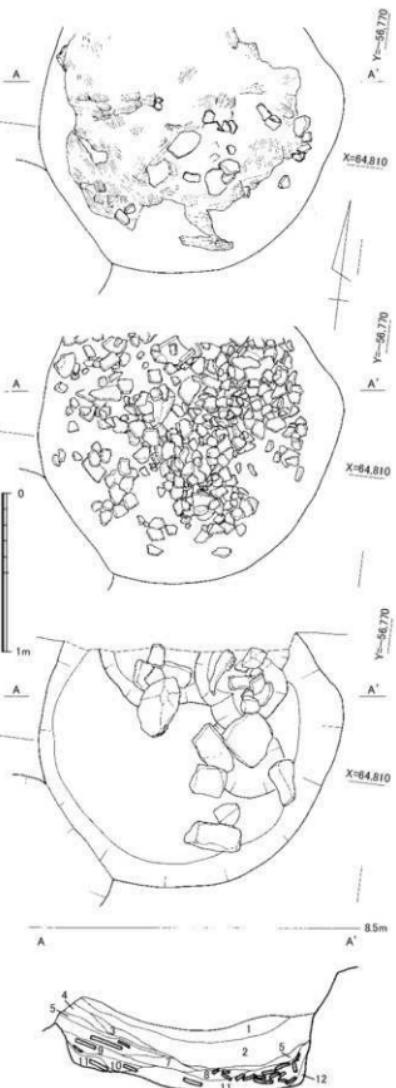


Fig.109 土坑 SK15028 実測図 (1/30)

- 1 黄色土、塊山粘土小ブロック混じり
- 2 稲灰白色土、炭灰土
- 3 稲灰土
- 4 稲灰土
- 5 砂質土
- 6 砂質土
- 7 鹿児島粘土、ペタペタ
- 8 黄色粘土土
- 9 黄色粘土土、油煙土同質
- 10 砂質
- 11 鹿児島粘土、ペタペタ
- 12 灰褐色粘土

位から外底部を露胎とする粗製品である。393・399・403には、白砂の目土が塊状に残っており、商品化が完了する前の未使用品と考えられる。405は、鉢である。目はほとんど落とされ、露胎になっている。406～408は、壺である。409は粗製青磁の鉢である。白化粧土が施されている。410～412は、白磁である。410は壺の口縁部であろう。411・412は碗である。413～417は、陶器である。



(1) 挖出状況（東より）



(2) 上部炭層（北より）



(3) 下部炭層（北より）



(4) 遺物出土状況（北より）



(5) 完成状況（南より）



(6) 土層断面（南より）

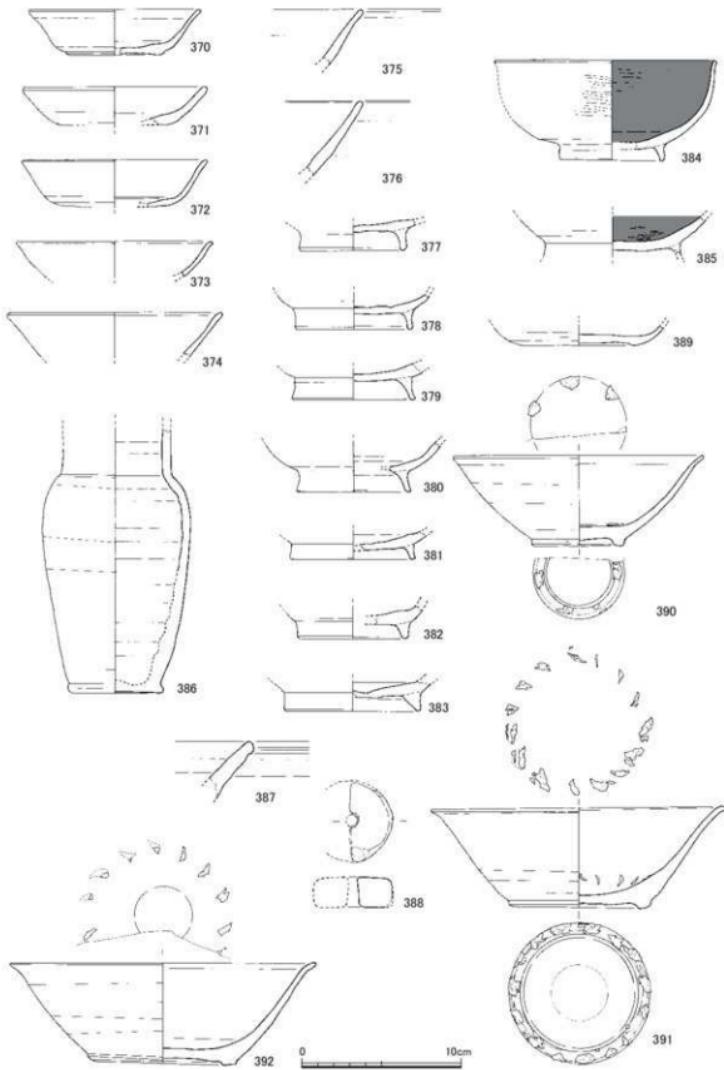


Fig.110 SK15028 出土遺物実測図 1 (1/3)

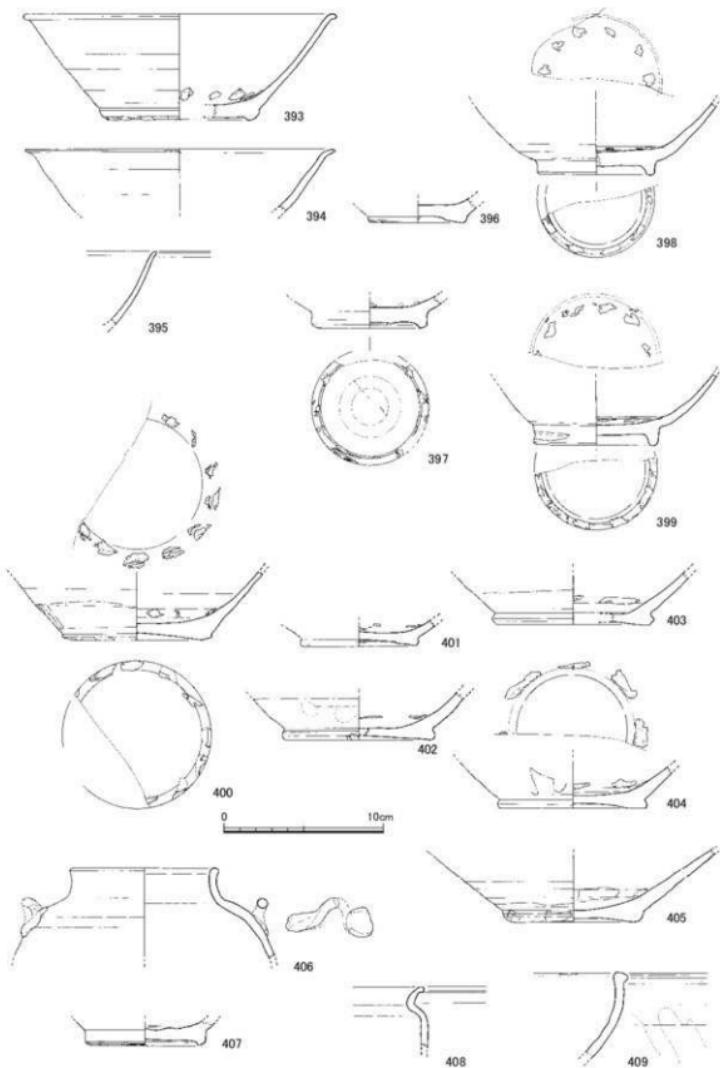
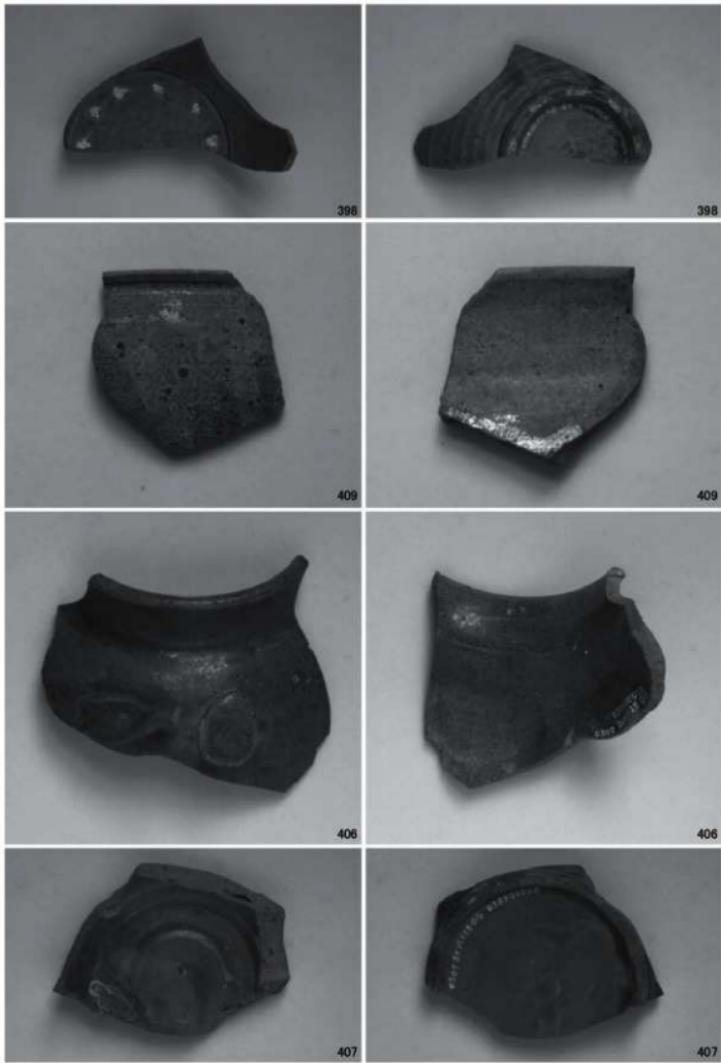


Fig.111 SK15028 出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph.51 SK15028 出土遺物1

413・414は無釉陶器の捏ね鉢、415・416は褐釉陶器の壺である。体部下位は露胎となる。418は、甕の底部と思われる。内底には軸がゆかっていた様だが、白色に変質して剥げ落ちている。

418～454は、瓦である。418～420は鴻臚館式軒丸瓦、421・422は単弁軒丸瓦、423は鴻臚館式軒平瓦である。423の珠文帯から上面は粘土の縦ぎ目で剥離しており、接合面に刻まれた櫛目を見ることができる。424～436は、丸瓦である。424・425は縄目叩きを丁寧になで消す。426・427は平行叩きの上を粗く削る。437～454は平瓦である。叩き目による分類をTab.17に示す。441-2B、426・427-2C、428・432-3Aa1、429～431・442・444-3Aa2、437-3Aa老、443・445-3Ab、433～435-3Ac1、435・446～448-5B、450-6A、451-6C、452・453-6H、438・439-縄目、440-無文に分類される。

土師器・黒色土器A類は、全体としては10世紀前半でおさまるが、384に見られる内外面に密に乾磨きを施す器面調整は、10世紀後半以降に一般化する特徴であり、早くとも10世紀中頃の廐棄土坑と考えるべきだろう。

Tab.17 SK15028 出土瓦分類

叩き分類	1	2A	2B	2C	3Aa1	3Aa2	3Aa老	3Ab	3Ac1	3Ac2
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15028		○	○	○	○	○	○	○	○	○

叩き分類	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb1	3Bb2	3Bc	3Bd	3Be	4A	4Ba	4Bb
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15028								○			

叩き分類	5A	5B	5C	6A	6B	6C	6D	6E	6F	6G	6H	縄目	無文
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15028	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○

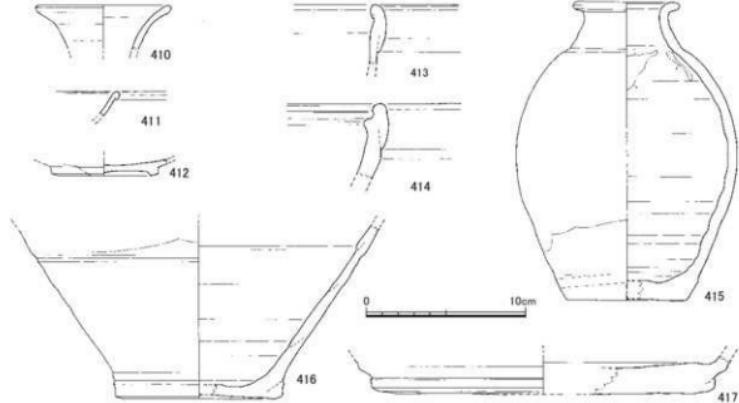


Fig.112 SK15028 出土遺物実測図 3 (1/3)

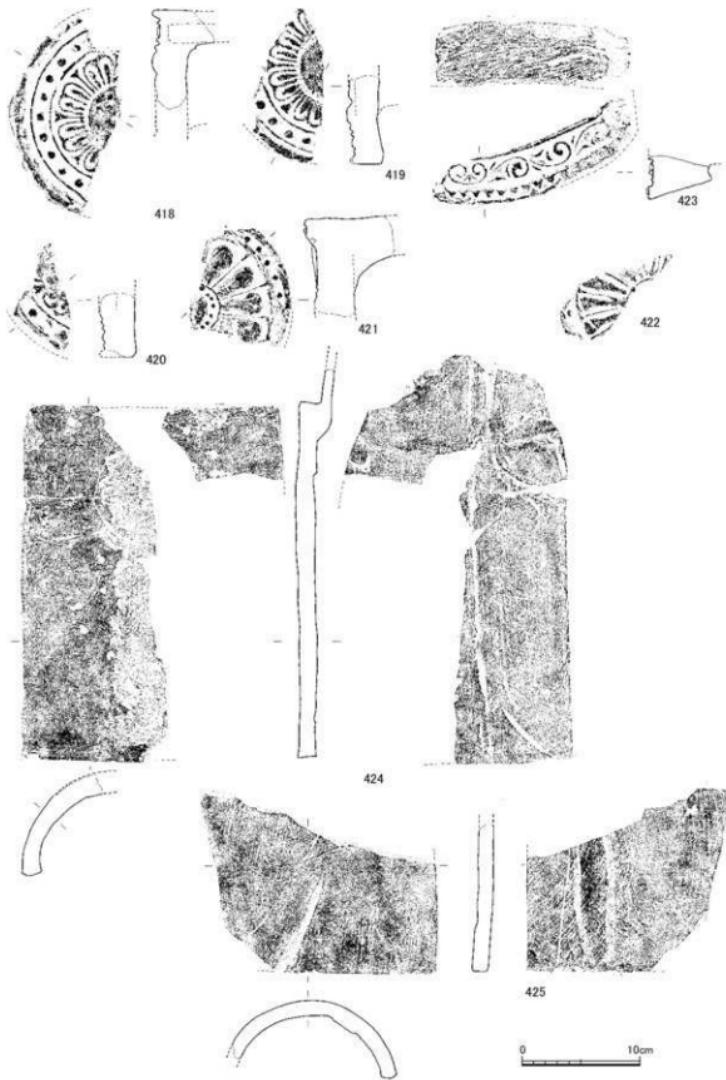
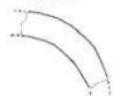


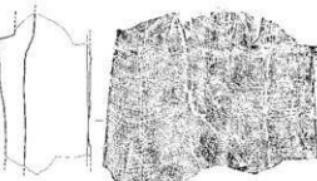
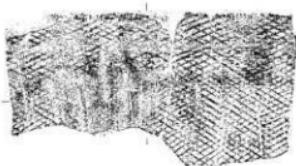
Fig.113 SK15028 出土遺物実測図 4 (1/4)



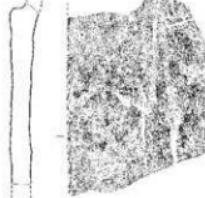
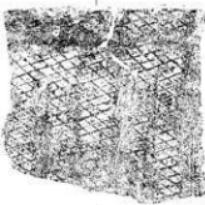
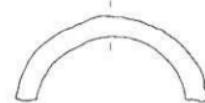
426



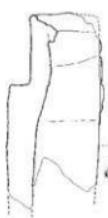
427



428



429



430

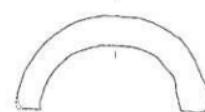


Fig.114 SK15028 出土遺物実測図 5 (1/4)

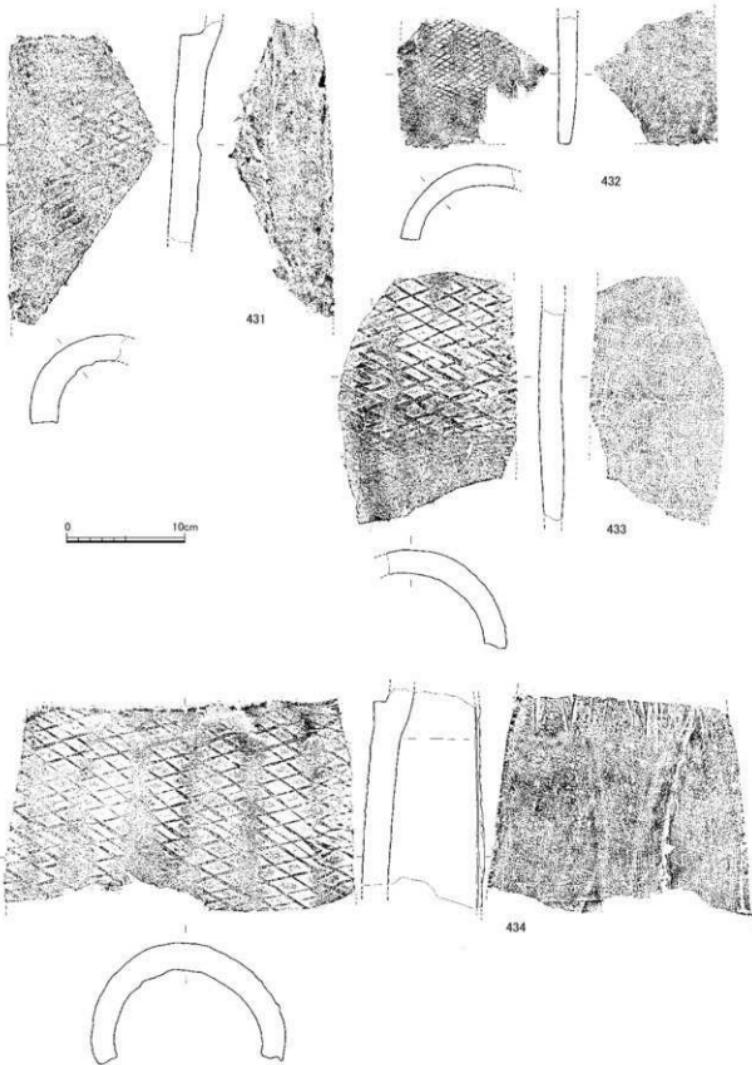


Fig.115 SK15028 出土遺物実測図 6 (1/4)

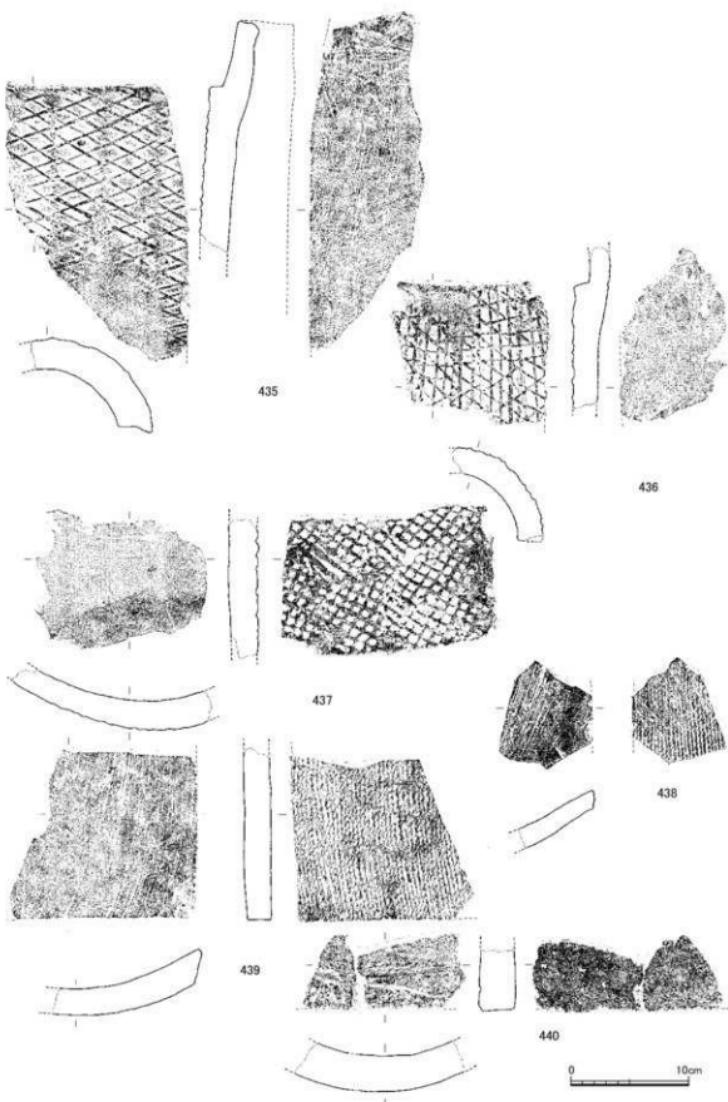


Fig.116 SK15028 出土遺物実測図 7 (1/4)

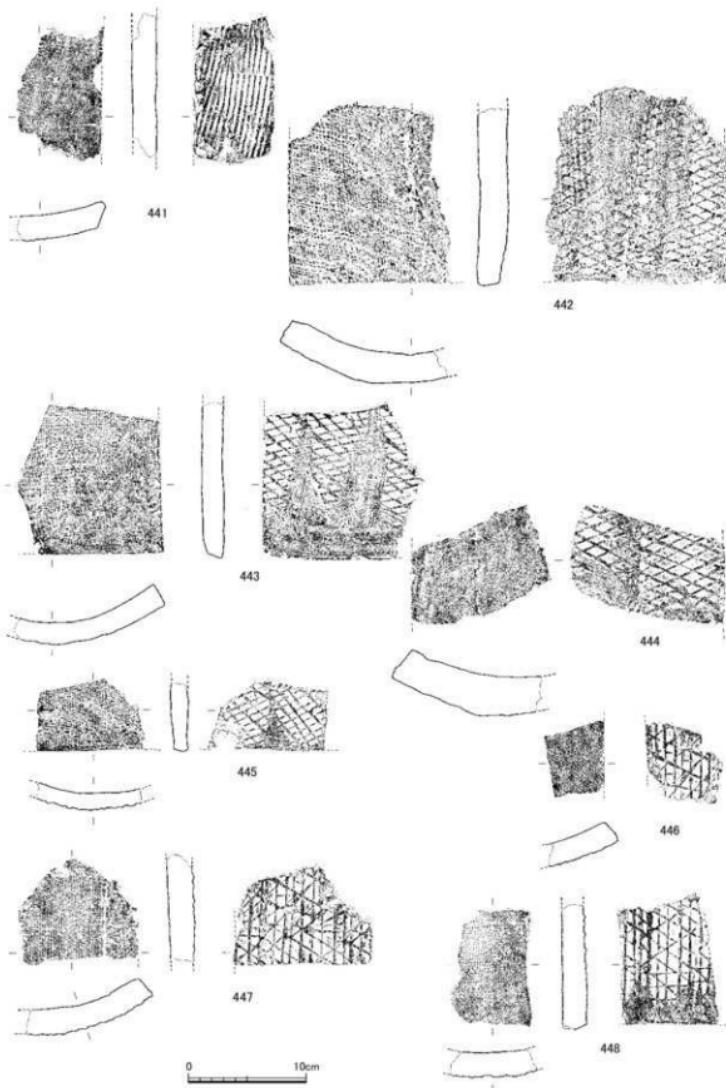


Fig.117 SK15028 出土遺物実測図 8 (1/4)

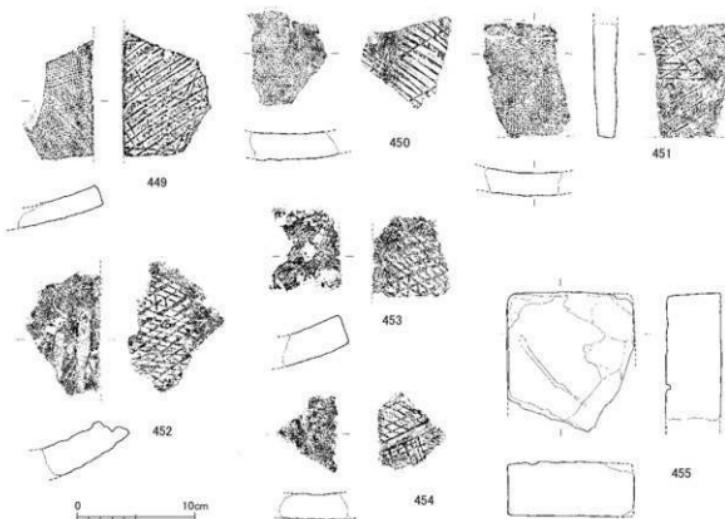
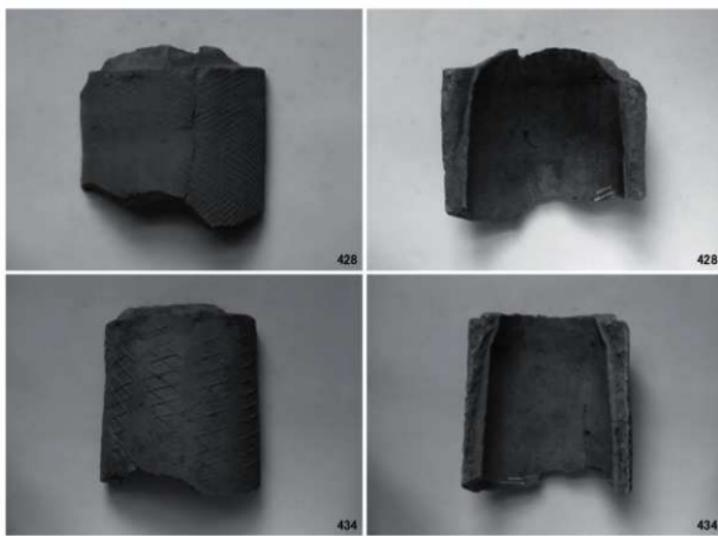


Fig.118 SK15028 出土遺物実測図 9 (1/4)



Ph52 SK15028 出土遺物2

SK15041 Fig.119、Ph.53

長径 85 cm、短径 80 cm の橢円形を呈する土坑である。検出面からの深さは、33 cm を測る。埋土の上半と下半では堆積に不整合があり、掘り直しがあったことを示している。埋土上半から瓦片がまとめて出土した。

SK15014 出土遺物 Fig.120 ~ 121

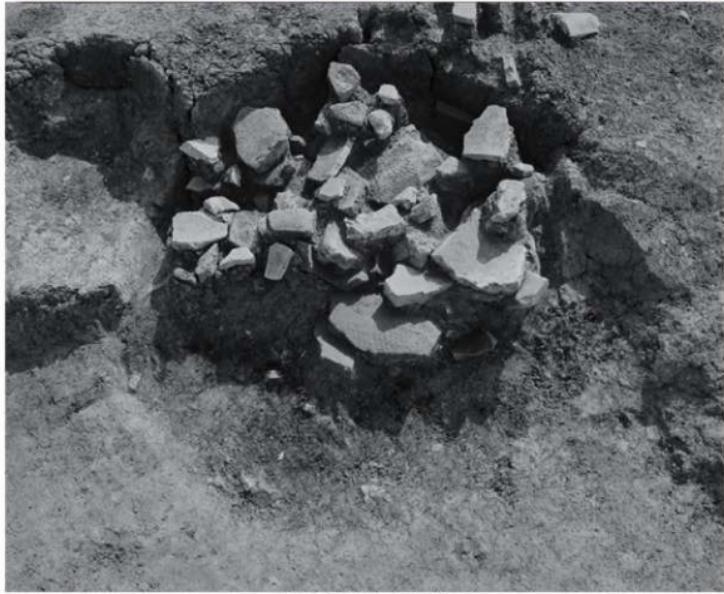
456 は、土師器の杯である。口径 10 cm 程度に推定復元される。

457 ~ 460 は、越州窯系青磁である。457 は、香炉の蓋と思われる。内外ともに施釉する。458 ~ 460 は、碗の口縁である。461・462 は、丸瓦である。436 ~ 470 は、平瓦である。471 は、熨斗瓦である。長辺の小口は、内側から切込みを入れて折り取るが、図示した右下端付近で、切込みを外れて割れている。叩き目による分類は、Tab.18 に示す。

9 世紀初頭頃の廃棄土坑である。



Fig.119 土坑 SK15041 実測図 (1/20)



Ph.53 SK15041 (北より)

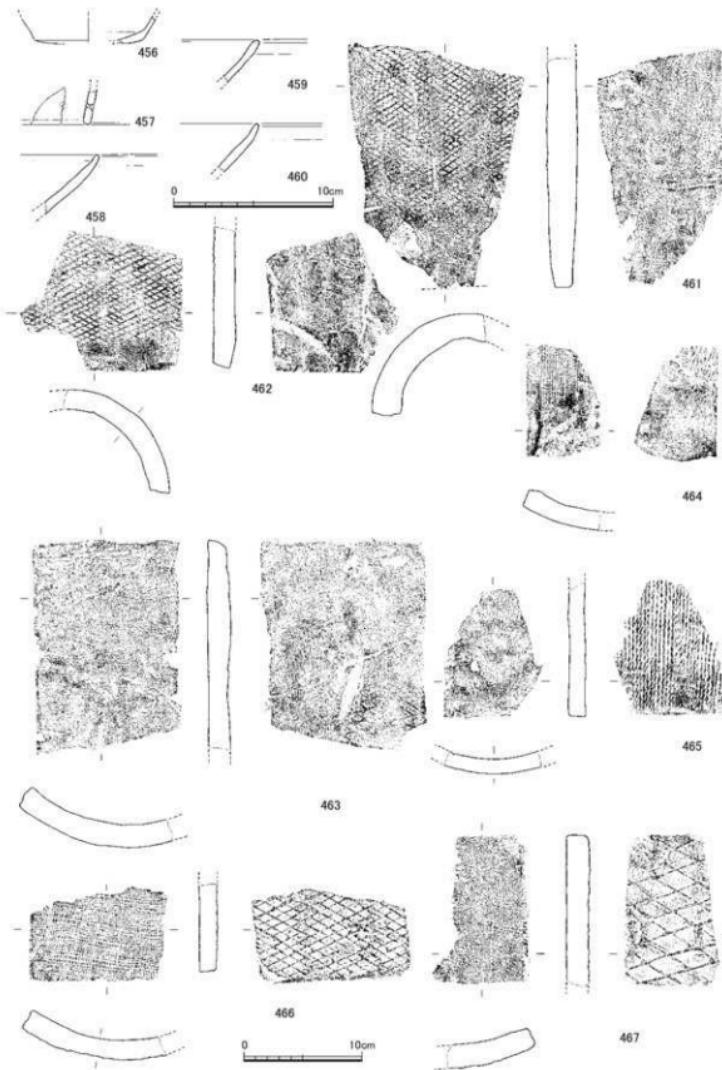


Fig.120 SK15041 出土遺物実測図 1 (456 ~ 460···1/3、461 ~ 467···1/4)

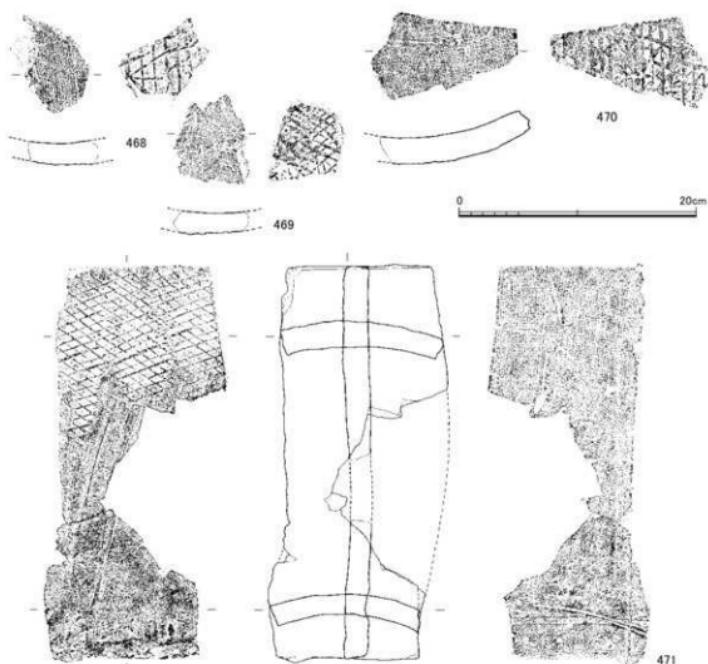


Fig.121 SK15041 出土遺物実測図 2 (1/4)

Tab.18 SK15041 出土瓦分類

叩き分類	1	2A	2B	2C	3Aa1	3Aa2	3Aa 老	3Ab	3Ac1	3Ac2
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15041					○	○	○		○	○

叩き分類	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb1	3Bb2	3Bc	3Bd	3Be	4A	4Ba	4Bb
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15041									○		

叩き分類	5A	5B	5C	6A	6B	6C	6D	6E	6F	6G	6H	縄目	無文
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15041	○	○	○									○	

SK15068 Fig.122, Ph.54

直径 60 cm の円形を呈する土坑である。検出面からの深さは、30 cm を測る。土坑内の全体に詰まったような状態で瓦が出土した。土坑の規模からも瓦以外の廃棄目的は考えにくく、何らかの事情で破損した瓦を差し替え、穴を掘って埋めたといった廃棄状況が想定できる。

SK15068 出土遺物 Fig.123 ~ 125, Ph.55

出土遺物の主体は瓦で、瓦以外で図示に耐える遺物はほとんどなかった。**472** は、越州窯系青磁の皿である。口縁に切込みを入れて、輪花に作る。

473 ~ 480 は、瓦である。**473** は、面戸瓦の小片である。表裏の角の部分は、籠で丁寧に面取りしている。**474・475** は丸瓦である。**476 ~ 483** は、平瓦である。叩き目による分類は、Tab.19 に示す。**474・477 ~ 480** は綱目、**481-3Aa2, 475-5A, 482・483-5B** に分類される。

土師器等の出土がなく、時期を推定する資料を欠くが、9世紀代の廃棄土坑であろう。

9世紀初頭頃の廃棄土坑である。

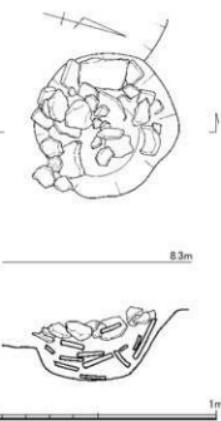
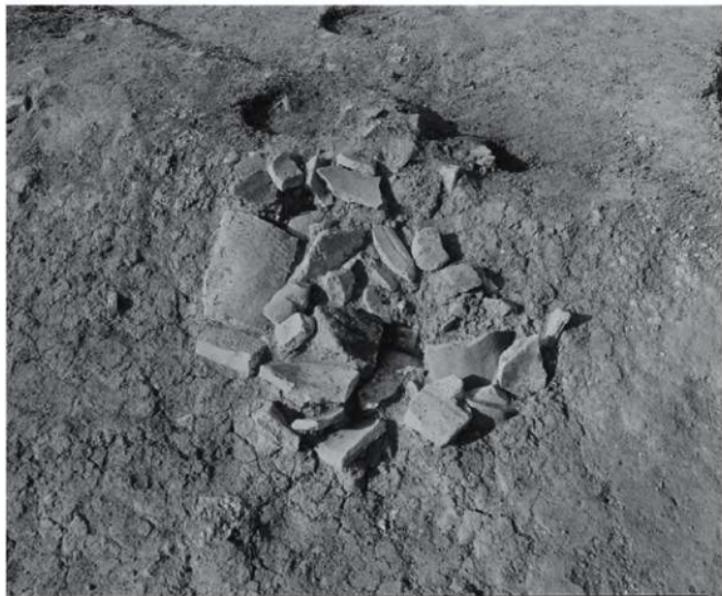


Fig.122 土坑 SK15068 実測図 (1/20)



Ph.54 SK15068 (南より)

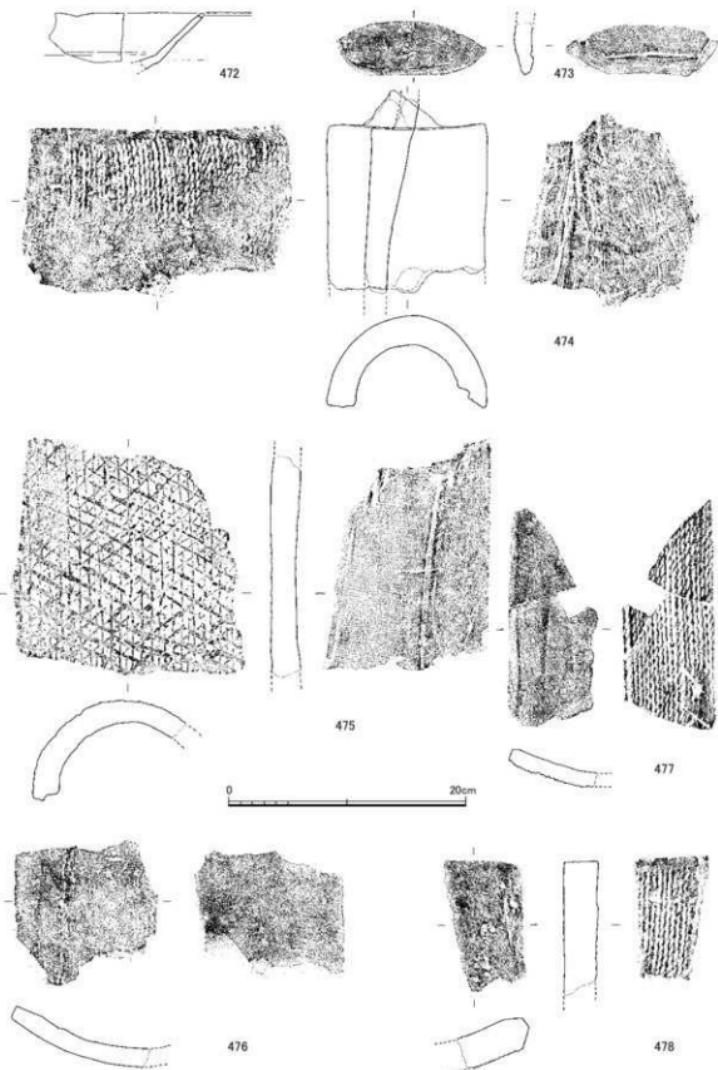


Fig.123 SK15068 出土遺物実測図 1 (472-478)

Tab.19 SK15068 出土瓦分類

叩き分類	1	2A	2B	2C	3Aa1	3Aa2	3Aa 老	3Ab	3Ac1	3Ac2			
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸			
SK15068					○	○		○ ○					
叩き分類	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb1	3Bb2	3Bc	3Bd	3Be	4A	4Ba	4Bb		
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平		
SK15068													
叩き分類	5A	5B	5C	6A	6B	6C	6D	6E	6F	6G	6H	縄目	無文
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平
SK15068	○	○	○									○	○



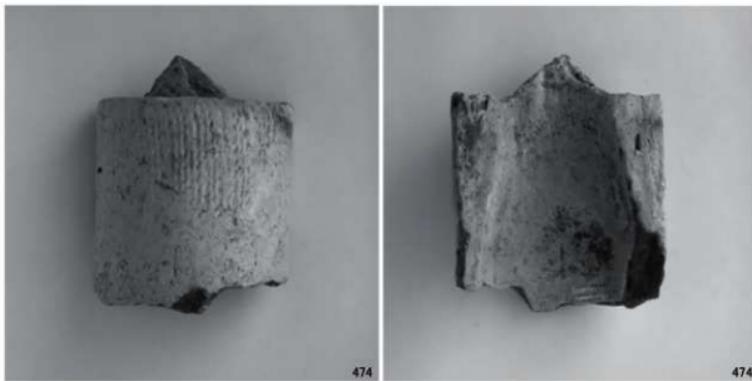
479



480



Fig.124 SK15068 出土遺物実測図 2 (1/4)



Ph.55 SK15068 出土遺物

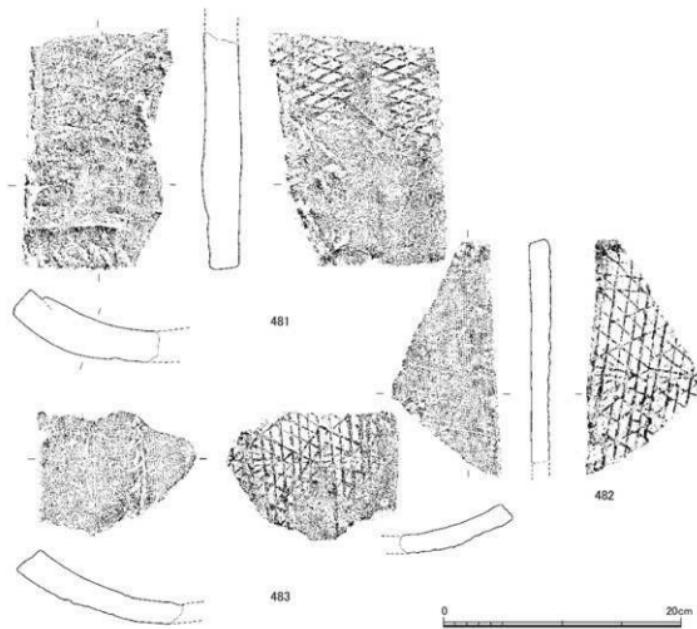


Fig.125 SK15068 出土遺物実測図 3 (1/4)

SK15185 Fig.126、Ph.56

第V期の南館を区画するSD15052とSD15098の外側から検出した土坑である。検出段階では、長楕円形の土坑を想定したが、精査の結果、2基の土坑の重複であった。

南側の土坑から陶器鉢と土師器皿が、埋置した状況で出土した。

SK15185 出土遺物

484は、土師器の皿である。口径10.0cmで、底部はへら切りする。485は、陶器の鉢である。砂粒の多い灰色の胎土に白化粧土を粗くかけ、灰緑色の釉を施す。

11世紀前半に属する。

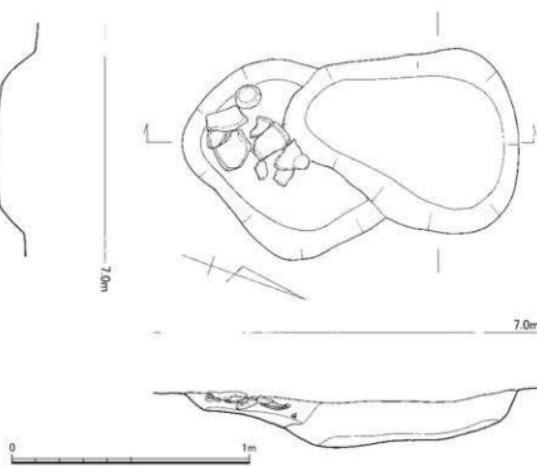


Fig.126 土坑 SK15185 実測図 (1/20)



Ph.56 SK15185 (東より)

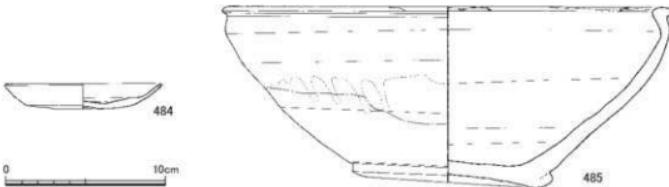
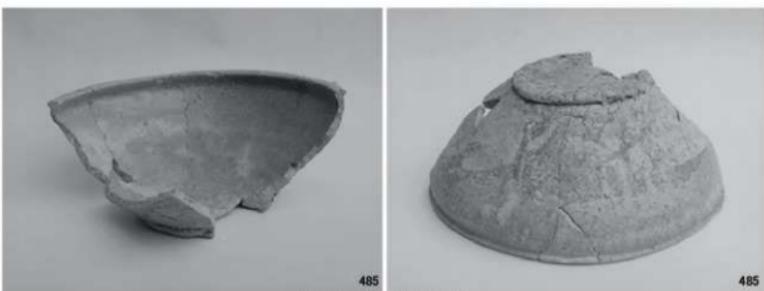


Fig.127 SK15185 出土遺物実測図 (1/3)



Ph.57 SK15185 出土遺物

SX15186・SX15193 Fig.128・129, Ph.58

前述した第IV期の瓦溜りSK15017の下層から検出した遺構である。SK15017を完掘したところで、大型土坑SX15186を確認、その長軸方向にレンチを入れた結果集石遺構SX15193を検出し、精査を行なった。

SX15186は、全体としては南西から北東に楕円形に伸びる土坑で、壁面は緩く傾く。SX15193は、その底面付近に築かれた敷石遺構である。

SX15186の断面土層をみると、敷石は池状土坑の最下部には作られていない。さらに敷石の堆積土は20層に切られており、掘り直しがあったことが窺われる(Fig.128)。これは、SX15193の土層断面にも1層～3層としてあらわれている(Fig.129)。すなわち、まず大型の土坑を掘削、29層・28層・25層が堆積した後、SX15193を営む。そして、SX15193が機能を失い埋積が進んだ後、掘り直しがあり、20層以上が堆積したと考えられる。

SX15193は、SX15186の東辺寄りを220×80センチほどの長方形に掘り込み、石を敷きつめた遺構である。敷石は南北210cm東西35cmで、面をそろえてはいないがおおむね平坦に並べ、南辺には板石を衝立の様に立てる。北辺は掘りかたいつぱいまで石を配し、北東角から弧を描いて北に150cmほど続いたところで、SK15027に切られて途切れる。SK15027の対面では集石あるいは溝の延長は確認できなかつたため、SX15193の末端がどのように処理されていたのかは不明である。敷石の隙間にキメの細かい灰色粘土が詰まつていて、水がみかかっていたことを示している。標高的には、弧状部分の方が南の集石よりも若干高く、弧状集石部分が排水機能を担った可能性は低い。

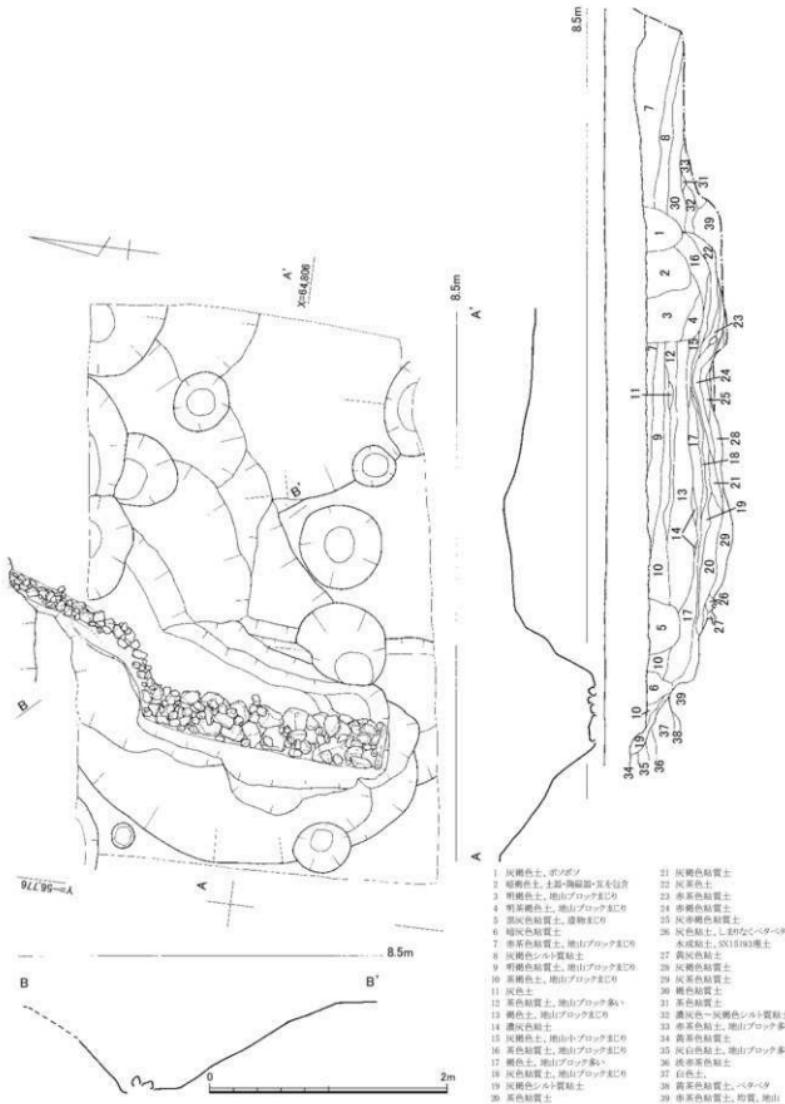


Fig.128 SX15186・SX15193 実測図 (1/40)

SX15186 は、不整形の掘り込みで底面が起伏を持ち、また埋土にも斜堆積は見られず意図的に埋め戻した様子は想定しにくいではないなど、廃棄土坑とは考えがたい。池状の、開放された景観を想定したい。

SX15193 については、敷石が整然と長方形に敷かれており、掘りかたも敷石の西側に接し、東側にはやや広いものの敷石の形状に沿ったもので、長方形を強く意識したものといえる。一方、敷石は掘りかた底面全体には敷かれず、また南端は板石で留めるなど、南北 210cm 東西 35cm の範囲に何らかの意味が

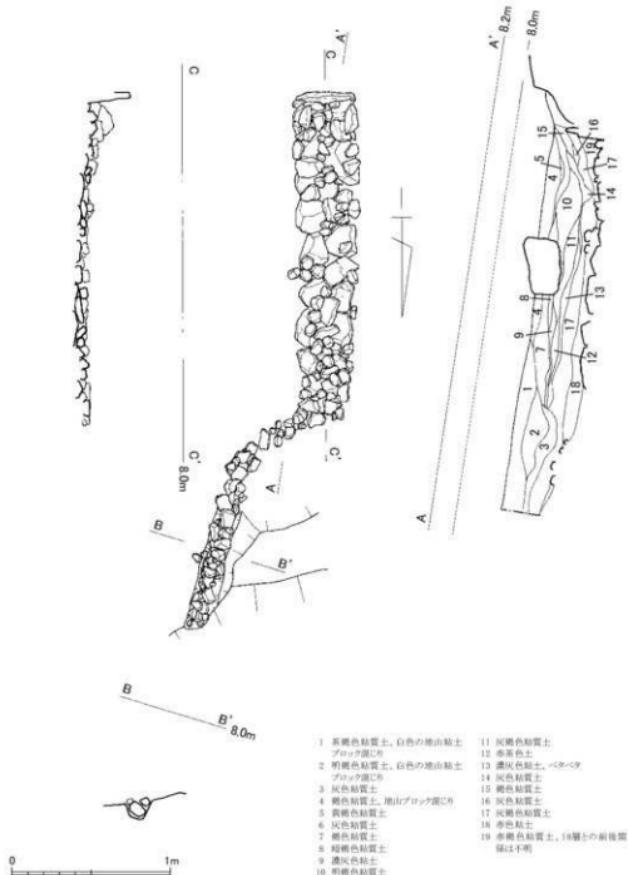


Fig.129 SX15193 敷石遺構実測図 (1/30)

あることは想像に難くない。安直に想像すれば、敷石の上に箱状の施設を乗せた状況が思い浮かぶが、それを判断する証左は得られず、性格不明といわざるを得ない。

出土遺物が皆無で、時期不明であるが、SK15027に先行することは切り合い関係から明らかであり、9世紀前半以前の遺構である。



(1) 検出状況（南より）



(2) 土層堆積状況



(3) SK15193（南より）



(4) SK15193（北より）



(5) SK15193溝状部分（南西より）



(6) SK15193奥壁（北東より）

SK15122(23次調査) Fig.130、Ph.59

陸軍第24歩兵連隊兵舎基礎の下から検出した土坑である。調査過程で、降雨のため上端が崩落し変形してしまったが、本来は、遺構検出時に確認した直径100cm程度の正円形を呈する土坑である。遺構検出面からの深さは、270cmを測る。

埋土の中ほどから、土坑の大きさいっぽいに、ヘルメットを伏せたような形で鉄分が混じった粘質土の塊を検出した。また、土坑の壁がほぼ直立し、底面までが非常に深いことから、これまでに鴻臚館跡の調査で検出したトイレ遺構との共通性がみとめられた。そのため、埋土を標高6.5m付近、6.05m付近、床面から出土した瓦と底面の間部分の三ヶ所からサンプリングし、寄生虫分析・花粉分析・珪藻分析を行なった。その結果については、P.197～204に詳述するが、寄生虫は検出されず、草本が集積されるような土坑であったとされた。

また、発掘調査においては、最下部まで掘り進んだところで、これまでのトイレ遺構で検出したような汚物の堆積層ではなく、乾燥した土壤の堆積であり、籠木などの出土も見られなかった。これらの点は、分析の結果を支持するものであり、トイレ遺構としての可能性はないを見て大過ないだろう。

一方、トイレ遺構としての可能性を排除した場合、深さ3mにもせまる堅坑的な遺構の性格は、想定しにくいものとなる。現段階では、性格・機能ともに不明とせざるをえない。なお、埋土の中位にみられた粘質土の塊については、埋積が中ほどまですんだ段階で、丸めた草などを廃棄したものと考えられる。

SK15122 出土遺物 Fig.131～133、Ph.60

486・487は、須恵器である。486は頸の体部である。肩部には、沈線が一条めぐる。487は、高台杯である。体部上半を欠くが、腰は丸みを持つ。

488～492は、土師器である。488～491は、碗である。高台径が約8cmの488～490と、9.5cmと広めの491がある。489・490の高台は細く高く、やや外方に踏ん張り気味に貼り付けられている。492は、鉢である。口径39.6cmを測る。

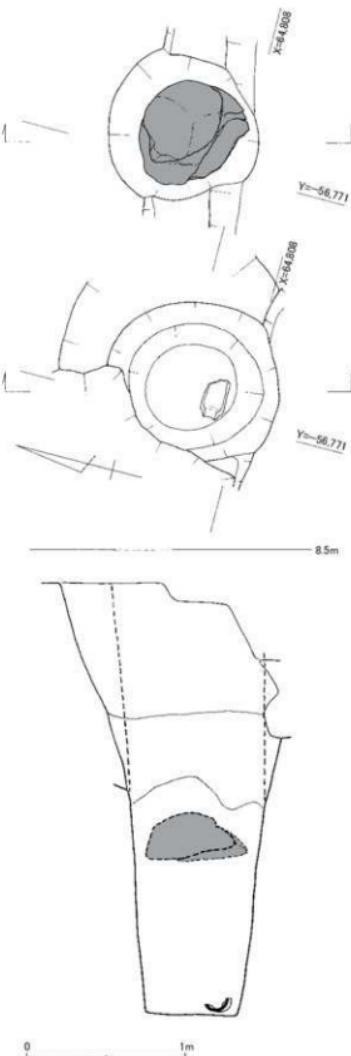


Fig.130 土坑 SK15122 実測図 (1/30)

器高は、推定で8cm程度となる。内外とも、粗いハケメ調整をおこなう。

493～494は、白磁である。493は、合子の身であろう。外面には、型押して籠目をつける。口縁部の内面は、肥厚する。494は、碗の口縁である。495～501は、越州窯系青磁碗である。495～499は、全面施釉の精製品である。495は平底の碗で、外底端部の袖をわずかに掻き取り、白砂の目跡が並ぶ。498は、体部を縱に箒押して五分割した輪花碗である。500・501は、体部下位から外底部を露胎とする粗製品である。

502は、須恵器の甕である。口縁部は横なで、体部外面は平行叩き、内面には同心円の当て具痕跡が並ぶ。

503～511は、瓦である。503は、面戸瓦の小片である。外面は網目叩きをなで消し、内面には布目痕が見られる。504は、熨斗瓦である。左右の小口は、箒削りする。505は丸瓦である。Ph.59-(4)に示したように、SK15222床面上から出土した。506～511は、平瓦である。叩き痕跡は、503・504-網目、505-508-3Aa2、506-3Ab1、507-3Ab2、511-3Ba1、509-5A、510-5Cに分類される。

前述したように遺構の性格は不明であるが、9世紀後半代の土坑であろう。



(1) SK15122 粘質土塊出土状況（南より）



(2) 粘質土塊断面（南より）



(3) 完堀状況（南より）



(4) 底面瓦出土状況（東より）

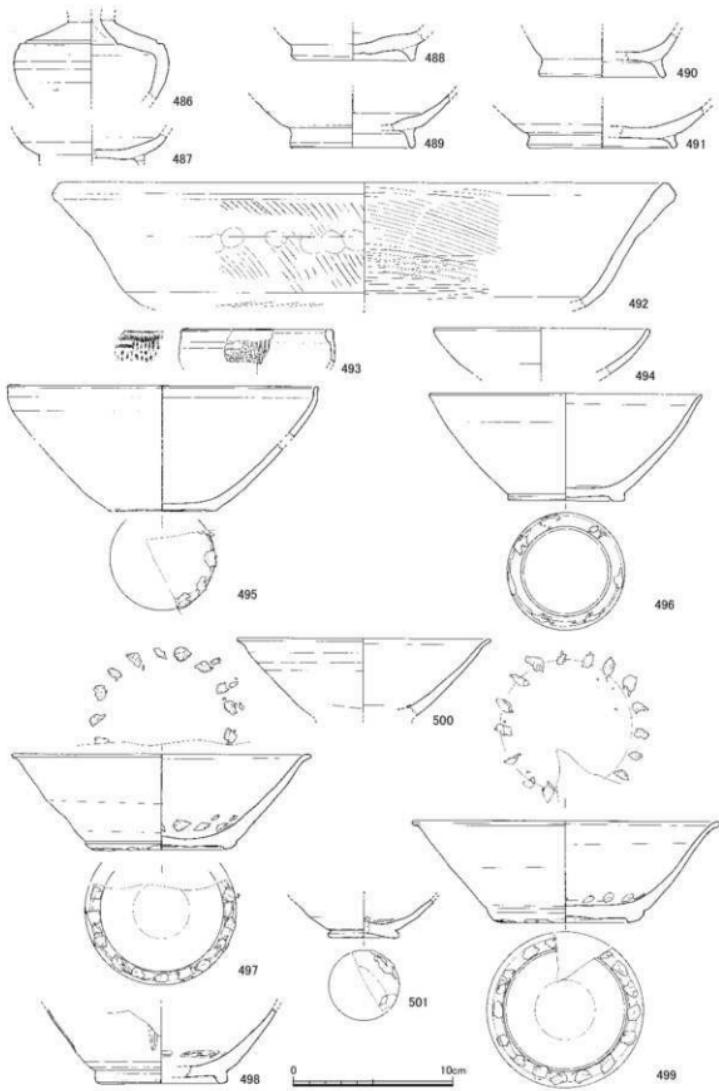


Fig.131 SK15122 出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph.60 SK15122 出土遺物

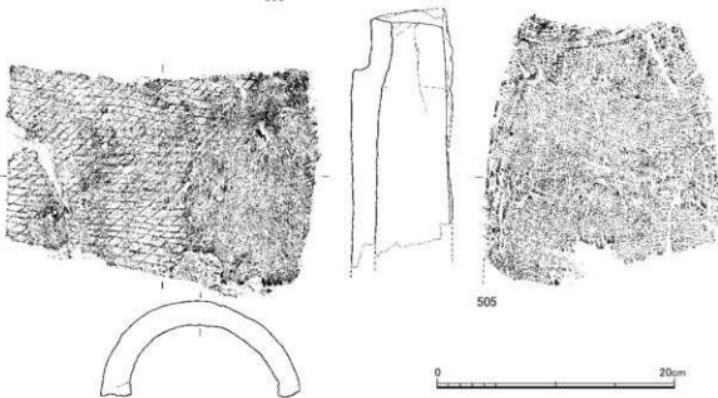
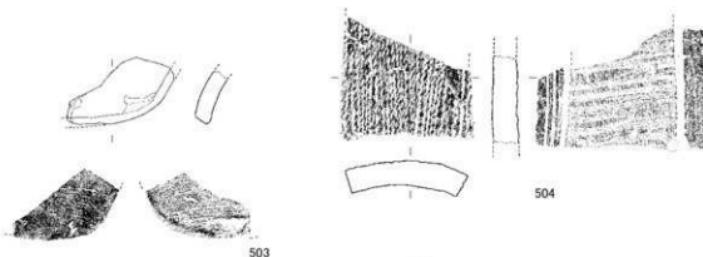
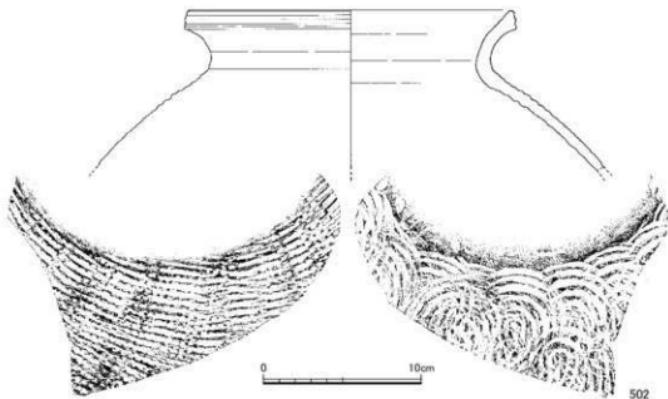


Fig.132 SK15122 出土遺物実測図 2 (502-1/3、1/4)

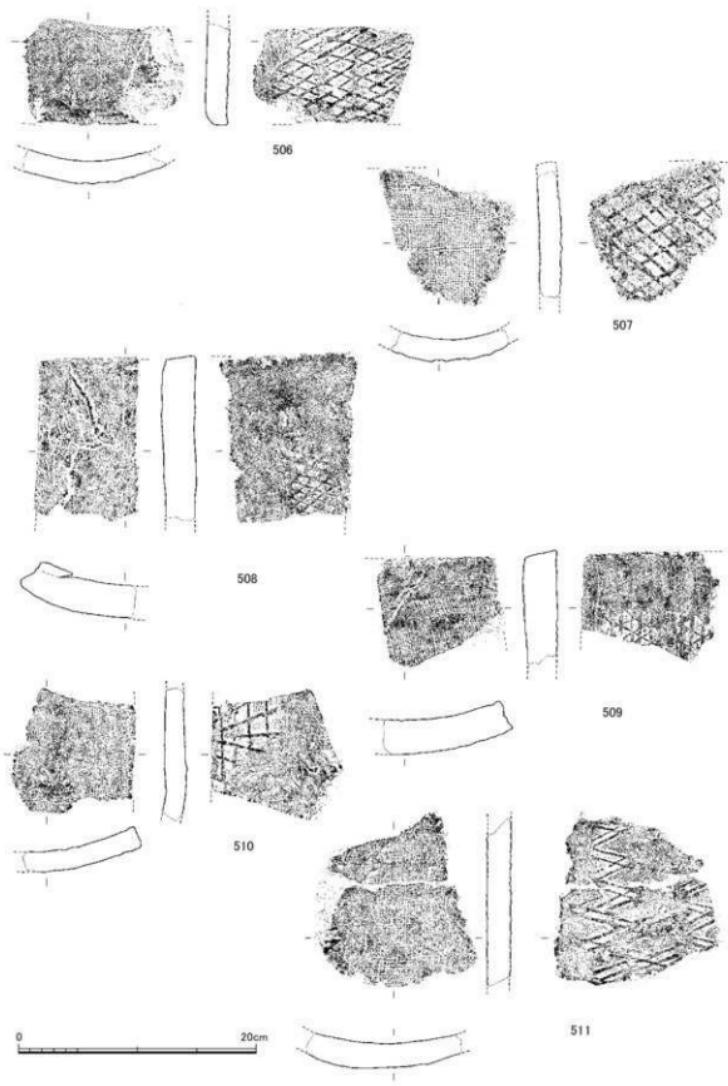


Fig.133 SK15122 出土遺物実測図 3 (1/4)

SK15257(23次調査) Fig.134、Ph.61・62

SK15027Bの北側から、陸軍第24歩兵連隊兵舎基礎に一部破壊されて検出した土坑である。

SK15027Bとの切り合い部分は、兵舎建物基礎の下になり、不明瞭だが、わずかに残った部分の観察では、SK15257の埋土がSK15027にかかっており、SK15257が後出するものと考えられる。長軸260cm、短軸は推定復元で200cm程度の小判型を呈し、検出面から床面までの深さは約50cmを測る。埋土上半に集中して、陶磁器・土師器・瓦などが出土した。また、埋土には、獸骨が混じっていた。獸骨は、遺存状態が悪く、同定するにいたっていないが、下頸骨や四肢骨から四足歩行の小型哺乳類であることは確かである。食物残滓なども廃棄されたことがうかがわれる。

鴻臚南館に滞在していた中国人商客の、食膳に上がった残滓と想えることができよう。

SK15257 出土遺物

Fig.135～141、Ph.63・64

512～517・522は、土師器である。512～516は杯で口径11.3～13.1cmを測る。517は、碗である。522は広口壺で、器面は磨滅し調整痕は残らない。518～521は、黒色土器A類碗である。いずれも器面は磨滅するが、520・521の内面には範磨きが認められる。

525～543は、越州窯系青磁である。525～527は、蓋である。いずれも同タイプの蓋で、広口壺の蓋と思われる。内面は露胎となる。529は、水注である。ほぼ完形品が割れた状態で出土した。白化粧の上にオリーブ色の釉をかけ、口縁部と肩部4ヶ所に掲釉を加える。530は、双耳壺であろう。化粧土はかけられていない。531～543は、碗である。全面施釉の精製品は含まれていない。全体に目土の剥ぎ方は雑だが、特に541は目土が大きな塊のまま剥がされずに残っている。544～547

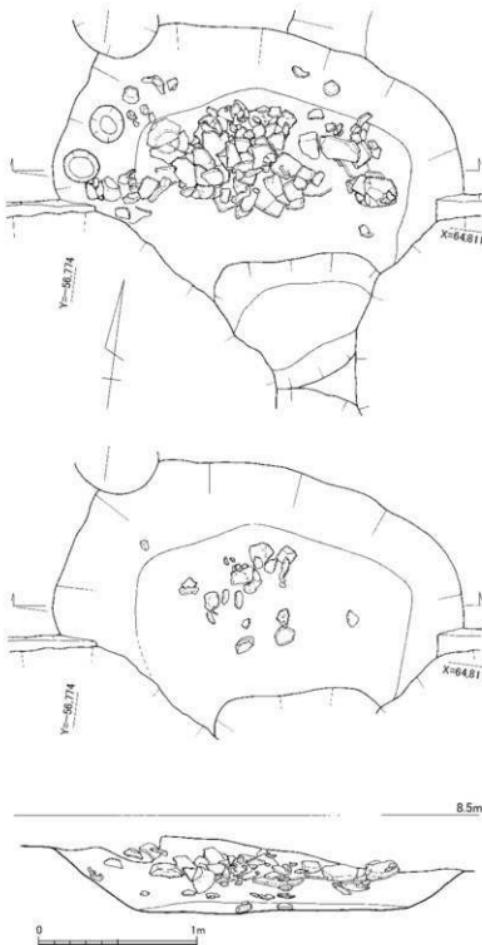


Fig.134 土坑 SK15257 実測図 (1/30)

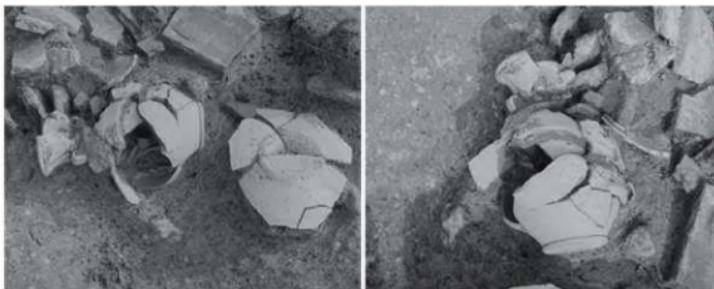
は、陶器である。544 は無釉の水注であるが、茶褐色を呈する胎土はきめ細かく、精良である。545・546 は褐釉陶器で、545 は化粧土をかけた上に施釉するが、釉はほとんど剥落している。547 は、無釉陶器の鉢である。

548～566 は、瓦である。548～551 は、軒瓦である。548 は単弁の軒丸瓦、549～551 は鴻臚館式であろう。552 は、熨斗瓦である。左右の小口は窓削りだが、表面に向かって反り返る。553～557 は丸瓦、558～566 は平瓦である。叩き痕跡は、553・558～562-縄目、554-2C、556・563・564-3Aa1、566-5A、557-6C に分類される。

土師器・黒色土器 A 類の特徴から、九世紀前半の廃棄土坑であると考えられる。



Ph.61 SK15257 (北西より)



Ph.62 青磁水注出土状況

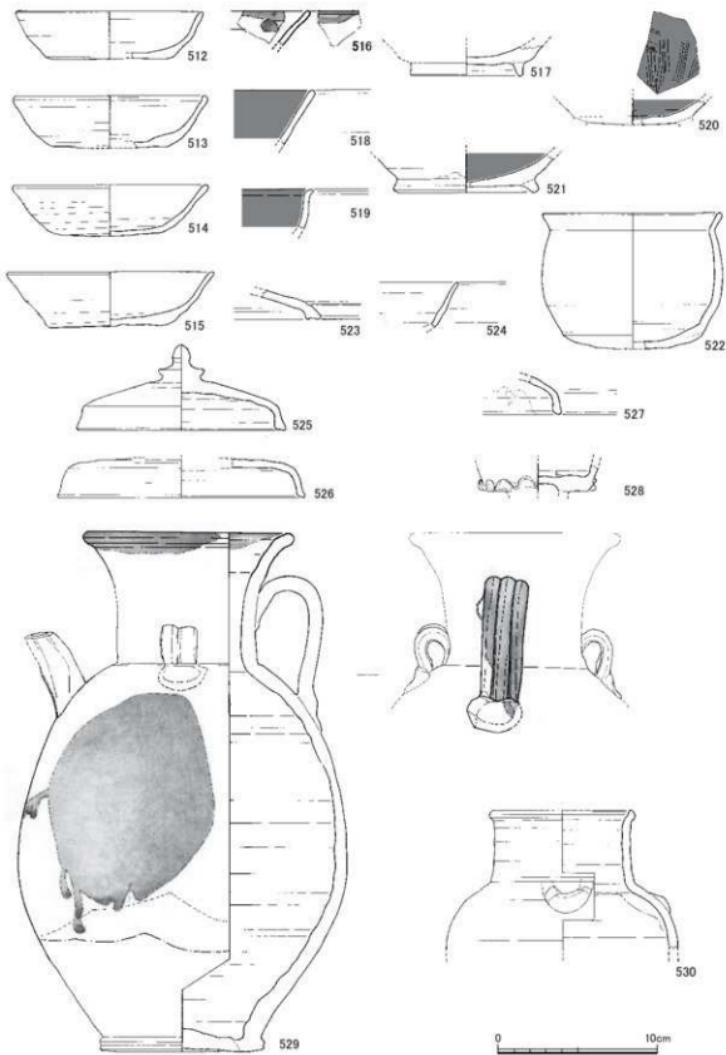
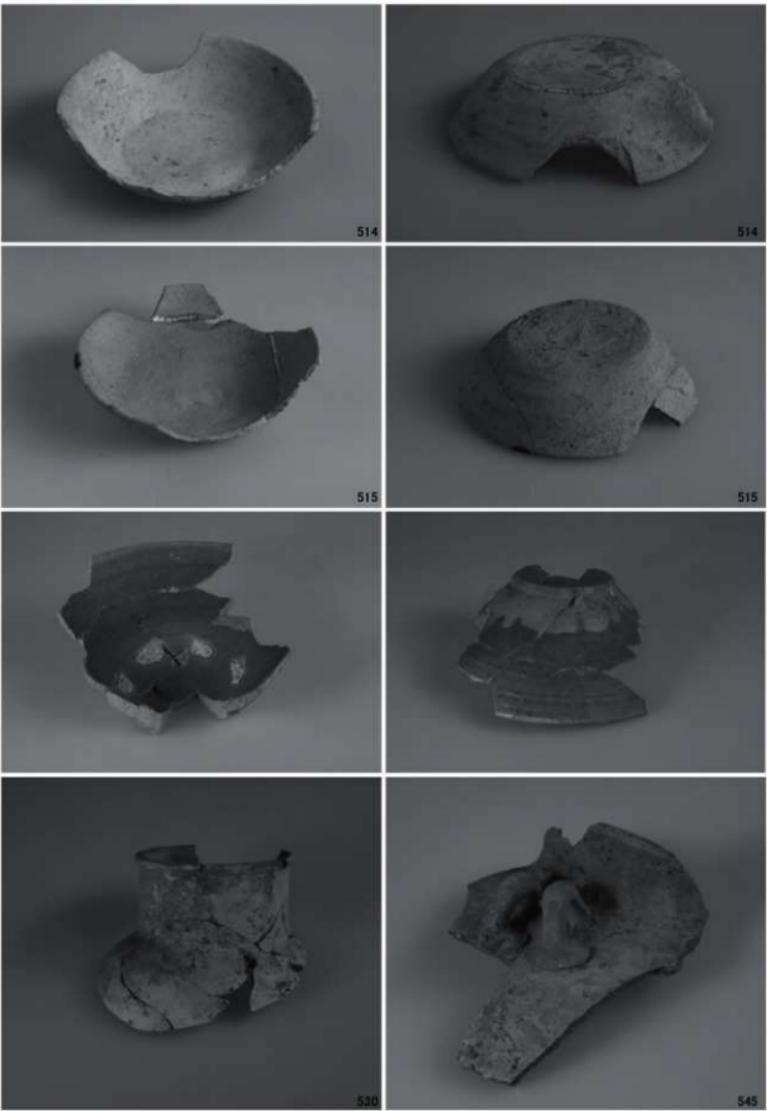


Fig.135 SK15257 出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph63 SK15257 出土遺物1

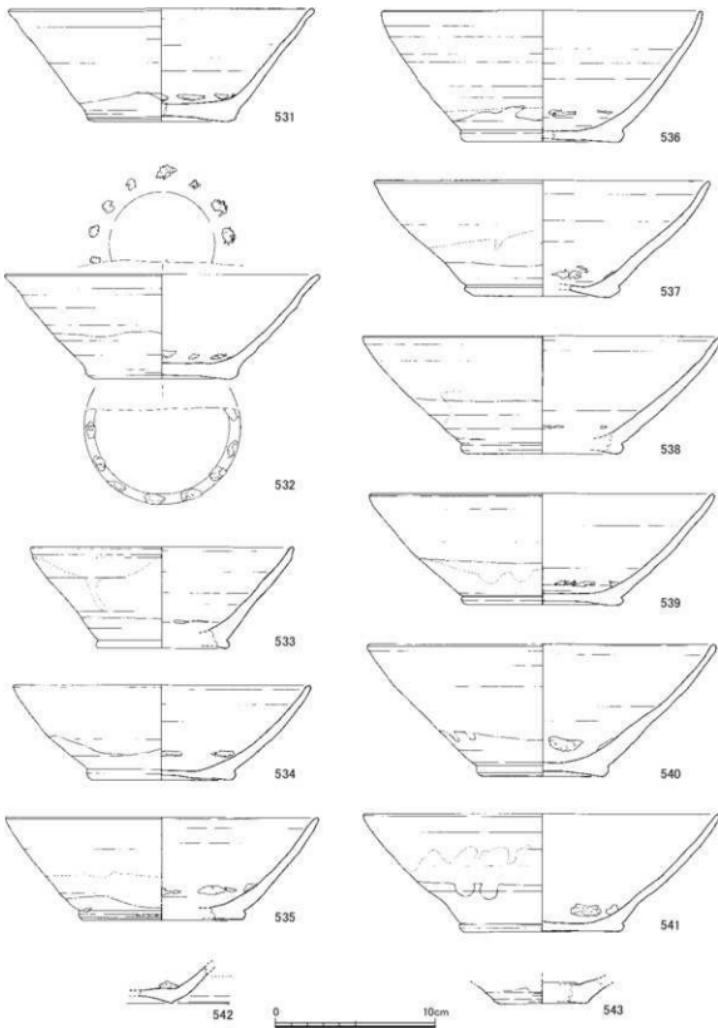


Fig.136 SK15257 出土遺物実測図 2 (1/3)

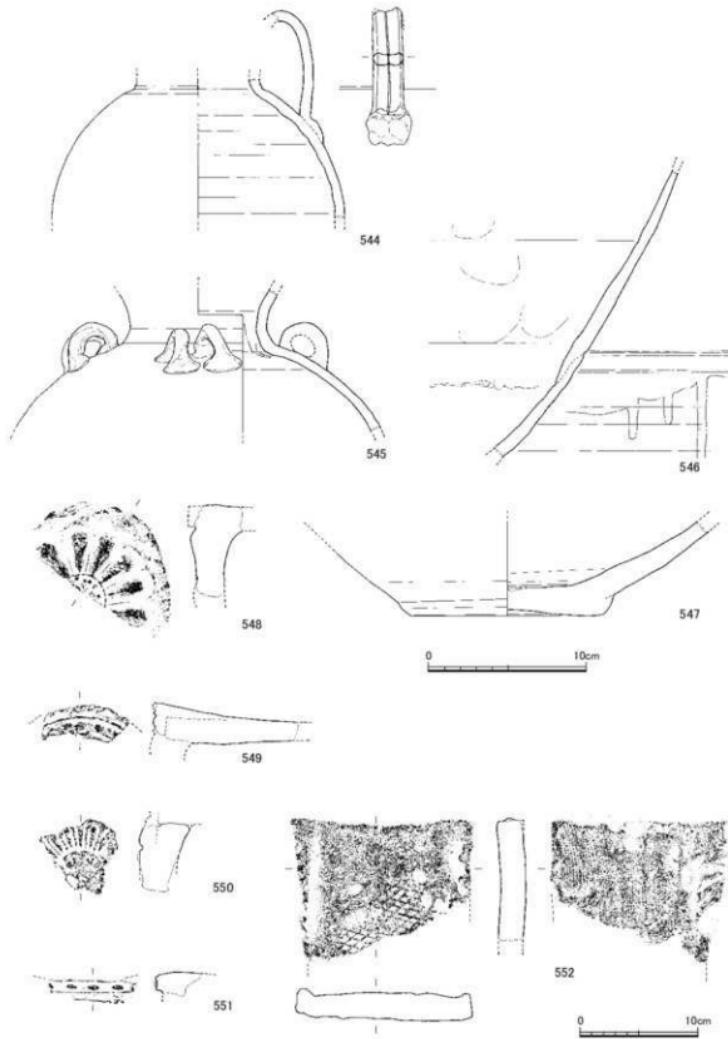


Fig.137 SK15257 出土遺物実測図 3 (544 ~ 547…1/3、548 ~ 552…1/4)

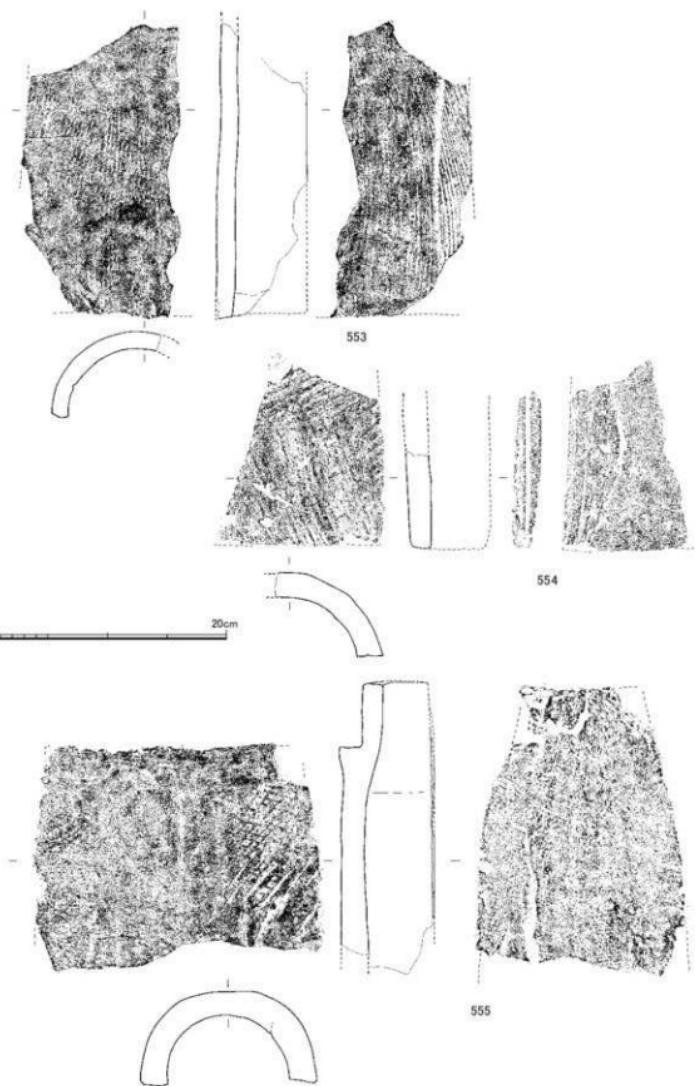


Fig.138 SK15257 出土遺物実測図4 (1/4)

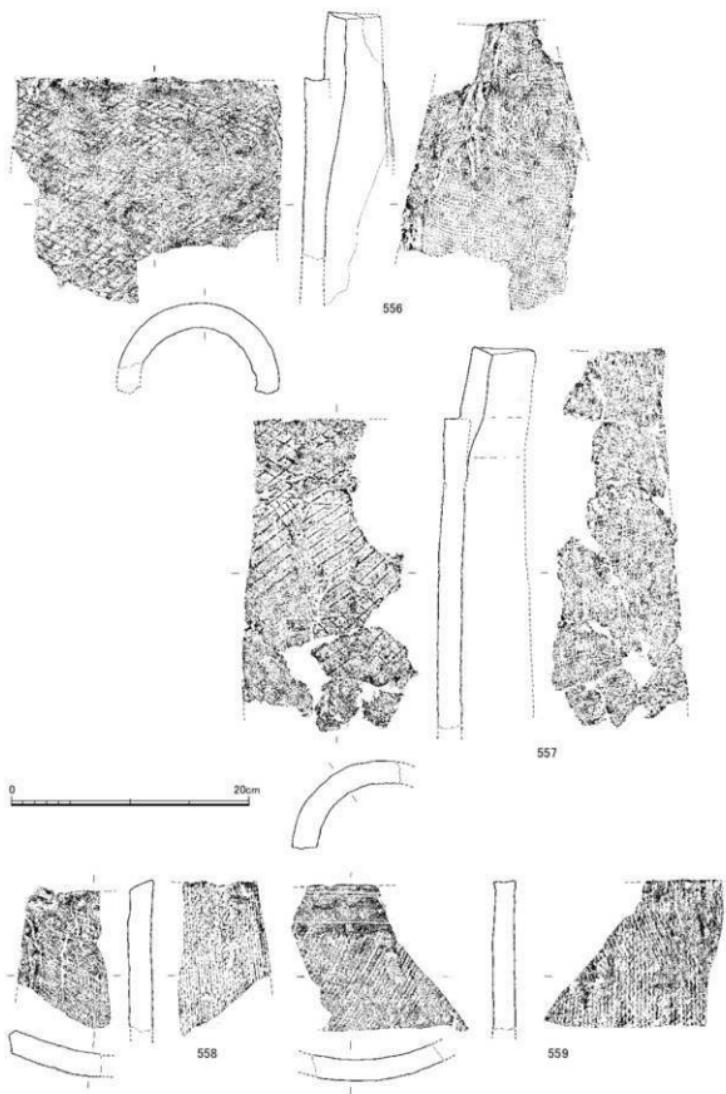


Fig.139 SK15257 出土遺物実測図5 (1/4)

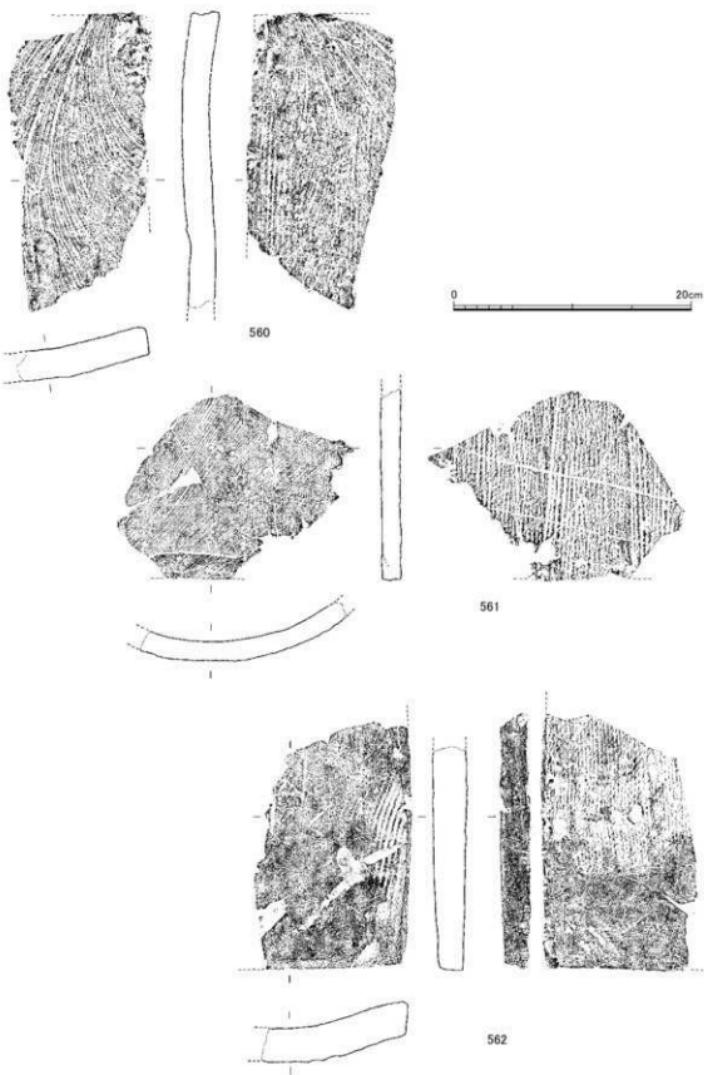
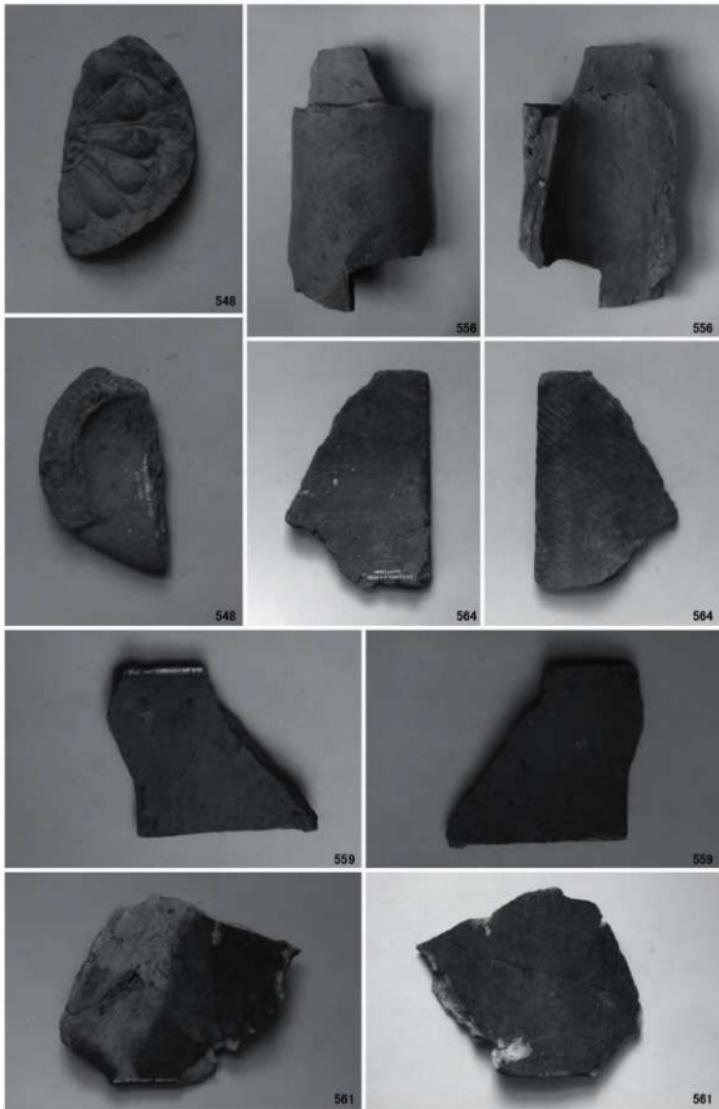


Fig.140 SK15257 出土遺物実測図6 (1/4)



Ph64 SK15257 出土遺物2

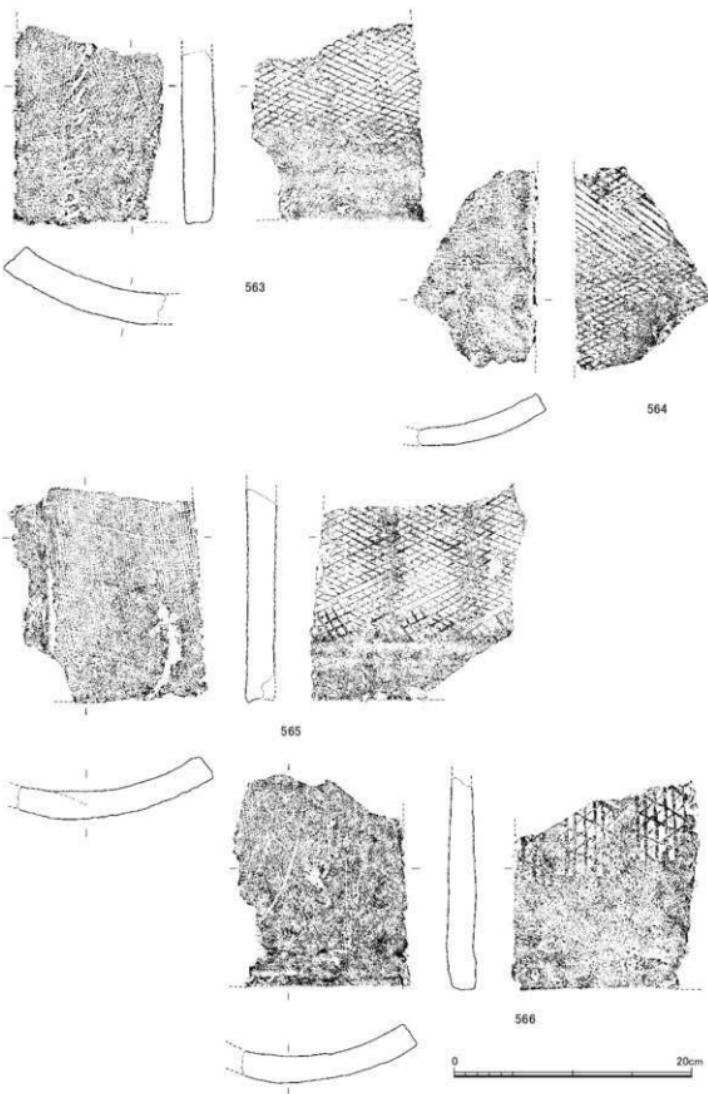


Fig.141 SK15257 出土遺物実測図7 (1/4)

SD15269(23次調査) Fig.142 ~ 144, Ph.65

主軸をN $^{\circ}$ 85° -Wに取る溝状構造で、約4.8m分を検出した。溝底は西から東に傾斜しており、西端は自然に浅くなっているため、本来さらに西に続いていた可能性は高い。東端はSK15027に切られしており、これに先行することは間違いない。

埋土からは、土錐が78点出土した。この内66点は、一ヶ所にまとまって、連結したままを思わせる状況で出土している。また、埴輪片、韓式土器片などが出土した。

SD15269 出土遺物 Fig.145 ~ 146, Ph.66

567 ~ 571は、須恵器である。567は坪蓋、568は高台坏、569・571は壺である。570は、壺の底部であろうか。範記号が認められる。571の肩部には、かき目がめぐる。572は、韓式土器の壺である。外面は格子叩き、内面は平滑になでている。焼成はやや甘く、瓦質焼成となる。

575 ~ 576は、埴輪破片である。573・574は円筒埴輪である。573の外面はタテハケ、内面は指ナデする。突帯は低く、断面はM字に近い。透し穴の一部が残る。円形と思われるが、断定はできない。574の突帯は、剥

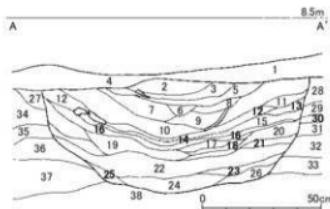


Fig.142 溝 SD15269 土層実測図 (1/20)

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 黄褐色土 | 23 黄褐色土 |
| 2 稲作耕作土 | 24 白色粘土質土、白色漂出物小ブロック |
| 3 稲作色土、やや砂質、炭化物あり | 25 黄褐色土、塊状構造 |
| 4 黑茶色土 | 26 黄褐色土 |
| 5 黄褐色土 | 27 黄褐色土、19管と鉢 |
| 6 細灰土 | 28 黑褐色土 |
| 7 黑灰土 | 29 黑褐色土 |
| 8 黄褐色土 | 30 黄褐色土 |
| 9 黑茶色土 | 31 黄褐色土 |
| 10 明茶色土 | 32 黄褐色土 |
| 11 黑茶色土 | 33 明茶色粘質土、漂出物面 |
| 12 稲作色土 | 34 明茶色粘質土、白色粘土ブロックを多 |
| 13 稲作土 | く含む |
| 14 四角土 | 35 黄褐色粘質土 |
| 15 黄褐色土 | 36 黑茶色粘質土、白色粘土ブロックを多 |
| 16 稲作色土 | く含む |
| 17 黑茶色土、やや砂質 | 37 黑茶色粘質土、白色粘土ブロックを多 |
| 18 黑茶色土、黄褐色土ブロック混在 | く含む |
| 19 黑灰土 | 38 黄褐色粘土 |
| 20 黄褐色土 | 21~38層は、地山(自然堆積)土層、 |
| 21 黑茶色土 | |
| 22 黑茶色土 | |

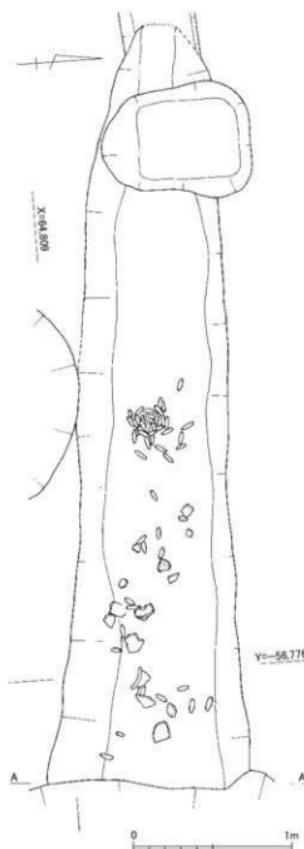


Fig.143 溝 SD15269 実測図 (1/30)



北西より



西より



東より



北より

Ph.65 SD15269

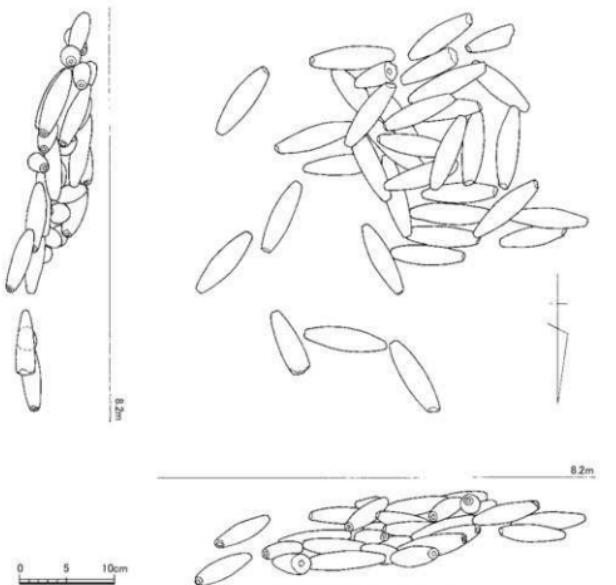


Fig.144 SD15269 土錐集中部分実測図 (1/5)

Tab.20 SD15269 土錐計測表

番号	長さ cm	最大径 cm	重量 g	備考	固番号	番号	長さ cm	最大径 cm	重量 g	備考	固番号	番号	長さ cm	最大径 cm	重量 g	備考	固番号
2001	7.35	2.15	21.3		579	2027	7.23	2.13	24.2	折損		2053	8.17	2.12	29.9		
2002	7.01	2.04	20.1			2028	4.96	2.04	15.4	半折		2054	8.42	2.37	32.8		
2003	6.38	2.05	18.7			2029	6.96	2.22	23.4		578	2055	7.8	2.26	31.3		
2004	7.91	2.09	24.8			2030	7.13	2.3	29.3			2056	8.52	2.16	35.4	折損	
2005	7.94	2.25	25.7			2031	7.56	2.16	23.3			2057	8.17	2.2	28.4		
2006	8.13	2.29	27.6			2032	8.03	2.21	29.4			2058	8.16	2.36	30.2		
2007	8.39	2.13	26.7			2033	7.45	2.26	26.2			2059	7.91	2.09	26.7		
2008	4.1	2.05	10.4	半折		2034	6.85	1.94	20.3			2060	7.85	2.18	28.3		
2009	8.17	2.16	26.1			2035	8.25	2.04	23.8			2061	8.24	2.18	30.2		
2010	7.8	2.24	28.8			2036	8.3	2.13	29.5			2062	7.94	2.09	27.7	折損	
2011	7.52	2.13	25			2037	6.73	2.03	21.2	折損		2063	8.34	2.2	28.1		
2012	7.15	2.19	23.8			2038	7	2.05	21.9			2064	7.73	2.22	25.6		
2013	8.14	2.22	28.5			2039	7.17	2.05	23.1			2065	7.88	2.3	27.8	折損	
2014	8.3	2.15	27.3			2040	7.01	1.98	19.5	折損		2066	7.86	2.05	23.9	折損	
2015	7.54	2.05	21.3			2041	7.98	2.12	25			2067	8.02	2.01	26.8		
2016	7.09	1.97	21.6			2042	7.4	2.22	26.4			2068	7.17	2.1	23.3	折損	
2017	7.58	2.02	22.6			2043	7.92	2.26	24.8			2069	7.94	2.03	25.9		
2018	7.23	2.06	23.1			2044	7.74	2.1	25.5			2070	8.19	2.13	29.7		
2019	7.91	2.32	30.8			2045	8	2.18	28.3			2071	6.86	2.06	25.5	折損	
2020	7.52	2	22			2046	7.98	2.14	27.6		582	2072	6.81	2.21	27.4	折損	
2021	8.06	2.03	24.3			2047	8.4	2.35	31.7			2073	7.53	2.22	26.3		
2022	7.48	2.15	23.2			2048	7.2	2.17	23.3			2074	7.58	1.9	20.6		
2023	6.24	2.11	27.4		581	2049	7.41	1.95	22.4	折損		2075	7.4	2.13	25.6		
2024	7.59	2.04	22.2		580	2050	7.63	2.22	29			2076	4.14	2	9.7	半折	
2025	8.61	2.21	29.8			2051	4.32	2.27	15.6	半折		2077	7.53	2.17	28.7		
2026	6.85	1.8	23.4	折損		2052	8.26	2.2	26.8			2078	3.78	1.4	6.4		

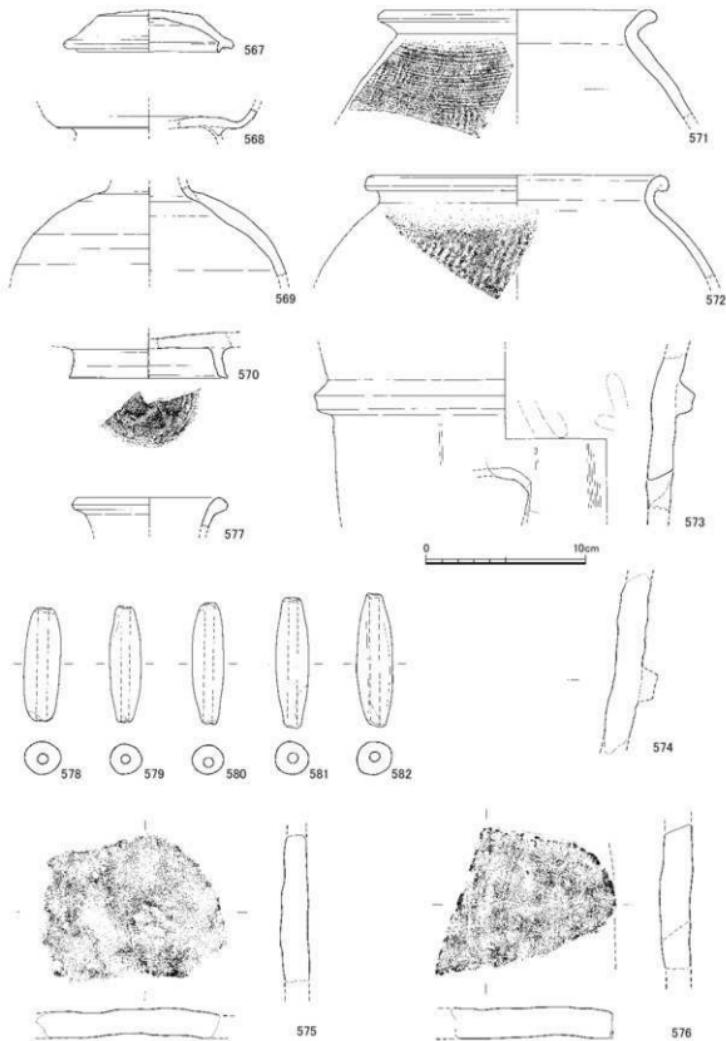


Fig.145 SD15269 出土遺物実測図 (1/3)



571



571



572



572



573



573



574



574

Ph.66 SK15269 出土遺物

離している。器面は磨滅し、調整痕は残らない。**575・576**は、形象埴輪であろう。**576**は右の小口の一部が生きており、それに向って沈線で三角形を描く。盾型埴輪の辺部であろう。

577は、揭軸陶器の小口蓋である。

578～582、巻頭図版4-(2)、Tab.20に土錘を示す。指押さえて成型する。土師質だが、焼成は良好である。

出土遺物には時期的な幅があり、特定できない。直線的な溝であり、南館第I期建物の主軸と共通した方位を取る点、出土遺物に瓦がまったく含まれず、第II期以降とは考えにくい点などから、鴻臚館第I期、すなわち七世紀後半の遺構と考えられる。

4. 小 結

報告を終えるに当たり、梵鐘鋳造遺構であるSK15027、調査時にトイレ遺構の可能性を考えたSK15222について、若干の検討結果を追加しておく。

梵鐘鋳造遺構に関する若干の検討

(1) 課題の整理

前述の検討から、いくつかの問題点が浮上する。

ひとつは、掛け木の不使用である。国内の梵鐘鋳造遺構の調査事例では、ほとんど例外なく掛け木の痕跡が検出され、掛け木を用いた鋳型の固定が推定されている。SK15027の場合、土坑基底部に掛け木の痕跡はあるものの、定盤のまわりは一面にすき間なく炭でおおわれており、掛け木から笠型上部の材木に綱を掛け渡した形跡はまったく認められない。したがって、掛け木を用いた梵鐘鋳造がなされたとすれば、遺存している鋳型による梵鐘鋳造に先行するものと考えざるえない。

次に、SK15027では、外型の検出状況から鋳型と掘りかたの間に空間があったとは考えられず、鋳造時に土坑内を土で埋めていた点に注意したい。これは、掛け木の不使用と関わり、おそらく外型を固定する役割を果したものであろう。豊後国分寺においても、同様に掘りかたを土で埋めた梵鐘鋳造遺構が報告されている。豊後国分寺の場合は、掛け木を使って鋳型を締めている形跡があるとされるが、梵鐘の取り出しの際に埋土を大きく掘り込み、梃子を当てて梵鐘を倒して取り出したと推定されている(大分市教要1999)。鋳型を埋め込む方式は、案外広く行なわれていたのかも知れない。

また、内型の支持のために軸木を通していた可能性がある。SK15027の底盤に穿たれた径10cmほどの竪穴であるが、前述したように底型の中央にはあたらず、位置関係から換型の軸穴でないことは明らかである。

吉田晶子・五十川伸矢は、鉄物生産の民俗例を一覧的に紹介した中で、中国華北軍区の鋳造工場の鋳造作業をもとにした搬砂法という鋳造方法にふれている。この銅鐘鋳造事例では、中子(内型)の中心には鉄芯が貫通する(Fig.146右)。さらに鋳造にあたっては、土坑を煉瓦で埋め、溶銅を流すという。吉田・五十川は、中国の多くの梵鐘製作に用いられた方法であろうと推測している。日本における事例は報告されておらず、即断はできないが、掛け木を用いない点、内型に軸を通す点など共通点がみられ、参考になると共に、今後注意していく必要があろう。

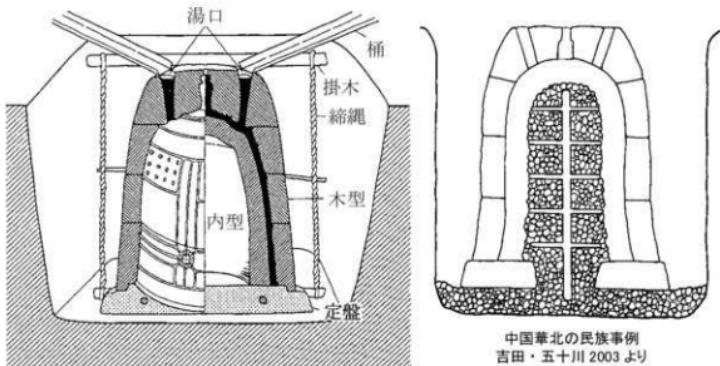


Fig. 146 梵鍾鑄造模式図

参考文献

吉田晶子・五十川伸矢「鉄物生産の民俗例一覧」『鉄造遺跡研究資料』2003

大分市教育委員会『豊後国分寺跡～平成10年度確認調査概要報告書』1999

大庭康時「筑紫浦臘館の梵鍾鑄造遺構」『鉄造遺跡研究資料 2005』鉄造遺跡研究会 2005

大庭康時「浦臘館における梵鍾鑄造」『鉄造遺跡研究資料 2006』鉄造遺跡研究会 2006

(2) SK15027 の年代について

概要報告書である『鴻臚館跡 16』福岡市報第 875 集において、SK15027 の年代を掘りかた最下部の溝状遺構から出土した土師器碗の年代観、SK15027B や SK15028 との重複関係から 9 世紀前半とした。その後、SK15027 基底部の空焼き時の炭層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果を得、また今回の報告に当たって出土遺物を再検討した結果、概報時の年代観を修正する必要が生じた。以下、まず放射性炭素年代測定の報告を転載し、ついで考古学的検討結果を記す。

①自然化学分析

鴻臚館跡第 21 次調査 SK15027 出土炭化材の放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）

1. 試料

測定試料は、第 21 次調査 SK-15027 より出土した炭化材 1 点である。

2. 方法

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄

2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去

表 1 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	21次調査 SK-15027	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
 4) 定温乾燥機内で 80°C で乾燥前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ベンゼンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表 1 にまとめた。

3. 結果

年代測定結果を表 2 に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

歴年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と歴年代較正曲線との交点の歴年代値を意味する。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に歴年代が入る確率を意味する。

表 2 測定結果

試料名	測定No. (PEO-)	^{14}C 年代 ⁽¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ⁽²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ⁽³⁾ (年BP)	歴年代 (西暦) ⁽⁴⁾
No. 1	776301	1120±20	-24.91	1121±18	1σ : cal AD 890~905 (8.3%) 2σ : cal AD 915~970 (59.9%) 2σ : cal AD 885~980 (95.4%)

4. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに曆年代較正を行った結果、SK-15027 では 1σ の曆年代で AD 890 ~ 905 年、AD 915 ~ 970 年の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26–0 ka BP.

Radiocarbon 46, 1029–1058.

尾崎大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04 へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNa3—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—, p.14–15.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1–36.

②年代比定に関する検討

概報時に年代の根拠とした土師器椀は、前述した通りであれば、SK15027 に先立って操業した梵鐘鉄造遺構に伴う遺物である。したがって、土師器椀の示す 9 世紀前半は、SK15027 の上限になる。今回改めて実測した他の出土遺物を検討すると、土師器の杯は腰に丸みを持った屈曲が見られ、椀には径が小さい割りに細く高く外反する高台を持つものが含まれる。また、多くの土師器椀では広大は断面三角形を呈し、体部の境界付近に付く。これらは 9 世紀後半、最も下つて 9 世紀末から 10 世紀初頭に位置づけられる特徴である。

遺物の接合関係を見ると、SK15014 や SK15028・SK15257 と接合する遺物が認められる。遺物廃棄の一括性から見れば、これらの遺物が本来 SK15014 に伴うもので、SK15027・SK15028・SK15257 の埋積に当たって移動したものと見て大過ないだろう。SK15014 は 9 世紀前半の廃棄と見られるため、この点からも上限は 9 世紀前半となる。概報段階に検討材料とした遺構の切り合い関係であるが、SK15027 を切る SK15027B、さらにそれを切る SK15028 の遺物を検討すると、SK15027B は陶磁器主体であるため、細かい年代差は見出せないが、SK15028 からは外表面を密にへら磨きする黒色土器 B 類椀が出土しており、10 世紀中頃に下げざるを得ない。

以上の点から、SK15027 は 9 世紀後半以降、10 世紀中頃以前ということになり、出土遺物や放射性炭素年代測定との整合性を図れば、10 世紀前半に位置づけるのが、最も蓋然性が高いと思われる。

SK15122 における自然科学分析

第21次調査において確認し、第23次調査で発掘調査を実施した SK15122 については、円形のプランをもちながらまっすぐに深く掘り込まれた形状から、これまでに鴻臚館跡で検出されていたトイレ遺構との共通性が想定された。それを確認するため、堆積土の自然科学的分析を委託した。以下に、その分析結果報告を転載する。(以下、株式会社古環境研究所の委託業務報告書による)

鴻臚館跡第 23 次調査 SK15122 埋土の自然科学的分析（株式会社古環境研究所）

(1).はじめに

鴻臚館跡第 23 次調査 SK15122 は、その形状からトイレ遺構の可能性が想定された。しかし、出土遺物には、トイレ遺構を示すものではなく、判断ができなかつたため、自然科学的分析を行いその可能性を検討することとした。トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、珪藻群集組成において

特異性を示す。これらの特徴から他の堆積物と区別することができ、トイレ遺構を識別することができる。また、その遺体群集から今まで以上に食物を直接的に探すことができる。

(2). 試料

分析試料は、鴻臚館跡第23次調査南館の客館区画内にあたる土坑 SK15122 より採取された堆積物3点である。試料1は標高6.5m、試料2は標高6.05m、試料3は床面の丸瓦と床面との間の土壤から採取された。なお、遺構の時期は9世紀後半とされている。

(3). 寄生虫卵分析

① 原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。

② 方法

微化石分析法を基本に以下のように行う。

1) サンプルを採量する。

2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎する。

3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)

5) 水洗後サンプルを2分する。

6) 2分したサンプルの一方にアセトニス処理を施す。

7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

8) 検鏡はブレバート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行う。

③ 結果

南館の客館区画内にある土坑 SK15122 (試料1～3) では、いずれの試料においても寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

④ 寄生虫分析から推定される環境

土坑 SK15122 (試料1～3) から寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、当初より糞便が混入するような堆積環境ではなかつたか、乾燥などにより分解された可能性が考えられる。

(4). 花粉分析

① 原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産す

る。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆地などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

② 方法

寄生虫卵分析で2分しアセトトリス処理を施した沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成、検鏡・計数をおこなう。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

③ 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉14、シダ植物胞子1形態の計24である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示す（図1）。主要な分類群は写真1に示す。

以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属—マテバシイ属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、タニウツギ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ソバ属、アザサ科ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、

チドメササ科、セリ亜科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

三条構胞子

2) 花粉群集の特徴

南館の客館区画内にある土坑SK15122において、花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。いずれの試料も草本花粉のヨモギ属が卓越し、イネ科が伴われる。試料1では、キク亜科がわずかに出現し、試料2では花粉密度が極めて高くソバ属が出現する。試料3ではイネ科にイネ属型が伴われ、クワ科—イラクサ科、キク亜科、セリ亜科などがわずかに出現する。いずれも樹木花粉は極めて少ない。

④ 花粉分析から推定される植生と環境

南館の客館区画内にある土坑 SK15122において、周囲は乾燥を好むヨモギ属が繁茂するような日当たりのよい乾燥した開地であったと推定され、イネ属型や栽培植物のソバ属などがわずかではあるが出現することから周辺地域に水田やソバの畑が分布していたと思われる。

(5). 珪藻分析

① 原理

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

② 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行う。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレバラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行う。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレバラート全面について精査を行う。

③ 結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）6分類群である。表2に分析結果を示す。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes hungarica、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Synedra ulna*

2) 珪藻群集の特徴

南館の客館区画内にある土坑 SK15122において、いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、検出されないか、わずかに検出されるだけで、出現した珪藻は陸生珪藻がほとんどである。陸生珪藻の*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*などが出現する。

④ 珪藻分析から推定される堆積環境

分析の結果、土坑 SK15122 は珪藻密度が極めて低く出現する珪藻は陸生珪藻で、比較的乾燥した環境であったと考えられる。

(6). 考察

① トイレ遺構である可能性について

分析の結果、寄生虫卵及び明らかな消化残渣は出現せず、花粉群集も周囲の自然植生を反映しているとみなされた。試料2の花粉密度は極めて高く、ヨモギ属を中心とする草本が集積されるような土坑であったと考えられる。以上のことから、土坑SK15122の堆積物は糞便の累積を示す遺体群は含まれておらず、堆積物の分析結果から土坑SK15122が便所遺構とする蓋然性は低い。なお便所廃絶時に清掃除去することもあり、その後草など投棄した可能性も考えられる。

②周囲の植生と堆積環境

卓越するヨモギ属は乾燥を好む人里植物であり、周囲はヨモギ属を中心とした人里植物の繁茂する日当たりのよい乾燥した集落域などの人為地が示唆される。イネ属型やソバ属の花粉も出現し、周辺地域には水田やソバなどの畑が分布していたことが推定される。また、珪藻分析ではわずかに陸生珪藻が出現し、土坑SK15122は湿ったかやや乾燥した環境が示唆される。

(7).まとめ

土坑SK15122の堆積物について寄生虫卵分析、花粉分析、珪藻分析を行った結果、寄生虫卵は検出されず、珪藻は極めて少なく、ヨモギ属を中心とした花粉群集は周囲の自然植生を反映しているとみなされた。以上から、糞便の累積は認められず、草本が集積されるような土坑であったと考えられる。堆積物の分析結果から土坑SK15122が便所遺構とする蓋然性は低いが、便所遺構は廃絶時に清掃除去することもあり、その後草など投棄場所になった可能性も考えられる。

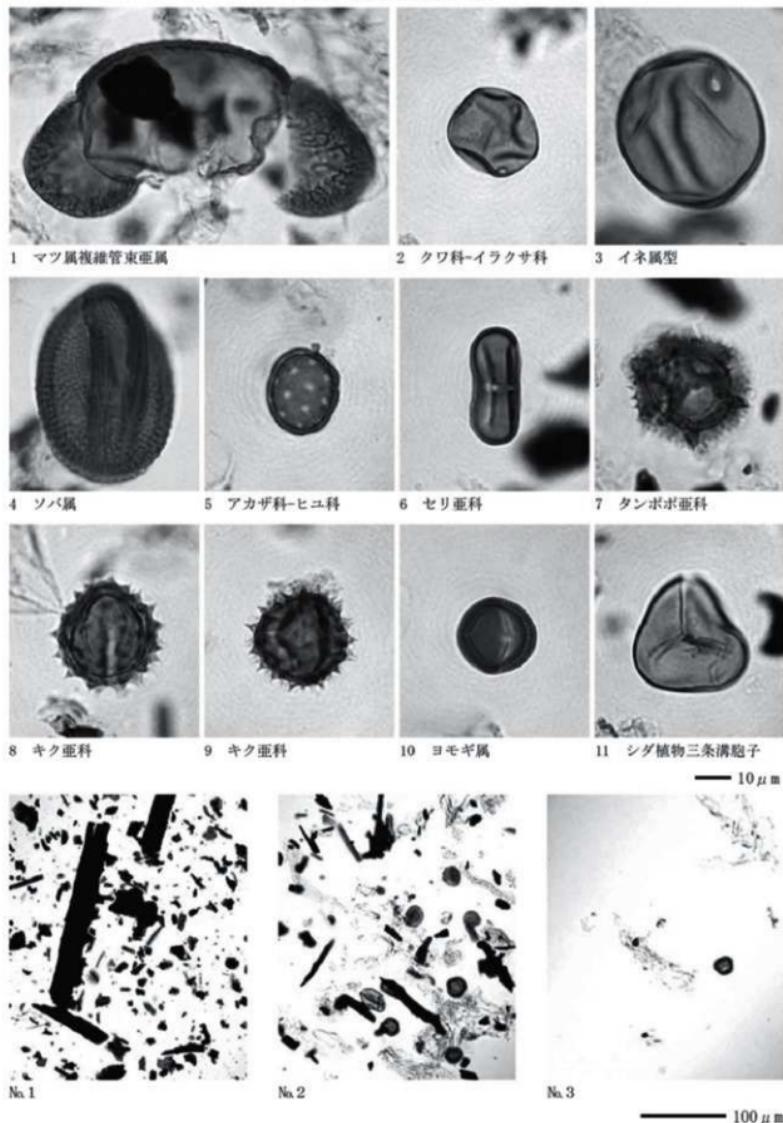
参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) *Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.*
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物、医動物学、新版臨床検査講座、8、医衛業出版、p.9-55。
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—、奈良国立文化財研究所、p.14-15。
- 金原正明 (1999) 寄生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社、p.151-158。
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110。
- 中村純 (1980) 日本產花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。
- Asai,K.& Watanabe,T.(1995) *Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.*
- K.Krammer & H.Lange-Bertalot(1986-1991) *Bacillariophyceae* • 1- 4.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用、東北地理、42、p.73-88。
- 伊藤良永・墨内誠志 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解釈への応用、珪藻学会誌、6,p.23-45。
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解釈とその意義—わが国への導入とその展望—、植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44。
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究、27、p. 1-20。
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑、群集解析に基づく汚濁指数 DAipo, pH耐性能、内田老舗、pp.666。

表 1 鳴臥館跡第23次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		SK15122		
学名	和名	1	2	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管東亜属		1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ		1	
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属			1
<i>Fagus</i>	ブナ属			1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亞属	1		1
<i>Weigela</i>	タニウツギ属		1	
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクラクサ科	5		10
Leguminosae	マメ科	2		
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	26	83	56
<i>Oryza</i> type	イネ属型	1	4	18
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属		1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亞科	1		1
Aipoideae	セリ亜科	1	8	7
Solanaceae	ナス科		1	
Valerianaceae	オミナエシ科		1	
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	
Astroideae	キク亜科	6	7	9
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	331	800	323
Fern spore	シダ植物胞子			
Trilate type spore	三条溝胞子	4	3	11
Arboreal pollen	樹木花粉	1	4	3
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	7	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	367	909	415
Total pollen	花粉総数	368	920	428
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	6.7 ×10 ³	1.6 ×10 ³	3.0 ×10 ³
Unknown pollen	未同定花粉	3	1	2
Fern spore	シダ植物胞子	4	3	11
Charcoal fragments	微細炭化物	(+++)	(-)	(-)

写真1 鴻臚館跡の花粉・胞子



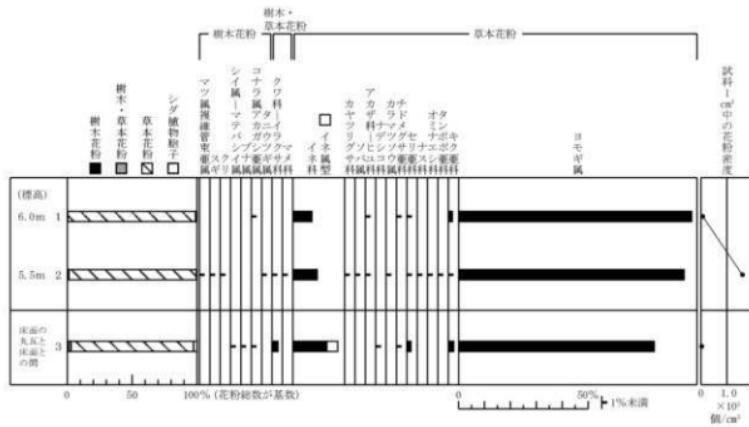
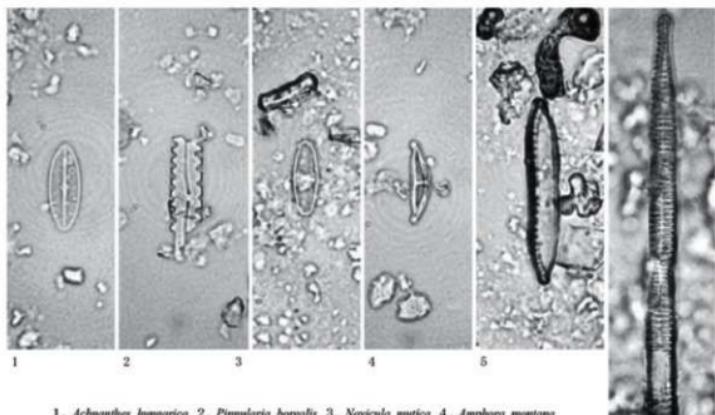


図1 鴻臚館跡第23次調査のSK15122における花粉ダイアグラム

表2 鴻臚館跡第23次調査における珪藻分析結果

分類群	SK15122		
	1	2	3
貧生性種(淡水生種)			
<i>Achnanthes hungarica</i>		1	
<i>Amphora montana</i>		2	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1	2	
<i>Navicula mucosa</i>	4	1	
<i>Pinnularia borealis</i>		1	
<i>Synedra ulna</i>	1		
合計	6	7	0
未同定	3	1	0
破片	0	4	0
試料1cm ² 中の殻数密度	2.4 ×10 ³	2.4 ×10 ³	0.0
完形殻保存率(%)	-	-	-

写真2 鴻臚館跡の珪藻



1. *Achnanthes hungarica* 2. *Pinnularia borealis* 3. *Navicula mucosa* 4. *Amphora montana*
5. *Hantzschia amphioxys* 6. *Synedra ulna*

6 1 - 6 — 10 μm

報告書抄録

ふりがな 書名	しそき こうろかんあと 史跡 鴻臚館跡
副書名	- 南館部分の調査(3) -
卷次	鴻臚館跡 21
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1248集
編著者名	吉武 学／大庭 康時
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4784
発行年月日	2014年3月24日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 **°	東経 ***°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しそき こうろかんあと 史跡 鴻臚館跡・ しそきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	ふくおかしちゅうおうく 福岡市中央区	40134	0192	33°	130°	19880727～19881210 19890429～19891207 19900409～19910131 19910501～19920331 19920910～19930331 19940606～19940731 19951101～19960329 19960704～19961204 19970818～19980131	856 1,200 1,300 1,000 430 50 300 450 204 (計 5790)	範囲確認
しそきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	じょうない1-1 城内1-1			35° 23° 12°	11°			

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	梵鐘鋳造遺構 溝 土坑 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鐵製品 銅製品	古代の客館である 鴻臚館（筑紫館） 跡の遺構

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 21

- 南館部分の調査(3) -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1248集

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 松古堂印刷株式会社
福岡市西区周船寺1丁目7番64号